

奇譚クラブ

■ 新しい風俗文献誌 ■



8月号

奇譚クラブ 昭和四十四年八月号

成人用
JND

定価三五〇円

THE KITAN CLUB
Published Monthly By Akatsukisyupan
Osaka Japan



8月号 ¥ 350

'69
8

花と蛇 特集号

好評の傑作集大成第四弾刊行!!

定価 五〇〇円 略号「花」

団鬼六作長篇小説「花と蛇」は、昭和37年8月号の奇譚クラブ誌上より現在まで引続いて連載し圧倒的人気を満天下のSFファンを沸かした傑作であります。過去三回に亘って発行した特集号も悉く売切れとなる人気でありましたので、ここに新しく昭和42年1月号以降の分を一括登載、堂々三頁十頁の特集に加えて四馬孝画伯筆の秀麗きわまりない口絵を添えて御覧にいたします。

四馬孝画「口絵」

美女羞恥責「花と蛇」画集

- 一、恐ろしい洗滌の末排泄を強要される美女
- 二、中腰で縛られた美女の品定めする調教師
- 三、清純な美女に初めて縄掛けしていたぶる
- 四、刺毛の羞恥責めに悶える地獄部屋の美女
- 五、全裸の開股縛りで深窓の美少女を責める
- 六、係のように縛られて宙吊りにされた美女
- 七、股間縛りの全裸責めにされる絶世の美女
- 八、足吊りで強制洗滌を施される全裸の美女

「日本」内容見出し

- 第一章 清純な令嬢の屈辱
- 第二章 人身御供の令夫人
- 第三章 深窓の美少女とズベ公

- 第四章 小夜子への執拗な調教
- 第五章 変性色事師の登場
- 第六章 生れかわるスター京子
- 第七章 激しいスターへの訓練
- 第八章 低脳男と令夫人の結婚
- 第九章 愛弟子を調教する静子夫人
- 第十章 羞恥と屈辱の日本舞踊
- 第十一章 悪魔たちの哄笑
- 第十二章 地下室の羞恥と汚辱地獄

- 第十三章 珍芸を開陳する令夫人
- 第十四章 淫靡な時代劇ショー
- 第十五章 華々しきショーの展開
- 第十六章 野卑な妻二人のいたぶり
- 第十七章 ズベ公達の邪悪な責め
- 第十八章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち
- 第十九章 悪党の執拗ないたぶり
- 第二十章 文夫と小夜子の屈辱的対面
- 第二十一章 勝ち誇る悪党一味
- 第二十二章 中国伝来の秘法
- 第二十三章 緊縛された美女の涕泣
- 第二十四章 新しい餌食への触手
- 第二十五章 苦痛と屈辱の生地獄
- 第二十六章 恐怖の責め続く
- 第二十七章 結末なき責めの結末

「最新版」美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態

大手札幌印刷紙 (9×13) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

- 四組四枚 五〇〇円
- 十組十枚 一〇〇〇円
- 二十組二十枚 一八〇〇円
- 五十組五十枚 四〇〇〇円
- 百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものを求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

- 1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
- 2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
- 3 緊う影に慄く (佐々木真弓)
- 4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
- 5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
- 6 縛られて困る (金原奈加子)
- 7 私を責めないで (左近麻里子)
- 8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
- 9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
- 10 清団の上に狂う (関谷富佐子)
- 11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

- 12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
- 13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
- 14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
- 15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
- 16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
- 17 何故私を縛る (金原奈加子)
- 18 感泣する胸縛 (ローズ秋山)
- 19 猿ぐつわの悦度 (関谷富佐子)
- 20 足指はくの字に (佐々木真弓)
- 21 麻痺の柔肌責め (金原奈加子)
- 22 美しき亀甲縛 (左近麻里子)
- 23 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
- 24 緊縛全裸の極度 (左近麻里子)
- 25 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
- 26 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
- 27 鎖骨と縄に泣く (川越美佐子)
- 28 縄に噛んだ重顔 (長井葉津子)
- 29 出筋を晒す縛り (佐々木真弓)
- 30 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
- 31 首絞りにあぐ (長井葉津子)
- 32 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
- 33 全裸縛りの哀愁 (佐々木真弓)
- 34 高小手の全裸 (佐々木真弓)
- 35 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
- 36 豊満な裸身縛り (左近麻里子)
- 37 竹縛責めに悩む (大島 照代)
- 38 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
- 39 縄目に噛む表情 (中河 恵子)
- 40 開股縛りの正面 (中河 恵子)
- 41 鎖骨に噛む緊縛 (左近麻里子)
- 42 縛りの肌を見て (金原奈加子)
- 43 私は縛りが好き (金原奈加子)
- 44 強烈縛りを味わ (金原奈加子)
- 45 裸身を横たえて (左近麻里子)
- 46 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
- 47 柔肌に縛は厳し (長井葉津子)
- 48 柔肌に痛む麻痺 (左近麻里子)
- 49 全裸の女体引連 (中河 恵子)
- 50 開股縛りを露視 (左近麻里子)
- 51 突き出したお尻 (中河 恵子)
- 52 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
- 53 首屈股間縛の女 (長井葉津子)
- 54 強烈後手で括る (佐々木真弓)
- 55 恥しき縛り初め (金原奈加子)
- 56 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
- 57 懸られる緊縛女 (長井葉津子)
- 58 豆絞りの鎖骨 (金原奈加子)
- 59 もう虐めないで (金原奈加子)
- 60 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
- 61 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
- 62 全裸の縛を見て (長井葉津子)
- 63 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
- 64 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
- 65 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
- 66 諸親の縛り表情 (長井葉津子)
- 67 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)
- 68 美体は縄に映る (中河 恵子)
- 69 淫ましき臀部晒 (左近麻里子)
- 70 両手吊りに噛む (長井葉津子)
- 71 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
- 72 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
- 73 縛けられる女体 (中河 恵子)
- 74 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
- 75 麗わしの肌を縛 (佐々木真弓)
- 76 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
- 77 開股の股間縛り (大島 照代)
- 78 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
- 79 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
- 80 豊満な裸身の美 (関谷富佐子)
- 81 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
- 82 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)
- 83 胴縛縛りと鎖骨 (長井葉津子)
- 84 投げ出された裸 (金原奈加子)
- 85 正面の亀甲縛 (左近麻里子)
- 86 開股縛りの女体 (左近麻里子)
- 87 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
- 88 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
- 89 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
- 90 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
- 91 美しい女の縛り (佐々木真弓)
- 92 股間縛りに羞う (長井葉津子)
- 93 ホスチスの緊縛 (佐々木真弓)
- 94 椅子坐開股縛 (中河 恵子)
- 95 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
- 96 息づまる鎖骨 (川越美佐子)
- 97 人身御供の乙女 (長井葉津子)
- 98 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
- 99 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

奇譚クラブ

第三三卷 第九号・通刊第二五六号

(昭和四十四年) 八月号 目次

本 文

告白

サドシーン愛好者はサドならずの……紫 仮 面……(10)

女子プロレス讃歌……みなみ 洋……(12)

連載小説「大噴火」(第十一回)……千葉 青鬼……(14)

バックレス・ドレスの理沙……芳野 眉美……(22)

最近の一般雑誌小説に思う……城 剣太郎……(28)

SMカメラ・ハント(金原奈加子の巻)……辻村 隆……(30)

「童女受胎譜」……辻村 隆……(30)

フェチ小説クイミテーションと信吉……浅羽やすし……(36)

文芸切腹史(殉死篇1)……中東 弘通……(70)

読者論「奇ク」について私はこう思う……新沼 町人……(82)

連載小説「花と蛇」(続第五十六回)……団 鬼六……(86)

わがコレクション ひそかな愉しみ……伊里賀 透……(116)

連載M小説「ピエロ床屋」(6)……鬼山 狗策……(118)



奇クサロン……編集部構成……(233)

SとMの随想……須磨好太郎

夫婦プレイ「理解者を求む」……宮前 好児

「SMカメラ・ハント」に寄せて……西野 正一

編集部だより……編集部

ああ、肥満女性……赤畑 修造

サロン楽我記(第六十一回)……辻村 隆

イメージ画「真珠のなみだ」……あらいかず

本書の特徴について思う……奇譚倶楽部

△詩△お仕置……太田 恵子

スチール写真……原 カオル

イメージ画「両派目的完遂」……赤ちゃん

所謂「ピンク映画」製作者に望む……庭 房の助

イメージ画「安全車はいかが」……香川ナミオ

残酷ムードの断片……柴 利好

イメージ画「準備OK」……志羽 利也

映画評S的映画を観て……三原 葉

イメージ画「短い縄」……柴田 貢

「縛り」と残酷……青井 松造

グロ趣味者のたわごと……須藤 朗

イメージ画「妙薬搾取器」……MUTSU

フェチ小説この胸のときめき(3)……日本 武士……(116)

連載時代伝奇小説 緋縮緬地獄(15)……白鳥 大蔵……(118)

感想 M女の要諦……小杉 千恵……(111)

男性虐待快楽術(第七話)……馬旗 保……(110)

BAR・SADO物語(前)……馬旗 保……(110)

ヤセ犬の遠吠え「ベツト」……系振 昇……(111)

レンズの中の女 十人十色(第四話)……泉野 薫……(114)

漫画「マゾミちゃん」……九美 淳……(119)

娘相模物語 花の女斗美たち……奮斗志好太……(111)

新・枕草紙 翻られる姉妹……筑紫 太郎……(111)

アマゾン考察 私の女性乗馬観……佐野 寿……(111)

懸賞告白……佐野 寿……(111)

「フェッチシズムに関する告白」……木崎 進……(113)

女武者討死シリーズ 女三日月城……川上 米子……(110)

演劇評「残酷劇」見たまま……南 彦造……(111)

告白 バンティに憑かれて……水田 耕作……(111)

懸賞入選作品「白い牡」(1)……歌田 欧二……(111)

読者通信……編集部選……(112)

(目次カット「珍魚を蘇生させる」……室井亜砂路)

(扉カット「ライバルは倒せ」……五屋和十)

〔最新緊縛資料写真一覽〕

梁からの両手吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろふ)

床柱に宙吊り縛り

大手札二枚一組 三〇〇円
木村 洋子 略号(ろへ)

開股股間縛り正面

大手札二枚一組 三〇〇円
山原 清子 略号(ろほ)

二女連縛責模様組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(ろそ)

二女連縛煩悶場面組写真

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(ろひ)

股間縛り刺青競艶

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろさ)

股間縛り正面妖美表情

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろす)

喰込む股間縛りの縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
山原 清子 略号(ろせ)

手足宙吊り

大手札三枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(つた)

オムツの股間縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
東浦ひかる 略号(むく)

強烈責、被虐の果

大手札五枚一組 八〇〇円
梨花悠紀子 略号(りお)

乳房いじめ

大手札二枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(とお)

激痛ノ逆エビ責め

大手札四枚一組 六〇〇円
大塚 啓子 略号(きえ)

美貌の裸身に縄目

大手札三枚一組 四〇〇円
絹川 文代 略号(きん)

腰元吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
村井知可子 略号(こり)

腰元間謀の拷問

大手札四枚一組 六〇〇円
村井知可子 略号(こく)

椅子エビ責

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(おき)

六尺縄縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(ろは)

弓吊り責め

大手札二枚一組 三〇〇円
梨花悠紀子 略号(つき)

狙われた和装の娘

大手札十二枚一組 二〇〇〇円
愛川 悦子 略号(ねい)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(えひ)

ゴム衣緊縛

大手札三枚一組 四〇〇円
水本 茂美 略号(みす)

抓ねりと操くり責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚、東浦、木村 略号(きし)

バンド責め

大手札五枚一組 八〇〇円
東浦ひかる 略号(はん)

夫人の表情

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号(せや)

後手吊り足挙縛り

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うら)

二つ折りエビ責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うり)

足挙げ椅子責め

大手札五枚一組 七〇〇円
東浦ひかる 略号(うる)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(えり)

鼻の穴責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大手 啓子 略号(なく)

鼻なぶり

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(ない)

鼻責めの陶酔

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(なは)

完全逆さ吊りフオート

大判判三枚一組 一五〇〇円
木村 洋子 略号(さつり)

両足首括り逆さ吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さか)

逆さ吊り女体折檻

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(させ)

手足逆滑車宙吊り

大判判五枚一組 一五〇〇円
梨花悠紀子 略号(さと)

啓子をいじめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原、大塚 略号(うの)

啓子を縛しめる清子

大手札八枚一組 一五〇〇円
山原・大塚 略号(うな)

山原を責める大塚

大手札八枚一組 一五〇〇円
大塚・山原 略号(うね)

逆さ吊り正面と背面

大手札二枚一組 四〇〇円
増田みゆき 略号(つる)

煙草責めの裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(たく)

乳房責め五態

大手札五枚一組 七〇〇円
山原 清子 略号(てら)

全裸麻縄強烈縛

大手札十枚一組 一五〇〇円
山原 清子 略号(いね)

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 44 年 8 月 号

(1969年・8月号<第23巻第9号・通刊第256号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
として編集しておりますが、青少年の保護
育成に関する条例には抵触しないよう、十
分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
載した文章は十二分に検討を加え、いやし
くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
めの努力はいたしません。



告

白

サドシーン愛好者は サドならず？

文及カット 紫 仮 面

子供のころ、べらぼうにでっかい蟻が、ときたま、わが家の庭をはっていった。当時、小学生だった私は、この大蟻を数回にわたって虐殺した。例えば六本の足を一本ずつもぎとって、芋虫のようにされた大蟻が、もはや逃げることもならず、ピクピクともがいている姿を二、三分眺めた後、圧殺！

そんな私が、中学時代、田舎道を歩いている時、とのさま蛙を捕えて三人がかりでいじめている悪童連を、こっぴどくやっつけたことがある。私は蛙が好きだし、第一、蛙は益虫であることを知っていたから……。蛙は、幸いに致命傷を負ってはいなかったとみえ、釈放されると、忽ち傍の小川に飛びこんだ。

○ 小学校時代、男女戦争というのをやった。別にエッチな面はない。男が女を押さえつける。女が男を押さえつける。それだけだ。

私の組は、どういうわけか、女が男の一倍半ぐらい。だから好勝負だった。K子さんというのがちょっとしたかわい子ちゃんで、集中攻撃！ そうはさせじと、T子さんという男勝りの大女が助太力に出てくる。なんのことはない、タッグ・マッチの草分けみたいなものだ。

このT子に私は一本とられたことがある。勿論フオールではない。この時、俺の大スキだったS子が「ヤッチャエ、ヤッチャエ！」

とかかってきたのに、いささか戦意をそがれたのだ。このゲームは、はたして男軍が勝ったが、誰もスカートをまくったり、オッパイにさわったりはしなかった。単なるレクリエーションにすぎなかった。

○ 小学校四年の時だったと思う。「大岡越前守」の授業で、I先生（男）が、二人の女性容疑者のうち一人が有罪となり、処刑。というところで、そのころの処刑法について、ちよっと話した。「百叩き」「裸の引きまわし」etc、……ものごころついて、初めての、イメージによるサド・シーンだった。

中学時代、Yという女優のファンだったころ、そのYが、中国服姿で手錠をかけられ、連行されるシーンが印象的だった。その姑娘は、無実の罪を赦され、平和で幸福な生活に戻る。私はホッとした。あの姑娘が死刑にでもなったら、私はガッカリしたろう。

私は、いわゆる好男子ではないが、小学校時代から女の子には割合に人気があった。冷静に考えて、私のユーモアが理由だったように思う。私は、他の人たちに言わせると、ユーモリストであるらしい。女の子は、正直いって、すきだ。しかし、同時に、からかってキヤアキヤアいわせるのもすきだ。しかし変ないたずらはしない。手は殆ど触れないで、口一つでからかう。手を出すのは女の子のほうだ。背中をぶんなぐられたことも……。

私の母は猫がすきで、よく飼っていた。よく飼っていた、というのは、猫という動物は大抵、どこかへ行ってしまうと、終りを全うしない。いなくなってしまうと、また別のを飼う。私は時々、ひそかに思った。

（この猫のくびをしめて殺してしまうことは出来る。こいつは、俺に、生命の危険を

さらしているようなものだ。実に哀れだ。それだけに、いたわってやらなければ……）だから私は、一度も犬や猫をいじめたことはない。

女性上位というが、女はやっぱり弱い。新聞記事が、それを実証している。女はやっぱりかわいそうだ。かわいそうな女が、更にかわいそうな状態を強いられる。そんな女が、最後に救われる。「シンデレラ」もその一例だ。「クオ・ヴァーデイス」が、少女少女向けの物語として、数年前に発刊されている。リギア姫が、両腕もあらわな姿で、後ろ手に縛られて猛牛の餌食にされる寸前、救われる。そんなシーンが私は好きだ。

ある変質者が、美女を裸にした上、磔のような状態に縛った後、殺してしまう。そんな映画を見たことがあるが、いい感じではなかった。

私は、徹底した「サド愛好者」ではなさそう。デカタニストといった方が適当かもしれない。私はまだ、女を、本当に痛めつけたことはない。それでいて、裸女の緊縛シーンは好きだ。女は、縛られてる時、最も美しい

のではないかな？ それも丸裸とあれば、更に美しい。そんな、あわれな女を、〇〇仮面が救い出す。男として、最高にもうかる役だ。しかも、〇〇仮面は、救い出した女に何の報酬も求めず消えていく。最高のシーンだ。おやおや？ 私は、サド・シーンを愛するフェミニストかな！

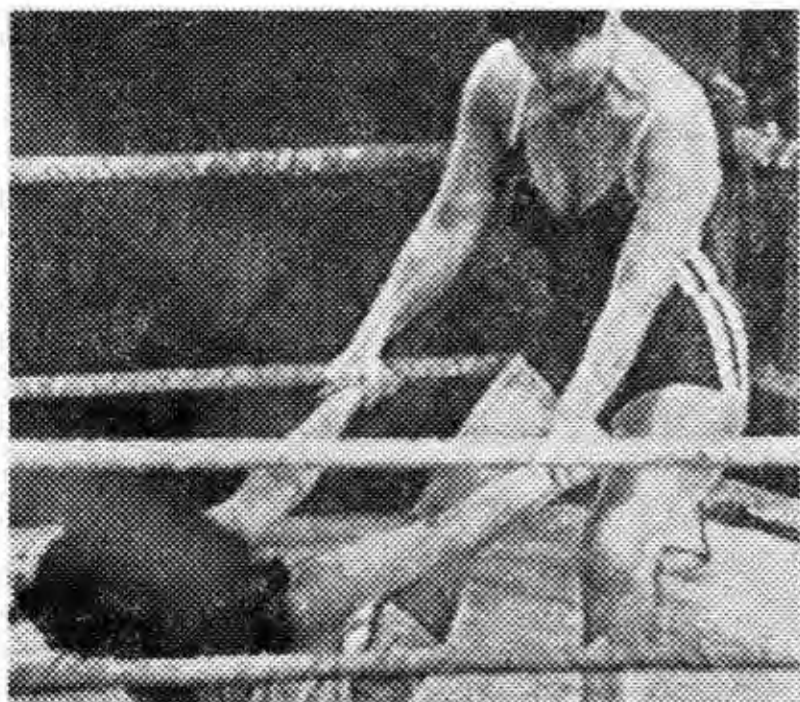
私は、マゾは大嫌い。縛られることをいやがっている女を無理矢理、裸に剥いて、高小手に縛りあげるからこそ、女性美の一大重要素である羞恥美が生まれるのだ。不見転芸者を転がしたところで、何の意味もない。男嫌いの彼女を強引に陥落させてこそ、初めて「勝った」と言えるのではないか。競馬でも、三百三十円ぐらいの本命を的中させて、どうなる？ 大穴をあててこそ、初めて万才が出来るのだ。

俺は浣腸シーンは大嫌い。切腹も大嫌い。ただ、「縛りあげられた裸女」に魅力を感じる。といって、自分で実際にやってみたいとは思わない。勇気がないのではない。そんなふうにして、女を征服したところで、どうなるものか。プライドにかけても、そんなこと

が出来るものか!?

『日本拷問刑罰史』は、サド映画の最高だったと思う。ただ、放火罪のぬれぎぬを着せられた娘が、裸姿で徹底的に責めぬかれた後、同じく裸で火あぶりにされるシーンは、あまりにも悲惨だった。あそこで無実が晴れば最高だったのに……。

女は、やさしく愛すべし。哀れな女は救う



べし。ここで私は一大矛盾を発見する。そんなに女が可愛いなら、なぜ、丸裸にして縛らせるのか? 捕えられる前に、救ってやったら、尚、最高ではないか。……ところが、注文はいささかむづかしい。美女が捕えられ、裸にされ、縛られ、責められ、悲鳴をあげてるところへ、正義の騎士が突然にわき出して、一気に悲運の美女を救う……そんなシーンを私は愛する。

私は多分サディストではないだろう。デカタニストなのだろう。本当いって、捕われの裸女がなぜ美しいのか、わからない。以上が私のサド・シーン愛好の弁である。いささか逆説的になるが、本当の意味でのサディストは、サド・シーンを鑑賞するぐらいではすまい。サド・シーンがすきだ、ということとサディズムを愛することとは、必ずしも一致しないらしい。

(終)

女子プロレス讃歌

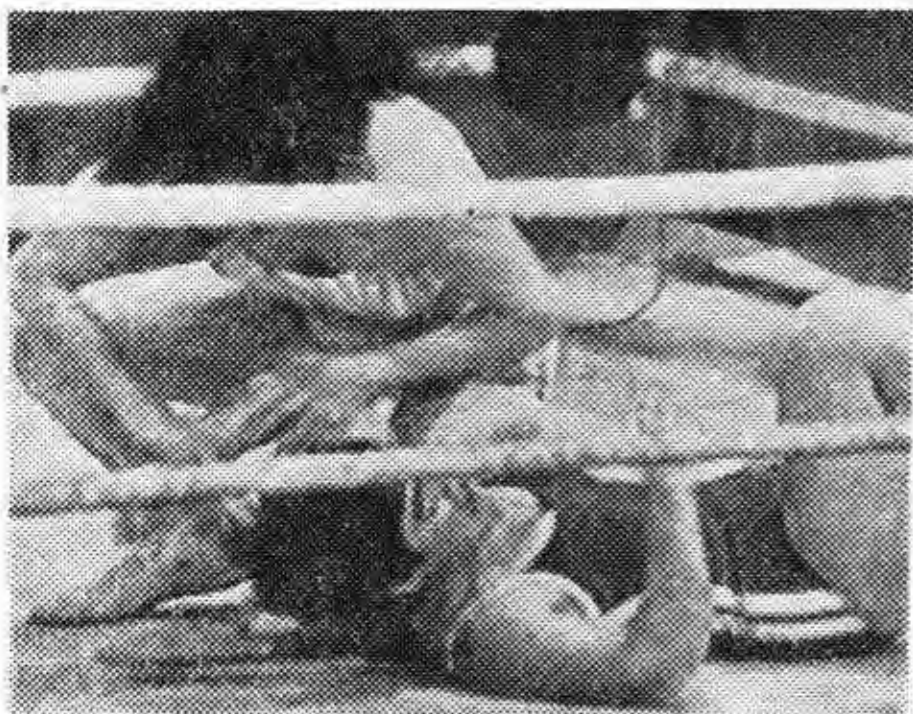
みなみ 洋

テレビ番組として良識を問いたいとか、エッチな番組とか、とかく批難を浴びているらしい女子プロレス中継番組。だが、私はこの番組を無条件に楽しみにしており、ほとんど欠かさずにみている。

夜11時近くなると、テレビの前へカメラを

持ちだし、三脚にセットして今か今かと待ちわびている。

最初のうちは、そんなことをする私に対して、妻は何だかんだと不平不満を並べたてていたが、最近は何もいわなくなったばかりか一緒にみるようになって、彼女自身も結構、



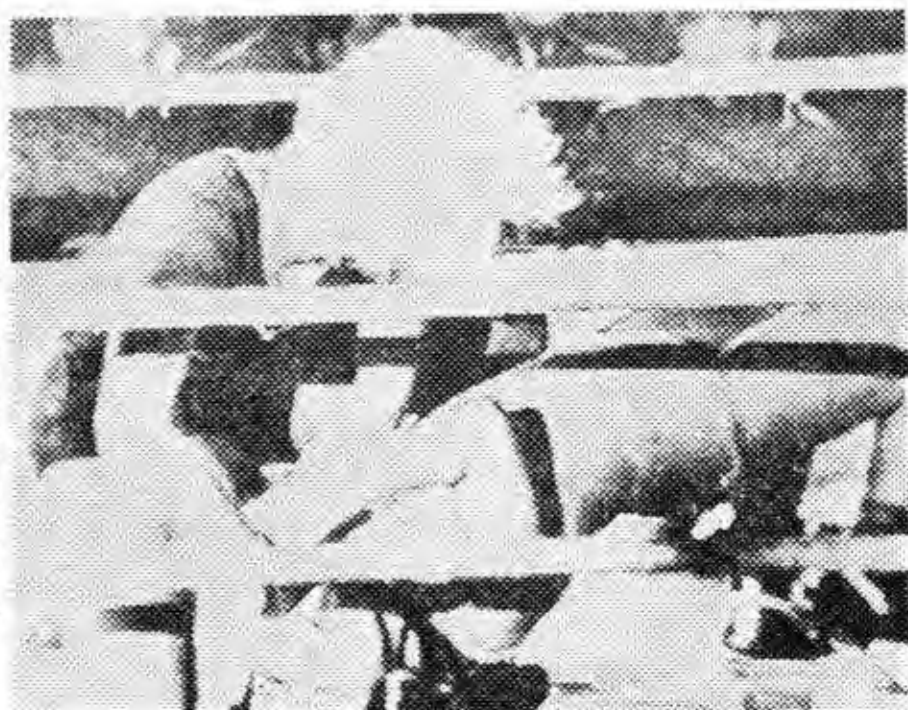
楽しんでいるようだ。

ゴングが鳴る。

さっととび出した二人の美女の、髪ふり乱しての格闘が始まる。

馬場だの豊登だのがでてくるプロレスにはみられない、女子独得の色気と、サディスティックなシーンの連続。

そんなシーンに、私は思わず快哉を叫びたくなるのである。とくにレスラーが美人であ

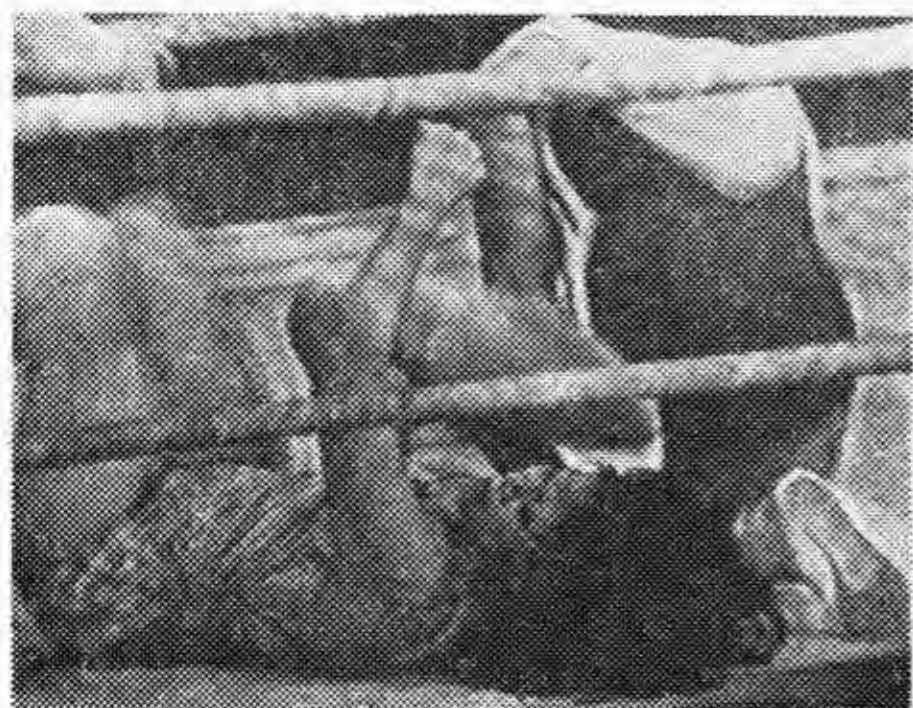


ればあるほど、私の熱中度は高くなる。

テレビの画面一ぱいに暴れまわり、痛めつけ合う美女二人の格闘シーンにエキサイトしながら、カメラのシャッターを切るのは忙しいが、また別の楽しさがあるのだ。

逆エビ固めなどという技がでたときなど、そのシーンの印画をジックリ眺め、私はそこに縄をかけた姿をかってに空想して楽しむことが出来る。……

逃げようとするのを押えこんで、逆にとっ



た手足を締め上げていているジーンは、拷問の形を連想することを容易にしてくれる。……こんな見方をさせてくれるこの番組を、私は何よりも歓迎する。

どちらが勝つかは分りきっているのに、その一瞬一瞬の動きに心をときめかせ、私をしてエキサイトさせてくれるテレビ番組、女子プロレス中継。

女子プロレス、バンザイ。

(写真はTV画面の撮影)

海 賊 船

南支那海、ホンコン島から南へ二百キロ、中沙群島とはほぼ同距離にある太洋の中に、ボツンと浮かんでいるジャンクがあった。沿岸にいれば、かなりの大きさに見えたかも知れないが、こんな大海原では、それはひどく頼りなく、又、チツボケだった。

しかし、それは外観だけのことであって、若し内部を見透す目があったら、このチツボケなジャンクが容易ならぬ船であることを発見出来た筈である。



第十一回

近代設備は巧妙に偽装され、被覆されていたけれど、帆に頼らずに航海出来るディーゼル機関は最新高性能のものだったし、レーダー、無線装置なども一級品が揃っていた。その上、無反動対戦車ロケット砲などという物騒な火器まで隠しているといったら、このジャンクが並みの船でないことは、あきらかである。

事実、この武装ジャンクこそ、ホンコンで神話のようにウワサされている蔡樹理の持船だったのである。

一九五一年、恨みを吞んで客死した、青幫（チンパン）の実力者、杜月笙の後継者とも

前号まで——艦腹一ぱいに囚れの美女達を満載した原子力潜水艦プチューン号はインド洋でマスター・有明の秘密指令を受けた。星司令と高橋副長の間で賛否両論があったが、結局、星の決断で彼女を乗せたポラリスミサイルが発射されたのである。一方、麻薬事件に巻き込まれて逮捕されたイーラはニューデリーで捜査当局のひどい仕打ちに苦しんでいたが、ある日尋問に来た日本の国際捜査官新津に会い、彼が旧知であることから助けを求めた。新津の心も仕事を離れて揺り動かされるのだった。その夜、忽然としてイーラは消えてしまった。

いわれているが、秘密結社のことだから、あくまでも臆測にすぎず、真相はヴェールに包まれてわからない。

ただいえることは、中国内戦に敗れたのち組織は目に見えて衰退し、特に杜月笙の死とともに全く息の根を止められたようになってしまったことが知られている。ところが、それから数年を出ないうちに、奇蹟とも思えるような形で青幫の活動が盛り返してきたというのである。

文化大革命の大旋風が吹き荒れはじめるとともに、その行動は一層公然となった。膨大な数を記録した香港難民のうち数なからざる部分が青幫の組織を通じてなされたということとは周知の事実である。

なかでも、迫害を受けた自由人たちの亡命は至難の業だった。国中、いたるところに監視の目が光っていた。子が親を、学生が先生を密告するということすら、正しい事と評価された時代である。一たび反革命のレッテルを貼られた者のみじめさは、言いようもなかった。大衆は、かつての権威者を泥まみれにすることで、単に日頃の不満を癒したばかりでなく、それは常に行き過ぎて、一種のサジステイックな欲望を満足させていたといつて

もよいであろう。

堅固な宗教的儀式で入団させられ、絶えず命と代替に行動している青幫の人々は、このような大衆の諮意に真向から闘いをいどんでいた。かつての、杜月笙のような、蔣介石との連繫を図るといったような甘さは、もはや一片も見出せなかった。具体的には彼等は広大な沿岸地域に神出鬼没して、革命の犠牲者を救出すると共に、造反勢力に斗争をいどんだのである。

そんなとき、いつも人の口に昇る首領の名前こそ「蔡樹理」だった。

そんな行動は、勿論、中共政府からみれば海賊のようなものだったから、囚えられれば当然、極刑が待っていたし、蔡樹理その人には、莫大な懸賞金さえかけられていたくらいである。

帆をおろして、ひっそりと漂泊しているジャンクの横腹に、凡そかけ離れた時代を代表するチグハグな感じで、新式のモーターボートが、もやっていた。

まだ夜あけ前の黄昏時だった。

ジャンクの船室から出て来てヒラリとそのモーターボートに乗り移った人影があった。

ただ一人、スターターを押していきなり走り出した方角は、やがて陽光の差す東の地平線である。

超小型のレーダーがダッシュボードを薄明るく照らしていた。そして、緑色の光跡が走るブラウン管に、ポツンとした目標点が映し出されているではないか。ジャンクのそれとは違って余程小さな物体らしい。ジャンクとはほぼ四十キロの距離があった。

小一時間ばかり飛ばす頃には、あたりは、すっかり明るくなっていた。

星恵美子ことエミー司令はゴム製の小さな救命ボートに横たわって、モーターボートの近づくのを待っていた。時差を無視すれば僅か二十分ばかりの飛行時間にすぎなかった。その間にインド洋エンガノ島のあたりから此所まで、約三千キロを飛び切ってしまった。コンピュータが目的地に到達したことを示すと、脱出ボタンを押す。そしてパラシュートでゆっくりと降下し、ゴムボートをふくらし、夜明けまで、静かに救出を待っていたという次第である。

エンジンをとめたモーターボートが惰力でゆっくりと近づいて来た。黒いスキンをピッ

タリと身にまとった星エミー司令は、身軽にゴムボートから乗り移った。

「蔡？」

「星か、よくきた」

二人の人影はヒシとばかりに抱き合った。船体が、ゆらゆらと揺れた。

ゴムボートを錘りをつけて処分したのち、二人は、まっしぐらにジャンクに戻った。

「明後日には、有明が東京へ行く途中、立寄ることになっている。わたしは生憎、仕事で一足先に台北へ飛ばねばならん。いろいろな事情で、どうしても明後日、彼と一緒になくて貰いたいのだ」

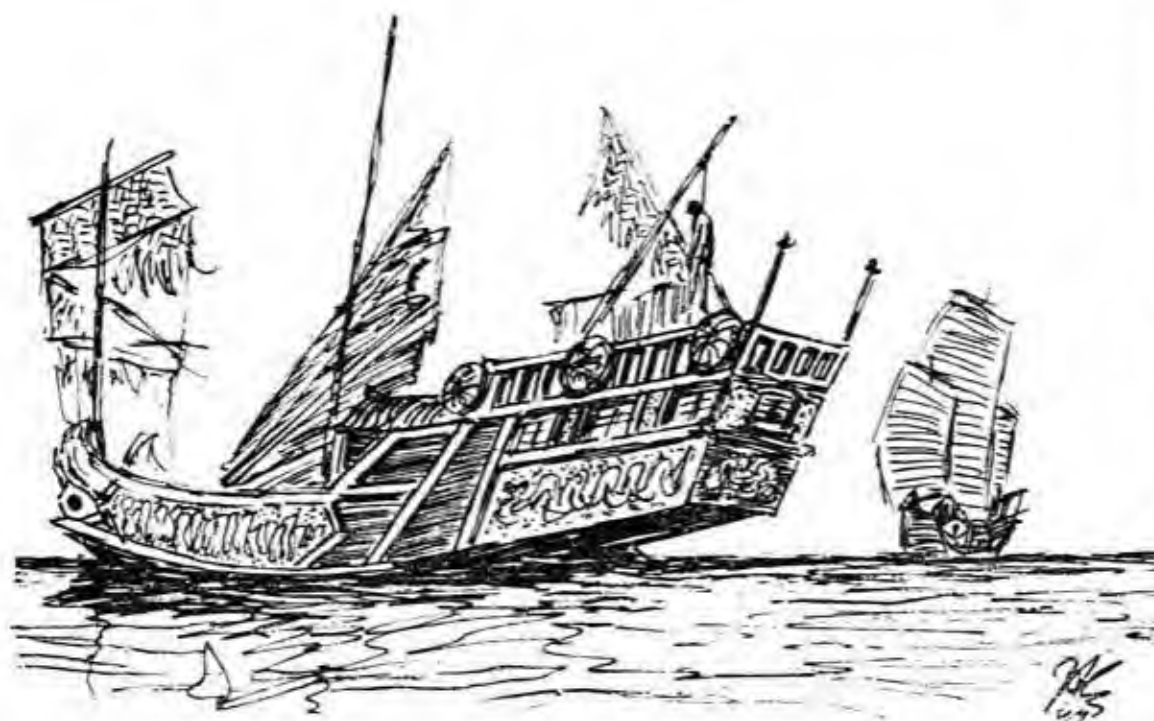
ニッコリと、美しく微笑を返しながら、星がいった。

「結構です。久しぶりで『あのひと』にお会いできますわね」

星恵美子が無事回収した蔡は、ジャンクの舳をホンコン島へ向けた。

帆走十時間余りして、日ざしが大分、西に傾いて来た頃、突然、見張り員が彼方を指差しながら叫んだ。

「青幫の僚船が見えます。変だ人影がない。まるで死人船のよう」



ドヤドヤと人々が甲板に出てきた。日焼けした顔に、黒々とした南京ひげをたくわえた蔡樹理は、絹の寛衣をまとい、まるで清朝の高官のような姿だったし、星は予め蔡の用意してくれた美しい旗袍（チーパ

ウ）を裾長に着て、思いきった脇の割れ目から雪のような太腿をちらつかせていた。

双眼鏡で見入っていた船長らしい男が、

「甲板に多勢、倒れている。接舷してみましようか」

「よからう。だが、気をつけてな」

テキパキした命令が飛ぶ。たちまち隠されたディーゼル機関が振動を開始すると、ジャンクは見違えるようにシッカリした船足で白波を立てはじめた。偽装してあった機銃がムキ出しになると、男たちがわらわらとそれに倚って向こうのジャンクに照準を合わせた。

固唾を呑む数十分の後、二艘のジャンクは寄り添うように並んだ。

もはや、事態は誰の眼にも明瞭だった。このジャンクは、正に死人船だったのである。

甲板は血の海だった。それも凝固して、ドス黒くなっている。ズタズタにひき裂かれた篷帆が僅かにぶら下っている帆桁に、首を吊られた若い男の死骸が素裸で揺れていた。むごたらしいことには、あたかも生命の空しさを象徴するかのよう、極度に緊張した肉の固まりが硬直していたのである。絞首された死体は、いつも、こうした肉体上の変化を示すのだというが、この様に露骨に見せつけら

れたのでは、さすがの海の荒くれ男たちもションとなっておし黙ってしまった。まして、この男こそ、死人船の船長、李伯年だったから尚更である。

「可哀そうに……」

涙を流しながら、蔡樹理は合掌するのだった。

その間にも船員たちは次々に、死人船に乗り移って行った。

李船長以外の乗組員たちも悉く虐殺を免れなかった。彼等の遺体は狭い前部船艙に折り重なって投げ込まれていた。その光景は、まるでアウシュヴィッツの墓穴を覗いたように血なまぐさいものだった。

蔡と星とは、プーンと血の匂いがする船室に降り立った。この船は本土から逃亡しようとする政治犯を救出、収容する任務を帯びていた。手配書によると、男六人と女三人、合計九人が乗船していた筈である。ところが、くまなく船室を探してみた結果、女二人の死体を除いて、あとの七人の姿が見えなくなっていた。それは兎も角、女たちの状態は正に目を蔽わせる程の凄惨さであった。

一人ずつ別々の部屋に、一糸もまとわぬ裸身を異様に硬直させてコト切れていたのではあ

る。数知れない凌辱を受けたのは、あきらかであった。開かれた足許から床にかけて血糊がベツトリとひろがって、無気味なシミを作っていた。大勢の男が、代る代るなぐさみものにした挙句、最後に拳銃でブツ飛ばしたもののらしい。弾丸は体腔内を縦貫して肩から抜けている。そのあたりがザクロのように割れて、血を噴き出していた。いっそ、ひと思いに即死させられたのなら、まだしもだったであらう。しかし、二人共に暫くは生きていた違いはない。瀕死の女達は、のたうちまわって断末魔の苦痛を耐えなければならなかったのであらう。虚空を攫んだ手、半白に見ひらいた両眼は、無限の恨みを明瞭に物語っている。

蔡も星も暗澹とした気持で死骸に見入っていた。そのとき、

「女だ」

「水に漬かっている」

「まだ生きているのか」

「早く引きあげてやれ」

ガヤガヤと口々にわめく声が、甲板から聞こえてきた。二人が甲板に駆け上ってみると既に数人の水夫がビシヨ濡れの女を水の中から引きあげていた。肉体に貼りついた工人服

がつくり出す流れるような陰影が、場違いだが妙になまめかしい気配を醸し出していた。まだ若い女である。

「アッ、周少姐（シウシャオチエ）だ」

誰かが叫んだ。

「周月鏡！」

蔡がシッカリと抱きあげる。息もたえだえな女が、うっすらと両眼を開いた。

「助かったわ」

ほとんど聞きとれない声で、誰にともなくつぶやくと、すぐに又、苦しうに目をつぶってしまう。その長いまつげの間から大粒の泪が絞り出て、つと頬を伝うのだった。

周月鏡（シウユエチン）は決して志士タイプの女性ではなかった。学者の娘に生まれて世の中さえ穏かであつたら、平凡で幸福な生活を送ったに違いない。しかし、運命は彼女を疾風怒濤時代のものとした。やさしい両親は国共紛争の犠牲者として死に、月鏡はみなし子となってしまった。親戚知人も四散した中で、彼女は浮浪児の集団に入るはかなくなくなってしまったのである。飢餓と貧困にもみ抜かれては箱入娘とて変容せざるを得ない。そして、憎しみは彼女から両親を、家庭を奪い去ったものへ向けられて行った。十六才で青

幫に加盟した彼女は、厳しい入団式にも、その後の訓練にも立派に耐え抜いた。そしてみるみる有力な地位にノシ上って行った。實際命を惜しまぬ勇氣と持ち前の行動力とが或いは深く本省内に潜入し、或いは変装して逃亡しようとする要人を救出し、縦横に目ざましい手柄を立てさせたものである。

蔡と星との手厚い看護で月鏡は漸く言葉が出るようになった。豪華な蔡の船室である。

途切れ途切れに語るところによれば、李船長は予定通り大陸沿岸の秘密地点で亡命者を收容して離脱を図っていた。ところが不運にも中共側の武装船に発見されてしまった。勿論正規の軍艦ではなく、当局に黙認された一種の海賊なのである。それだけに暴行と略奪は激しく、香港を基地とする海の交通にとって大きな脅威であった。青幫の活動も、直接的には、このような海賊との戦いに向けられる面が少なくなかったといつてよい。さて、そのような海賊船の一つに李船長のジャンクが襲われたのである。生憎、武装において敵の方が強かった。その結果が、この悲惨な最期である。話を聞いた蔡は怒髪天を衝くような態度だった。幹部を集めて何やら打合わせる、船橋に仁王立ちとなり、早くも暮れかけ

る海面をニラミつけていた。

「香港へ帰る前に、一寸、寄り道をさせて貰おう」

ややあって、側にひっそりと立っている星恵美子を振向くと、ポツリとこういったのであった。

脱 出 行

イーラを乗せた車は再びデリー市内に戻って来た。華麗なコンノート広場を廻って、リンク・ロードへ抜ける。すぐ左へ切れて、大きな門の中へ乗り入れて行った。

王族カラージャの故宮かも知れない。よく手入れの行届いた深い木立が際限もなく続いていく間に、滑らかに舗装したペーブメントがある。

イーラは自由になった手で、与えられたサリを汚れたままの裸身にザッと巻きつけただけだった。まだ良く呑みこめなかったけれども今まで置かれていた状態よりは悪いことなからうという莫然とした計算は出来るので幾分かほっとした顔つきになっていた。しかし、苛酷な運命は一寸した浮き沈みを繰返しながら、次第次第に彼女を絶望の深淵に誘

って行くのである。

車がとまった。平家建てだが広い平面を持った石造りの家の前である。

赤い制服を着て、白いターバンを巻いた召使いが、うやうやしく扉を開いた。

「もう始まっているかしら？」

女が、たずねた。

「はい、十五号さま。只今、はじまったばかりでございます」

「そう。それじゃ、いそがなくっちゃ」

ポーチへ進みながら、十五号といわれた女が、イーラを振りかえった。いつの間にか顔に黒いマスクをつけていた。同じものをイーラに渡すと、こういった。

「あなたも、これをつけて下さい。お気の毒だけど身体を洗ってもらう時間がなくなってしまう。気持ちが悪いでしょうが、もう暫く辛抱して下さいね」

といわれては、コックリと頷かざるを得ない。

奥へ導かれた二人は、薄暗い階段を降りてとある広間へ入った。飾り気のないガラシとした部屋である。

覆面の男が数名、グルリと取巻いた中に、日本人らしい六名の若い女が赤裸に剥かれた

上を、ガンジガラメに縛られ、寄り添うように立っている。六人が六人とも、極度の恐怖と恥かしさに肌を鳥毛立たせて慄えていた。

イーラは目の前が暗くなる様な気がした。一難去って又一難というか、虎を狼に乗りかえたに過ぎないような気がしたからである。「サア、一列にならんでヨク面（ツラ）を見せろ」

一人の男がヤクザっぽい日本語で叫んだ。ギクツとした女達は、それでもノロノロと動いて一列に並んだ。

十五号がイーラを押出して、その前に立たせた。

「どれが似ているかね」

「どれもこれもブスばかりで、イーラみたいな美人はいないぜ」

「いや、不美人の方が変装しやすいんだ」

「脊恰好はコイツかな」

「そうだな。まあ、どちらかといえば、こんなところか」

右から二人目の女が、突然、腕を掴まれてヒイツと叫んだ。

イーラと並んで立たせてみると、どこことなく感じが似ているようだった。

さっきの男は、その女の縄尻をおさえなが



ら、残された五人にいった。

「いいか、テメエらよく聞いておくんだ。このイーラさんというお嬢さんは、われわれの大切な方だ。事情があつて大ぴらに東京へ帰れない。そこで、テメエらの一人とスリ交えて行って貰おうというわけだ。テメエらの女友達は何人かとしてコッチへ預けておく。うまくイーラさんを守って東京まで行けたら、あとから何とかして帰してやる。もし誰か一人でもバラすようなことをしたら、この女は、淫売女にしてタタキ売ってしまうぞ。いいかテメエら、おれ達のいい付け通りにできるか」

ドスのきいた巻き舌に押されて、夢中で肯定する五人。

この女達は、実は京都の大学の山岳チームで、ヒマラヤを見ようとサークルで出掛けて来たところを、この連中にさらわれてしまったのである。

「嫌よッ。イヤッ。あたしだけが、一人ぼっちでコンナところに残されるなんて。アア、イヤ、イヤ、イヤ、助けてエ」

縄尻をおさえられた女が狂ったように身をよじって叫んだ。上下に巻きついた縄がグツとクビレ込んで、それだけ余計飛び出したように見える豊かな乳房がブルン、ブルンと揺れ動いた。

五人の女は一方でホツとしながら、一方でこの友人一人だけが人質にされるのを、ひどくみじめな気持ちで受けとめなければならなかった。それだからといって、自分が代るのは真平なのだ。それは、どちらにとっても一種の精神的拷問となった。

ヒステリックにもぐその女を、男達は手取り足取りして部屋の外へ連れ出した。

十五号が残った女達に、横一列に並ぶように命じた。よろよろしながら従う女達は、まだ胸の縄目は解いて貰えない。キリキリと高小手手にネジリ上げられた腕は、とっくにシビレ切ってしまった。

「サア、もう安心しなよ。明日はチャンと日本に送ってやるから」

五人のおびえ切った表情に、一様に安堵の色が泛かんだ。

「但し」

キッパリした調子で十五号がいった。

「あたしたちのことはコレッパカシもしゃべっちゃいけないよ。シンジゲートは世界中に網を張っているから、裏切った奴は必ず復讐される。いいかい」

言いながら、一人に近づいて、上を向いた乳房を人差指でグイと突いた。マニキュアをして尖らせた十五号の爪が、ムッチリした隆起に喰い込んで、赤い痕が残った。

ピクッと慄えた女は、あわてたように早口で答えた。

「イ、言いません。決して……。誓います」
あとの四人も、口を争う様にして交々秘密

厳守を誓った。さもないと折角与えられようとしている自由が、とり消されてしまいそうに思えたからである。

覆面の男達がヒッソリと帰ってきた。それをチラッと横目に入れた十五号が、又言葉を続けた。

「もう一つ」

勿体ぶった声で、ジラすようにゆっくりと言う。

「あんたたちのカラダに入れて運んで貰いたいのがある。イヤ、麻薬じゃないから安心おし。ずっと前、麻薬を運んでいた女が泡を吹いてブッ倒れちゃったんだ。それも税関の前でさ。調べてみると嚴重に包んだ筈のヤクがどうしたわけか外へしみ出したからタマらない。忽ち粘膜から吸収されちゃったのネ。

その失敗にコリて、あたしたちはヤクをカラダで運ばせるのはヤメにしたんだ。フフ、横道にそれちゃったね。それで、今度あんたたちに頼む品は宝石さ。何しろ、ガサをくったから、東京の組織は大変な資金を要求して来ている。それで緊急輸送用に、あんたたちの身体を借りることにしたんだ」

女たちは、まだ何が何やらわからないような顔付きをしていた。しかし、すぐにその意

味を、イヤというほど悟らされてしまうことになった。

左の乳房に赤い爪痕を残した女が最初だった。大きく両足を開くことを命じられたのである。もたもたしていると、力一ぱい頬を張られた。

覆面の一人が、ソーセージのような形をしたポリ袋を十五号に渡した。透明な被膜に包まれてギッシリ詰め込まれた様々な宝石が光っている。

「キレイだろう、どうだい。イクラ位だと思う、ええ？」

これみよがしに目の前で振って見せ、ニヤツと嗤う。

「サア、これを頬張って、タンと唾をつけるんだ」

無理矢理に口に押し込まれて、目を白黒させるのを、ドツと男達が嘲笑した。

唾液で濡らされたポリ袋を、口から抜きとった十五号は、いきなりシヤがみ込んだ。

「痛いッ。やめてえ、ああ」

さすがに金切声をあげるのを、気にもとめない風であった。

声も出ないで女は大粒の涙を流しつづけていた。十五号の作業は終わった。ポリ袋は完全

にかくれて見えない。

「こいつらは、まだホンのネンネだから、これぐらいのことでも痛がるよ」

立上った十五号は男達の方を向いて、こういったものである。

「フフフ、そりゃあ気の毒だ。痛くないように少しクスぐってやれ」

合点。とばかり、男達は一斉に四人の女に飛びかかった。それは、まるで餓えた狼のような勢いだった。四人の哀れな小羊たちは、悲鳴をほとばしらせて逃げまどった。しかし赤裸の後手縛りでは到底、逃れられよう筈がない。

やがて、一人一人つかまえられて、床に押し倒される。ある覆面男は逆馬乗りにまたがった。同時に右足を飛ばして女の膝関節にからむと、そのままグイとひきあげる。馴れ切った動作である。声をふりしぼり、あらん限りの力で、押え込みを外そうともがいても、男の体重と、手慣れたテクニックには所詮、太刀打ちが出来ない。情けないのは女の性である。屈辱と疼痛に如何に苦しみさいなまれていても、肉体はその意示に反して複雑な反応を示しはじめる。

組み方は様々であったとしても、他の四人

を襲った運命も大同小異だった。押えつけられ、屈伏させられた女体は、ヒクヒクと屈辱を慄えで表現していた。すえたような臭いが部屋の中に充満している。

すさまじくも華麗な攻防の絵模様だった。

打ち捨てられたイーラは、逃げることも出来ず部屋の隅にうずくまっていた。怒りとも絶望ともつかない想念が、彼女の頭の中で、嵐のように吹き荒れていた。又、最初の女にしても、自分の友達が襲われるのを見て、完全に動揺してしまっただけの事だ。異物感が恐怖心を倍加させたのかも知れない。免に角その女は、失禁しながら痴呆けたように立ちつくしていた。

修羅場の雰囲気巻き込まれなかったのは十五号だけだったであろう。あり合せの雑巾で汚れを拭いてやると、再び足を開くことを命じた。その手にキラキラ光る三角形の金属板が握られている。

「これは大事な品物だよ。落としたり失くしたりしないように鍵をかけておくからね。つまり、昔の貞操帯さ。だけど、あんなゴツイんじゃないよ。細い鎖で吊るようになってるから、スカートさえ穿いていれば誰にも解りはしない」

そういいながら十五号の手は素早く動いて金色の鎖を女の素肌に巻きつけて行く。そして三角形の金属がピタリと貼りついた。鼠蹊部でピチンと錠前がかけられる。何のことはないストリッパーがつけるバタフライと大差ないのだが、このバタフライは鍵がなければ絶対に脱れない。肌に喰い込んだ鎖は、ヤスリをかけるわけにも行くまい。それより、何とかして取ったとしても、あとの祟りが怖ろしいのである。

半時間もたたないうちに、五人とも夫々、宝石をいぱい詰めたポリ袋を保管させられて金鎖で封印され、こうして奇妙な荷造りが終わったのである。

「フフフ、用事にはチョイとばかり不便かも知れないけど、まあ少しの間だ、我慢しておくれ。無事、東京へ着いたら、すぐに外して貰えるんだから、鍵を持ってお待ち兼ねの人ね」

十五号の声は、魔女のそのように無気味だった。

(未完)

× × × ×

× × × ×

バックレス ドレスの 理沙

芳野眉美

A

ミニグラマーの理沙は、おとなのようなこどものような印象で魅力があった。苺のようなあかい形の良い唇、あどけない目、ブロンドにそめた髪。中学生の頃、理沙の白痴美に魅せられた担任の先生が、放課後一人理沙を残し、理沙にいたずらした事件があり、その担任は教職を追われたという伝説がある。

ロングスカートの膝下すれすれの35センチのブーツという、あまりカッコよくないスタイルで理沙は街に出る。

ぶらぶらとウインドウショッピングをして、いるうちに、理沙の鋭いカンがひらめいて、その中年の男にみよがしに、ロングスカートのブレース（腰のひも）を引っばった。

と、ロングスカートのするすると上にあがって、マクシからミディになり、理沙はその

男にウインクして、更にブレースを強く引くのである。

ミディがミニに変化し、半開きの唇が余計に光り、艶やかなレザーの光沢を放った35センチのブーツがカッコよく、すんなりした理沙の足の線をひきたてるのであった。

中年の男は、小学生の頃、御神影の白い垂幕が静々とあがるのを思い出したのかもしれない。理沙に頭を下げたのである。



カット・春川ナミオ

ロングスカートからミニスカートに変貌した理沙が男に近づく、男はあわてて、

「お茶でも……」

と口ごもった。街で若い女の子を誘うのに慣れていないらしい。

シースルー（透けて見える）ルックのランジェリーが飾ってある店に理沙が入ろうとしたので、男は当惑したらしい。

「このお店の地下が喫茶店なの」

理沙は男の腕を取ってドアを押した。透明なナイロンのブラジャーや、ロングベチコート、唇形のアクセサリが縫いつけてあるパントリーなどが飾ってある店に入るだけで、男の顔は紅潮していた。

ピアノが置いてある喫茶店で、優雅なシャンドリアがまばゆい。レモンティにブランドイをたらしめて、男はどうも落着かない。

「理沙は高いのよ、おじさま」

理沙は男の顔に頬を寄せるようにしてそつとささやく。男がいいだしにくいことを平気でいう。男の顔が不安になった。

理沙はテーブルに水で数字を書き、零を四つつける。ほっとしたような男の表情にやつと微笑がこぼれた。

「理沙、おじさまのためだったら、上の呉店

に飾ってある透けて見えるランジェリーを着てもいいわ」

「上手なおねだりだ」

「フフ」

「好きなのを買うといい」

「有難う、おじさま。理沙、おじさまのことなら、なんでもきくわ」

「そうかな」

「あら、信用ないのね」

「いや、無理な注文をつけるかもしれないからね」

「おお、こわ」

甘ったれた理沙の鼻声は、男の財布から多額の金を消えさせる。

理沙のマンションに案内された男は、理沙が買ったばかりの華やかなシースルーランジェリーと、ハイヒールの金色の室内履きだけであらわれたとき、理沙の前に土下座してうやうやしく拝謁したのである。

「女王さま、私を奴隷にして下さい」

「Mなのね、お前は」

イギリス女王が剣を肩にあててナイトの称号を授与するように、理沙は金色の室内履きで男の肩を踏んだ。

理沙の皮膚と一本化したかと錯覚を起こさ

せるような華麗なランジェリーは、花模様のリボンがついていて、見上げた男の視線をオフリミットしていた。

「口を開けて」

と理沙は男にいった。

「ほら」

熟した苺の果汁が唇にあふれ、糸を引いて男の口に落下した。理沙の唾液は男の口に甘い芳醇の香を漂わせ、男は肩を強く踏まれて呻めいた。男の肩に理沙の体重が集中したのである。

理沙は男の顔をかかえると、男の唇に接吻した。小さくなった丸い飴が、唾液のオブラートに包まれたまま、口移しに男の口に移った。

「お脱ぎになって」

理沙は、やさしく男にいった。

「理沙は裸と同じでしょう」

理沙の小さな可愛い手がネクタイをほどいていた。

金色の室内履きをはいたまま、天幕のように天井から張り飾られたレースで包まれたベッドに横になった理沙は、男がスーツを脱ぎ下着をおずおずと取るのを眺めていた。

男がテレルのはこの一瞬である。前を手で

隠すのはあまり恰好の良いものではない。と
いって、子供のように無邪気にむきだしにも
できない。

女王に見られているという刺激で、興奮す
るところか、男のはだらしくなっていた。
ウインドウショッピングしていた理沙が、ロ
ングスカートをミニにからげて、男の腕に手
をまわしてきたときとはまったく逆の結果で
ある。奇妙な面白い現象といえる。

女王の金色の室内履きの先が、つとのばさ
れてくると、男は思わずあとずさりした。

「誰が逃げてもいいといった」

ハイヒールの室内履きをのばしたまま、理
沙は声を荒げて男にいった。

「そのままじっと立っていろっしやい」

「――」

「返事はどうしたの」

「はい」

「女王さま、とおいい」

「はい、女王さま」

「それだけ？」

「申し訳ありません。女王さまのお好きなよ
うに料理して下さい」

理沙は男をベッドに近づけて、室内履きの
尖った先が颯り始めた。理沙がくすつと笑う

と、男の顔は羞恥で真赤になった。意外にウ
ブであった。

理沙が両脚をのばすと、男の手が理沙の足
首をつかみ、悲しそうな顔をした。

「やめて下さい」

「どうして？」

「――」

「女王様に抗う気なの」

かかとの高い金色の室内履きは、容赦なく
男の体を狙って突き出される。

「お坐り」

理沙は男に命令した。

「ヒールの底をお舐め」

理沙はベッドの前に跪いた男の顔に、ヒー
ルの底を押しつけた。男の舌が仕方なしに動
く。なさけなそうな男の顔であった。

「いやいやするんなら、このまま追い返すわ
よ」

理沙は、きびしい声でいった。

「もっと丁寧にお舐め」

理沙は男の顔を思い切りけとばし、ヒール
の鋭い細いかかとで、男の肩に傷をつけた。
わずかに血がにじむ。

「帰るかい」

「とんでもない、女王さま」

男の両手が理沙の足首をつかみ、男は必死
に室内履きの底を舐めた。首を振り振り、命
令に従うさまは、だらしく滑稽であった。
理沙のいいなりに、多額の金を支払っている
男である。しかるべき社会的地位のある男と
見たが、マゾとは面白いものだと思っ
た。会社では、部下を叱咤し、やりての上役
に違いなかった。

それが、さっきはじめて会った理沙のいい
なりに裸になって理沙の命令に従っている。

「もういいよ」

理沙はベッドから起き上り、衣裳ダンスの
戸を開けた。そこに、奇妙なダミーが立って
いたのである。

金網のファッションをつけた、ダミーであ
った。

「奴隷の服だよ。ダミーから、はずして着て
ごらん」

「金網が着られるのですか」

「伸縮自在だから着られるよ」

ブラウスとタイツに別れている金網のファ
ッションは、男のやや肥満した肉体に食い込
み、金網の隙間から肉がはみだして、男は呻
いた。

「少し、きつかったかしら」

「苦しいし、痛いです」

「あたりまえよ。苦痛を感じなければ、奴隷にさせたことにならないじゃない」

理沙は金網のブラウスのボタンをかけ直し一部にはナイロンのナチュナルストッキングを使った。

「お似合いよ」

ハイカラーで、男の首は細い金網に締めつけられ長くのびていた。金網のファッションは、男の腕といい腹といい尻といい、男の体を締めあげていた。

のれん状の鎖がそのまま責め具になり、金網のファッションの袖につけられた腕輪につながれて、男の両手は大きく開かれて天井から吊るされた。

金網からしぼりだされたようにハミ出している皮膚を、理沙は長い鋭い爪でつつき、つまみ、ぎゅっとつねって男に悲鳴をあげさせた。爪のあとが赤くはれあがり、男の全身はみるみる、あざだらけになっていった。

「奥様には見せられないわね」

新品の唇のアクセサリが縫いつけてある透明の薄いパンティは珍品であった。

気色悪そうに、理沙は男に買わせたそのパンティを見てから、ひょいと男の鼻をつまんで口に押し込んだ。

「吐き出したら、ライターで、はみだした肉をバーベキューにしちゃうわよ」

男の口から、理沙の脱いだばかりのパンティの端が、はみだして、男はもぐもぐと口を動かした。パンティで舌がもつれているらしかった。

ランジェリーの花模様のリボンを取り、理沙の華麗な肉体が、薄物を透して男を魅了した。肩は細く、背中中は長く自然で表情ゆたかなヒップが男を狂わせた。

女のうしろ姿がこんなに美しいものだとは思わなかったのに違いない。

マンションのドアが静かにノックされ、理沙がのぞき窓から外をうかがってから、ドアのカギをあけた。

レザーコートに、ブーツをはいた太った中年の女であった。太ったからだを、ぎゅっと皮で包んで、ブーツからこぼれているのが、意外にエロチックであった。

金網のファッションを着せられ、パンティを口からはみだして天井から鎖で吊るされた男を、ちらっと見ただけで鼻を鳴らし、

「綺麗だね、今夜の理沙は」
と裸同然の理沙をかかえこむように抱きしめると、吊るされた男の前で接吻した。

「カモをみつけたね」
王朝風の天蓋でおおわれたベッドの中に理沙を横たえたのである。

B

そのレザーの中年の女から招待状を貰うとは、男は考えもしなかったのに違いない。

会員制の秘密クラブといったところだろうが、招待状にはただパーティーを女のマンションで開くことと、会費が書いてあるだけであった。

会費を送ってから、マンションの場所を知らせるといことは、パーティーごとにマンションをかえていくのかもしれない。

金網のファッションを着せられたまま、男が中年の女と理沙のレスを見せられたのは、ワイルドパーティー（そう呼ばれるものなら）への試験であったのかもしれない。

理沙との通信に、男ははじめて私書箱というものを利用したのである。あの夜は、理沙は抱かれていない。

静かな住宅街をぬって、指定された高級マンションをさがし、男はベルを押した。高価な代償を支払っても、ワイルドパーティーの経

験をしてみたかったという好奇心も手伝って
いたことだろうし、とうとう許してもらえな
かった理沙の肉体に対する未練もあっただろ
うと思われる。

ブザーが鳴り、小窓があげられ、ドアが静
かにあいた。

「お待ちしていましたわ」

ミニドレスの理沙が微笑を浮かべて男を出
迎えた。理沙が男に背を向けたとき、なんの
変哲もないミニドレスだと思っていたのが、
理沙のうしろは、まるっきりの裸であった。

バックレスドレスだったのである。

ロングスカートがみるみるミニスカートに
なった初対面のときと同じような新鮮な驚き
を男は感じ、理沙のセックスゾーンが首筋か
ら背筋にあるのではないかと思った。

そして、白くふっくらと盛り上ったお尻に
ボディペインティングされているのに気がつ
き、いままで緊張でつぶっていた身体が急
にもみほぐされたようで、男は首をまわして
大きく嘆息をついた。

中央にセミダブルのベッドが置かれている
部屋は、ブルーグレーのカーペットが敷きつ
められ、フロアスタンドはつけられていず、
色とりどりのキャンドルの炎が、ゆらゆらと

まるで男心を誘うようにゆらいでいた。

そして、驚いたことに、そのキャンドルの
炎の下に、鎖で縛られたり、手錠足枷をはめ
られた少年が、キャンドルの蜃を、ひたいや
ほおにまともに受けて、カーペットにじっと
坐っているのである。

人間燭台であった。

「あの燭台たちは、みんな、ママに童貞を捧
げた少年たちなの」

とバックレスドレスの理沙が男にいった。
ひたいに赤いキャンドルを立てられた少年
もいるし、背中に青いキャンドルを立てられ
たもの、お尻に突き通すように立てられたも
のと、さまざまに恰好で、パーティのライト
の役目を果たしていた。

サウンスはものかないブルースものが多
く、男は理沙から白い丸い錠剤をわたされて
一瞬ひるんだ。

「白いダイヤよ。カリカリかんで飲むの」
ハイミナールであった。羞恥心を除くため
に用意されたものと思われる。

目がようやくキャンドルの薄明りに慣れて
くると、部屋の中央のセミダブルのベッドに
すでにもつれ合う二つの影を見つけて男は息
をとめた。

ワイルドパーティはすでに始まっていたの
である。

「お脱ぎになって」

と理沙が男にいった。

「殿方は裸。それがパーティのルールよ」

ベッドからロングブーツがのびて男の顔を
下から上に撫でた。ナチュナルストッキング
のように、肌にぴったりと吸いついた腿まで
包むロングブーツの女が、パーティの女主人
であった。

「ようこそ」

と、レザーのロングブーツの女主人は男に
いった。

「理沙のお部屋でお目にかかりましたわね」

「ご招待、有難うございます」

と男は、ようやくいった。

女主人の膝下には組敷かれた人間が呻いて
いたのである。

女主人の豊満な体重に押し潰された男は、
半身しか見えなかった。いや、見えないのも
不思議はなかった。その男の半身は黒光りの
レザーの妖しい光沢の中に埋没していた。

全頭式皮マスクと皮マントが結合したよう
な拘束具であった。全頭式皮マスクは耳も口
も眼もなく、かろうじて鼻の小さな穴だけが

あいているだけであり、両腕ごと皮マントで包まれ、両手が胸で組合わせられているのがマントの盛り上りでわかった。皮マントの下で、手錠をはめられているに違いなかった。

レザーのマントは、ウエストで急激にすぼまり、男の腰を太い皮バンドで責めつけて固定してあった。

つと、レザーの拘束具の男から立ち上った女主人は、二本のロングブーツをあざやかにひらめかして、ベッドに坐ったまま、理沙に裸にされた中年の男の首をはさんだ。

いつのまにか、鋭い細い強靱な乗馬用の鞭を握った理沙が男のうしろに立ち、女主人のロングブーツの枷から逃れようとがく男の背に、これでもかとはかりに力のこもった鞭を振り下ろした。

パシッという得体の知れぬ音が響き、中年の男は体をのけぞらせて悲鳴をあげたが、その悲鳴は、女主人のロングブーツに猿ぐつわをされて、むなしく消えた。

バックレスドレスの裾がひらめき、理沙の打つ鞭の音が、ひゅうひゅう鳴って部屋の空気を震わせた。

裸の男の背は、みるみる赤くはれあがり、無数に、みみずばれが交錯した。

つとロングブーツを開くと、男の身体はへなへなとくずれ、ブルーグレーのカーペットに沈んで動かなくなった。

皮鞭の激痛のせいか、ハイミナールのせいか、男は半死半生になって呻いていた。

「フン、だらしない」

まっ白な豊満な腿をレザーのロングブーツできっちり締めつけた女主人は、ぐったりと床にのびた男の足をつかむと、ずるずるとトイレまで引きずった。

マンションのトイレは、バスルームの中にあり、洋式だったが、女主人はトイレに男の背中を寄りかかせると、男の髪をつかんで白い陶器の中に顔をつけたのである。

「パーティのスペシャルドリンクだよ。たんとお上がり」

スペシャルドリンクは容赦なく男の口に流れ込み、息も絶え絶えに男は呑みほしていたようであるが、女主人がおかしいと気付いた時、男の上半は、がくりとくずれてタイルにくずれ落ちた。男は気を失っていた。

「理沙、おいで」

全頭式マスクと皮でおおわれたベッドの男を床に蹴落とし、女主人はゴージャスなセミダブルのベッドに理沙を呼んだ。

「お前の鴨は、あまり上等でなかったよ」

「すみません、ママ」

理沙は、このサディスティックなレザーマニアの中年女の命を受けて、M男をさがしているのかもしれない。

「契約違反だね。わかってるね、理沙」

「あまりひどくいじめないで、ママ」

「可愛いがってあげるよ」

理沙はベッドに仰向けに寝かされ、バックレスドレスのまま、両足をなげさせられて、ひざと腰をロープで縛られた。理沙は女主人の刑罰の意図に気がついた。理沙の丸まっちは女主人の攻撃を待ってふるえている。香水を混ぜた石けん水の脱水作用で、理沙の直腸は焼けつくような疼痛と、どうしようもない圧迫感に襲われたようであった。

「ママ、許して」

女主人は五分すぎても脱脂綿をはなそうとしなかった。

「お願い、ママ」

そのとき、バスルームからゆらゆらと中年の男が寝室にもどってきた。ようやく気がついたらしかった。

「野良犬」

と女主人は男に叫んだ。

「こっちへ来い」

まるで夢遊病者のように、男は女主人のゆいなりに、ベッドに近づいた。

「ここへ坐って顔をおだし」

男はベッドに両手をつき床に膝をついた。

罰を受ける理沙のお尻が目前にあった。

「口を開けて」

「もう、だめ」

女主人の声と理沙の声は同時であった。

サディスチックな妖しげなパーティのムードとハイミナールが、男の思考を完全に奪っていたに違いない。男はシンナー遊びの少年

のように、ふわふわと夢幻境にさまよっているのかもしれない。

「こんなに素晴らしいカクテルを、お前は今まで知らなかっただろう」

夢うつつに聞いているらしい男は、なんども、うなずいた。

「うれしいだろう」

女主人の暗示は、まるで催眠状態に男を追いやっているようであった。

ニンマリと笑った女主人はピストンでチューブ入りのチョコレート有理沙の直腸に送った。固体でもなければ液体でもない。やわらかなチョコレートは、理沙に種々な呻き声を

もらし続けさせた。

「さあ、できた」

女主人は、にんまりして男にいった。

「お前は幸福な男だよ。わたしの最高の手料理をたべられるのだからね。世界中のレストランでも、このごちそうはつくれないさ。お前にたべさせるのはもったいないけど、これからもお前の金をしぼりとらなければならぬいから、せいぜい、ごちそうしてやるよ」

「有難うございます。女王さま」

夢遊病者は女主人に土下座して礼拝した。

(終)

最近の一般雑誌小説に思う

城 剣 太郎

近頃の本誌上でも時々云われていることだが、最近の一般雑誌の小説類の中には、一昔前までは全然姿をみせなかったSM、フェチ、浣腸、男色などをテーマにしたものが、堂々と掲載されるようになった。しかも、その描写は、本誌の控えめな表現をあざわらうかのように、露骨であり、

詳細である。同じテーマでも、一般雑誌だから官憲の目が届きにくく、本誌のように特殊雑誌の場合は、そういう先入感でみられるから余計に控えめにしなければならないのか……というようなことはない筈だと思ふのだが、なんとも不公平な話だ。

それはともかく、題名からしてズバリ、M

小説を連想させる梶山季之氏の『男を飼う』が、前篇、『鞭と奴隷の章』として単行本にまとめられ、集英社から発行されたが、これはハイティーンの男女対象週刊誌『週刊明星』に連載中のものであることはもはや大方の周知のことだろう。

美貌の混血女性、牙子女王が、フェチ、ゴムマニア、マゾなどの性癖を持った男性を、奴隷として飼育し、メキシコへ渡り、外人女性にこの奴隷を提供して外貨を稼ぐというもののだが、全篇にわたって、女性にしいたげられて喜びのたうつ男性の姿が、

描写されている。

「成人向き」というレッテルを貼って、特殊雑誌を表看板にしている本誌ですら、遠慮しているのだろうと思う描写が、十代の男女を対象とする週刊誌に、これほど詳細に、リアルに表現され、さらに単行本として堂々と発売されているのだからオドロキである。

梶山氏の小説には、倒錯性を扱ったものの多いことも本誌読者なら周知のことだろうが、一般誌に挟ったあの露骨さを、予備知識も理解もない人がどう受けとるだろうかと思うと興味深い。

宇能鴻一郎氏。この作家のものにもかなりマゾ的な作品があり、本誌でも早くから紹介されているようだが、特に講談社から出版されている同氏の『私の女性開眼』の中に書かれている数行に眼をひきつけられたので、引用させて貰う。

「——私の知っているかぎり、マゾヒストには堂々たる体つきの好男子で、仕事もばりばりやっている、自信にあふれた男が多い。逆に女性をいじめて喜ぶサディストには、小柄でやせていて、女性的な性格の、劣等感だらけの男が多いようである。」

たとえば、人類はじまって以来の、もっともすぐれた男の一人であるゲータには、

マゾヒスト的傾向が多分に見受けられるし、日本が生んだもっともスケールの大きい文豪の谷崎潤一郎にも、その傾向は見られる。逆にサディストは智能の低い犯罪者に多く見られ、しばしば新聞をにぎわす強盗殺人魔などは、まずたいていがそうである。△サディストの方、ゴメンナサイ。私が云うのではなく宇能氏が書いていられるのですから……▽

この本の中には、ピアノ教師との交渉や看護婦との思い出などが、宇能氏独得のネチッコイ文体で表現されているが、梶山氏のものほど、あけすけな生々しさは、いくらか少ないようにも思う。しかし、ピアノ教師とのくだりでは、相当に微細な描写がされている。

さらに、女店員が何人も住み込んでいる隣の商家の便所をのぞき見するくだりで、目の前に展開する女体開陳の様様や、放尿の場面が、実に克明に、しかし美しい描写で書かれている。

同氏の作品『痺楽』——講談社版——の中の『薔』に、うすのろな倉吉という店員が、女主人おけいに、麻縄で後手にしばられて股間に通した縄で吊り上げられ、爪先立ちしなければ立ってられないような折檻をうけて喜ぶ、というくだりがある。

「——細引は罌丸の一部を喰い、鼠蹊部にじかに喰い入り、尻の割れ目にはさまれて肛門

と尾骶骨をすさまじく締め上げにかかっている。——略——苦痛の激しさは変りなかったにもかかわらず、彼の肉はひとりでに容積をました。細引きの圧力で一方に引かれていた皮膚に、はじめて別方向からの緊張が加わった。とぎれがちな隣室の声を聞きながら、倉吉は股間に加わる苦痛が、いままさにその声の発し手によって加えられているのだ、と考えた。するとふしぎなことに苦痛は、痛みのはげしさはそのままながら、妖しい甘みをしだいに帯びはじめたのであった。罌丸の圧される重苦しい不快感も、鼠蹊部の灼かれる痛みも、麻の繊維が肛門を刺す辛さも、性的な光りをあてられたとたん、一変して快さの要素を持ちはじめたのであった。——略——

以上単行本から、ホンの少し引用させてもらったが、最近の一般雑誌には、この種のテーマを扱った小説が、必ずといってよいくらいに載っているようだ。変態性欲視されているこれらの傾向が、一般誌にこれほどとり上げられることは、出版社の奇を狙うという編集ぶりもあるうが、自分は正常だと思っている人の心の中にも、こうした欲望の一端が顔を出ることがあると、認識され出したからではないだろうか。

S M カメラ・ハント

／金原奈加子の巻／

童女受胎譜

辻村 隆

——春雨の譜——

金原奈加子の告白「或る願望に托して」が発表されたのは、四十三年の三月号である。

編集部からの連絡によると、一月草々、年賀状の追伸分に混って送られてきたとかで、本人のスナッフフォトも同封してあったので早速サロン欄に載せたということであった。告白の中で私や山本一章にも呼び掛けているので、これは脈があるぞと、早速機会があれ

ばハントすべく期待していたが、諸種の雑用に追われているうち、山本一章の方がカメラルポ「この人と」に書くつもりで、早速デートの約束をし、二度出掛けて二度ともすっぱかされて、相当頭にきていることをきき、こいつはヒョツとしてよくあるヒヤカシじやなからうかという気になって、ついついそのままになってしまっていた。女性名でさもさも垂涎的な文句を書いてよこして、その実、我々をウロウロさせて、蔭で私達を見ていて、



編集部提供

ほくそ笑んでいるような、性悪な連中にも過去数度、苦い経験を味わっているから、私も余り当てになくなっていたのであった。

ところが翌月の四月号に、編集部で撮った彼女の緊縛フォトが出ていて、しかも「／洗礼／を受けて」という告白までの

っている。やはりホンモノだったのかと、すぐさま箕田氏に連絡すると、

「彼女、どうも時間の観念が、ルーズでね。一度はスカを喰ったんだが、二度目に相当待たされて、やっと会ったという次第なんだ。一章氏の時も遅れていったのだそうだが、何しろ一時間以上も遅れては、誰だって待ってられないだろうよ。大体、時間厳守の我々仲間だからね。いい年をして来るか来ないかわらぬものを、一時間以上も待てないじゃないか。それで一章氏、とうとう腹を立てて、あきらめてしまったよ。あんたも一、二度の待ち呆うけ覚悟なら、会ってみるがいいよ。とも角、電話番号をしらせとくからね」

という返事で、彼女の勤めている西宮市内の美容院の電話番号をしらせてくれた。なるべくなら女性の声で電話をかけた方がいいというので家内に頼んで電話をかけさせ、金原奈加子を電話口に呼び出してもらって交替する。店の人達の手前、判つきり何もいえないのか、こちらから要件をきり出してやると、二月中は、婚礼や何やかやで出難いというところで、改めて三月になって電話することにして、やっと彼女と会えたのが、今年の三月三十日のことであった。

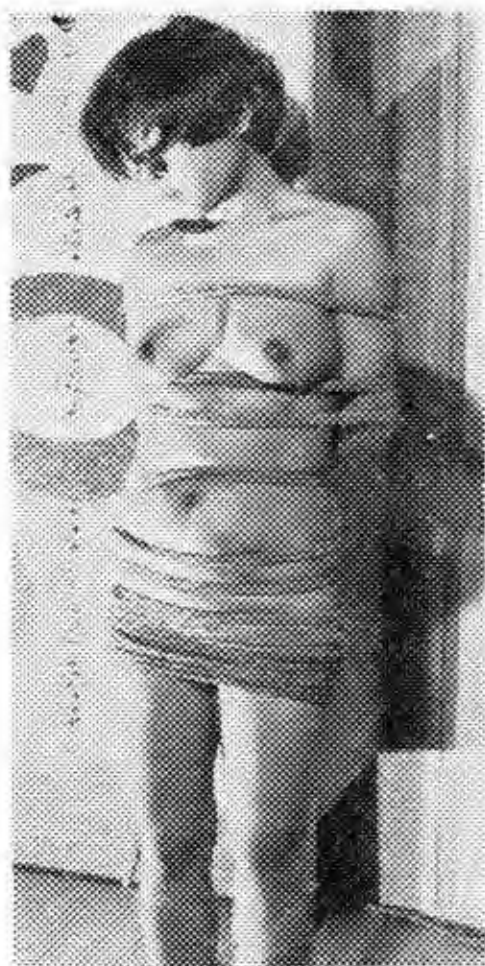
阪神電車の西宮駅で待つこと四十分——。生憎の春雨煙る雨中を、わざわざ出掛けてきたのに、やっぱりやられたかと少々業腹になりかけた時、中学生のようなおカッパの少女が、ビニール傘の赤いのをさして急ぎ足で駅にかけこんできた。それが金原奈加子であった。全然化粧もせず、このうすら寒い時季に黒と茶の縞のワンピースに、マフラーを首に巻いただけの、ほんとの平常着で、鼠色の雨靴を履いている素朴さであった。余りにも幼い感じなので、はぐらかされたようで、私は、しばし途迷ってしまった。箕田氏からフオトを送られていて、あらかじめ小柄な娘とは分っていたが、まるで十五、六才の少女みである。フオトで私は彼女の顔を知っているが、相手は私を知ろうはずもない。

「金原さんでしょうか？」

幼い後ろ姿に声をかけると、ビクッとしたように振り返って、私を認めるとオズオズした表情になって、そっと目を伏せてうなずいた。十九というが、余りにも可憐で童女めき過ぎている。食事をきくと、未だと

いうので、駅前近くの寿司屋へ入って軽くすませ、万一を慮んばかりで、地元の西宮を避けて、阪神電車で甲子園に向かった。二時間ぐらいで帰らねばならないというので、近くを選んだのであった。駅前タクシーの運ちゃんに、何処でもいいから頃合のホテルへ行ってくれというところ、この親娘のような変なアベックをジロジロみていたが、これも男性対女性と察したのか、五分許りでアベックホテルへ横付けにしてくれた。

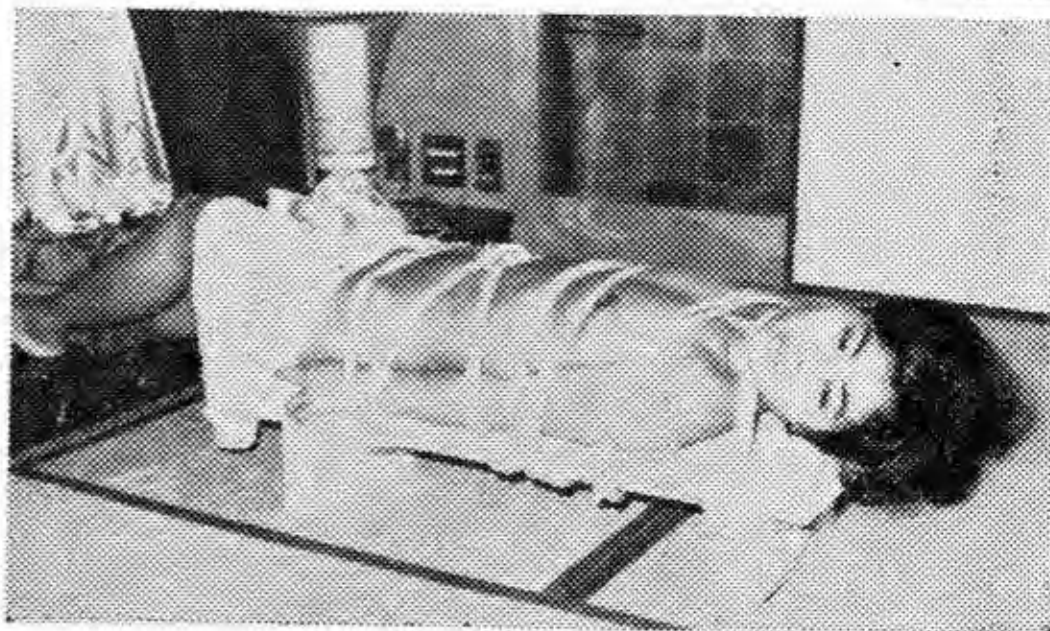
まるで親子ほど年令の違うせいとか、彼女は無口で終始、習えたようなオドオドした感じであった。私もこの子供のような金原奈加子に、余りSめいた緊縛もしにくく、大分勝手が違ったが、一応フィルムを三本ばかりとりそのうち二本位は緊縛のポーズであった。



編集部提供

体全体が未だかたい感じで、蕾がやっと聞き始めたといった青い未熟さに包まれていた。

私も勿論、若い娘にこうしたことはないが、それもよりけりで、全裸から受取る感じが、こゝうも若過ぎると、女性としての対象には、しにくかった。念のため年令をたしかめると、一つサバをよんでいて十八ということであった。近頃の十八才なら娘によっては結構、女らしいのに、彼女には全然そんな感じはなく胸の隆起のみ、かなり膨れをみせているが、ヒップは小さく、そのあどけなさといい、所詮、少女の域を出ないものであった。この娘が、ああした告白を発表したこと自体、私には不思議であった。セーラー服を着せたらそのまま中学生で通用しそうなこの童女の、どこに、ああした魔性の想念が、ひそんでいる



のであろうか。告白の手記について、その日、相当つつ込んで尋ねたが、少女は困惑したようにモジモジして、遂々返事をしなかった。しかし、この娘を緊縛して、開股位の露出を撮った時、私は彼女がバージンでないことを、判つきりとこの眼で確かめたのである。肉体の未熟さに比してその部分の発育は、これ又、意外にも十八才の娘以上のもので、このアンバランスに私は奇妙な錯覚に陥らざるを得なかった。肉体が女らしく発育する以前に、既にセックスの方が先行して発達したこの娘——そして、彼女の経歴は未知で何も分らない。

二時間という制約された時間をフルに活用して、かなりの収獲はあったのであるが、その日の経過は、四十三年七月号の楽我記に書いた通り、散々の失敗であった。使い馴れない軽量の、ミノルチナというカメラがM接点になっていて、最初の緊縛プレイにかかる前

のヌード四、五枚が、辛うじて映っていたに過ぎず、さて、これからという肝心の処は、全部、白ボテだったのである。一番手のもってゆき易い、絞り位置をかえる個所に、MXの接点があるなんて、ミノルタも随分、不親切なカメラを出したものだ、独り癪にさわっていたが、幾分は自分の不注意もあることで、今更どうしようもない。そんなわけで、緊縛プレイの様子は、肝心のフォトがないので省略するより仕方がなく、したがってハントも書く気になれず、折角の金原奈加子との第一回の会合は、こうしてあっけなく終わってしまった。改めて彼女の都合をきいて、もう一度、約束し、四月十日、再び出掛けたのに今度は、ものの見事にすっぱかされ、やはりやられたわいと、この日も生憎の小雨空、見上げて慨嘆したが、そのうちにアレヨアレヨという間に六カ月が経過してしまったのであった。

——秋風の譜——

そろそろ秋風の立ちそめた十月の下旬、忘れた頃になって、ヒョッコリと金原奈加子から電話がかかってきた。

「一度、是非お目にかかりたいんです。お願

「います」

「でも君は、いつも待ち呆うけくわせるからどうも信用出来ないよ。だめだ——」

スッポかされているから、私の返事はつめたかった。それに、恰度その頃から、東映の『元禄女系図』の話もあって、多忙になりかかっていた。

「今度こそ、そんなことはありません。絶対ゆきますから……」

「どうして待ちぼうけくわせるの、いつも」
「その時は、いつでも出る気になっているんです。でも、いろいろと用事をいつつけられて、仲々出られなくなるんです。四月にも遅れることは遅れましたが、行ったのです。でも、心ならずもあんな結果になって、御免なさい」

私は、しばらく返事をせず思案していた。美容院の見習いとして勤めていて、その合間に、そっと脱け出すのは、かなり困難なのだろうか。だから、ああして平常着で駆けつけてくるというのか。

「もしもし……もしもし、ダメでしょうか」
何か哀願するような必死の口吻である。何となく気になったから、
「それで、いつ頃？」

「ハイ、二十六日の、一時頃では、いかがでしょうか」

「二十六日、エーと土曜日だね。約束がないこともないんだが、必ずくるというなら、考えるよ」

「きつと行きます。私

美容院やめましたから、もう前のように、出難くなくなりました。是非、撮ってほしいのです」

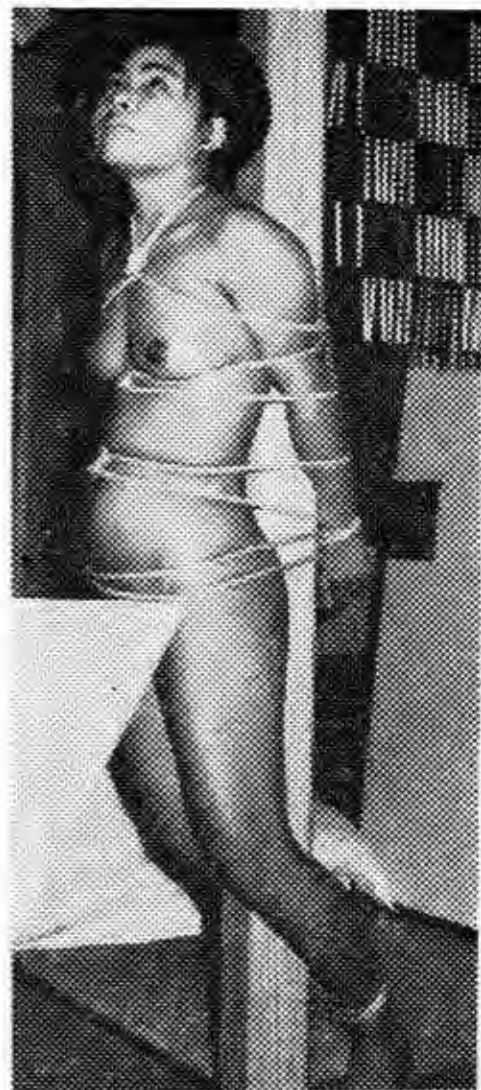
「莫迦に熱心だね。じゃあ待合せの場所は、どこなの？」

「阪神の尼崎駅前の、Mという喫茶店なら近いんですが、すぐ分ります」

「じゃあ、きつとだよ。三十分待ってこなかったら帰るから……」

「ハイ、絶対にゆきます。それに一寸御相談もあるのです。是非、お願いします」

何か切羽つまった声で、それで電話はきれた。又そう待ち呆うけでは叶わないと思ったが、差し迫ってお金が必要なのか、彼女の声は真剣であった。三度目の正直ということもあるし、土曜日のスケジュールを急変変更し



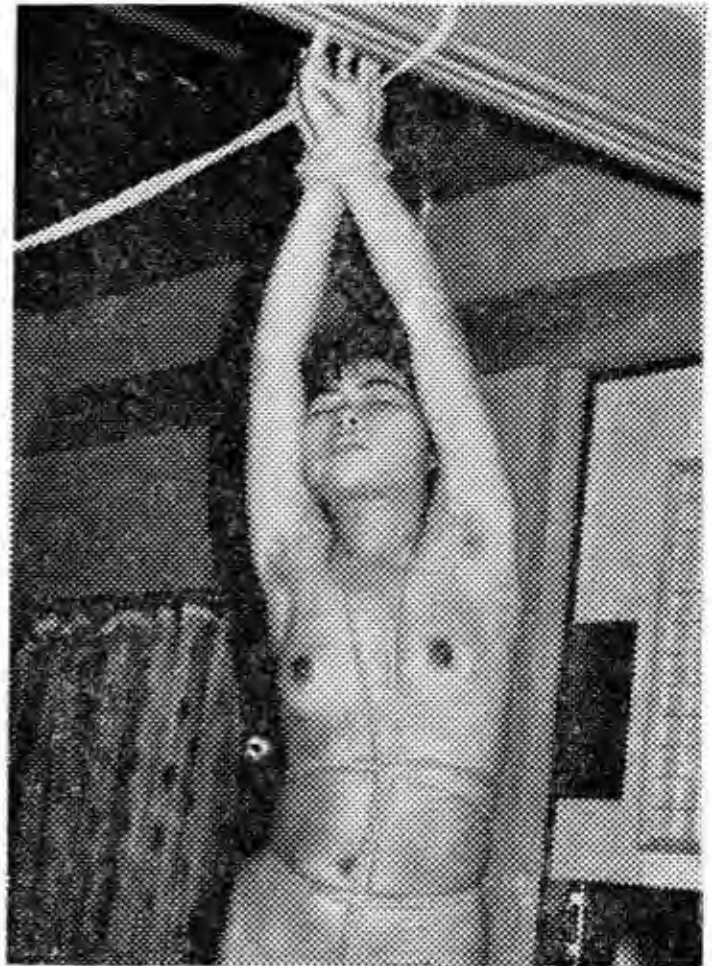
て、約束の午後一時過、尼崎駅前の喫茶店へ出掛けしたが、辺りを見廻したところ、彼女らしき姿も見当らない。二十分近く待たされた頃、金原奈加子が急ぎ足で駆けこんできた。案外こざっぱりしたグレイのツーピースをきこんでいる。私は彼女に手を振る。どうも時間を守らぬのは彼女の悪い癖だ。

「二十分、遅刻だよ。あれほど自分からいっておきながら……」

向かい合うなり、つい仏頂面でいうと、「御免なさい。バスがなかなか来なくて」と、低い声で弁解する。

「それは交通地獄の折柄、お互い様だ。私は一時五分に着いたけど、その為にうんと早く家を出ているんだよ」

いつも書くが、時間を厳守しないと、最初



どこか少し離れようか」

金原奈加子は微かにうなずいたが、相変わらず無口だった。年令にしては明朗さの乏しい、どこか翳のある感じの娘であった。しかし半年経って、ちっとも変わらない。髪をかなりショートにカットして、少し娘らしい工夫のあとはあるが、やや浅黒い顔は、以前とおなじで全然化粧のあともなく口紅すら塗っていない生地そのままであった。

「何か相談があるって言ってたね？」

「ええ……」

もじもじして切り出さず、さっぱり煮え切らなかった。

「何時までいいの？」

「午後五時ぐらいまでなら——」

「そう、じゃあ今日は三時間ぐらいは、あるね。甲子園の方へでも行こうか。あそこなら勝手も分っているし、始めての思い出の場所だからねえ」

行動に移るより仕方なく、一見親娘づれのような私達は、喫茶店を出ると、阪神電車であの甲子園に向かった。半年前にいった、あのホ

テルへゆくために——。

繁華な場所での待合せは、殆どが駐車禁止の今、反って車より電車の方が便利がよかった。おなじみの黒革の袋一つぶらさげて私達は甲子園で降りると、駅前のタクシーにホテルの名を告げる。

未だその時点では、彼女から、相談なり事情らしきものは、何一つ聞き出していなかったのである。

× × ×

フォトを撮る場合の、きまりきったルートであるが、先ず風呂をすすめ、その間に私はカメラの支度をする。今も亦、その例外ではなかった。

金原奈加子は、小柄な裸身を、バスタオルでスッポリ包んで、おどおどした態度で、机からかなり離れて、そっと坐った。

「あのう、聞いていただけますか？」

意外にも、遠慮がちに彼女は自分から口を切った。

「ああ、いいとも。言って御覧」

「あのう、私……妊娠したらいいのです」

「えッ、君が——。それで兆候はあるの？」
そう聞き直して、流石に吃驚りして私は急に体を乗り出した。

からどうも不機嫌になる私である。来たのだから、もういいじゃないかと思いつつ、つい

「今度から気をつけます」

彼女は、まるで遅刻して学校の先生に叱られている生徒のように、うなだれていた。

「まあ、いいよ。ところで美容院やめたんだって？」

「ええ、一寸事情があった……」

「聞いてはいけないこと？」

「……………」

彼女は黙って、そっと爪を噛んだ。

「尼崎じゃ、知人に出会っても困るだろう。」

この中学生みたいな小娘が妊娠している—
 ということは、間違いなく対象の男性がいる
 ことである。第一回にとった時、私は、はし
 なくも、その露出のポーズから、彼女の未熟
 な体に比して、セックスの方が体に不似合な
 くらい発育していることを発見して、異様な
 思いにかられ、その時から、男性との交渉は
 かなりあったに違いないと想像していたが、
 今、その真実が、彼女自身の口から語られる
 かも知れなかった。

「未だお医者に診てもらっていませんが、生
 理が止まって二カ月になるんです。だからヒ
 ョットとして……。それに近頃、酸っぱいもの
 がほしいのです。本を読んだら、それが妊娠
 の兆候だと書いてありました」

「間違いなさそうだね。或いは妊娠三カ月以
 上、経っているかも知れないよ」

「それで彼は、医者へ行って始末してこいと
 いうのです」

「どうして」

「生活出来ないから」

「それで、その金が必要になってわけ」

金原奈加子は顔を伏せて、うなずいた。

「妊娠は初めてなの？」

「ええ、初めてです」

「彼——いや、君の旦那さんは、いくつ？」

「二十二才なんです」

「いつ一緒になったの？」

「もう一年以上になります。私が十七才にな
 ってすぐでしたから……。籍は未だ入れてま
 せんが、一緒に暮しました」

道理で肉体よりセックスが先行して発達し
 ているわけである。稚な妻、ベビーワイフと
 は、彼女のような子に当て嵌まる言葉なのだ
 ろう。半年前、初めてあったあの頃には、既
 に夫婦として同棲していたのだから、一体ど
 うなってるの、といたい気持である。しか
 し、私はフト不審を感じて尋ねた。

「じゃあ美容院は住込みではなかったの？」

「いいえ、住込みでした。生活出来ないの

……。三日に一度ぐらい彼
 が呼出しに来て、会って
 いました」

「やめたのも、そんな理由
 から？」

「ええ、まあ……。余り出
 てばかりいますから。彼、
 お酒のむと、まるで人が変
 わったようになって、私を
 帰さないんです」



「こんなモデルしていること知ってるの？」

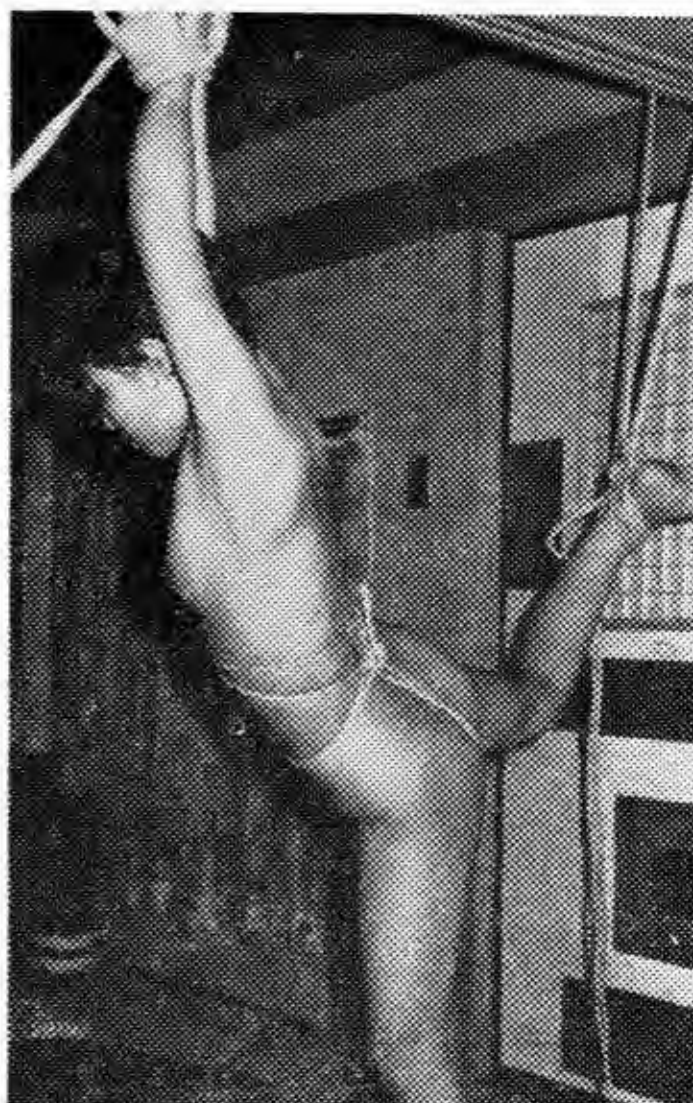
「ハイ、本当いうと、彼が雑誌でモデル募集
 の記事を見たからといって、私の名を使って
 応募させたのです。何か私の名で文を書いて
 のせてもらったとかいってました。どんな雑
 誌か知らないんです。辻村さんは、その雑誌
 の方なんでしょう」

「まあね。それで彼は君を虐めたり、縛った
 りするの？」

「余り縛ったりはしませんけど、お酒をのむ
 と、蹴ったり叩いたりしてひどいことをする
 んです。そんな時は縛る事も時々あります」

「そんな彼と何故、別れないの？」

「何度も殺されると思って逃げ出したのです
 が、友達に頼んだりして私の逃げてる所を探



し出しては、引っ張って帰るんです」

「それで又、余計ひどく虐められるんだろ」

「ええ、逃げられないようハダカにしておくんです。私の衣服類を全部、友達とこへ預けてしまつて、友達が訪ねてきても、皆の前でハダカなんです」

「じゃあ、今日のことは？」

「搔抓する金を、自分で作ってこいっていわれたんです」

私は金原奈加子の話の中から、彼女の夫と称する青年にサジストを感じた。奇巧の読者である点からみても、それはほぼ間違いないようであった。普段は内攻性であるが、酒の

勢いをかりて彼女を虐めることに、悦虐を見出しているのではなからうか。この稚な妻を奴隷のように扱うこと自体が、異常な愛情の発露であつたかも知れなかつた。それゆえに彼女は、夫の命ずるプレイの場に困惑し、つい心の波るまま遅れがちになり、せめてもの

反抗が、私達に対するすっぱかしとなつて現われたに違いない。初めて会った時から感じた、年令に似ぬ無口の淋しい様相も、こうした夫の横暴さから、やむを得ず命ずる俚になつていた悲しさが、つい顔に現われていたのかも知れなかつた。

「じゃあ、こうした縛られたフォト撮つてることは、彼、勿論、知っているんだね」

「雑誌をよんでますし、時には、うんと虐められてこいなんていいます」

「そして帰った時は？」

彼女はフツと瞼を伏せると、眼をしばいた。これ以上、この童女のような稚な妻から

SMのプレイの赤裸々さをきくことは酷のようであつた。

「どうして、そんなに若くから夫婦になつたの？」

「好きだつたんです。彼が……」

これは又、明白な答えである。

「今も？」

返事はなかつた。咄嗟に答えられない、微妙で複雑な現在の心境であつたのだろう。

「始めようか、もう知っているだろうから。」

ヌードは撮らないよ」

私は縄を握ると立上つた。

マットレスの前に置いてある、灰皿やペーパーなどの物置台が、まるで廻板の大きい奴みたいで、それに私は彼女をグルグル巻きに巻きつけてみた。

廻上の鯉さながらに、金原奈加子は私の縛るが俚になつていた。妊娠三カ月か四カ月未満の腹部は、未だ殆ど、ふくらみもなく、言われなければ全然、分らない。パラリとバスタオルをかけて数枚、撮り終る。おっぱいも以前と同じくらいの隆起であるが、生理の不思議さは早くも現われて、黒ずんでいる。それ自体も微妙な、それでいて確固たる妊娠の変化である。金原奈加子は表情を変えない。

いいかえれば無表情であった。とても演技出来る年令ではなし、被虐の悦楽は知る筈もなかった。彼女にとって被虐は、むしろ苦痛以外の何ものでもなかったかも知れなかった。

姐板を縛りつけたまま立てると、両脚を左右に開かせて、巻きつけた縄に結ぶ。受難の姐板を背負った恰好で、彼女は生命の誕生の根源を、私の眼前にあからさまに露呈していた。流石に羞恥がチラリと走り、顔をそむける。近々とクローズアップを撮り終えて、カメラを措くと私はその前に坐る。

「どう、君の本当の気持はおろす気なの？ それとも彼の子供を産みたいの？ どっちなんだ」

「産みたいです。でも怖い、なんだか……」

「そうだろうね。赤ちゃんを産むのは大変なことだ。母親になるんだからね。それにしては骨盤も狭いし、赤ちゃんの出口も小さいからね」

「彼も、そのこと心配しているのです」

私は縄を解いてやり乍ら、女の哀歓をしみじみ感じた。十八



才と何カ月かで妊娠して、十九才になるやならずで、或いは母親になるかも知れない彼女の、これからの長い人生は、どんな起伏に満ち満ちていることだろう。

いつもプレイの場合、個人的な感情を殺して緊縛に精出す私が、今日はどうも力が入らない。それでも思い直して、恰好の縛り柱に彼女を、いざなってゆく。

首縄をかけ、ぐるぐる巻き締めて、腰骨近くで縄をとめて、柱の背後で両手を縛る。こうして縛ってみると、心なしか膣下が少し膨らんでいた。ここに新しい胎児の生命が宿っているのか——。両脚を柱のうしろに引いて

揃えて縛る。体のバランスがくずれるから、かなり縄目が喰い入るはずであるが、前後左右からストロボを光らせてゆく。

「痛いかい？」

「大丈夫です」

と、そつけない。

「君の旦那、こんな縛りをして虐める時もあるのだろ」

「時々、あります」

「どんな気持？」

SMがかった方面に話をむけていった。

「あまり酔っていない時は、縛っても可愛がってくれます。すごく酔っ払った時は、無茶苦茶するから怖いんです。ハダカで私を縛っておいて、友達と酒をのむ時が恥かしくていやです」

「友達は、君の縛られた姿をみているの？」

「友達の奥さんも二度ばかり一緒に来て、縛った私の目の前で、彼と二人して奥さんにいろいろなことするのです」

「その奥さんいくつ」

「二十才ぐらいです」

「その奥さんも縛られるの」

「縛られた時もありました。かわりばんこにいろいろなことするのです」

彼女のいうへいろいろVの意味は大体察せられた。ここにも交換パーティに似た乱交の匂いがする。所詮、金原奈加子の夫も、その友達と称する男も、夫婦とは名目で、こうした不純交遊に、飽くなき情熱を燃やし、耽溺しているのではなからうか。その情熱の吐け口には、私も内心、羨ましく思った反面、家庭とプレイを混同した結果の破局を考えると急にそのいけにえになっている彼女が、哀れに思えて、この薄幸の少女が、いとおしくなってきた。私はその時、始めてこの少女に感情を移したことを告白しなくてはならない。

いけないと知りつつ、私は柱に縛りつけたその少女の前に立ちはだかつて、柱ごとぐつと抱きしめた。

「あッ、やめて。やめて下さい」

彼女は左右に首を振って、私の唇を逃れようとした。フォートを逸脱した行為に、俄に彼女の感情は乱れ始めた。

いけないと、さっと離れて私は縄をといていった。両手で胸を抱くようにして、彼女は私を見上げ、眼をうるませていた。

「どうして、急にそんなことしますの？」

「いたい質問であった。返事に窮して、

「君の告白をきいていたら、何だか急に君が

哀れに思えてきて、抱きしめたくなったのだよ。いけなかったね」

その時、みるみる金原奈加子の臉がふくれ上ったかと思うと大粒の涙がパラパラと頬を伝った。いきなり彼女は私の胸にむしゃぶりつくと、大声を立てて泣き始めたのであった。余りの急変に呆然として、立ちすくんでいると、泣きじゃくる吐息の合間に切々と、彼女は訴え始めた。

「苦しいのよ……つらいのよ。どんなひどい目にあっても、誰もみなし児の私に、親身になって相談にのってくれる人はいない——」。

辻村さんは、いいおじさんだと思ったから、何でも打明けて言えると思ったのに、ちっとも私の気持なんか分りやしない。誰だって好きこのんで、こんなみじめなことしたくないんです。それでもひょっとしたら、力になってももらえるかも知れないと思って、泣きたいような気持をじっと我慢してきたのに……」

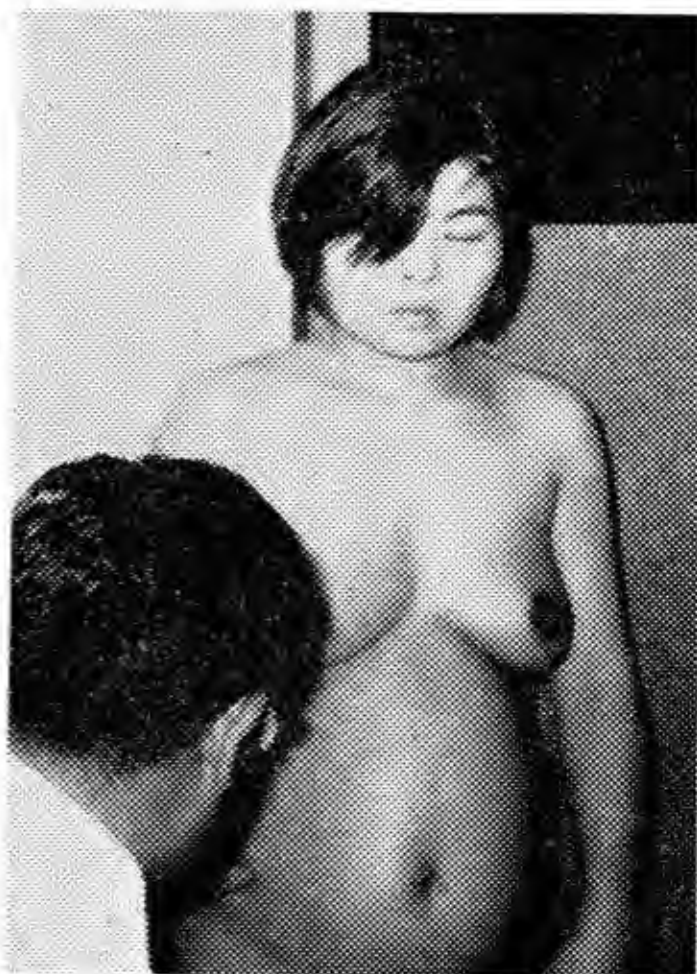
じっと、独りこらえ忍んでいたものを、どつと吐き出すようにいって、金原奈加子は、

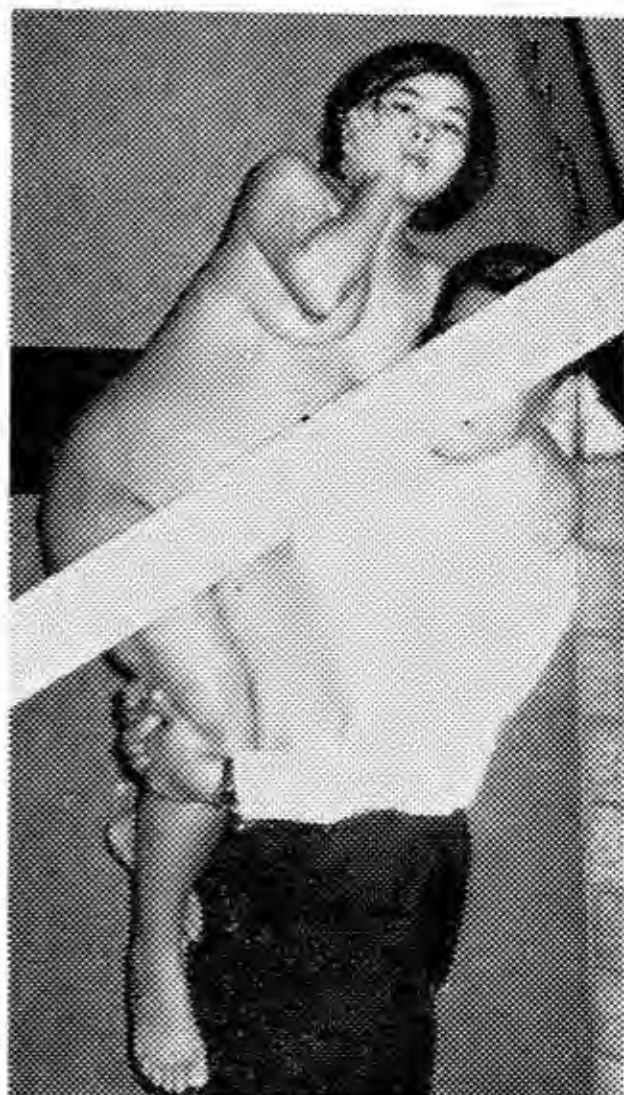
私の胸に顔を埋めて、シクシクとむせび泣きしていた。

この世の倖せから置き忘れられたような少女——頼りにする彼から冷酷に、始末する金をつくってこいといわれて、心で泣きながら私を頼ってきた彼女——。

報酬の代償が、どんな行為であるかを承知の上で、彼女はやむなくやって来たに違いなかった。

私の胸のあたりまでしか背丈のないこの少女の、オカッパの髪をそつと優しく撫でてやりながら、薄倖な愁いにみちた彼女をみると、私自身の心まで重く沈潜していった。





「わかったよ。じゃあ、もうこんなことよさうね。今日はこれでお終いだ。若し搔把する気になったら、いつでも電話しておいで。親友に婦人科の医者がいるから、お金の心配いらないよ。一緒にいってあげるからね。だから今日のお金は彼に渡さず、君自身の必要の時のため、もっているんだよ」

「有難う、嬉しいですよ。そんなに優しくいって下さったら……。でも多分、彼は私の今日の代償をとりあげてしまうでしょう。それでもいいの。だから辻村さん。遠慮なさらないで、私をもっと縛って下さい。きつく縛って下さい。叩いて下さい。我慢しますから……。でない私、何もしないでもええません」

意慾をなくしたよ。あげるものはあげるからもうよそう」

「いけません。それでは私の気持がすみません。さあ、縛って下さい」

必死な面持で、彼女は私に詰めよらんばかりの勢いで叫ぶようにいった。

「困ったな。すっかりその気をなくしちゃったんだよ」

「私がいやになったのでしょうか？」

「そうじゃない。弱ったな、今更こんな気分プレイも出来ないじゃないか」

「私つまらぬことを言いました。さあ早く」

彼女は自ら縄を拾い上げると、私に差出すのであった。そうまでされては仕方がない。

泣いたことを羞らうように、そっと手の甲で頬を拭うと金原奈加子は淋しく微笑んだ。

「いいんだよ、気にしなくても。知らない以前なら、そりゃそれ相当地に緊縛のフオートを撮りもしただろうが、君の今の悲しい気持を考えると、正直なところ

もし頑くなにやらないと頑張り通したら、彼女は又ぞろ泣き出すかも知れなかった。気の乗らぬまま縄を受取ると、部屋の境いの鴨居に両手首を縛って吊し、爪先立ちになるまでしぼり上げた。彼女の背は一杯に伸びきって珍しい微笑みが泛かんでいた。

「辻村さんは叩くのが好きだと彼はいつていました。よかったら叩いて下さい。構いませんから」

「いたんだよ」

「いたくても構いません。私そうしてほしいんです」

叩いてくれといわれることは、ごく稀であった。そういわれると、私の沈んだ気持も多少は昂揚して来た。足許の縄を二つ折りにして、軽くオシリに二つ、三つ縄束を飛ばす。

ピクッと体を硬ばらせたが、声を殺して耐えている。何がなしプレイらしい雰囲気が出して来た。ついつられて、私はもう三、四度、縄束で彼女のヒップを打った。

「どう、痛いかね」

「いいえ、大したことありません。もっと強くても我慢出来ます」

金原奈加子は、意外にハキハキした返事をして、私の打擲をこらえていた。徐々である

が、嗜虐の想念が昂まってくるのを覚える。ポーズが平凡なので、更に縄を殖やすことにした。首筋に縄をかけて垂直に股に下降させて股縛りにした上、腹と胴で縛る。神妙に眼を閉じて縛られている彼女に、いつしか哀愁の陰は薄れ、憂憤を吐き出してふっ切れたような表情で、恬淡としていた。その諦観の化粧のない顔に、私はこの時、女を感じたのであった。

いつしか私は、先程の言葉とはウラハラにプレイに熱中し始めていた。このポーズに数枚閃光を走らせてから、更に右足首を縛るとぐっと力一杯ひきしぼって吊り上げる。爪先立っていた片足を吊られたものだから、彼女の体は重心を失ってグラグラと揺れ、左足の爪先が、必死にタタミを搔いてふんばっていた。手足に力がかかりかかって、揃えて縛られた両手の縄がひしひしと喰い込んでいた。むき出しの臀部に縄束の鞭が、力強く飛んで撥ね返った。

「あッ、あーあ」

小さい悲鳴を挙げて、彼女はこの疼痛を懸命にこらえていた。か細い体が前後に揺れ、両手の指先が、虚空を掴んでそりかえっていた。いつしか縄束が、ズボンより引抜いた革

バンドに変わっていた。ピシリ、ピシリと鞭打つ度に始めて彼女の口から魂切るような絶叫が走った。小さいヒップに歴々と、数条の薄桃色の鞭痕がみみずのうにのたくっている。呻きと絶叫が口をついて出ても金原奈加子はやめてくれとは叫ばなかった。自から求めた鞭の洗礼を、涙をこぼして甘受しているようであった。ホッと一息つくとは私はバンドを捨てた最後のこの鞭打ちで、一応嗜虐の思いを果たし得た気持であった。もうここらでよしやろう。フィルムは、僅か一本と少々撮ったきりであるが、さっと止めて、彼女を少しでも喜ばせてやろう——そんな不惑を誘う老婆心から、私は縄を素早く解いていった。

「さあ注文通り縛ってあげたよ。君もこれでもう遠慮しなくていいだろう。これでよそうよ」

裸の儘、凝然と立って、彼女は私をみつめていたが、
「今、何時ですか？」



と、簾から棒に時間をきいた。机上の腕時計を見ると三時を一寸廻ったところである。その時間を告げると、

「それじゃ、ここへ入って未だ一時間一寸しか経っていませんね。お願いです、もう少し続けて下さい。でないと私の気が済まないのです。もっと縛って下さい」

哀願する眼付で、真剣な表情を泛かべて彼女は私に近よってきた。それは無理に抵抗しているようで、同情されたくないといった意地すら覗ける態度であった。私は苦笑すると「いいんだ本当に、今日はこれでよそうよ。よく協力してくれたね。さあ体が冷えただろ

うから、もう一度お湯につかって温たまっておいで。その間に部屋を片付けておくから」
駄々っ子をなだめるように、私は奈加子のオカッパの頭を撫でる。彼女は不満そうであったが、やっとその気になったのか、小柄な裸身をバスタオルにくるむと、風呂場の方へ消えた。

やれやれ——。まったくやれやれといった感じで肩の荷を降ろしたような気持になってホッとする。こんな気疲れのするハントも近頃一寸、珍しい。第一回の時は、お互いに初対面で、プライバシーに関しては、言わず語らず聞かされたので、縛っていても気分的にラクだったのに、少女のような彼女に身上話をきかされた上、泣かれたとなると、同じような年頃の娘を三人も持つ私だけに、妙な父性愛が先に立って、もう一つハントに身が入らず、プレイする気も起こってこなかったのであった。さして体も使っていないのに、変に気疲れして、私は煙草に火をつけて啜え、素早く辺りを片付け終り、布団ごと二つ折りにして隅に押しやっておいたマットレスをのべると、ゴロリと横たわった。

束の間、神経の疲れからであろうかウトウトと仮寝の夢をむさぼっていた。胸のあたり

がフツ重く感じて、ハッと眠りからさめるとどうしたことであろうか、金原奈加子が、こともあるうに、遠慮勝ちに両手で私の肩を抱くようにして、裸の肌を寄せてきていたのである。虚をつかれた思いで、神経はさっと緊張したが、眼をつぶったままじっとしていた。



「眠っているのですか……」

そっと囁くように耳許でいう。無言で身動きもしないでいると、彼女はそっと身を離して立上り、壁の嵌込みスイッチを、パチパチときった。採光の少ない部屋は、途端に夕暮れのように薄暗くなる。窓のカーテンも引いて、夜のようにくらくしてから、彼女は再び私に近よってくると、ゴロリと私の傍らに横たわり、黙って体を丸めて裸身をすりよせてきたのであった。これは又一体どうしたというのだろうか。何が彼女の心境を変化させたのであるうか。咄嗟に判断がつかかねて、私は唯、石仏のようにじっとして、あらぬ寝息を立てているより致し方なかった。人の世の綾に不思議な女心の微妙な変化は、十数年のガールハントでかなり自認する私にとっても分らぬことであった。

「ねえ眠っていらっしゃるの？……抱いて」
ドキリとする言葉である。ネクタイを外したカッターシャツとズボンの姿で転んでいた私であったが、どう扱ってよいか分らず、尚も狸寝入りを続けるよりほか能がなかった。

少女は、私のカッターの胸に、湯上りの香をただよわせて顔を埋めていたが、やがてまさぐるように胸のボタンを一つ一つはずし出

した。遠慮し勝ちに胸を押し開いてゆく彼女の気持は、もう瞭らかであった。しかしこの豹変は、どう解釈したらいいのだろうか。ほんの半時間前、柱に縛った彼女を抱きしめた時、あれ程抵抗を示した彼女が、今自から身を投げ出そうとしているのである。部屋を暗くし、カッターのボタンを外してゆくか細い手の動きが、その何よりの証拠であった。何が彼女の心をその様に変えたのであろうか。憂憤の吐け口を私に見出し、心が洗われたようになつた今、私に肉親に近い倒錯した愛情をおぼえ始めたともいうのであろうか。

私は静かに身動きを始めると、さりげなく夢うつつを振舞って、少女の肩の下に手をさしこみ、ぐっと小さい体を力一杯引き寄せて抱きしめた。まさぐる指先の運動がピタと止まり、瞬間、青麦のような未熟な体が硬直したように思えた。その俣抱きしめてじっとしている、いつしか少女の体から、私を押すような力が感じられてくる。闇の暗さが私の心をハイド氏にしていた。無言の俣、顔を起して唇をよせると、柔らかな舌端がいきなり私の口の中に入ってきた。それが、すべてを許容する合図のようであった。私の自由な一方の手指は少女の胸をさぐり、そして伸び

ていった。この十八才の娘が既に体を濡らしていることを知った時、私の大脳神経が一点に集中して、いきなり、いきいきと活動を始めたのであった。

× × ×
まるで幻想の中の、ポイントマイムのような、ひととき――。

少女はひっそりと息をはずませ、声を殺して、体を波打たせていた。遂に別れる間際まで、女心の変化を知ることが出来なかった。

車中、金原奈加子はずっと無言であった。電車が尼崎に停車すると、チラリと私を見上げて、心持ち頭を下げると、サヨナラもいわず、黙って去っていった。

それが少女とのあっけない別れであった。お互いに何か一言喋べると、愉悅にみちた刹那の幻影がこわれそうに思えた。

今も、まるで白昼夢を見ているように私は思う。しかし、まぎれもなくあれは事実には違いなかった。報酬の代償という気持では割り切れない、何か切なく思いつめた、稚い愛情を轟と感じとって、私の心は揺れて痛む。

秋風と共に、声もなく去った金原奈加子から、その後たえて音沙汰もない俣に、冬が来て、新しい六九年を迎えていた。(四四年二

月号「楽我記」参照)

――妊婦逆吊りの譜――

渚マリ、妊婦、モデル志望の女性等を撮るため上京中の一月中旬、三日間ばかり家をあけた留守に、金原奈加子から電話があつて、家内の言葉によると、会ってほしい口吻であつたらしかった。いきなり前触れもなく掛かってくるから、どう仕様もない。彼女の事で箕田氏に聞き合せてみると、編集部にも電話があつて、何とも驚いたことに妊娠五カ月の半ばで、進行中だそうである。折悪く箕田氏も、その頃、株の上り下りが激しく、電話に嘔りつき放しでそれ処ではなく、あたちチャンスを逃がしてしまっていた。もう五カ月半となると掻把は出来ない。人工中絶の早産するとしても大変だし、どう気が変わったのかどうやら産む気になつてゐるらしい様子であったが、私自身、直接何も聞いていないから、くわしい事情は分らなかった。一月中旬で五カ月半とすると、あの十月の下旬に会った頃は、妊娠三カ月のかかりだったのか。道理で全然、目立たない筈であった。

「なーに彼女の事だ、気がむけば又ひょっこり掛かってくるさ」

と、箕田氏は樂觀的であったが、私にとっては忘れられない少女になっていた。何とかもう一度会いたいと、帰京して以来、連日首を長くして電話を待ったが、それからウンともスンともいってこない。いろいろと複雑な事情もあるに違いないが、気紛れ電話にはつい心を乱して振り廻されてしまう。かげの多い無口な少女、いやもう一人前の妊婦となつた今、少女ともいえないが、私の心の中には、幼い童女のような彼女しか住んでいなかった。あの日以来、彼女に対する観念はかわり、金原奈加子の生活が、どこか謎めいていくだけに、尚更、惹かれるものがあつた。白昼夢に似たあのひとときが、私にとってはどうしても忘れかねる強烈な印象を心に深く植えつけていたのである。(四四年四月号「楽我記」参照)

× × ×
三月も、もう終りに近い土曜日の午後九時夜の電話のベルがなる。受話器をとると、思ひもかけず、金原奈加子のあの低音の、無表情の声が伝わって来た。始めて出会った時から、丁度丸一年が経過していた。
「私、金原です。明日の日曜日、会っていただけませんか？」



「えッ、明日？」
「ハイ、お願いしたいのです」
「いつも急だね。正月過ぎに電話あった時は生憎留守の折だったし、あれから随分と、今日か明日かと電話を待っていたんだよ。忘れ

かけた頃になって、ヒョッコリ掛けてきて、そのあいだ一体どうしてたの？」
「いろいろなことがあったのです」
「おなか大きいんじゃない？」
「九カ月にかかったところですよ」
「やっぱり産むんだね。私とそんな体で会って大丈夫なの？」

「電話では詳しく言えませんが、会って下さい。お話ししたいこともあるのです」

「じゃあ兎も角、会おう。場所はどこ？」

「大阪市内の城東区緑橋近くにある友達のアパートにいます。こんな体ですから、どうかその近くで会っていただきたいのです」
土地勘はなかったが、緑橋附近の白山町のH小学校そばに市民グラウンドがあるからそこなら目立たないし、車も道路わきに駐車出来るという彼女の言葉であつた。その辺りの地形を精しく聞いて、明日の正午会うことに話をきめる。友達のアパートで居候しているというのに、かなり複雑な事情があるらしい様子であつた。

日曜日なので、天気がよければ車二台で家族ドライブのつもりであつたのが、急拠予定を変更せざるを得なくなった。週末の午後より降り出した雨が終日続き、明日も天気が悪

そうなのが私には幸いであった。

金原奈加子との明日の邂逅に、私は奇しきえにしを感じた。あたかも一年前の同月同日の三月三十日、初めて阪神の西宮駅で出会ってハントして以来、恰度丸一年目に、妊婦となった彼女と会うことに、私は運命の悪戯のようなものすら覚えるのであった。それは眼に見えぬ糸で、二人を繋いでいるようでもあった。

箕田氏に電話して、彼女より電話のあったことを告げると、妊婦フォトを撮れるいい機会だから一緒に分譲用のフォトも撮ってくれようにと依頼された。日曜日は彼にとって家族奉仕日——。例え雨の日曜にしても私のように忽ち予定を変更せぬところに彼の律儀さがあった。依頼された以上、秘蔵用の露出もの許りも撮っておられない。近頃どうも妊婦についているわいと苦笑して電話をきる。

あの少女のような金原奈加子の、ちっぽけな体の臨月間近い妊婦姿を想像して、私はその夜、なかなか寝つかれなかった。

妊婦というハンディキャップを考慮して車で出掛けたが、雨上りの肌寒い日曜日のせい

もあって、この辺りの混雑は比較的少なかった。かつては場末であった緑橋界限にも、今は地下鉄が伸びている。

彼女が指定した市民グラウンド附近は、雨上りのせいか人影もまばらで、人待ちには恰好の場所であった。三月下旬から、東映撮影所通いが始まっていて「徳川いれずみ師・責め地獄」の緊縛指導をしているので、平日ならいつお呼びがあるか分らぬだけに、日曜日は私にとって反って都合がよかったのである。

グラウンドに面した待合せ場所に十分前に到着し、カーラジオを聞きつつ待つこと十五分——。金原奈加子にしては珍しく指定時間を一寸おくれて、私の車を見掛けると、寒そうに首をすくめ乍ら急ぎ足にやってきた。風の強い、春の嵐のあとのうすら寒さである。オカッパのちっぽけな彼女の腹だけがぐっと出張っているのが気恥かしいような異常さであった。ドアを開くと助手席に坐る。

「久しぶりだったね、元気？」
「ありがと、どうやら無事でいます」



「何処かで食事しようか。まだなんだろう」
「余りたべたくないの。私、サンドイッチもってきたのだけど、よかったらこれ一緒にたべましょう」

「へえ珍しいことだ。それで我慢するか」
正直いって、この少女めいた妊婦とレストランへ入るには、かなりの勇気が要った。じろじろ見られる事は必至である。妊婦の少女を連れていては、誰ももう親娘だとは見てくれないだろう。変な興味で衆人に環視されては、流石の私も気恥かしくなってしまう。サンドイッチを持参してくれたのが、この際、勿怪のさいわいであった。

ここから桜の宮界限のホテル群は近い。交

通停滞を計算に入れても、二十分ぐらいで行ける距離である。

蒲生四丁目に向かって走り、左折して直行する。車中、金原奈加子は自分からは余り喋らなかったが、私の方から軽く問いかける。

「今日は何時までいいの？」

「何時になっても構いません」

「おやおや、どうなってるの」

「その代り、アパートの近くまで送って下さい」

「勿論、心得ているよ。いろいろと聞きたいこともあるが、ホテルに落ち着いてからにしよう」

デラックスなホテルの林立する、銀橋河畔に到着して、私は地下に駐車した後、直接に



エレベーターで部屋まで直行出来る、二度許り利用したことのあるこのホテルを選んだ。出来るだけ身重姿の、金原奈加子を入眼にさしたくなかったからであった。

子供っぽい少女のような妊婦と、中年男とのとり合せでは、いかにアベックに馴れたホテルの案内係にしても、恐らくは異様に感じるに違いないと思えた。

人眼を避けるようにして、地下のエレベーターのボタンを押す。乗り込むと、そっと彼女をかばうようにして、案内係の眼から、彼女の腹部を蔽うようにする。珍しくも、奇妙な気恥かしさが私を支配していた。

× × ×

大抵の場合、カメラを撮る前に入浴を奨めるのに、その日に限って私はこの定石を破ってしまった。部屋へ入るなり金原奈加子は、物怖じせず、予定の行動のようにさっさと身につけていた物を脱ぎ捨てていった。ちっぴけな体で、むき出しの膨れた腹部を隠そうともせず、彼女は全裸の

後、両手をそっと前で組み合せて、黙って立っていた。余りにもあっけない脱ぎっぷりに私は多少、狼狽する。まだプレイに対する心の準備が出来ていなかったからである。サンドイツをつまみお茶でものみ乍ら、ゆっくり彼女の身の上話をきくつもりであったのにこれは又、何と性急なことであろうか。浴槽の湯の溜るいとまもない。あわてて浴室へ駆け込むと、温冷両方のカランを全開にして部屋に戻ってくる。

「えらく又あわてて裸になったね」

苦笑して声をかけると、彼女も流石に早く脱ぎ過ぎたことに気付いて、サッと羞じらいを泛かべた。浴衣でも着たら、というおとしで私は言葉をのみ込んだ。この少女のような妊婦の、大きな腹部の膨らみが、私の心を異常に刺激したからであった。童女受胎という言葉がピッタリする初々しさであった。臍窩の凹みもやや押し出されて、充満した腹部がこのチビッコの彼女の全体の半分以上を占めているような、奇妙な錯覚にとらわれる。

既に暗黒色にくろぐろと彩どられた乳量はふくよかな白磁の乳房とは対照的に、受胎の事実を、ありありと物語っていた。

屹立する壮大なメロンを私は匍伏してねら

った。抱え上げるようにしたメロンは、熟してたわわに実っていた。数カ月前に撮った時はっそりとくびれていたあのウェストが、今かくも拡大して膨満している事に、私は改めて受胎の神秘さを、まさまざと感じた思いであった。

軽便雲台にカメラを装着すると、セルフタイマーにして私は女体に近々と寄る。みぞおちから撫でさするようにして、いとおいしいこの珍果を鑑賞する眼で、私は硬く張りつめた腹部を撫で廻して、しばし感触を愉しんだ。髪をひたいに垂らした俤、金原奈加子はすべてを私にゆだねたように、軽く眼をつぶって私の指先の触感に耐えていた。

倒錯した愛情に溺れて、私はガバと彼女を



抱き上げるや、体よりも高く高々と抱え上げた。私の肩に手をかけた俤、奈加子は軽々と子供のように抱かれていた。親娘ほど年令の違う二人の間に醸し出された、いわば親娘の感情に近い奇妙な親近感であった。高く抱いたまま、私は部屋をぐるぐる廻り始める。カメラに近づき、私の肩にしっかりと掴まらせて、片手を離してセルフタイマーをかける。

うつる辺りに、ねらいつけて立つ。ジジジという秒を刻む音と共に閃光が走り去った。依然として私は奈加子を高く抱いていた。その俤、次の間の間のダブルベッドに、少しはずみをつけて落とす。ふんわりと軽くバウンドして女体は洋布団の上に横たわった。嗜虐の情にムラムラとかられ、さっと取り出した縞

縋を一本握りしめるなり、この可憐な稚い体へのしかかるとみるや、抱き起こして後手に括り上げていた。今の私にとって、もうカメラは煩わしい厄介なもの以外の何ものでもなかった。しかし反面、いつもハントの心が動くのである。いちいちセルフタイマーもうるさいので、長尺レリーズをつけて私は掌の中

に握りしめ、奈加子の顔を両手で持ち上げるようにして、いきなり、その幼い唇を貪っていた。小さい舌が私の口腔に忍び込んで来て、微かに息遣いが乱れていた。彼女は、いやとも避けようとせず、寧ろ嬉しそうに、私の口腔の中で可愛い舌を弄ばせていた。何かこの俤、崩れてゆきそうな私の激しい男の気持である。しかし、それはカメラの終焉を告げていた。ともすれば崩れそうになる心を引きしめて、やっと私は体を離す。ドタリと女体は仰向けに深々とベッドに倒れ込み、彼女はみじろぎもせず、凝っとしていた。

心持ち開いた下腹部から眼をそらせ、冷酷なカメラマンになろうとして、私は身を退けた。ベッドぎわの側面の鏡が、二人の奈加子をカメラに撮し出していた。顔を傾けて彼女は鏡をみた。そこに全裸に縄目を受けた膨満の腹をさらす己れ自身を発見して、奇妙に顔を歪めると奈加子はツト顔をそむけた。そんな彼女に私の手の中のカメラは次々と光る。

「君のその姿みられていいだろう」

意地悪くいうと、

「恥かしいです」

ポツリと応えて、奈加子は眼を閉じた。フット硝子越しに浴室をのぞいた時、冷熱二つの

カランからほとばしり出る湯水が、今や堰を越えて、洗い場を湯舟にかえて、正に浴室一杯に湯煙濛々とあふれかえっていた。

× × ×

抱き合うようにして体をひたしていると、眼に見えぬえにしのつながりを、ひしひしと感ずる。

「一年前の今日の今日、初めて西宮で出会ったんだよ。覚えてるかい」

「そうですか。三月だと記憶していましたが日まで同じだったとは、気がつきませんでした。なんだか不思議ですねえ」

「しかし君のオナカ、九カ月にかかったにしては、さして大きく見えないね」

「お医者さんは、骨盤が小さいから、少し難産かも知れないといっていました。人工的に陣痛を起こして、少し早いに産んだ方がラクだといってくれます」

「その方がいいよ。けれど、そんな体で又、どうして友達のアパートになんかいるの？」

「一週間前、彼のところを逃げ出しました。乱暴するんです。おナカの赤ちゃんに若しものことあったらと思って……」

「結局、中絶しなかった原因は？」

「全部、彼にとり上げられました。又稼いで

こいといわれて、私、そう度々御無理いえません。中絶の目的でこんなことしても、又ぞろ彼にとられるだけと思ってやめました」

「だから、いったただろ。その気なら友達の婦人科の医者を紹介してやったのに」

「うみたい気持ちの方が強かったのです」

彼女は私の胸に巻いていた手を、そっと外すと、頬をほてらせて洗い場に出た。

「背中、流してあげようか。いやそうだ、皆洗ってあげるよ」

「勿体ないです」

「遠慮しないでいいんだよ」

「すごく親切ですね。彼もこんなに優しくしてくれるら嬉しいんですが……」

しゃがんだ彼女の体の隅々まで、丁寧に洗

い始めると、石鹸の泡にま

みれて、私のなすが俚にな

っている。直立させて足を

洗ってやりながら、

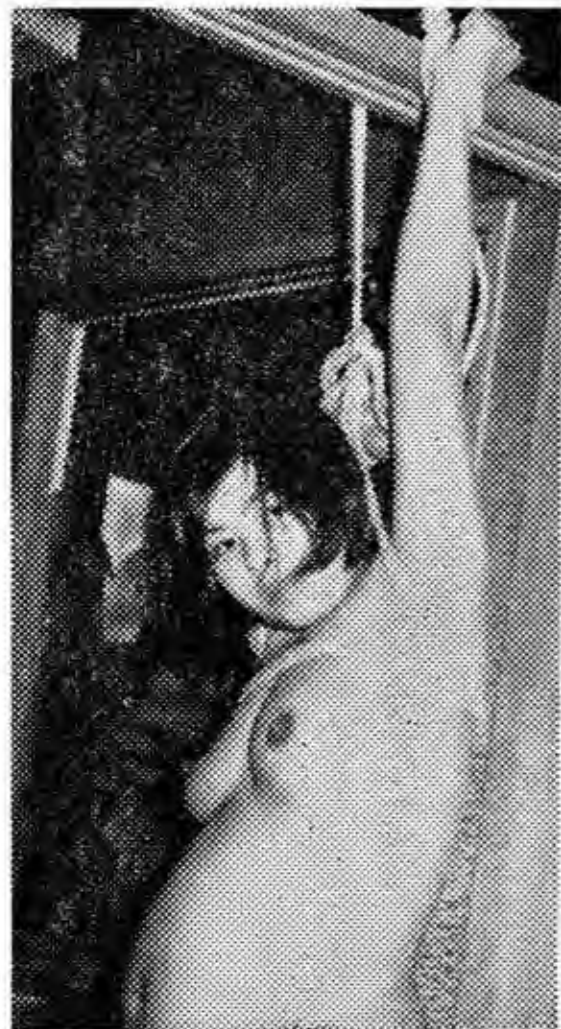
「正月に電話かけてきただ

ろう。あの時は産む気？

それとも中絶する気？」

「私が産む気になっている

として、彼は喧ましくい



こんなになった今でも間に合うかしらと、悲しい気持ちで電話しましたら、箕田さんも辻村さんもダメでした。内心ホッとしました」

「悪くいうのはイヤだけど、君の彼も情ない奴だ。男の甲斐性で、墮ろすのなら墮ろす金ぐらい自分で都合つけりゃいいじゃないか。そのつものの金をとりあげて使ってしまったやいやい言うのは男らしくないよ」

「そう思います、私も。それでも彼、いつもピーピーしてるんです。とても纏まったお金なんか持っていない。私がダメだったという、腹を立ててオナカをぶったりするんです。でも半ば、あきらめたようです。酔わないとおとなしくて、可愛いお前に似たベビーを産んでくれよというくせに、酔うと人間



「韓国籍の女の人ですが、日本でうまれているのです。ホステスですが優しい親切な人です。子供を産むまでここにいてもいいと言ってくれます。以前、尼崎の私達のアパートの隣の部屋に住んでいた人でした」

「彼、探しているだろうね」

「と思います。でも、今は帰りたくないのです。夜、独りでポツンとしていると無しように悲しくなっていて、もうお腹の子供なんかどうなってもいいと思うのです。もし産まれて来ても尚更、苦勞するだけですから……」

金原奈加子の私を見上げる眸は、湯気ではなく、しっとりと濡れているようであった。

「じゃあ、今日は自分の意志で来たのだね」

「ハイ、そうです。私こんな体で働けませんから、友達にお金、借りているのです。いつでもいいからといってくれますが、余り友達に迷惑かけたくありません。だから……」

「ああ分ったよ。可愛い君の為だもの、何とかする気で、ある程度覚悟してきたよ」

「その代り、辻村さんの好きなだけ縛って下さい。虐めて下さっても構いません。辛抱しますから——」

「といわれても、身重の体ではね」

「いいんです。もしそれが原因で流産するようないことがあっても、構わないと思ってます。もともとなんですから。祝福されないベビーを産んだからとて、私しあわせになれるとは思えません。でも大丈夫と思います」

彼女はキッパリとこたえ、私とのプレイをむしろ期待しているようであった。いじらしいものを感じて、私はこの時、力になってやりたい気持ちにかられた。切端つまると私を頼りにする彼女の心が、擦ぐったくも又嬉しかったのであった。この稚な妻は、少女めいた潔癖さで、報酬に応じて、プレイそのものの軽重を、その代償で割り切っていた。それだけに妊娠九カ月の体であり乍ら、精一杯努力するつもりでいるらしかった。

長い入浴で、のぼせたようになって、私もハダカ。彼女もハダカ——。

ふたつのハダカが、鏡のある閨房のダブルベッドに転ると、無言の俛、金原奈加子はヒタと私に寄り添ってきた。

×

×

×

×

が変ってしまうのです。尼崎のアパートの近くで、内職して生活のたしにしていたのですが、そのお金も全部、持っていて呑んでくるのです。あんまりです。で遂にケンカして彼が働きに出た留守の間に家を出たのです」

心の中を風が吹き抜けてゆくような、佗しいうら悲しい話であった。この稚な妻はそうした逆境の中でも、必死に生きようとして、祝福されぬかも知れない子供を産もうと努力しているのであった。

ザブザブ湯をかけて、体中の泡を洗い流すと、彼女を抱くようにして再び浴槽に二人で身を沈める。金原奈加子は狭い湯ぶねの中で自分からヒタと寄り添ってきた。

「今一緒に暮しているアパートの友達ってどんな人？ まさか男じゃないんだろ」

同衾しても、臨月間近い初産の彼女との間に情事は起こらなかった。オカッパの濡れそばった髪をなでて、かなり長いくちづけと、ペッティング。それが精一杯のところであった。奈加子の瞳はうるおいを帯びて、ぬめつて光っていた。

のろのろと体を起こすとパンティを穿いてやっとカメラに向かう。縄は車に積んだのでフンダンに持参してきた。

「本格的に縛るよ。ここへお出で」

呼ばれて、彼女はやつこらさと身を起こすと、閨房を出てきた。

箕田氏よりの依頼もあるから、フィルムは相当、沢山廻さねばならない。手始めは、ロープを使つての首から縄をかけ、乳房の谷間で結びめをつくって、この隆起を挟んでの胸縛りから始まる。手馴れた調子で、さっさと縛って二分もかからず縛り終る。三面鏡の腰掛けに坐らせたり、立たせたり、膝立てしたり、側面を向かせたりして、この緊縛で十数枚撮る。私の場合、編集部撮影と違ってありの尽にとるから、どうしても露出が多い。ネガをみて箕田氏、さぞかし困るだろうと、又改めて隠蔽したポーズを考えて、かなり撮り直した。妊娠の腹部を強調したものを撮ら

なければと思いつつも、角度によって彼女の大きさはかなり違っていた。同じ九カ月に入った頃、増田みゆきを撮ったが、その大きさはみゆきに比べると問題でなかった。勿論、彼女は双生児という点もあって、人並以上に異様に大きかったが、奈加子の場合、人並以下に小さいようにも思われるのであった。それで体とのバランスがとれているのかも知れないが、臍の凹みの余裕が、臨月近いとは信じられないのであった。しかし考えてみれば出産まで、まだあと二カ月足らずある筈であった。九カ月といっても、八カ月の終りと同じことであった。

部屋と閨の境いの襖を外すと、鴨居へ彼女を吊る。左手首を縛って高々と引っ張りあげて、欄間に通し、右手を縛って、余った縄で胸を巻いて、手首に戻る。

パツとしない構図であったが縛り方よりも私の目的は立縛りの鞭打ちにあった。背伸びするように上体を伸ばした彼女の腹部は更に小さくみえた。体の背後に、浴室をのぞく硝子窓のはめこみがある。何をされても

金原奈加子は一切逆らわず、只管に協力の態度をとっていた。それは先程浴室で、自から口走った代償の現われであろうか。縄束を二つ折れにすると、私は彼女に近附く。

「叩いていいね」

「ハイ、構いません」

「きつくても？」

「我慢します。でも、なるべくオナカだけは叩かないで下さい。赤ちゃんが可哀そうですから……」

腹を打つ気は更にならない。しかし一応、彼女は観念したものの、自分の孕んだ腹に心を走らせていた。

情念の燃えない体に、縄鞭は痛かったのだろう。奈加子は手加減した叩きにもかなり眉をしかめ、唇をかねて苦痛をこらえていた。





これが悦虐の歓喜にのたうつ時なら、この痛さが快楽と変わり得ても、悦虐に眼覚めぬ未熟の女体には、疼痛以外の何ものでもなかったに違いない。唯これを、代償の報復として甘受しているところに、痛々しさだけが私の心をうった。私は思い切りよく縄を捨てる。

「まだ我慢出来ます」

けなげにも奈加子は呟くようにいって、私をみつめた。その澄んだ視線に、反って私の嗜虐欲は水をさされて萎えていった。

両手首を揃えて、改めて縛り直し、欄間から、爪先すれすれに吊り下げる。別の縄を首につないで背から垂直に腰へ降ろすと、股を通して、ぐいと体を持ち上げるようにして引絞る。あっと呻いて彼女は腰を浮かし、縄

の痛みを少しでも遁れようと爪先は更に立ち上った。鴨居に縄を巻き、それに通して固定させると、カメラは凡ゆる角度から、この股間責めをねらって瞬間の閃光を、パッパッと部屋中に撒きちらしていた。

更に、この縄を腹のふくらみで二分し、胸元で縛る金原奈加子は神妙に、この羞恥の縄をうけて縛られて、みじろぎもせず立ちつくしているのであった。

続けさまの、高手縛りに、既に手首の血が下ってか、白々と変色しつつあった。縄をとくと、体を休ませる目的で、オーソドックスな後手縛りをして、部屋の片隅に坐らせ、分譲フォト向きのポーズを、かなりの枚数費やしていった。私好みのゴテゴテ縛った雁字搦目の縛り方よりも、箕田氏は平凡な縛りの中に、女体の緊縛美を伴ったものを好むのを知っている私は、彼の意図に添うつもりで、そうしたもの、かなり撮りまくった。金原奈加子の場合、緊縛よりも妊娠腹に重点をおいて撮ることが、この際、主眼である事を、

私は承知していた。起きよ、寝よ、坐れよと次々命じて、これが体を休めることには全然ならないのを知りながら、彼女は易々諾々と私の言うが俤に黙々とポーズをとるのであった。

殆ど休む間もなく、ポーズを変えさせ、又幾分、縛り方も変えて、次々とフィルムに納めていったが、これを詳細に書き、フォトをのせていては、掲載フォトが何枚あっても足りない。この辺りは分譲フォトの方に任せて私はいつときも早く、本番である、妊婦逆吊りに触れねばならない。

× × ×

どんなに縛り方を変えようとしても、人みなそれぞれの好みがあつて、私の緊縛にも亦私独特のものがある。箕田氏にいわせれば、とかくゴテゴテと縛り過ぎるというのであった。かつて妊婦の木戸悦子を雁字搦目に柱に縛りつけて、お負に数本の竹棒まで使って派手にゴッタ煮さながらに縛った如く、いつしか私は、金原奈加子にも犇々と、次々とあつたけの縄をかけていた。それが私の好むところであれば、余人は知らず、私にとってはそうしたものが、緊縛という言葉に一番ピッタリとくるのであった。順序もなくそもない

タダ滅多矢鱈に縄の上から又縄をかけて次々と縛ってゆく。流石にふくれ上った妊娠の腹のみは避けて、又しても股縛りになってゆき縄は、縦横無尽にかかっていた。腰掛けの上へ、ピッタリと腿を揃えて坐らせて、露出をさせて正座させる。二の腕の縄は、既に深々と喰い込み、股縄も又、相当に締っていた。いわれる儘にポーズをとり、一言のあがらもなく、彼女はちっぽけな体の全身に縄の苦痛を甘受していた。

しかもその緊縛で鴨居から吊り、猿轡をはめさせると、いきり立った私のSの狂血は、発止々と臀部に縄束を打ちおろしていた。ぐらぐらと体が左右に揺れ、その度にふくらんだ子宮が体内でのたうち廻っていた。

小型のパイプをとり出すと、ハチ切れそうに突出した黒い乳首の先端に震動を伝える。ピリッと体を震わせて、彼女は眉をしかめ、猿轡の奥で、たえ切れぬ荒い息を吐き出し始めた。眼はうるみ、いつしか、両脚がくの字にねじれて床をけっていた。快楽をまざまざと浮彫りにし始めた女体に、もうあの少女めいた金原奈加子はいつしか影を消し、妊娠の実体を知った女の肌の匂いが、そこはかとなぐ立ち昇る気配で、肉の快楽のうずきに悶え

る女の姿がそこにありありと現出していたのである。

しかも奈加子は、電動の伝わるのをやめてくれとは叫ばなかった。くぐもり声の呻きの中に、女の歓びがまざまざとにじみ出していた。

喘ぐような切ない吐息が豆絞りの猿轡の奥から、容赦もなく吐き出されていたのであった。少女は一変して

男の肉を知った、血の通った女に変貌していった。もうそこには童女の面影はカケラもなく未熟な女体で、早くから男性を知ったなまめく柔肌が、赤裸々な激しい歓喜をあからさまに示して、歎歎のハーモニーすら奏で始めていたのであった。奈加子の感応は、乳首のみにとどまらなかった。脇腹にも乳房にも相当の反応をあらわしていた。しかし最も敏感な個所を知りながら、敢えて私は避けていた。

それがむしろ焦燥となって、更に歓喜の連鎖反応を起こさせようと、私はじりじりと、この操り責めに似た行為を続けていたのであった。それにこの雁字搦目の緊縛は、さして悦楽を呼びさませるプレイにはふさわしくなか



った。結局、歓喜の半ばで、私はパイプをとめると、複雑に全身に纏いつき、絡みついた縄を次々と解きほぐしていった。あまねく全身に、縄目のあとをくっきりと残して、奈加子は呆然と、解かれて自由になった体を、その儘そこに佇立させていた。しばらくして、彼女はタタミの上に転がっているパイプに眼をやると、ノロノロと体を折ってそれを手にとった。

「これは何というものです？」

奈加子にとって、この歓喜をよぶ小型パイプは始めてみるものであったらしかった。

「携帯美容マッサージ器というのは表向き、まあ、今のようにして使うのだよ」

「どこにでも売っているのですか」

「そう、近頃は大分出廻っている様だね」

感に堪えたように、彼女はこの砲弾型のパイプをみつめていた。

「もっとかけてほしうだね」

「感じるのです——私」

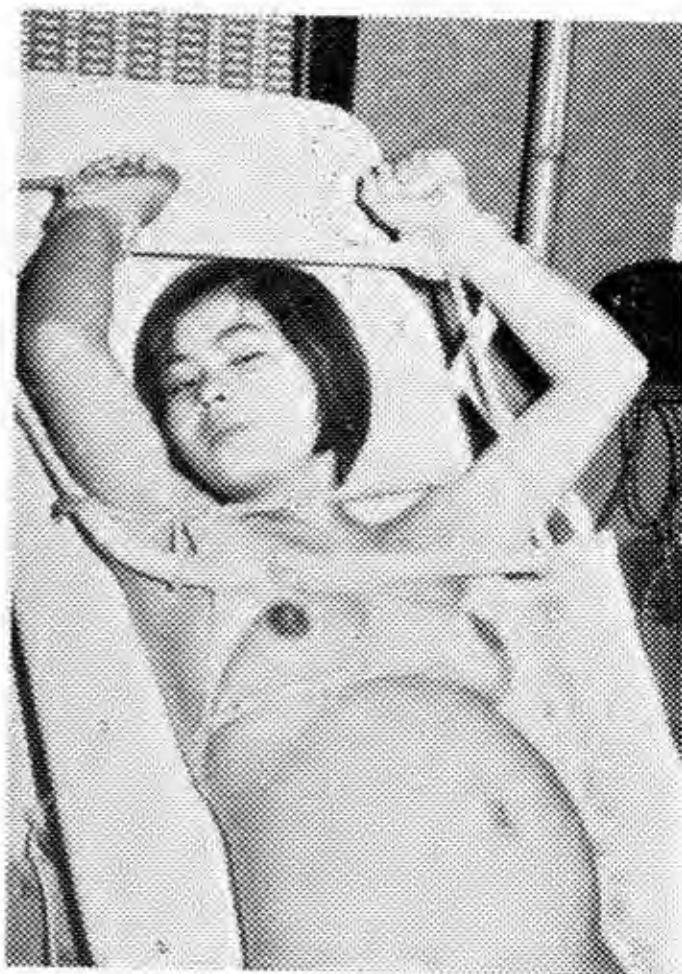
判っきりといって、奈加子はフト顔を赤らめてうつむいた。

めらめらと漁色の炎に包まれて、私はこの女体責めを、更に続行する気になっていた。

部屋の片隅に、安楽椅子が裏向けに立てかけてある。椅子の脚を立てて、上半身をくぐらせて横たえさせると、数本の縄で、胸から上を椅子の脚に固定させて縛り上げる。奈加子の投げ出した両脚に、それぞれの足首に縄をつけて開股にする。

盛り上った乳房、メロンの腹へ、ビビビインと電動音を響かせて、パイプが肌をマッサージしてゆく。

押し殺した、忍び呻きが、耐えきれなくなつて、童女の形相に妖艶さが漂い、ひととき



奈加子の喘ぎは大きく昂まっていった。歎歎が洩れ、悦虐がヒタヒタと彼女の全身を包んでいた。そこには最早一人前の、歓びを知った女がのたうち廻っているのみであった。ぐぐつと押し殺した呻きが、激しく塊となつて吐き出された時、妊娠で圧迫された膀胱が激しいいきみによって起こる現象が現われたのだった。

縛られた俤、奈加子は首を落としてぐったりとうなだれていた。こうした美容器が出廻り始めてからというものの、私はいつもこれを忍ばせ、過去のカメラ・ハントにはついぞないような、生々しい事をやり続けていた。ひ

とつには、年令と共に退化するものをはななくも振り立たせようとする最後のあがきにも似た行為であった。糖尿という厄介な病いが尚更に、こうしたプレイに於てでも、私の意志とは逆方向に萎えさせていたのであった。縄を解くと、奈加子はそそくさとトイレに消えた。私は彼女のいきみ現象の後始末をする。さやかな音はすぐ終り、それでいてしばらくは出てくる様子もなかった。

「少し体が冷えたのですが、もう一度お風呂へ入ってもいいでしょうか」

やっと出てくると、恥じらいを泛かべて、

おずおずと私に訊ねる。

「ああ、いいとも。よく温まっておいで」

流石に疲労を覚えた私は、それをシオに煙草に火をつける。是が非でもやってみたい逆吊りの為、余力を蓄えておきたかった。

透きとおっていた浴室の覗き硝子窓が、忽ち湯気で曇り始める。さめた湯に熱湯をそそいでいるのであろう。束の間も私の想念は逆吊りに走る。小柄な彼女だから、私一人でも何とか吊り下げられそうに思う。しかし彼女は果たしてこの冒険を諒承するだろうか。しらずしらず私は、伊藤老のあの妊婦逆吊りの壮挙に挑戦している自分を見出した。Sを好

む者にとって、これは夢にまでみた最高のポーズである。伊藤老の場合、臨月だっただけに、私は老に一步譲る気持であったが、妊婦の逆吊りは、考えただけでも胸躍るプレイであった。湯から上って来たら、彼女にそのことを宣言してやろう。今日の彼女の、あの協力振りからして、恐らく拒まれることはない確信を抱いていた。

冷えた体を温ためて来ただけなのか、思ったより彼女は早く部屋に戻ってきた。素肌の頬が紅潮し、全身がほんのりと桜色に染っている。部屋の片隅に裸の尽で膝をくずしてそっと坐った。

「疲れた？」

「いいえ、大丈夫です」

「いよいよ、これでお終いにしたいと思うのだけど、この鴨居から逆さに吊してみようと思ってるね。どう協力してくれる？」

流石に一寸考え込んでいたが、決然とした顔付で

「やってみます。私は構いませんが、辻村さん一人で私を吊れるんでしょうか？」

「多分やれると思うがね。君何キロある？」

「四十三キロです。妊娠してからははかりませんが、おナカがふくれた分だけ、目方が殖

えてるかも知れません」

「机の上に、三面鏡の腰掛けをのせ、脚を上にしてのってもらう。足首の縄を鴨居に縛り終わったら、とり外してしまおう。それでやれると思うがね」

「おナカの赤ちゃん、逆さになってビックリするでしょうね」

彼女はソッと含み笑っていった。意外に大胆な思い切りのよさで、平然としている様子に、私も意を強くした。

「辻村さん、少し聞いてもかまいませんか」

「ああ、何だね」

「妊娠した人の逆さ吊りを撮った経験、過去にあったのですか？」

「ないね、君がやってくれるなら、それが私にとって始めてだよ」

「じゃあ、胎児に異常ないとはいい切れないわけですね」

「いい切れないが、この道の権威のある人が、自分の奥さんの臨月の逆さ吊りをして、無事元気な赤ちゃんが産まれているから、実例はあるんだよ」

或いは、Sの世界で、伊藤晴雨老以来二人目の女性が、この



金原奈加子であるかも知れなかった。二十数年来のかなり長い探求の間、ついぞ、妊婦逆吊りのフォトには、寡聞にしてお目にかかっていない。それだけに私の意気込も、いつもに較べて違っていた。このチャンスを見逃せばいつ再びこうした機会が巡りくるやも測り知れなかっただけに、この一期に賭ける私の気持は、むしろ悲壮でさえあったのである。若し金原奈加子が応諾してくれたならば、彼女にどんなに酬いてやっても酬い過ぎでないような思いにかられてくる。

彼女の決断をつけるように、縄を握って「やろうか——」

と近寄る。うなずいて素直に両手を後ろに回した奈加子を、私はオーソドックスに菱形

の胸縄に縛り、両手は余りきつく締め上げずに縛り合わせた。

私にとって世紀の瞬間が、刻々と迫りつつあった。机を鴨居の下へ運び、その上に腰掛をおく。足縄に繋ぐ縄を鴨居にかけ、足首だけに力のかからぬよう、膝下から、かなり強く縄を巻いて足首で留め、別の縄でしっかりと両足首を縛り上げた。

私は先程から、数杯水を吞んでいたが、尚且すぐにのどがカラカラになった。嗜虐の昂奮がバロメーターの様に、口腔の渴きにつながっていることを、改めて知らされた思いであった。

彼女を抱き上げると、腰掛から落下せぬ様に腰骨のやや上あたりを中心にして、腰掛に仰向けに寝かしつける。上半身がそって、頭

が机上すれすれに垂れ下っている。片手で体を押え、片手で足首に吊縄をとりつける。体を逆さに抱え上げるようにし乍ら、一方の手で吊縄を引きしぼってゆく。脚部はかなり上って、奈加子の肩胛骨の辺りが腰掛で支えられていた。

もう一息——。さらにぐっと引くと、肩が腰掛けにつく、首が直角に屈曲し、彼女はかなり苦しそうであった。私はもう必死であった。机上に足をかけて上ると、メリメリと音をたててきしんだ。そんな事はもう構ってはおられない。両脚を大きく開いて、奈加子の体を内腿のあたりで挟みこむようにして、更にぐいと一つ揺りあげて、とる手もどかしく、吊縄をとめた。彼女の首筋が、かろうじて腰掛で支えられていた。



「どこも痛くない？」
「両足首がしま
って少し痛い
ですが、我慢
します。早く
撮ってください、早く……」
奈加子も必死

にこらえているようである。首を抱えて腰掛を外すと、ゆらりと髪が逆さに拡散して、彼女の体は宙に揺れた。机を立てる時間さえもどかしく、私はこのSの窮極ともいえる妊婦逆吊りの、最高のポーズにあわただしくピントを合せ、続けさまに十数枚とりまくった。逆吊りによって、確かに膨らみの位置は胸に下っていた。

「大丈夫？」

「頭がカッとしています。息が苦しいです」
「一寸待って——」

かねて準備の布切れを腰に巻いて蔽い隠すと、再びあちこちから数枚とる。分譲用フォートの箕田氏垂涎のものをとる為であった。

「く、くるしい」

「よしッ、すぐ降ろすからね」

この間約二分半。兎も角、机と腰掛を元通りにして、頭で体を支えさせる。

「感激したよ。よくやってくれた。有難う、本当に有難う」

抱きしめたい様な、胸の熱くなる思いで私は吊縄を解いた。ズルズルと体が下り、奈加子は大きく息を吐いた。

あわただしく解き放って、やっと奈加子を自由にする。

「ああ、よかった、これで本望だよ。私としては長年念願の、最高のプレイをやった感激で胸が一杯だよ。今迄何人か妊婦はとってきたが、どうしても逆吊りは許してもらえなかったのだ。それが君によって遂に実現できたのだよ。こんな嬉しいことはない」

よくぞやってくれたと、褒めて褒めて、ほめち切りしたい気持ちであった。あれだけSMに徹した、増田喜代司、みゆき夫妻でさえ逆吊りには二の足踏んで躊躇したのである。それを果たし得た喜びは、この世界に足を踏み入れた者のみにしか分らぬ、感激と喜びの極みであった。伊藤老以来、なし得なかったこの壮挙にあえて挑んで、成功した歓びは、私の長いS歴にとって、新しい一つのエポックとなるに違いなかった。

「もう一度会ってくれますか？」と奈加子。

「いつ？」

「私はいつなんどきでもいいんです」

「もう少し膨れ上がった、臨月を撮りたいね」

あわよくば、彼女の好意に甘えて、出産ぎりぎりの、臨月の逆吊りを撮りたい慾望に燃え始めていた。その時は、箕田氏も必ず同行するに違いあるまい。彼女がもう一度会って

欲しいという目的は、出産費用の捻出にかかっているようであった。飽く迄体を張って、自分の力で産もうする彼女が、私にはいじらしくて仕方がなかった。不幸な結びつきが、一人の可憐な少女を、かくも薄幸に押しやってゆくのか——。そして、彼女は夫へのせめでもの憂憤ばらしのように、私のテクニクによって、むしろ積極的に燃えたがっているようでもあった。

俺はツミな男——。そんな自戒めいた想念にとらわれたが、金原奈加子にとって、その刹那の火花のようなひとときが、すべての憂さと苦しみを忘れて、没我の境地に遊ぶとするなら、それも又考えようによっては一人のかよわい女性を、たといいつときなりとも飲ばせる手段となっているのである。己れの所業に対する苦しい弁解であるかも知れないが——。

私達は食事すら忘れてプレイに耽溺していた。果たし終った時、思い出したように金原奈加子はサンドイッチを提籠からとり出して私にすすめた。ハムと胡瓜を挟んだ、洋辛子のよく効いたハムサンドの手製であった。殆どは私がたべ、彼女は僅かに、小さい切片を二きればかり口にただけであった。

ホテルを出ると、未だ午後四時過というのに、辺りは既に夕暮れのようにもやにけむって、川面から吹き上げる風が、一入身にしみわたるつめたさであった。

現実の空気に触れると、忽ちこのちっぽけな少女めいた妊婦と二人きりという気恥かしさが蘇ってくる。

金原奈加子は、ホンの先程までのあの強烈なプレイが、まるで遠い過去のような顔付であどけない童女さながらの表情を泛かべて、チョココンと私の傍らに坐っていた。

普通なら夕食でもと誘うのだが、相手が相手だけに気がひけて私は誘えず、一路車をもとの緑橋の方角へと走らせていった。

出会った場所に戻っての別れ際、夕食がわりにと、別に小さくたんで渡した一枚の紙幣を、彼女は当然のように受け取ると、黙ってペコリと頭を下げ、車から降りると、チラリと一度振りかえり、それっきりもう振り向きもせず、スタスタと、陋巷の路地の彼方へと消え去っていった。

(おわり)



(一)

おとこにはあまりエンのない、舶来のアクセサリーとオシャレ着のみせ、G屋のケースに、おもいがけない商品を見出して、信吉はそこへ吸いよせられた。

彼が、あの神秘的なものの魅力にとりつかれたのは、十七才の秋であった。

なぜ、選りに選って、あのようなものに惹かれるようになったのか、自分でも見当もつかないのだ。

理屈なしに、美しい女人に出会々と、女神に思え、土下座して拝みたくなる。

フエチ小説

イミテーションと信吉

浅羽やすし

女神の命とあれば、いかに無残ないいつけにも、忠実に従えるのだ。そんなきもちからそのような、人の口にすべからざるモノをくらうことに、はげしい憧れを感じた。憧れは空想から、飢えを満たす実行へと、エスカレートするばかりだった。

それから、二十年経った今に至るまで、その妖しい香氣から逃げられないでいる特殊な性癖に自分ながら、いやになるときもある。

モノがモノだけに入手には、かなりの苦心を要したし、かなりの金銭支出を伴いながらさて、手にとったそのモノの、あまりにも奇怪な香りと、みにくい形と、そして少量を口

に含んだだけで、無残な味覚に、思わず嫌悪して放りだしたことも、二回や三回でない。

そのくせ、しばらく味あわないと、どうにも欲しくてたまらず、いやがる相手の女性にせがみ、ときには哀願し、ときにはおどかし心ならずもダニのようにまつわりついて、相手が根まけし、呆れ顔で、羞じらいながら、そっと手渡したそれを、飢えたように、ガツガツと目や口に近づけながら、けっきょくはこっそりと捨て去る―おろかな行為のくり返しだった。

人間の排した、固形物―ふつうの人なら、マユをしかめて逃げるだろうそれを好むのだ

から、われながらおぞましい。それが、ガラスケースの内部に飾られているではないか！

○

その日――。いつものように、国電の新橋駅西口を出た信吉は、三十六階建ての霞が関ビルへ通じる道を、足ばやにあるきだした。

霞が関ビルの手前に、古ぼけた木造三階建ての建物がある。日刊建業新聞という業界紙を発行するこの新聞社は、信吉のおとくいさまの一軒だった。デザイナーの信吉は、毎月ここから三万円前後のデザイン料をもらっている。月にせいぜい延べ十時間で稼げるのだからラクだった。月末にわたされるその金は、今月はかなり仕事が多かったので、五万円は越しているだろう。

無責任に書きなぐったみたいな仕事だったが、器用にまとめる彼の仕事ぶりは、社内では好評だった。

信吉は、この社からの収入は、ぜんぶ、くだらなく使ってしまった。

本業は、ほかにあり、生活は保証されていた。この収入は、だからヨロクである。

週に一、二回、トルコ風呂へ行って、きれいなサッパリ使うことにきめていた。

でも、それでよいのだと思う。

デザインのようない仕事は、うでが固定してしまったら、おしまいであるから。

「お礼が出ていますから」

係りの編集庶務女子社員から、仕事場へ電話がかかったのは昨日のことだった。

瀬田きみ子、というその女の子は、都会風の美女だった。年齢は二十二、三才だろうか色の浅黒いのが難だが、目と、くちのきれいなのが、その欠点をカバーしている。

二カ月に一ぺんくらいのわりで、信吉は、瀬田きみ子に、ささやかなプレゼントをすることになっている。原稿の受けわたしから、お払いのことまで、なにかにつけて世話になるし、この係が親切であるかどうかで、信吉のような、社外の立場にある寄稿家は、便、不便の差が大きいのだ。

「今月は、五万円ちよつとの計算ですわ。先生、ずいぶんコキ使われましたわね」

瀬田きみ子は、電話口のむこうで、早口でいった。きれいな、かわいい声だった。

この社に出入りする寄稿家は、何十人とあるのに、信吉のように、ときたまでも、プレゼントを用意するような、気のきいた者は、あまりないらしい。

だから、ささやかなプレゼントとはいえ、

ちゃんと贈ってくれる信吉のような存在は、彼女はやはり、ありがたいのだろう。

(サマーバッグか。いいな)

ゴーストアップの赤に引っかけた歩みをとめた、そこにG屋のウィンドがあった。

若い女の子の気にいりそうな舶来の品々が飾られている。前にも、ここで、しゃれたブローチを買って、瀬田きみ子にやったことがある。

ホワイトの地にブルウの線を大胆にあしらった、しゃれたバッグが目にとまった。

イタリア製のあかぬけしたデザインで、瀬田きみ子に抱えさせたら、似合うように思えたのである。

五〇〇〇円の価格は、やや予算オーバーだが、しかし、たまには、謝礼の十パーセントを割くのも効果的だ、と計算した。

ついでに、のぞいた隣りのケースに

「特集！ いたずら玩具見取り市」のカードにそんな文字があった。

そして、そこに予期しないモノを発見してもうそうになると、サマーバッグなど、そつちのけにあかず、それを眺めたのだった。

○

ビニールやプラスチックを巧みに使って

奇抜なアイデア玩具が並んでいた。

よくもまあ、これだけ集めたものだ、と感心させられる。

女性の客たちは

「マア、うす気味わるい」

眉をひそめながら、でも好奇の眼で、信吉につられてか、のぞきこむ。

本物そっくりの、生きてるとしか見えないヘビやトカゲ。ムカデや、大きなクモ。いまにも口を開きそうなワニもあった。

ロー細工のビーナッツや、モチ菓子。ライターからは、ヒョーキなピエロが、ほのおのかわりにとびだす。

それら、子供だましみたいな玩具のかげにひっそりと、それは置かれてあった。

トイレットペーパーを、わざと引きちぎった粗末な紙には、誰のアイデアか、点々と血痕らしいものが散り、その中央に、それが鎮座していた。

まったく実物そっくりだった。

用をたしたあと、便器の水中に浮く、あの奇怪なモノが、陳列されているのだ。

その落し紙に点々と散った血？ のシミはいかにも女性のそれを思わせる。

やや太目の一本のうえに、それより細めの

が一本、横に垂れ、実感をだそうとしてだらうか、ミカンのタネか、ピーナツのひとかけらのような白いものが、ちょこんと顔をだしている。リアルな形だった。

二五〇円のプライスカードを見るまでもなく女店員に、

「サマーバッグくれたまえ。それから、これも」

よいとしをして、いかにも、テレくさい買い物だったが、逃げるように、釣り銭をとるのももどかしく、折柄ゴーストアップが、緑になったのをさいわいに、足ばやにG屋を出た信吉だった。

(二)

「まあ、すばらしいわ」

瀬田きみ子は、うれしさをかくしきれないように、大声をあげた。社へは電話で、

「連れを待ってるんで、そっちまでゆけないすまないが、謝礼をもってきてくれないか」

そんな理由をこしらえて、新橋駅前の喫茶『しゃれいど』まで瀬田きみ子呼びだしたのは、サマーバッグを、社で渡すことは、人目につくのでうまくない、と思ったからである。

彼女を喫茶店まで呼び出すのは、じつはこれがはじめてではなかった。

プレゼントを渡すときは、いつもかならずそうすることになっている。

信吉にしてみれば、この美人と、たとえひとときでもデートの気分はわるくなかったしきみ子はきみ子で、呼ばれれば、プレゼントをもらえるのは、たのしみなのだ。

だから、信吉の呼びだしには、いつもイソと応じてくれる。

庶務部長も、

「湯川先生からたのまれた」

と、一言いえば、快く

「ご苦労だね。よろしく言ってくれ」

と、外出をゆるしてくれるのだ。

一日じゅうを、うすくらいオフィスにすわらせられているきみ子は、社用にかこつけて公然と一時間以上も『しゃれいど』で、名曲を楽しめる信吉とのデートを、心まちにしているらしかった。

「イタリアの品だ。気に入ったかい」

「うれしいわ。とても」

「ぶらさげるより抱えるほうがシックだよ。定合うなあ」

「でも、せんせ、いつもいただくばかりで」

きみ子は、ことのほか気に入ったらしく、バッグの口をあけたり、しめたりしている。小切手をうけとり、受領証にサインしながら、とっさに、妙な言葉が出た。

「きみにちょっとたのみがある。このつぎにゆっくり時間をくれないか」

「はい。でも、たのみって何かしら。あたしにできることですか？」

「できるものにも、きみさえその気になってくれば、いまスグにでも、というものさ」
まあいやだ、と瀬田きみ子は、うっすら赤くなった。

彼女なりに、何かを連想したらしい。

（ちがうんだなあ。想像したものとは、ぜんぜん。まさかボクが、きみのからだなんかねらわないから安心したまえ）

澄んだひとみ、上気した瀬田きみ子の美しさは、ひときわ、さえている。

（どうしても、探らせてやるんだ）

そのかわいい顔に、ほればれと見とれながら、信吉は、そこそこでつぶやいた。

なんとしても、手にいれるんだ。

そんなことをたのんだら、どうせいやがるにきまつてる。おそらく呆れて、もう二度と用事とはいえ、自分には近づかないだろう。

（でもオレはほしいんだ。絶対諾かせるぞ）
ポケットのなかには、たったい買った、れいのオモチャが入っている。

（イミテーションなんかじゃない、キミのほんものが、ね）

信吉は、きみ子に向かって微笑した。

(三)

瀬田きみ子と、『しゃれいど』で四十分ほど、とりとめもない時をすごした信吉は、午後早々に仕事場のドアをあけた。

中野の自宅には、おとなしすぎて物たりない妻のゆり子と、ことし三才になる長男が、平凡にくらしている。その自宅は、とてもせまくて、専用の室もなければ、仕事に必要な電話もなく仕事のできる環境ではなかった。

やむなく都心に、1DKのマンションを借りてある。ここには電話もあるし、国電へも地下鉄へも三分。おまけにマンションの一階は、スーパーマーケットなので、日常の買い物は、すべてここで間に合うのが、好都合だった。

一人ぐらしだから、夜ふかししようと、外泊しようと、友人をとめようと自由だった。家に帰らなければ、ここに泊っているもの

と、ゆり子は思い込んでいる。

気がむけば中野の自宅へ帰るが、そんな日は週に二回、あとは、ぜんぶ、この仕事場がネグラになった。

べつに、忙しい仕事があったわけでもないのに、日のたかいうちから、この仕事場に戻ってきたのは、めずらしいことだった。

というのは、じつは、さきほどG屋で買ったれいのもの。固形物のイタズラオモチャを早く、ゆっくり鑑賞したかったからである。

物心ついたところから、なぜか信吉は、ほんものの固形物や、神秘的なコハクいろのれいの美酒に深い憧れを抱いてきた。

ただし、それは、もちろん誰のものでもないというのではない。

顔や、からだつき、声音から、体臭、そして性格、年令にいたるまで、すべての点が、信吉の好みにピッタリくる女性の、それであればならなかった。

もうひとつ、社会的に高貴な身分のひとのそれなら、心からそのものの前にひれ伏すことができそうだった。でも残念ながら、高貴の女人にコネがあるわけがなく、それは、はかないのぞみにすぎなかった。

プロ女性のそれなら、金にモノ言わせて、

いとも手軽に入手できたが、好みのうるさい信吉は、不潔感ばかりが先にたつて気がすまない。

もっとも、ときたま、気がむくと、馴染みのトルコ嬢の休日を一回、買いきって、この仕事場へ来させ、タタミ半畳あるかなしの、せまい風呂場で、幻想ドラマを楽しむことはある。

トルコのことは、信吉の好みをとてもおもしろがり、目のまえで、小おけに音たてて、ためたそれを、

「はい。あたしのブランドー」

などと、ふざけて、つきついたりする。

すんだ、うすくコハク色をおびたブランドーは、新鮮な香気を放ち、魅力ある飲み物とみえたし、信吉が首だけだしている浴槽のヘリにサーカスみたいに、しゃがみこんで

「すばらしい香料いれたげる」

さわやかな、せせらぎの音とともに、ゆたかな香りを、湯ぶねに流しこんだりする。

「ちょっと、お供しなさい」

トイレに無理に引きずりこみ、平然と陶器に腰を据え、

「よく拝むのよ」

うえから見おろす。

特有の香気が、せまい個室にたちこめて、眼やハナを刺戟し、信吉は、むせた。

でも、そんなことは、はじめは信吉のほうで教え、求めたものではあったが、いざ現場にのぞむと、嫌悪の感情がつのってしまふ。

なによりも、そのおいが不快なのだ。

いっその口へ入れられたら、おいが来ないだけ、まだマシだったかもしれない。しかしそのおいには、たえがたい不潔感が伴うので、耐えられない。

信吉は、いつもそのへんで女の子にストップをかけ、無理に追いだすのだった。

女の子たちは、はじめはいやがったが、いっかこのあそびに熱中し、ストップをかけたくらいでは止めない。

「もういいんだ」

信吉が、ハラ立たしそうに大声あげると、「信公のバカ。もう絶対たのみをきいてやらないから」

ふくれ顔で帰ってゆく。

ひとが、せっかくその気になったのに、と不満をさらけだしたり、自尊心を傷つけられるらしかった。

事実、その女の店へあとから行っても、ツンとして絶対くちもきかない。ここまでくる

のには、かなりのカネを使ってるのに、思えばムダなことをしている。

しかし、相手が瀬田きみ子なら、話はべつだと思ふ。だから、いちど、ぜひためしたかったのだ。

仕事場のデスクに坐って、ポケットからたいてつそうにとりだした、れいのものは、イミテーションだから、リアルな形は、いかにもグロテスクだが、臭いがないのがなによりだった。

でも念のため、ハナに近づけてみたら、かすかに塗料らしいのが匂った。

じっと見つめると、それが瀬田きみ子の顔とダブってくる。

信吉のポケットに入っていたために、温まったのだろうか、シットリと、人肌のあたたかさが手に伝わった。

思いきって、大口あけて、舌にのせた。

不快さはなかった。ただ異様なタッチが、口をおそったが、気になるほどではない。

まるで、こどもがチョコレートでも味あうみたいに、目を細めてしまった。

このイタズラ玩具を製作した人は、まさかこんな使われようをしようとはユメにも思わないだろう。

信吉は、千万無量の思いで、それを舌で、
とろかすのだった。

(四)

三時きっかりに来客のチャイムが鳴った。
G屋で、イミテーションを手にいれて、ち
ようど三週間目の日であった。

(来たな)

いそいそと、インタフォンに向かい

「どうぞ」

と応答する。

静かにドアが開き、瀬田きみ子の美しい顔
が、のぞいた。

きみ子が、社用でここへ現われたのは、こ
れがはじめてではなく、前に三回ほど来てい
るのである。

作品を受取ったり、デザイン料を届けてく
るのは本来なら新聞社の責任で、こちらは待
っていればよいわけだが、信吉は、ちょうど
社の近くに顔の利く小料理屋があり、月に三
四回の用たしは、ついでにやれるので、気軽
に、足を運ぶことが多かった。

最初的时候は、別の雑誌社から特急の仕事
が来、記者が坐り込んだため動きがとれなく
なり、そのわけを電話したら、庶務部長が

「わかりました。誰か、うかがわせます」
事務的に答え、偶然、瀬田きみ子をよこし
たのだった。

社には遊軍の若い社員が三人いた。三人と
も出払っていたため、瀬田きみ子が、動員さ
れたのだったが、一回訪問すると、それが実
績みたいにモノを言い、以後は、しぜんに同
じ人間がくるのだった。

そのときは、思いがけない瀬田きみ子の来
訪で、うれしかった。

三十すぎた信吉が、十才も年下のきみ子の
来訪にソワソワしたものだ。坐りこみ記者の
手前、よけいな話もできず、あっけなく入口
で原稿をわたしたただけだったが、でもそれ以
後は、信吉の係りに、任命されたようなもの
で、理由さえちゃんとつくれば、いつでも瀬
田きみ子と呼ぶことができた。

「そとは暑いすわ、先生」

クーラーの前にどっかと坐り、ムネから風
をいれるのが、生々しく目にうつる。

「まあ、冷めたいものでも、一と息に吞みた
まえ」

手づくりのアップルジュースをすすめたが
じつは、これに、ちょっと細工してあること
は、もちろん瀬田きみ子は、まったく知らな

いのである。

信吉は、ついでにトイレへ立ち、ドアに貼
っておいた『故障中』の張紙を、そっとはが
した。

実は、はじめから故障ではなかったのだ。
他人を入れないための苦肉の策だった。

三時には、きみ子がやってくることはわか
っていた。

その前に、便器のなかを入念に清めた。
ふだんだって使うのは、信吉ひとりなのだ
から、不潔感はないようなものだが、でも食
器は、キレイにしとくほど、食事がうまくな
るだろう。

三時から、瀬田きみ子が帰ってゆくまで、
トイレは誰にも使わせてはならないのだ。も
ちろん信吉自身でもある。

たっぷり水を流したから、食器のなかは、
完全にきれいになっており、陶器の肌は、ま
ったく、食卓にのせる本もののサラと、同じ
くらい磨きあげられている。

そのうえ、用意周到にも、トイレの水道に
は、ちょっと細工が加えてある。コックの把
手のネジを逆に回せば、機能が停止し、水は
一滴たりとも流れないことは実験済みであっ
た。

ドアの中央には高さ五〇、巾三〇センチのマジックミラーが、そこだけ板をくりぬいてつけられてある。

内部からみれば、ふつうのカガミだが、外部からここに顔をよせれば、素通しで、多少輝度はおちるが、なかのようすは、すみからすみまで見わたせる。信吉のじまんの装置だった。

いままで、種々の用件でここを訪れた女性客の大半は、トイレを使うため席を立つと、信吉に、ここからのぞかれている。ただ、ふだんはミラーの外がわに、ベニア板のカバーがとりつけられ、上下を固定されているので手をふれられることはなく、ましてや、内部で、どんな表情で、何をしようとも本人は気がつかない。

この世で、信吉と、このミラーをとりつけた、ガラス職人しか知らない秘密だった。いままでに、ここで何十人の女性がのぞかれたであろう。

十人十いろというけれど、内部のひとのようすは、まったく百人百いろであった。

使用後のペーパーを、ひろげて、じっとのぞいたり、匂いをかぐしぐさをしたり、なんのつもりか、その紙を丸めて、大切そうにポ

ケットにしまったひと、二人や三人では、きかないだろう。

ミラーは、ちょうど腰掛便座の真正面に、とりつけられていた。

その位置をきめるのに、ああでもない、こうでもない、さんざん注文をつけ、「ダンナ、なぜこんなところに、マジックなんか、くつつけるんですかい」

職人に、口をとがらされて、あわてた。

でも、苦勞して何回もやりなおしたおかげで、その位置は満点であった。

ミラーは、女性たちの秘密を、心ゆくまでうつしだす。

意外なところに、女性たちのホクロを発見したり、つましやかな良家の子といわれる連中が、一歩なかへ入ると、野性にかえり、とんでもない姿態をみせるのだ。

用済み後、ペーパーを使わなかった水を流すのも忘れて出てゆくひとはザラだった。

信吉は、マジックにうつしだされる、そのひとたちのようすを、あきず、むさぼり眺めることを、大きな快楽としていた。

マジックミラーのカバーを外して室にもどると、瀬田きみ子は、テーブルのうえの、外誌のモード雑誌をよんでいた。

れのアップルジュースは、半分ほどカラになっていた。

もう、ジュースは、きみ子の、ほっそりした食道を通りすぎ、下へくだりつつあるだろう。

そして、ジュースに仕かけた、少量の白い粉末も。

ドイツ製の白い粉末は、速効性の緩下剤だった。

確実に、腸に刺戟を与え、耐えがたい便意をさそい、トイレにかけつけさせずにはおかない。ききめのたしかな、その白い粉は、この日のために、わざわざ日比谷の、外国のフアーマシーで買ってきたものである。

信吉は、無言で、きみ子と向かい合った。

(五)

きみ子の表情に、静かに変化がおこりはじめたのは、白い粉末がききはじめたためだろう。

モジモジと腰をうかし、便意をおさえてい

るらしい。

それもつかの間で、ヒップを、わずかに右左に、ゆりはじめたのは、説明書にあった通りクスリが急速にききだしたことを、物がた

っていた。

「あの——」

きみ子は、羞恥をおさえながら言った。

「おトイレ、どこですか」

「うん、入り口の左手だよ。いきたまえ」

つとめて軽くうけこたえたのは、余計な羞恥を感じさせないための心くばりだった。

「ちょっと失礼しますわ」

「どうぞ」

できるだけ事務的に返事をした。

○

足をしのばせ、ミラーによせた信吉の顔のむこうに、きみ子の、腰をおろしたからだが見えた。

「伝言板」○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。

○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。

○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお断り致します。

水族館で、ガラスの水槽のさかなを、くらい中でのぞく、それとよく似たうずきだった。

白い粉末は、わざと分量を指定の半ぶんに減らしてある。

いきおいよく、一気に流させないで、しばらくさせたほうが、長時間かかるだろうとの計算は当たっていた。

マユを寄せ、上体を倒しぎみに、きみ子はしきりに、ちからを入れてるらしかった。

信吉は、そんなサカナの動きを、熱心に見つめた。

三分：五分：。

きみ子の表情に、やや安心のいろがうかがえたのは、どうやら、いっさいが終わったからと思えた。

そっと、きみ子が、立ちあがり、身づくろいをはじめたのをしおに、信吉は足音をこらして、もとのイスにもどった。

「あの、おみずが：流れないんですけど」

もどってきた瀬田きみ子は、消え入りそうな声であった。

「ああ、言うの忘れてた。一階が工事中でね断水なんだ。いいよ、あとで、ボクも入るから」

「でも、イヤですわ。お水だけでも流しますわ」

「うっかりしちゃって汲みおきもないんだ。本当にいいよ、心配しないで」

瀬田きみ子は、なさけないような、そしてハラを立てたような表情だった。

わかっていることを、さもわからないようにつくろうことも、やさしいことではない。

すがりつくような眼差しを、わざと見ないようにしてソッポを向く。なんとかキゲンをとっておかねばならない。

手もとに、ホンコンから友人が持ってきてくれた香水セットがあった。

「これ、よかったら、つかってくれたまえ」気分をいれかえるように、デスクの抽出しから、小箱をとりだした。友人は、こんなものに、五〇ドルも支払ったという。一万八千円は少々おしいが、目をつぶって、きみ子の手にならせた。

きみ子は、トイレのアクセシデントが、こたえたのだろう、早々に帰っていった。

でも、それでいいのだ。目的は達したのだから——。

(六)

きみ子を送りだすと、かえす足で、トイレのドアを開く。

もはや香気は失せていたが、レモンいろの水中に、健康そうなそれが、二たきれ三きれ浮いていた。

G屋で手にいれたイミテーションより、さすがに、ずっと手のこんだ、神秘のすがたであった。

いかにも若さの所産のような、まるで彫刻みたいなそれが、ペーパーの下に、ひっそりと息づいていた――。

不潔感は、みじんもなかった。
目をつぶり、顔をよせた。

手にとったそれは神々しくさえ思われた。それからのひとときを、トイレの床にどっかとすわり、思うままに眺めた。

陶醉と、放心と、そして自虐の念が、胸いっぱい立ちこめた。

(七)

瀬田きみ子から、おこった口調で電話がきたのは、それから三日のことだった。

「先生で、ひどいかたですわ」

あのと、信吉が足もとに不用意にすてた白い粉末のアキ箱が、めずらしいデザインだ

ったので、ふと拾いあげたら、緩下剤ということだけわかった。それを服ませられたのは明白だった。

かえりに、念のため管理人に訊ねたら、水道工事など全然ないと、わらわれた。

「おまけに、マジックミラーでぞくなんて悪趣味な、かた」

マジックミラーは、内部から外側も同時にのぞけるのが欠点だった。

ほかのひとたちは、そんなことに気づかなかったが、前にきみ子は、ある事件の参考人として警察によれば、容疑者の面通しをさせられていた。

そのとき、係官から、マジックミラーのことを説明され、信吉の仕かけを知ってしまったのだった。

「もうお目にかかりたくありませんわ」

とはいっても、きみ子のほうにも、なぜそんな仕打ちをされなければならなかったのか、多分に好奇心を交ぜた、真相を知りたいような口調があるのは事実のようだ。

(まだ、絶望じゃないさ)

自からなぐさめた。最悪のばあいは、あのと、おのれの醜悪きわまる行動を、くわしく「白状」して、こうつけかえてやろう。

「オレは変態さ。きみのあのとのは、まだ記念に、机に飾ってある」

そういいながら、

「ホラ、これが、そのカケラさ」

れいのイミテーションをポケットからとりだして口の中へ入れてみせたら、どんな顔をするだろう。

○

近いうち、用事にかこつけて、強引に会ってやろう。

用事をこしらえて、庶務部長に電話し、使いとして『しゃれいど』まで呼びだすのは、たやすいことだ。

(おもいきって、サマースーツでも買ってやったら、きっとキゲンが治るだろう)

ムネのなかでくり返しながら、机上に飾った、れいのイミテーションを眺め直す。

とたんに口のなか一ぱいに、このあいだ、きみ子を迎え、トイレを使わせたあと、口の中一ぱいにひろがった、あのとときの苦い味覚がよみがえり、苦い生つばが、あとからあとから湧くのがあった。

文芸切腹史



殉死篇 (一)

中 康 弘 通

文芸作品に現われる切腹の様相は種々あるが、今回は特に、主題が「殉死」に因^{ちな}むものを選んで解説してみよう。

森鷗外

興津彌五右衛門の遺書

文芸作品に描かれた殉死といえば、誰しもまず脳裏に浮かべるのが、明治の文豪、森鷗外の名作であろう。

明治大帝のみあとを慕うて、乃木希典將軍夫妻が自刃されたのは、大正元年九月十三日のことであった。「興津彌五右衛門の遺書」の初稿は、同十八日、鷗外が將軍の葬儀に列した直後、脱稿されたものである。

その書き出しは、

某儀今年今月今日切腹して相果候事奈何にも唐突の至にて弥五右衛門奴老耄したるか、乱心したるかと申候者も可有之候へ共、決して左様の事にては無之候であつたが、のちに鷗外は稿を改め、

某儀明日年来の宿望相違候て、松向寺殿御墓前において首尾好く切腹いたし候事と相成候。然れば子孫の為め事の顛末書き残し置き度、京都なる弟又次郎宅に於いて筆を取り候。

とした。

この作品は、元和七年二十八才で三斎細川忠興に仕え、のち正保四年、さきに卒した忠興に殉じて追腹を切った、興津彌五右衛門景吉の遺書に体を藉り、武士の心得と殉死に対する、鷗外自身の解釈を試みたものである。

従つて制作の動機が乃木將軍の殉死にあることは、右に引用した書き出し部分の初稿と改稿(定本)と、次に引く將軍の遺書の冒頭とを比較してみれば、おのずからそこに想起されるものがある。

自分此の度御跡を追ひ奉り自殺候段恐入候儀其の罪は輕からず存候然る処明治十年の役に於て軍旗を失ひ其の後死所を得度心掛け候も其の機を得ず、皇恩の厚きに浴し今日迄過分の御優遇を蒙り追々老衰最早御役に立ち候時も余白なく候折柄此の度の御大變何共恐入り候次第茲に覚悟相定候ことに候

右が將軍の遺書の第一条であつた。

景吉もまた三十一才のときすでに切腹すべきところを免されたばかりか、かえつて面目を施したことがある。

そのときは、主命で香木を長崎に求めた、相役の横田清兵衛が、本木の高価さに鑑み、

末木を求めようとしたのに反し、景吉は、

主君あの城を落せと被仰候はば、鉄壁なりとも乗り取り可申、あの首を取れと被仰候はば、鬼神なりとも討ち果たし可申と同じく、珍らしき品を求め参れと被仰候へば、此上なき名物を求めん所存なり、主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格別、其事柄に立入り候批判がましき儀は無用なりと申候

と所信を述べたため、横田清兵衛と争論の果て、清兵衛が景吉に切りつけた。やむなく景吉は清兵衛を討ち果たし、無事に伽羅の本木を御前に呈したのち、いさぎよく

扱御願申候は、主命大切と心得候為めとは申しながら、御役に立つべき侍一人討ち果たし候段、恐れ入り候へば、切腹被仰付度

と願ひ上げた。しかし三斎は厚く労をねぎらい一々申し分もつともである、と賞して

総て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし

と、かえって景吉の心がけを賞揚した。

右の次第が先に引用した書き出しの如く、この切腹が「年来の宿願相達し」ということになる所以である。

それにしても、彼の一生を貫く信条は主命至上であつた、というのが事実であらうし、同時にまた、鵠外の解釈した武士の信条がこれであつた、とも云えよう。それは同時に、乃木將軍の生涯に対する鵠外の、彼自身が最も納得の行く解釈であつたに違ひない。

遺書体の文章のあとに、鵠外は簡潔ながら印象的な筆で景吉の最期を述べている。

正保四年十二月二日、興津弥五右衛門景吉は高桐院の墓に詣でて、船岡山の麓に建てられた仮屋に入った。畳の上に進んで、手に短刀を取った。背後に立って居る、乃美市郎兵衛の方を振り向いて、「頼む」と声を掛けた。白無垢の上から腹を三文字に切った。乃美は頸を一刀切ったが少し切り足りなかった。弥五右衛門は「喉笛を刺されい」と云った。併し乃美が再び手を下さぬ間に、弥五右衛門は絶息した。

仮屋の周囲には京都の老若男女が塔の如くに集つて見物した。落首の中に「比類なき名をば雲井に揚げおきつやごゑを掛けて追腹を切る」と云うのがあつた。

たまたま筆者は十年ばかり、この船岡山の西北麓に住居したことがあつた。従つて、こ

の文章を読むと一層感銘も深い。

当日、松籟朔風に咽ぶ大徳寺の山門を出でて、西南、船岡山に向かう景吉の眼に映じたものは、左大文字山から金閣寺の裏山に続く山なみの蕭条とした冬景色であつたろうか。はたまた、白く冴えた冬の彼方へと続いて行く、永遠の臣道であつたろうか。

作中、景吉が、

明日切腹候場所は、古橋殿取計にて、船岡山の下に仮屋を建て、大徳寺門前より仮屋迄十八町の間、藁藁三千八百枚余を敷き詰め、仮屋の内には畳一枚を敷き上に白布を覆有之候由に候。いかにも晴がましく候て、心苦しく候へ共、是亦主命なれば無是非候。

と書き遺したことになるその道が、今は市電の北大路線を斜めに横切り、船岡山の東北麓に至るものであらうか。

その日に堵をなした洛中の老若男女は、その幾人かが子孫を、今もこの紫野近辺に遺しているのかも知れない。そう思えば、ちょうど今、ま冬の船岡山に吹く風音にも紛れず、景吉の「頼む」という凄烈な矢声が聞えて来そうな、心持ちさえもされてくるのである。

森鷗外

阿部一族

「興津弥五右衛門の遺書」からおくれること七十日、同年十一月二十九日、鷗外は「阿部一族」を脱稿した。

前作で、殉死を必然とする一武士の心情に仮托し、鷗外は殉死を肯定するものの考え方を卒直に述べたといつてよい。しかし「阿部一族」では、極力客観的かつ意識的に、動機や状況で截り取った殉死の様相の差異を、幾つかの人間像を通して描いてみせることによつて、その変化が、しかし結局は武士という階級の内包する矛盾撞着を超越した一つの不文律に、やがては順応せざるを得ぬ過程を明らかにしたのである。

寛永十八年三月十七日、細川忠利が卒したときから、この悲劇ははじまる。

肥後の大守である忠利の容態が悪くなり、次第に前途が危ぶまれはじめたとき、殉死を願ひ出て許された者は十八人あった。彼らは平常から忠利の信任厚い者であったから、忠利としては彼らを子息光尚のために残しておきたく、かつ、彼らを死に就かしめるのは残酷だという感を持っていた反面、後日におい

て、死すべきときに死せざりし者として非難される彼らの苦悩を思い、併せて、生者必滅の理を思い、更には忠利の信任のゆえに彼らが、あるいは他の怨嗟や嫉視の的となる可能性を思い合わせたとき、「許す」と云わざるを得なかつたのである。

殉死者の最年少は、平素お馬回りに勤めた内藤長十郎元統で、十七才の若さであった。彼は、忠利の足をさすりながら殉死の願ひを申し立て、再三懇請して忠利の肯ずくのを目に留めていた。

酒の上の過失があつたのに、忠利が、「あれは長十郎がしたのではない、酒がしたのじや」と笑つて咎めなかつた。その報恩の意味があつた。老母と新妻が、己れの死後に優遇されることに安んじ、彼は追腹を切つたのである。

また殉死の先登は、児小姓太田小十郎正信十八才で、即日切腹したが、彼は加藤清正の臣太田伝左衛門の孫で、祖父ものち忠広の代に加藤家の除封に際し、祖父も父も浪人したが、二男の小十郎が忠利に召出され、百五十石を取つていた。

こうして三月十七日以後五月七日までに殉死した者の中には、忠利の代に召抱えられた

者が多かつた。

身分の低い者では犬牽いぬひきの津崎五助がある。

彼は家老たちが制めても聞かず、五月七日に犬を連れて寺に入つた。犬に握りめしを見せ、彼が殉死するいわれを懇々と説き、

「鷹も井戸に飛び込んで死んだ。おぬしも己と一緒に死ぬ気なら、この飯を食うな」

犬は五助の顔ばかり見て食おうとしない。

「それならおぬしも死ぬるか」

と念を押し、鳴いて尾を振る犬を抱き寄せ、脇差で刺した。

かねて介錯を頼んであつた松野縫殿助に、

「松野様、お願い申します」

安座して肌をくつろげ、犬の血のついた俵の脇差を逆手に持つと、

「お鷹匠衆はどうなさりましたな、お犬衆は只今参りますぞ」

高声に云い、快よげに笑つて、腹を十文字に切つた。

こうした十八人の様相を見ると、そこにおのずから義腹、論腹、商腹の差が生じて来ている。義腹というのは本当の殉死で、衷情から発して真にやむにやまれぬもの、論腹は他を顧りみ事情に迫られての追腹、商腹は己れの追腹を以て遺族のこうむる恩恵を思うもの

である。それらの事情を忠利もまた察しつつ追腹の許諾を与えたものである。

ところがここに、猪之助と名乗った少年のころから忠利に仕えた、阿部弥一右衛門通信という者があった。家中でも彼が殉死するものと思ひ、当人も殉死を願ったが、忠利は許さなかった。

もともと弥一右衛門の性格に余りにも間然とするところの無さすぎるのが問題で、忠利はどうしても彼には逆らいたくなり次には彼の「意地」で勤めるのを憎みはじめていた。何度も殉死の願いを申立てるあいだに、

「弥一右衛門奴はお願いと申すことを申したことはございません。これが生涯唯一のお願いでございます」

とまでいったが、忠利は

「いや、どうぞ光尚に奉公してくれい」

と許諾を与えなかった。

弥一右衛門は、大死と知って切腹するか、浪人して熊本を去るほかはない。だが己は己だ。妾ではあるまいし、主の氣に入らぬからと云って立場のなくなるはずはない、と決心した。しかし実際に十八人の追腹が済むと、誰彼となく城中は殉死の噂ばかりで、その内に意外にも、「お許しは無うても追腹は切ら

れぬはずがない、阿部の腹の皮は人とは違ふと見える、瓢箪に油でも塗って切ればいいに」という噂が彼の耳に入った。

思いもよらぬ悪口に弥一右衛門は、「げに言えば言われたものかな。好いわ、そんなら此の腹の皮を瓢箪に油を塗って切って見しう」と決心し、即日、長男から五男までを邸に呼び集めた。

「家中一般の噂ぢやと云ふから、おぬし達も聞いたに違ひない。此弥五右衛門が腹は瓢箪に油を塗って切る腹ぢやさうなそれぢやによって、己は今瓢箪に油を塗って切らうと思ふ。どうぞ皆で見届けてくれい」

彼は「目先ばかり見える近眼共を相手にするな」と兄弟五人を戒めると、切腹して果てた。遺された五人のうち長男の権兵衛は独断の嫌いがあつたので、二男弥五兵衛と三男市太夫は、父の遺言通り兄弟結束して世間の白眼に耐えよう、と皆に念を押した。

やがて忠利の継嗣光尚が家督したとき、家臣にも沙汰があつて、殉死者十八人は嫡子があれば幼少でも無事に跡目を継ぎ、嫡子のない者は遺族に扶持して優遇したが、阿部一族のみは弥一右衛門の知行を兄弟に細分されて

しまった。

これは、若く物馴れぬ光尚の側近に、大目付の林外記という者があり、その献策に拠つたのである。外記は小才覚があるが、大綱を見る目のない者であつたから、真の殉死者と許を得ずに死んだ弥一右衛門とのあいだに差別を必要と考へたのである。実際には何の差別もない追腹で、弥一右衛門の遺骸もお霊屋の側に葬られたくらいであるから、跡目の差別をする必要はなかった。

嫡子権兵衛は快々として樂しまず、翌年三月十七日、故忠利の霊前で殉死者遺族の一人として焼香後、髻を切ってしまった。

取調べに當つて彼の申立てたところは、

「父は一生瑕瑾なく御奉公したればこそ、お許なく切腹しても殉死者の列に加えられ、拙者もその遺族として人に先んじ御焼香を許されてゐる。しかし父同様の御奉公成りがたいのを上には御承知と見え、知行を割いて弟どもに遺わされた。拙者は、故殿にも御当主にも亡父にも、一族や朋輩にも面目ない。御焼香に際し万感胸に迫り、武士を棄てようと決心いたしました」

というのであつた。

権兵衛の言葉に光尚は反省もしたが、何分

若い殿様ゆえ、彼を先代の御位牌に不敬を働いたものとして、縛り首に処した。

阿部家では次男弥五兵衛以下が集まり、権兵衛の死罪はやむを得ぬとしても、切腹なら異存はないが、白昼に縛り首では一族の面目も立たぬ。兄弟別れ別れになるな、との亡父の遺言を守って、一族で討手を引受け討死しよう、と衆議一決した。

その様子が知れ、寛永十九年四月二十一日討手を差向けられたが、前夜に老人や女は自殺し、幼い子供を刺殺した一族は、念仏で夜を明かして迎撃した。まず弥五兵衛が柄本又七郎に胸板を突き貫かれて腹を切った。やがて乱斗の末に一族の者ごとく討死し、討手も死人や手負いが出た。もっとも、受けて立つ阿部一族は必死の働きであったが、討手にはおのずから剛臆もあった。畑十太夫のごときは臆病の一人で、後日に追放された。

(筆者註 畑十太夫がのちに、汚辱を加えた同藩の士を斬り、みずから切腹して果てる物語は、中正男氏の「切腹殺法記」に見えるところで、追って是については御紹介する機もあるう)

一族の死骸は、白川で洗って創口を改められたが、又七郎が弥五兵衛の胸を突き抜いた

創が、誰よりも立派であった。

以上が「阿部一族」の梗概であるが、先に「興津弥五右衛門の遺書」で殉死の純粋性を肯定的に描いた阿部は、この作品では更に、殉死の幾多の様相を描くことによって、無意味な武士の意地が人間性と相剋する姿を描きその否定的な面をも示した。

後に「歴史其儘と歴史離れ」を説いて、彼は、在りのままに描く、ということに己れの指向するところを示したが、そうした客観性尊重にもかかわらず、ある意味では彼の主観が可成り強く表現されている個所もある。

しかし全体としてみれば極めて冷静に事態の推移を史料に拠って描いた部分に、簡潔さが持つ非情の透明さが湛えられ、そのゆえにこそ、彼の推理に基ずく阿部一族の、激動する心理の説明や激発する行動の描写が、異常な迫真力をもって、この悲劇を吾々の眼前に再現してみせ、吾々に強く訴えて来るのである。

殊にその圧巻は、阿部一族と討手とが、わずか三十畳の空間においてくり拡げる凄惨な戦闘の場面であり、まことに

市街戦の惨状が野戦より甚だしいと同

じ道理で、皿に盛られた百虫の相啖ふにも譬へつべく、目も当てられぬ有様であった。

そのゆえにまた結末の

阿部一族の死骸は井出口の口に引き出して、吟味せられた。白川で一人一人の創を洗って見た時、柄本又七郎の槍に胸板を突き抜かれた弥五兵衛の創は、誰の受けた創よりも立派であったので、又七郎はいよいよ面目を施した。

という、いささかは冷酷にも見える突っ放し方で終るこの作品の余韻が、如何にも深いものになって来るのであろう。

この項については角川文庫版に拠ったが、同版には、かつて石川鶴三氏が雑誌「苦楽」の口絵物語のために描かれた作品が、単色版で挿入されている。

なお左記文献を参照した。

まつしまえいichi氏

阿部の歴史文学——殉死、武士道

松本勲氏

殉死の犠牲者「阿部一族」

唐木順三氏

角川文庫「阿部一族」解説

(未完)

珍書探訪

明治の性典

斎藤夜居

いつの時代にも通俗的な性学書は読書界に潜勢力を持つ。青年子女が、そこに人性探求の指針を発見しようとするからであろう。

現代では一般的な週刊誌や雑誌においても北欧諸国の性文化の赤裸々な実態報告が寄せられ、神秘と恥じらいのベールが取り除かれつつあるが、日本への海外性文化の流入は明治初期の『通俗造化機論』（明治九年にゼームス・アストンの著書を千葉繁が訳述）以来実に夥しい数にのぼっている。

私見を忌憚なく云えば、明治初期の通俗性学書はコトバを難しく書いてあるとしても、案外にハッキリした記述を示していた。

私は此処に明治を代表する八性典／三種を紹介し、それらはいずれも今日では資料としての絶対数が不足しているので、以下原典の面影をなるべく其のままに伝え、読者各位のご参考に供したい。

尚、明治年代の性学書を解説・紹介した雑誌記事の所見は、次の通り。

○微療新法（明治9年）の紹介 小泉游子

（『変態資料』三ノ二）昭和3

○明治初期に於ける性学書 桃源堂主人

（『資料』一）昭和9

○明治初期の性教育書に現れた、男根女根入門考 高橋鉄（『生活文化』2）昭和28

◇ ◇ ◇

先ず始めに紹介する『交合条令』という題名だが、交合という卑俗な言葉と、政治外交用語として知られた堅苦しい「条令」「条約」などの組合せのおかし味をねらった書名だった。つまり性交に対する国際間の規則という程の大きな意味である。然し、それはもう滑稽としては通じない――。

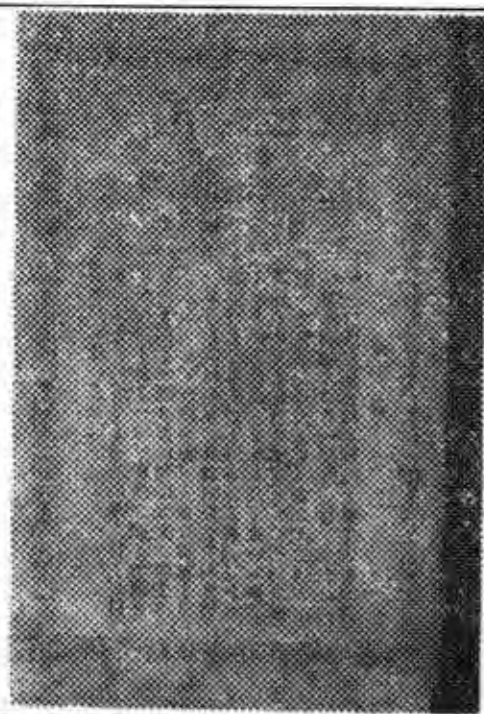
書型は、明治の刊行物によくあるボール表紙。明治十五年三月 出版御届 編輯兼原出版人赤塚錦三郎 発売駿々堂 定価廿五銭 六十五頁

「衛生交合条例」一名閨房秘書

緒言

予一日親友某を訪ひ、談偶ま衛生の事に及ぶ。某壁間掲る所の一篇額を指して曰く、人生の樂交媾たのしみより大なるはなく、人生の害亦交媾より先なるはなし、これを節すれば則ち衛生齊家の道となり、これを貧れば則ち損生破産の媒となる。樂むべく亦恐るべきは其れ唯交媾乎。故に我仮に交合条例を草して、以てここに掲げ窃に夫妻の鑑戒となすと。予読了一回其意の深切其文の周密なるを感嘆し、請て一本を写得て帰る。予独り其恵を受るに忍びず遂に印刷に付して

交合条令 (明治15・3) 表紙



以て公衆に頒つと云う。

第一条 房事は毎週二回づつ一年一百三四回ぐらい行ふを適度となす。是より少くとも多くは決して行ふべからず。されども是は無病にして壯年なる者に就ていふのみ、老人と虚弱の者は此限りにあらず。

第二条 交合は情慾の真に発動して生殖器充分に勃脹する時にあたりて行ふべし。情慾の自然に発動せざるを、無理に促がし、強ひて行ふが如きは甚だ健康に害あり。

第三条 多淫に因て起るところの病多しといへども、先づ左に叙列するが如き病の起るを以て其の普通なるものとす。(筋緩む、心臓の働き不順となる、卒中、肉脱おちて瘦す、等々三十七の症状を記してある)

第四条 精液の缺乏は多淫若くは手淫の爲めに生ずるものなり。これを復せんには暫らく交合を禁ずべし。(尚ほ外に一方あり、寒水浴を陰部に行い、朝は六時前より起き、昼間は適宜に運動をなし、牛乳鶏卵等の如き滋養分多きものを食ひ、夜は軽き衾かいまきを用ひて眠るべし。此の如く四五週間も行はば次等に補充するを得るものなり)

第五条 夫婦は同室に寝るを以て其通例となせども其室は務めて広きを要すべし。

第六条 交合の体勢は正しく一樣なるを要す若し悪戯たはむれをなすときは婦人の健康を害ふこと多し。(交合の正しき体勢とは婦人は両脚を延して正しく仰向きに臥し、男子は体を整へて府うつぶくをいふ。彼の隔山取火陰陽異位等は婦人の白帶下又は子宮病などを起すことあり、戒めざるべからず)

第七条 男女ともに陰毛は有効なるものなりたとへ長く延びたりとも濫りに剪去きりるべからず。(男女の陰毛は仮初に思ふときは無用の如くに見ゆれども、甚だ効用あるものにして先づ交合のときに於て陰部の電氣力を發せしめ、又交合の時男女の摩擦より生ずるところの電氣を其中に包蔵するの職掌やくめあるものなり上帝あかに無用の長物を人体中に与ふべきや、深く思ふべし)

第八条 交合の時精液早く泄もれて充分の快美を覚ゆ能はざるは、身体の衰弱に因るものなり。是れより種々の病患を引起すことあれば須すべらく意を用いてこれを防ぐべし。

第九条 婦人の交合を嫌ひ惡むものあるは、其夫の陽物婦人に適合せざるがゆえなり、故にもしかかる事に出逢ふときは、夫たる者自から其身を嘆じて、決して婦人を咎むべからず。(交合に臨みて其快美を覚ゆるは全く男

女の陰具共に適合するに因れり。若し其適合せざるを嫌ふ婦人とて、真に嫌ふにあらずして、其快美を覚えざるを以て仮にこれを避くるのみ。故に独り婦人を無情なりと思ふべからず。

第十条 睪丸は交合に於て最大有用のものなれば、常にこれを大切に保つべし。

第十一条 婦人には精液なし。交合に方り陰戸より出るところの液を以て誤て精液となすべからず。(婦人の交合のとき溢れ出る液は陰戸の両側にある数多の小孔より流れ出る臭液なり。此臭液は交合の便によきたために上帝の婦人に与えられたるものなり)

第十二条 交合を忌む時期あり。(十七項目をあげている)

第十三条 子を挙げんと思ふときは、婦人月経終りたる後二三日目に交合すべし。しかる時は孕むものなり。

第十四条 前条に反してもし妊娠を避けんと欲せば月経後一週間交合すべからず。

第十五条 月経後一週間内に交合を行ふといへども、生涯孕まざる婦人甚だ多し。斯くの如きは交合の過度なるに因るものなれば、若し子を設けんと欲せば、決して多きに失ふべからず。

第十六条 懷妊を避けんがため、男子きのゆかんとするとき突然陰門の外に於て精液を注出するものあり。是等の事は男女ともに健康に大害あれば慎みて為すべからず。

第十七条 交合過度なるときは精液不足して精虫を醸造するの速なきにより、子を設くること能はざるものなり。子を設けんと欲せば交合の度数を過すべからず。

第十八条 精液は至て貴きものなれば、みだりに泄すべからず。もしこれを慎まざれば、その身の健康を破り、遂には一命をも失ふに至るべし。

第十九条 妾は金銀を以て、我れに交合を売るものなり。彼れ真情我を愛するものにあらず。いかで真の歓楽を尽しまこと伉儷を遂ぐべき。理學上より論ずるも、又た道德上より論ずるも、置かざるを以てよしとす。

第二十条 陰部の周囲より多く汗を流す事あり、是は尋常陰部の脂にあらず、手淫多淫より起し来れる一種の輕患なり。

第二十一条 痲病は頗る感染し易きの性を具へ、且治療の効を見ること甚だ遅きものなれば、大いに恐るべき症なり。

第二十二条 婦人の妊娠中月経なきを幸いとて、何時の厭ひなく交合をなすは大なる心

得違ひなり、慎むべし。

第二十三条 生児の我が容貌に肖さればとて我が種にあらずとて婦人を疑ふべからず、生児我に肖ざるのみにあらず、時としては他人に感肖することあり。(五例を記しているが、再縁の婦人はしばしば前夫の容貌に肖たる子を生むことあり)以下次条に続く……

第二十四条 凡そ、情を解する者は其妻を去るべからず。いかにとなれば、離別の後其婦人(即ち去りたる妻)を娶る者あれば、其婦人には前夫の譲与えたる音声態度習癖等存し居るがゆえに、後夫必らず忌嫌の念を生じて其婦早晚難儀に陥るべし、殊にその生児前夫に肖たるを以て危禍にかかる者少しとせず。

(再縁の婦人時として前夫に肖たる児を生む故は他にあらず、其婦人の子宮前夫の磁氣に感染すること深く、後夫の勢力を以てこれを掃い除くには数多の星霜を費さざるを得ざればなり。且つ婦人はその破瓜の際に當てて交合したる男子の磁氣に深く染む者にして、其後他夫に接するともその破瓜を行ひし男子は其児の性質を進退するに足るものとす)

第二十五条 月経不順の原因を述べているが省略。

第二十六条 女子の年若くして情慾いまだ発

動せざるものと交合するは、その理手淫と相同じくして、害毒を男女両体に被らしむるこ
と甚しとす。かまへて少女とは交^{まじは}接るべから
ず。

第二十七条 身体遊惰なる者は淫慾^{さか}熾んにし
て、遂には衰弱に陥るものなり。其身の強健
ならんことを欲せば身体を程よく勞すべし。
(其理を説くに身体の運動少きときは忽ち影
響を陰部に伝へ、精液の製造分に過ぎて多く
なるなり。精液分に過れば従つて情慾を起す
べし)。

第二十八条 身体健康なるときは睪丸強く縮
まり居るものなり、もし睪丸の長く垂ること
あらば、是れ手淫又は多淫のために精液系の
衰へたるものと知るべし。

第二十九条 幼稚の時は精液いまだ精囊^{そなは}に具
らざれば、度々陽物を摩擦すといへども、精
液更に漏出るの理なし。されどもこれに因り
諸種の病疾を醸し、就中^{なかんづく}脳病神経病を發して
死するもの尠からず。父母たるもの平常其子
の動作に注意して嚴に手淫を禁ぜざるべから
ず。

第三十条 婦徳は貞淑にして従順なるを貴ぶ
といへども、時としては良人の言をも聴くべ
からざるこゝとあり。そは良人泥酔せしときな

ど交合をもとむるとも決してこれに従ふべか
らず。

第三十一条

第三十二条

右二条は胎児の男女鑑識法、省略。

第三十三条 婦人強いて情慾を抑えこれがた
め引起したる鬱結病には交合甚だ効能あり。
交合度に適ふときは、神経質の人をして気分
を爽快ならしめ、胃弱に宜しく、世上の人を
較べ見るに配偶ある人は独身の人よりもすべ
て長生を得るなり。これに付ても交合の度を
失はざるときは健康に益あることを知るべし
第三十四条 (受胎期間の日数を記してある)
第三十五条 (遺精と手淫の害を述べている)
第三十六条 (交合の後陰部を清潔にしてお
かねばならぬと説く)

第三十七条 人ややもすれば奇薬を陰部に塗
りて交合を行ふものあり。是等の薬剤はただ
陰部の熱を増すを目的として製出せし毒物な
れば、慎て是等の惡^{わる}謠^{じやれ}をなすべからず。不測
の大事を被ることあり。

第三十八条 婦人は閨房の秘訣を知らざるべ
からず。しからざれば往々良人の愛を失ひ、
良人をして遊蕩におち入らしむことあり。

第三十九条 男女ともに情慾は熾んならんこ

とを貴ぶべし、という説。そして、

第四十条 情慾は先づ一方に發して他に及ぼ
すものにして、通例婦人の情慾先づ發して、
男子の情慾を誘動するものとす。故に男子濫
りに情慾を以て婦人に迫るべからず。必ず婦
人の誘ひ来るを待つべきなり。

第四十一条 癩病は不正不潔の交合を行ふこ
とより發するものなり。

第四十二条 妊娠せざる婦人に対しては男子
にもその責を分たざるを得ず、という説。

第四十三条 陽物の充分に成長しないのは、
手淫と多淫が原因。

第四十四条 処女膜について。

第四十五条 交合をなすには心と身体との妨
害になるべき物事は一切排除して一心不乱に
行ふをよしとす。半途にして停め、或は傍よ
り妨げられつつ交合するときは、其身の健康
を害するのみならず、孕むところのその児に
及ぼすものなり。

第四十六条 閨房は清潔清浄にせよ。

第四十七条 陰部の清潔は(三十二条)に述
べたが、しかれども交合の後直ちに冷水を陰
戸に注ぎ入れて洗ふは甚だよからぬ業なり。
陰戸交合のために疲労れて温度を復すべき力
なき時に方^{あた}り、俄^{にわか}にこれを冷すがゆえに其害

を受ければなり。

第四十八条 世に半陰陽（ふたなり）といふものあり。しかれども其実は挺孔（陰核）大にして陽物の如くに見ゆるにて、これをすて置くときは害あるものなれば、速かに医師に乞うてこれを載り去るべし。

第四十九条 男女の情慾余りに急激くして精神これがために躁乱るときは生児に其性を伝へて狂躁者を生むべし。

第五十条 男女共に成熟期に至らざるうちは交合すべからず、また老境に至ったら強いて交合を行ふは有害あり、という説。

第五十一条 手淫の害を説く。

第五十二条 天発既に終るの婦人時としては陰門より出血することなしとせず、誤ってこれを経水なりと思ふは非なり、かかる時は速かに治療を施すべし。

第五十三条 月経に関する迷信は物理を知らざる者の至す所なり、といふ説。

第五十四条 少女における初潮に対する注意
第五十五条 陰門の尿翹（小陰唇）大きくして長きは病根となるものなれば速かにこれを切断すべし。

（以下附記として、各条に関する挿話的実例六話が記載されている）

◇ ◇ ◇

『男女交合得失問答』の初版と異版

『男女交合得失問答』（初版）の奥付は明治十九年四月十二日出版御届同年同月全刻成となっており、翻刻人は武部滝三郎と木村己之助の兩名。ボール表紙石版画で明治本としてはお馴染みの書型である。二二二頁、定価がついていないので幾らで売られたか不明。大売捌店としては鶴声社・兎屋・春陽堂など十六店名がならんで印刷されている。

表紙の絵（砂目石版）は伊邪那岐、伊邪那美の男女両神と国旗日の丸が上部に描かれ、中央に書名、左右に山高帽の紳士と夜会服の



男女交合得失問答（明治19・4）表紙

貴夫人で、おのずから書籍の内容を暗示している。口絵（銅版画）は前記男女神二柱が、「汝が身はいかに成れる」「わが身は成りて成り合はぬところ一処あり」「わが身は成りて成り合はぬところ一処あり、汝が身の成り合はぬところに刺しふたぎて、国生みなさむはいかに」という有名な古事記の問答の場面と旧約聖書で名高いアダムとイブの像の二枚、書中には女子陰門の図とケジラミの図の二枚が挿入されている。

その緒書（序文）によれば編者芙蓉楼主人は雑誌智恵の庫（由己社）発行者より同誌の購読者間より生殖器や交合上に就いての論考の投書が往々あり、最近男女生理学に対する開進の運に向うを知り、此処に一書の編集を依頼されたものが、即ち本書だという意味のことを述べているが、漢学流行の時代であるから難しい字が多く、今日の活字に無いもの、振り仮名に当字が多く、紹介に当っては取捨撰択もまたやむを得なかった。

総目次。

生殖器論。妻妾をして閨を守らしむるの法。交合の際精液早く漏れて其情を尽す能はざるを防ぐ法。身体虚弱にして精液少きを治する法。少女と成女とを識別するの奇法。随意に

男児を挙げ女兒を生むの法。痲病の説及び治法。睡眠中精液漏出の原因及治法。陰茎の勃起するを防ぐ法。精液を増多し精虫を生ぜしむる法。婦人の月経不順を治する薬法。男女交合の際精液早く泄れて快味を尽すこと能はざるを防ぐ法。交合の後陰部の拭淨に注意すべし。生児の父親に肖或は母親に肖るの理。娼妓と交合するの害及其理由。男女の子種なき原因及之を医治する法。身体の衰弱等によるにあらざして而も交合を行ふに方り陰茎俄に痿縮するの理及医治法。子女生来の智愚も亦交合の道其正を得ると得ざるとに關す。妊避妊法。婦人の容貌を視て其可孕女たり石女たるを判識する法。梅毒ある男女と交合して而も其毒の感染を免るる別法。男子の精虫は終身生ずべき者なりや。交合を行ふの度を論ず。婦人白帶下の原因及治法。生来短小なる陰茎をして長大ならしむる法。神速に陰精を強むる法。陰茎の包皮不開を治する法。婦人の多淫なるを治する法。男女逢引する所以の理。房事過度の徴候。疳瘡の説及医法。中夜以前に交合すると中夜以後に交合する事の利害如何を論ず。酒氣の為に淫念發動し或は淫念衰耗するは何の理なるやを論ず。股間淫の害。胎児の男女鑑識法。陰茎の無力を治する

法。月経に臨む毎に注意すべき要件。血属相婚するの利害。婦人周命（月経閉止）に至るの遅速。手淫の害に因て交合の快味を受くること能はざるを治する法。過淫は人をして愚に陥らしむ。男女過淫の害。婚姻の要訣。長命丸及女悦丸の説。（重複する項目もあるが



男女交合得失問答表紙

右 明治 19・5
左 21・3

全五十七題

性行為の際に早く射精してしまつて「その情を尽す能はざる」を防ぐ法については、その答として、精液を漏らすこと早きに過ぎるは身体の衰弱が原因で、平素の不品行つまり過淫や手淫にあるとして、交合を節制し、猥談に耽けるようなことを避け、淫史（にんじょうぼん）や春画（わらいえ）の類など、すべて淫慾を誘発する源を絶ち、端正的論説を聴き、正しき書籍を読み、克己復礼を旨とし食飼その他養生を專一にし、日々冷水浴を行ふべし、そうすれば漸く健康を回復して従つて、射精管（インスイヲハジキダスクダ）括束筋（シメルスチ）の弾力を増し、その患を治するに至るだらう——と云うのである。まったく、常識的な問答で余り科学的でも医学的でもない。但、性医学上の術語がまだ完備していない時代なので、用語のおかし味が読書としての趣味を感じさせる。

また「娼妓（ぢょうろう）に交合するの害」では、世の淫蕩者流は往々にして交合の快味をむさぼる余り女郎買ひに至るが、娼婦との交合は手淫（ていたづら）と同じで害あつて何ら利得のないものだ。手淫を行つても手淫

男女枕草紙（明治末期）表紙



の少しも快味を感じないのと同じで、遊女相手の性行為というのはまったく男子の一方的な遂情であって、その身体を疲らすだけである。「朝に北海北陸の客を送りて、夕に山陽南海の人を迎ふる等、常に面識あらざるの人に接して枕席に陪待するを業」とする娼婦はどうして客毎に愛情を発するにいとまあらんや、まして淫慾をや。

次に、平凡な事柄だが、交合後の陰部の清拭について

「交合を行ひて後はまさに宜しく陰部の粘気を拭き去りて之を清潔にすること緊要の件なり。其法先づ紙を取りて十分に揉み、二重若しくは四重に畳みて、男女両個の小腹の間隙にはさみ、次第に陰部に送り之を以て女陰を

塞ぐ如くし、かたはら男陰に捲き着けて、其粘気を拭き去るようすべし。而して此際最も注意すべきは、粘液をして陰毛或いは股間等の部を濡らさしめざるにあり。ゆえに拭淨を為さざるうちは深く注意して、身体を動かさざるようにし、又右の法を行ひて後も新紙をとり換えて可及的清潔に拭き取るべし」

若しこの清拭を怠るときは、粘液腐敗して寄生虫を生じ、この虫は毛虱または陰虱と称し、その蔓延と發育は甚だ速にして、駭くに堪えたり。と説いている。（江戸時代に嫁入道具の一つにかぞえられていた、春画入の婚禮秘事を説いた草紙類には、行為後の閨房用紙の使い方方の記載を見たが、かえって大正昭和の性典類では紙のことは殆ど書いてないようだ）

扱て、この『男女交合得失問答』については、異版を二三散見したので、その件について記す。いずれも内容は同文である。

○男女交合得失問答 明治十九年五月 出版人（大阪府平民）横山泰治郎 定価六十四錢百廿四頁（売捌書店もみな関西になつてゐる）。東京版発行一カ月後で、活字の組版も違つていて、ずいぶん早い出版である。

海賊版か版權を大阪で買ったものか、不明である。

○男女交合得失問答 全（明治十九年四月十二日出版御届）明治廿一年三月第二印発行となつており翻刻人も武部、木村の両氏。発行者は和田篤太郎となつてゐる。

○男女枕草紙 刊年発行所不明 内容は交合得失問答の抄出で、安っぽい石版画表紙三十頁（袋綴）程の本だが、厚みを出すために一丁当り新聞紙を五枚もあんにした珍本？ 夜店で売つたり、通販用の悪どい商法に作つたのであろう。

然しこの本は仲々普及された通俗性学啓蒙書だったらしく、一種の問答体の持つ大衆への親しみ、これが次に紹介する『女医者』にまで発展したと見ても良い。

実際のところへ性に関する質疑応答などこの章の始めに記した総目次が端的に物語っているように、現在でもそれに尽きるのではないかとも思った。一問一答の妙味としてはむしろこんな明治期の通俗書に於いて、かえつて冴えているようだ。この種の本を読んで一番気になるのは交合の回数だが、この問答本では二十歳以上四十歳までは一週間に二度

女医者(明治38・10)表紙・口絵



四十歳以上、五十五、六歳までは同じく一度おこなうを適度だと云っている。

『女医者』『続女医者』

『女医者』 十六版(明治三十八年十月)

講述者 秋琴女史 晴光館発行 四六版二五四頁 定価三十銭

『続女医者』 十一版(明治三十八年九月)

著者発行所定価共に右に同じ、二七〇頁

『女医者』の正編初版は明治三十五年四月発行、続編初版は明治三十六年六月発行となっている。

人身病理疾病について、応急手当法とか、養生法についての疑問を、読者が問い、女医者秋琴女史が親切に解答すると云った文体で着想のよろしきを得、表題も亦斬新奇抜なこの書は売行きも非常に宜しく、気を良くした版元は早速正編とまったく同じアイデアを踏襲した続編を刊行したが、これまた今日いうところのベストセラーとなった。

正・続共に内容は前編後編に分ち、脳の故障や肺臓の諸病、肋膜・心臓・肝臓・腎臓・など臍から上の疾病が前編。後編は生殖機能の問答を主として、男子生殖器の解剖生理の説明より始り、女子生殖器に関する万般の説明、つづいて妊娠・早産・流産の解説、更に

は男女陰毛、春情発動、手淫、交接及び同衾花柳病や梅毒の手法、雞姦・獸姦・強姦などを説明し、育児法を説いておわる。至れりつくせりの感がある。が、読者一般は勿論後編の記述をむさぼり読んだことに間違いあるまい。

そして、大切なことは『女医者』という優雅なみやびやかな書名であって、これならば婦人読者にも買える。安心感を与える書名であった。表紙、口絵共に尾竹国観の石版画で特に続編の巻頭折込み口絵は明治末期における婦人の海水浴姿が描かれていて、風俗資料としても一見の価値があり、背景の溪谷と滝の図は一種のへかくし絵と受けとることもできそうである。如何なものであろうか。以下正続女医者の(男女生殖器部門のみ)の内容を概略紹介したい。「性」に関する事柄だけは、むかしも今も変らぬ素朴な質問を自ずと発したくなるものだ。あながち、明治の青年子女の疑問としてとどまるべきことではないが、その解答にいかにも明治の文章らしい妙味があり、私としてはその点にもおもしろ味を感じる。原文は総ルビ。紹介に当っては特に読み難い字のほかはルビを省いた。

「普通の陰茎の大きさは何程ですか」といふ質疑に対して、秋琴女史は次のように解答しているが、この言葉の調子というのはどうも女性の筆ではない。勿論、女史の名を冠した仮名の執筆者があつたに違ひはない。

「陰茎は十人十種にして人毎に其長さ太さを異にするを以て孰れを普通の者とは云い難し壮年にして長さ一寸(3.3cm)に満たず、太さ食指に相当する者も往々にして見るに違ひあり又長さ五六寸に達しまれに七寸以上に達するものなきにあらず、前者は發育不全の者として論ずるに足らず、後者はあまり長大の感あり。通常交接に堪えるもの即ち長さ三寸七八分より四寸五六分に至り、太さ其れに相当するものを以て普通とすべし」

「陰茎勃起する原因は如何ですか」

「陰茎勃起する主なる原因は概して精神の感動にあり。凡て淫事に関係したる感覚の刺激により、即ち、淫猥の書画或いは女子の陰具を見たととき若しくは女子の陰具に触る時或いは単に姪情の思想を脳中に画きし時、等において頓かに発情し、陰茎の勃起を来す。即ち海綿体の空隙悉く血液を以て充たされ陰茎甚しく膨大して、其長さ太さを増し、龜頭は昇り陰茎は体を腹側に向け、稍々彎曲す

るに至る。此の時に當りては肉交せんとするの情切にして抑制すべからず。其交接をなすに至り、腔壁と相摩擦して、茲に新しき反射作用を起し、精液を注出して止むに至る」

「私は四十歳ですが少年の頃過度の手淫に依りてか此頃は交接せんとするも、氣ばかり早まりて、陰茎少しも勃起しません。療る法はありませんか」

これは仲々に深刻な質問だが、男子いまだ年少の頃から手淫を行い、老年に達しないうちに老衰無力を顕すことがあるが、高老年の無力とちがつて、三十代四十代における勃起力の衰弱は生理的にあらずして、「後天的に受けたる諸多の障害によって顕はるるの結果なり、療法として殆ど絶望とは行かぬ迄も著しき効顯あるものなし」と匙を投げてしまっている。こういう余りにも實際的な質問になると、その答えは容易なことではない。明治大正昭和を通じて、通俗性学書では手淫の害を誇大視し過ぎると、敗戦後の性書では説かれてはいるが、手淫罪悪感の心理外傷がいつまでも根強く、個人の人生觀の裏がわで支配することは有り得ることだ。また、次の問答なども青少年にありがちなウブな恐怖である。

「手淫のため陰茎曲りたる者交接に差支なき

や、又妊娠せしむるものなるや」

「甚しき手淫をなす時は陰茎は其の習慣せられたる方面に曲るものなるも、予後の注意と習慣とにより直立せしむる事能はざるにあらず。然れども、曲り居るとて交接に差支を生ぜざるも之がため女陰の腔底子宮の一部に焮衝(医学用語、身体のある部分に熱をおこし或いは腫れたり痛んだり、その部の官能に異常を呈すること)を起すことあり。又妊娠は全く別種のものにして、如何なる場合に於ても、精虫活動するときは卵子と結合して受胎せしむる事無論なり」

また次に心配なのは包茎(俗にいう皮かむり)で、「陰茎包皮は切開せざれば如何なる害ありや」「廿二歳の者包茎にて困る手術すれば治し、且つ相続者を得べきや」「包茎治療は幾日を要し費用は何程を要するや」ということとなる、そして、

「陰茎包皮者は交接すること度々なれば自然に治りませんか」といふ質問、まったく横着者の考えそうなことである。「包茎者の交接は例令幾度の交接をなしたりとて、容易に治するものにあらず」と答えている。(尚、日本人はどういう訳か龜頭が露呈していないと一人前でないような一般の風潮だが、海外の

裸体運動のクラブ会誌の写真など見ると殆ど男性は包茎者ばかりだから、欲に際して包皮を展じ、おわれば龜頭を覆うのが自然で、それが不可能な場合が真性包茎で切開手術を必要とする。包皮が翻転できれば何も手術の必要はない。

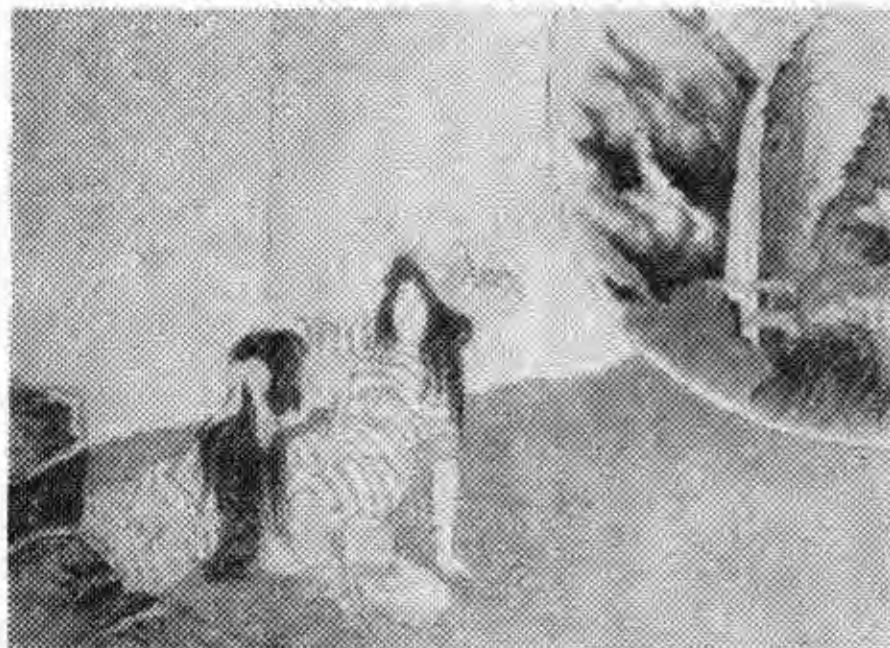
「他動物の陰茎は如何なる形状をなすものなるか」

「猫の陰茎は全部刺を以て覆はれ後方に向い居るも、交尾の際は前方に向いて、牝に大なる苦痛を与ふ。犬の陰茎は牝陰の中に侵入すると共に膨脹し、精液を注射すること劇しく従って交尾の時間を甚だ長からしむるあり。鳥類の陽具は大抵發育未全の状況なるを以て適当に交尾と称すべき交尾を行ふこと能はず只精液を陰中に送り込むを得るのみなれば、表面よりは伺ひ見るべからず。袋鼠は陰茎兩個を有すると共に牝も亦陰道兩個を備ふ。鰐も亦兩頭の陰茎を有するものなり」

次はいよいよ女子生殖器の部で、「その解剖と生理を問ふ」ことより始まる。

「女子生殖器は内陰部と外陰部の二つに分れ交接・妊娠・分娩を営む最枢の機関なり。内陰部は腔（陰道）・子宮・卵巢・喇叭管・靱帯を云ひ、外陰部は陰核・大陰唇・小陰唇と

続女医者（明治38・9）表紙および口絵



なす。腔は交接の要具にして子宮の下部より外陰部に渉る扁平の管にして、周囲に甚だ堅牢濃厚なる護膜性の膜を具え、著しく伸縮するに適す。陰道の長さは三寸五分乃至五寸にして、稀れに七寸に達するものあり。直径一寸三分より二寸に達し曲線に迂回す。深部腔底には許多の粘液線ありて、交合の際分泌漏潤して滑達ならしむ。又腔壁には数条の皺ありて拡張に便す。腔口（陰門）は大陰唇後連合の上部に開口し、未婚の婦女に於ては処女膜を以て閉鎖せらるゝと雖も、妙齡に達すれば破裂して其の周囲に遺留す。女子破瓜の時多少の出血あるは即ち処女膜の裂碎せらるるものなるも、婦人悉く斯くなる能はず、手淫の結果これを破ることあり。——陰核（さね）は男子の陰茎の如く海綿体の組織より成り、その感覚鋭敏にして甚だしく勃起の性質を具え色慾亢進の根源なり。実に陰核の発達非常にして刺戟せらるる事甚だしきときは往々女子をして色情狂を起し、徳義を紊る事少なからず。殊に結婚期前後の女子に於ては、陰核は甚だしき過敏となるを以て、衣服の聊か之に触るるも、又歩行の際陰唇之れに触るるも、陰核忽ち充血して春情を勃々たらしめその興奮を防ぐ事能はずして遂に手淫を行ひ

濫りに陰核を刺戟して春情を洩すことあり。
 (反対に) 又陰核余りに不敏なるものに在つては、常に春情発動せずして、交接すること幾度に及ぶも、何等の快感を感ずる事なしと云ふ。陰核の位置は大陰唇前連合の下部にして、小陰唇上端二脚の間にありて円き柱の如し。大陰唇(外唇)は陰阜の直下にある左右二個の大なる唇にして、未通女は淡紅色を帯ぶるも、最初の交接によりて少許の紫色を帯ぶ。大陰唇の外面は陰毛を以て覆い内面は滑らかにして、無数の小線凸起し、一種の臭気ある液を分泌す。大陰唇は陰阜より始まり肛門に至り上下は左右全く結合するも、中央は十分に離れ且つ広く隆起す。大陰唇の上部稍豊隆する部を陰阜と名づけ、妙齡に達すれば陰毛を繁生す。時として無毛なるものあり。大陰唇の下部結合する處を会陰と云ひ、膣口の上にも陰核の間を前庭と云ふ。その中央に尿道口あり。小陰唇(内唇)は大陰唇の内側にありて、弁膜状を呈し、紫色を帯びたる赤色を呈す。婦人妙齡に達すれば、大陰唇益々発達するを以て、小陰唇その中に閉じ込められ、外面より殆ど見る可らず。左右二個に分れ、上端相結合すと雖も下端は漸々狭小となりて、大陰唇の内面と膣口との間に消失す。

粘膜に被はれ多くの分泌線ありて、滑達にして交接に便せしむ。

以上が女子生殖器の説明で、普通造化器論では此處で例の銅版画のグロテスクな陰門之図が入るのだが、女医者には本文中に挿絵が一図もない。それだけに文章の説明は詳細懇切丁寧である。質問事項はどれも切実で、「私は出産後満三年の者身体何の故障なきも唯だ交接の際粘液の分泌なく困難す、何とぞ療法を教えて」「お恥しき事ながら私事年少の頃膣内に挿入せし物段々子宮に進入致し、如何にも致方なく其まま打過ぎ、幾程もなく結婚致し候も三年の星霜を経て、未だ妊娠せず如何にせば可なるや」「産後膣がぶら下り俗に茄子と云う様になりましたが、どうしたら治りましょうか教えて下さい」「陰門炎の原因症候及び療法等ご教示あれ」「欧州人の陰部は如何なる点に相違ありや」「陰部に頑癬ができて困ります療法を」「私は二十才ですが、陰部に甚しき悪臭あり、いまだ嫁すこと出来ません、何とぞ簡易なる良法を聞かせて頂戴」等々。また、「私は陰核甚だ長く醜いが、害あるものですか」という問に対して、「陰核の非常に発達して甚だ大なる婦人は、

第一多くは神経過敏にして、成年に至りてヒステリー症を患ふる事少なからず。通常は豆の大きさを普通の者とするものなれば、それ以上余りに長大に過ぐるものは早く通常の形に截らざるべからず。仮令之を切り去るとも決して危険あるものにあらず。凡て少女の春情を催す時には、往々陰核を摩擦して手淫を行なひ、或いは女子相互にこの悪戯に陥るときは、共にその陰核を肥大ならしめて、遂には色情狂を起すことなきにあらず」

これなどは素人考えでも、随分無茶な解答を与えたものだと思う。封建道徳思想と西洋思想の混合が、このような手淫ノイローゼの筆法を生んだのであろう。この書『女医者』が初版発売後九年も経って、明治四十三年に当局から発売禁止の処分を受けた原因は、こうした点にも大方の批判があったと思われる。非科学非衛生もこれでは余りにも過ぎるようだ。勿論、「性」の通俗書として余りにも長きに亘って普及され過ぎたことが、当局者の洩面を招いたこととも思われるが――。更にもう少し問答のひろい書きを続けると、「婦人の陰毛は何の用をなしますか」「天然の原理によりこれに毛を叢生せしものなれば、在って用なきものにあらず。即ち、

陰門或いは大小陰唇の幾分を覆^つ包み、陰阜より深く陰毛を発生せしめて、空氣塵埃等すべて汚穢なる物質を陰道内に侵入せざらしむる幾分の効ありて、恰^{あた}かも眼の睫毛^{まつげ}に於けるの感あり」

「交接とは如何なる事を云ふや」

「交接とは男子の勃起したる陰茎を女子の腔中に挿入し、ぼんぷ吸^{きゅう}子様の運動をなすを云うものにして、男女共に一種の快美感覚を起すべし。此感覚は男女の意氣相投合したる程度に準じて、或は強く或は薄く感ずべし。兩者の意識は共に閉止せんとし、全身熱感を覚えて発汗し、凡ての思慮官能を止め、生活力は一に生殖器系に集注したるが如し。此感覚

は益々進みて其極点に達し、男子は勃々たる精液を射出し、女子は子宮腔部絶頂に勃起す即ち、此期を佳境期といひて其間実に数秒時に過ぎず。次で恍惚として疲労を感ずるものにして、男子は一回の交接に只一佳境あるのみなるも、婦人は然らず、又男子は次の交接を行ふ迄には多少の時間を要するものなるも婦人にあつては全く然らず」

この交接及同衾^{どうきん}の項目は書中の庄巻で「交接は一ヶ月何回なれば差支へありませんか」「交接するに最も宜しき時を聞きたし」「拙者は娼妓とは交接を遂げ得れど妻とは交接出来ず原因及療法を」「月経中に交接すれば如何なる害ありや」「産後何日を経過すれば交

接して可^{しか}然^る哉^や」「本年二十歳の男子身丈僅かに四尺八寸なり然るに父母頻りに婚姻を勧む若し結婚するも交接せざれば身丈成長するや」「婦人の交接時に於ける生殖器の変化を説明あれ」「婦人交接後に於ける状態を聞かせて」「男子女子交接力の優劣を問ふ」「交接中絶法として行なはるる諸法如何様のものなるか」「尼は自然的に生殖器を使用せざるも害なきや」「妊娠中交接は絶対出来ませんか」等々。

この他まだ沢山あるが、特に採録する程の珍説はない。男色のことが出ていたので抄出して置く。

「雞姦の害を説明せられたし」

「近來青年者間に於て忌しき風習あり、しかも白昼乱行して恥とせず、群を成して對手を選び、特に美少年を見れば跡追ひかけ泣叫ぶをも聞かばこそ、其肛門を女陰に替えて情念を洩らす者あり。これを雞姦(男色)と云ふ……此習慣を持続するときは龜頭尖鋭となり細長なる陰茎に変じ、成年期に達し女子と交接するに當りて勃起力薄弱にして、しかも陰萎することあり」。

——この稿おわり——

「伝言板」

○分讓品録目録は作成が大変遅延しておりますが出来次第発送申し上げます故、今暫くお待ち下さるようお願いいたします。尚 フォトのお申込みは、大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号天星社内箕田京二宛願います。○御送金は、現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替にてお願いいたします。普通郵便に現金の封入は違法です故、現金の場合は必ず現金書留(封筒は郵便局で売っています)にて御送金下さい。○既

刊の臨時増刊号「花と蛇」第一回分(前篇写真と絵画特集)第二回分(統篇小説絵画特集)第三回分(前篇統篇収録小説特集)のいずれも売切れにて在庫がありません。○旧号に広告してありまして最近号に掲載してないものは在庫のないものがありますので、旧号に依つてのご注文は一応在庫の有無を御照会下さい。○雑誌の予約とお申込は大阪住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社へ願います。



読者評論

『奇ク』について

私はこう思う

新宿町人

ちかごろ東京では、わが奇ク誌（新刊）の入手が、ますます窮屈になる一方のようだ。

わが友人の〇は、池袋、五反田、錦糸町と三カ所にアナ場（毎号二十二日には確実に売る本屋のこと）をもっていたが、前者、中者は、半日おくれれば完全売切れ、後者は、まず四日間でこれまた売切れ御礼という状態で油断できないと、こぼしている。

私は、ここ十年来、たまに原稿を送るおかげで、迅速に送付を受け、買いそこないの悲運にみまわれないから幸福だが、むかしのよう、書店にブラリと立ちより、ゆっくり内容をえらんで、気に入ったら買うという、おおらかさは、なくなった。

一方、古書店におけるバックナンバーの高騰も、またものすごい。

復刊以前のお厚いやつなどは、三、〇〇〇円、四、〇〇〇円という高値。それもかなりくたびれた雑誌で、手アカ、落丁、写真のキリトリを覚悟しないと買えない、ありさま。

書店も心得たもので、一冊一冊パラフィン紙で嚴重に包装。カネを払わなければ、絶対なかみが拝めない仕掛けになっている。

○

とにかく、こうしてバックナンバーは、日ごと、月ごとに、タカネの花となる現状だが皮肉にも、入手難は「悪書封じ」にはなるようだ。

ええい、めんどごと、ゼロックスや、電子

リコピーで複写する海賊版横行との情報（あるピンク週刊誌の編集部で訊いた）もあるが冗談じゃない、ゼロックスの丸公だと、一ペーじあたり二十二円五十銭。かつての「家畜人ヤプー」あたりの名作だと、一回ぶん四、五百円がとぶ。

一部には、「書店が買い占めて、値上りを待っているのではないか」との声すらある。

（神田の古書展で、古本屋の主人の談）

とにかく、わが奇ク誌は、いまやコットー価値すら呼んでしまい、そのうえ、バックナンバーの全揃いをさがすのは、三億円強盗をつかまえるより、まだ困難。なんて言う本屋

さんもある。

○

売れ行きがよいから、早くなくなるのか、あるいは、他の原因のために姿を没するものか、後世の研究家は、この現象をどう解くかと想像すると、興味が湧いてくる。

先日、例の金壱千円也の豪華雑誌『血と薔薇』の三月号巻末の予告をみたら、まことにショッキングな文字が、目を射た。

惑星のごとく現われて、忽ち地平のかなたに没した、鬼才、沼正三のネームを、そこに発見したからである。

博学多才、偏執の文人、沼正三の、家畜人ヤプーという小説は、日本の小説界にエポックを画した、と言っても、けっして言いすぎではないだろう。

いつぞや私も、沼正三の書いたものに答えるべく、本誌編集部を経由して手紙を送ったら、早速丁寧な返書が来た。

それが、文字の大きさが、五ミリ角ほどのこまかさで、ピッシリ埋められた全文に、作家魂というものが、うかがわれるのだった。

現在だったら、あるいは、文壇で活躍をみせていたと思われるこの作家も、惜しや、現在、その消息が絶えている。

その、マゾ文学の鬼才沼正三が、また忽然と生き返って、その名をだしているではないか！

「血と薔薇」次号予告

四月号（四月十日発売）マゾヒズム特集号

「家畜人ヤプー」 沼 正三

の文字が目についたのである。

おしいかな、その四月号は、五月も九日になろうという本日まで市場にすがたをみせないが、あの名作が、どんなカタチで再現されるのか、これまた興味がふかい。

いずれ、サワリの部分の採録か、ダイジェストになるしかないのだろうが、いずれにせよ、この原文を世に紹介し、いまや国定語？になった感すらある。「ネクタール」なる用語を世に流布したのは、まちがいに本誌なのだから。いまから十年以上も前のこと。

「キミ。これは文献誌として貴重なものになるゾ。バックナンバーは大切にしまえ」

と、わが家にみえた、コント作家の、わが恩師の故T・T先生が、ズラリ並べた奇ク誌の背文字をみて折紙つけたことを思いだす。

さすがに情痴作家といわれ「女千一夜」などエロティシズムに溢れた（ただし、T・T氏は、ノーマル派で、私が躍起になって、アブ

レクチュアをして差し上げたが、とうとう、理解されないままに世を去られたが）作品をモノされた作家だけに、趣味こそたなかつたが、モノの真髄を正しく評価されたものだといまだに印象が深い。

これもだいぶ前のことになるが、たしか、週刊現代誌か、週刊文春誌の特集記事で、わが奇ク誌が、毎号、有名なセックス研究機関として権威のある「キンゼイ研究所」に何部か買い上げられ、永久保存物として、書庫の奥深く所蔵される情報を、たしか読んだ記憶がある。

○

以上、永々と、奇ク誌の社会的立場の半めいた私の見聞を述べたわけだが、私の言いたいのは、なぜ、この異色ある研究言論機関が、不当な悪者よばわりに甘んじて、抗議どころか、表紙にドギつい「成人向・18才未満のかたには販売できません」と、ラク印を捺されなければならぬのか。なぜ巻頭第一ページ目に「本誌自粛の徹底」という、始末書めいた自戒の弁を毎号のせて、自から、「私は悪者でござい」と、告白させられなければならないのか、という疑問なのである。

○

「ウチの子は、ゲバ棒ふりまわして、機動隊に追いまわされるより、エロ雑誌でもなんでもよいから、おとなしくウチにいられるようなものを与えてほしい」

と、私の知り合いの、高3と大2の二児をもつ教育ママが洩らしたのを聞いたことがあるが、世の多くの「暴走する怒れる若者」の親たちの多くは、本心そう思いこんでいるのではないだろうか。

○

識者は、もっとまっとうに、ちまたの声を聞き入れてほしいものだ。

東京池袋駅の朝の階段は、ラッシュには、キャパシティの3倍の人間でハチ切れそう。

誰かが、一段階段を踏み外して転倒したがさいご、将棋たおし、死傷者の山を築くのは必定といわれている。

そのラッシュ時には、アルバイトの女子学生が、やさしい声で、スピーカーを通じて「みなさま、おはようございます……」

やわらかく呼びかけ、静かにテープの音楽を流している。

音楽は、名曲のときもあれば、かわいい童謡、土の香りのする民謡と、バラエティに富んだのしい。

おなじく新橋駅では、小鳥の声を放送している。

両駅とも、このB・G・M（バック・グラウンド・ミュージックのこと）が効を奏して、事故の発生を防止していることは、まちがいないのである。

音楽は、万人の心をやわらげ、ともすれば殺気だつことを歯止めするのに威力を発揮しているのである。

○

ズバリ言おう。

わが奇ク誌は、ときに我々読者のくらしのB・G・Mの役目をりっぱに果たしている。といっても、けっして過言ではないのだ。

アタマから、悪書よばわりして、いわゆるどうしようもない桃色不良誌といっしょくたにするのは、やめるべきではあるまいか！

○

奇ク誌に存在価値がなかったら、本格的にスタートしだして十七年。それ以前までさかのぼったら二十年を越そうという長い年月、寿命を全うすることはできなかった筈だ。

なんだかんだと叩かれながら、しかし終始一貫、態度を変えようとしない発行元にたいしては、ただ敬意を表すのみである。

○

44年5月2日発行の、宇能鴻一郎の伝奇小説集「土俗の悦楽」新書判、二三七ページを一気に読了したのは刊行早々の五月六日未明のことだったが、久しぶりに深い感銘をおぼえた。

というのは作中「菜人記」の一節である。貧寒の漁村に、犬として飼われることを余儀なくされた主人公「簀虫太郎」が、飼主の一人である、浦役の女房なる中年おんなに、からだの不淨の部分の清めさせられたり、あげくには、あるもの（原文には、ハッキリ書いてある）をムリに垂れかけられたりまでされながら、しかし、その汚物にまみれた屈辱が、やがて快楽へと昇華するプロセスが、短文ながら作者一流の美しい文章でうたいあげられ「米の飯を食ってるから、味が良いにちがいないぞ」云々と、飼主の女房に、強制的に味あわされるあたりは、必然性に富み、鬼気せまる感すらおぼえたのである。

○

ここで、今いちど識者に設問を呈したい。見ようによっては、この一節だけを探るならば、芥川賞作家の、この作品も、悪書と片づけられるかもしれぬ。

しかし、これは断じて悪書よばわりされる性質のものではないのだ。

ここに、悪書とするか否かの難かしさがあるのである。

「奇クという雑誌は、悪書である。かかるがゆえに、マジメな研究論文を掲載しても、悪書は悪書である」

かりに、そのような断定的価値判断がくだされるのでは、話にならないと思う。

○

話は、また出発点にもどるが、近來しばしば聞く「奇ク誌入手困難」の理由が、よく読まれるために、スグ売りきれるものならば、私は沈黙するが、万が一、書店が、諸種の客観状況から、販売の意欲はありながら、しかし見送らざるをえないということであるなら黙視するわけにゆかないのだ。

なぜか。

政治に感情は禁物である。

先入観念の過剰はときに判断をあやまらせ

○

るおそれがなきにしもあらず、ということとは古今の歴史が、雄弁に物語っているとおりだからだ。

○

どうか、我々の唯一の慰楽をうばい去らないでほしい。そのかわり、我々は、心してたとえば、18才未満の者には、立入り禁止を命じたり、また、保管には注意を怠らず、不要なものを目にふれないよう、積極的な注意をおこたらない用意をもっているからだ。

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思えます。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

宇能文学のような作品を、わが奇ク誌にも迎え入れてほしい。しかし、それは、部数の関係上、稿料の面においても許されないことだろう。

しかし、フェニックス（不死鳥）のごとく永久の生命をもつ奇ク誌のことだから、いつの日か、あるいは実現することがあるかもしれぬ。

しかし、一流作家のネームが欲しいのではない。まだまだ、野に埋もれた無名作家は存在する筈である。

それらを糾合し、日本一の「悪書にあらざる悪書」へと、さらに成長してほしいのである。

ようにしながら、はっきり云うのだった。

「お嬢様と私と一緒にして下さい。貴方達は油断がなりませんわ」

カチンと冷たい表情で強く云った珠江夫人の眼は、水々しいまでに鋭く輝いている。

「何て気位の強い女だ」

川田は、頭にきて、「社長、こんな女、何も優しく出る事はないじゃありませんか。傷を負わされた俺の身にもなって下さいよ」と田代に云い、憎々しげに珠江夫人を睨むのである。

「まあ、そう怒るな」

と、田代は微笑しながら川田をなだめて、

珠江夫人の方へ向き直ると、

「別々に入るのが嫌だとおっしゃるなら、それでも結構。そのかわり、お二人とも丸裸になつて牢屋へ入って頂きましょう」

「な、何ですって」

珠江夫人のこめかみのあたりが痙攣した。

「裸にしておけば、逃げる気も起こらないでしょうからね。如何です」

珠江夫人と美沙江の顔は恐怖のあまりひきつって、二人は、ヒシと抱き合うようにしながら後ずさった。

「どうなんだよ。はっきりしろい」

急に吉沢が凄んで、先頃、珠江夫人に奪われた拳銃をポケットから出す。

「もう二度と逃げたりは致しません。ですから——」

珠江夫人が喉をつまらせた声を出すと、田代は笑って、

「裸になるのが嫌なら、別々に入るより仕方がありませんよ」

珠江夫人は、力強く美沙江の手を握りしめた。

「お嬢様、一日の辛抱ですわ。お嬢様の体は命に代えても私が守ります」

と、慄える美沙江を励ますように云ったものの、別々の牢舎へつながれば、もし美沙江に毒牙が迫った時、どうすればいいのか、珠江夫人は、たまらない不安に見舞われた。

「さ、入んな」

吉沢は、美沙江を珠江夫人の傍から強引に引離すと一方の牢舎の中へ押しこんだ。

「ああ、お嬢様」

美沙江は、一人牢舎へ押しこめられた不安と恐怖で鉄格子に手をかけ、綺麗に揃った柔らかな睫毛の間から涙を光らせている。

「奥さんは、こっちだ」

森田は珠江夫人の肩を押し、隣の牢舎へ押

しこんだ。ボタンと両方の牢舎の扉は閉ざされ、鍵がかけられる。

「さてと」田代は、鉄格子の間から、二人の美女を楽しそうにのぞきこんで、

「これから本題に入るんだが、川田の受けたこの怪我の始末はどうつけてくれるんです」

田代は、川田の包帯した手を握って云うのだ。痛えっと川田は大袈裟な悲鳴をあげ、わざと顔をしかめて痛がって見せる。

「治療代として、三百万。御大家の奥様と、千原流生花の家元令嬢なら、安いものだと思うのですがね」

田代が葉巻を口に咥えながらそう云うと、珠江夫人は、白蠟のような白い顔をさっと上げて、冷やかな口調で云った。

「主人に電話をかけさせて下さい。すぐにそのお金は都合致します」

「奥さんに電話をかけさせると何を云い出すかわかりませんからね。そこで、いい方法をお考え下さい」

田代は森田の顔を見て、眼くばせする。うなずいた森田は地下の階段を上って行った。

田代は、更につづけて珠江夫人に、
「京都からお嬢さんの添人として来ている二人の女中さんを、この屋敷へ呼び寄せたので

すよ」

「えっ、友子さんと直江さんが、ここへ来ているのですか」

美沙江は、ふと顔に生気を蘇らせて田代の顔を見た。

「その二人の女中さんに使いに立ってもらいます。ただし、その女中さんが途中で警察へ知らせたり、今夜中に金を持参しなかった場合は、お二人とも、治療代がわりに着ておられるその豪華な着物を全部脱いで頂かねばならなくなる。いいですね」

含み笑いしながら、そんな事を田代が云った時、森田が美沙江お付きの女中、友子と直江を連れて階段を降りて来た。美沙江も珠江夫人も、二人の女中が田代や大塚順子達と共に謀になっっている事など、夢にも知らない。

「あ、友子さんっ」「直江さんっ」

美沙江と珠江夫人は、鉄格子につかまっておろおろした声を出すのだった。友子も直江も、なかなかの役者で、

「ああ、お嬢様」「奥様、一体どうして、こんな——」と、涙声になって、鉄格子の間から美沙江と珠江夫人の手を握ったりして、肩を慄わせるのである。

「わかったな。折原元康と直接に逢って三百

万、現金で受取って来るんだ。今夜、十二時

までにここへとどけないと、可哀そうにこの奥様とお嬢様は、素っ裸にならねばならん」

と、田代が云えば、森田も調子を合わせて「それでもなお金の着くのがおくれれば、この二人の別嬪さんはどういう事になるか、その所をよく考えて、大急ぎで金を持ってくるんだ。いいな」

ハイ、と友子と直江は、わざと慄えて見せ立上るのだ。

「友子さん、直江さん、ほんとに大至急お願いしますわ。お嬢様と私の命にかかわる事ですから」

珠江夫人は、何度も念を押し、夫の元康が女中の話を疑う事を懸念して、田代に紙切れと鉛筆を借り、二人が誘拐され、三百万の金が至急必要な事を走り書きするのだった。

「じゃ、行って参りますわ。すぐに戻って参りますから、安心なさって下さい」

友子と直江は、珠江夫人よりメモを受取るに立上った。

「さ、急げ、急げ」

と、田代達は、二人の女中を追うようにして一緒に階段を上り、地上へ出たが、そこで友子や直江と舌を出し合い、大声で笑い合っ

た。

「仲々、芝居がうまいじゃないか、友子」

森田が涙まで見せた友子の熱演をほめると「昔はこれでも、役者志望やったんよ」

と、気楽に関西弁になり、手にしていた珠江夫人のメモを破り捨て「お小遣、頂戴」と田代に手を出した。

「よしよし」と田代は二人に、何枚かの札を握らせ、

「葉桜団の銀子達を紹介してやるよ。ついて来い」

「ね、社長はん」

と、直江が白痴めいた、とろんとした眼で田代を見上げる。

「あの折原の奥さんと、うちのお嬢さん。これから、どないになるの」

「さあ、どうなるかな。さしずめ、ストリッパにでもするか」

「あんまり可哀そうな事せんといてね。お嬢さんは、あんまり体の丈夫な方やないさかいな。何しろ、生花以外の事、何も知らんお嬢さん育ちや」

こいつ、主人を裏切っていながら同情してやがる、と男達は笑った。

「心配するねえ。そのうち、丈夫な体に俺達

が鍛えてやるさ」

川田はそう云って、次に田代に向かって云った。

「社長、何もあんなに手数をかける事ねえじやありませんか。一思いに剝いで、吠面かかせてやった方が——」

「待て待て、楽しみは、そうガツガツ急ぐもんじゃない。俺は、じわじわいたぶるのが性に合ってるんだ」

と、太鼓腹を揺するのだった。

——田代達が地下から出て行ったあとは、凍りつくような無気味な静寂が流れた。珠江夫人は、牢舎の冷たい床に正座したまま、時々、隣の牢舎にいる美沙江に声をかけるのである。

「お嬢様、心配なさらなくても、友子さん達はずぐに戻って来ますわ。元気を出して下さい。いいですね、お嬢様」

ええ、わかってますわ、お嬢様。と力のない美沙江の声が戻って来、つづいて、奥歯を噛みしめるような、かばそい美沙江の哀泣が断続的に聞こえて来る。

ともすれば、珠江夫人も胸が押し潰されそうになるのだ。友子と直江が三百万を主人より受取ってここへ戻って来た時、田代や順子

が簡単に自分達をここから解放するかどうかが疑問になってくる。解放すれば、この屋敷の秘密がその筋へ露見する事になるのは必定だから女中達も自分達の命も、そこで断たれる事になるのではないかという恐怖の念がわいてくる。一体、どうなるのか予想もつかない。名状しがたい不安と恐怖、それに刻々と過ぎていく時間がかもし出す重苦しいあせり

「お嬢様、今、何時になりますの？」

美沙江も、そうした気分に苦しんでいるらしく、たまりかねたように声を慄わせて聞くのだった。

珠江夫人は、銀の腕時計に眼をやる。地下室の壁にともっている裸電球の鈍い光波にうつして見ると、もう夕方七時であった。

あと五時間——珠江夫人は、眉を寄せ、その不安を自分で追い払うように立上ると、牢舎の壁に身を寄せ、隣の美沙江を慰めるのだった。

「七時ですわ、まだ五時間もあります。何も心配する事はありませんわ」

もし、十二時までに友子達がここへ姿を見せなければ——美沙江の恐怖も珠江夫人の不安もそれにあった。

「今日の生花の会場は、どうなったでしょうね、お嬢様」

美沙江は、胸について溢れ出そうになる働哭をこらえて口にする。

定刻に家元の令嬢が姿を見せないというので、会場の方は恐らく大騒ぎになった事だろう。それに後援会の代表者である珠江夫人まで顔を見せないの、関係者はあわてふためいているに違いない。千原流の信用に大変な傷がついた事になると、珠江夫人は胸のはり裂ける思いだったが、それどころではなく、現在、自分達は生命の危険にさらされているのだ。珠江夫人は、背中に冷たいものが走りじっとしていられず、狭い牢舎の中を歩き廻った。地下の土間に面した鉄格子、そして三方の壁が厚い板で取囲まれた牢舎は、無気味で陰惨であった。こんな中に、たとえ一日にせよ監禁される美沙江の気持を思うと、珠江夫人は、いても立ってもおられぬ気分になるのである。

「ああ、出たいわ。早くここから出たいわ、お嬢様」

美沙江は、おろおろした声音でそう云うとたまらなくなったように振袖の袂で顔を覆い泣きじゃくるのだ。

肉の鍋

静子夫人の浣腸ショーなどを夕方近くまで見物した岩崎は、

「また、来月。必ず、ここへお邪魔するで」と、新しく入った獲物などに心を残しながらも、関西の方に仕事が待っているので一旦引揚げる事になった。

ボディガード二人と一緒に車に乗りこむ岩崎を、田代や森田達、それに葉桜団のズベ公達までが一せいに玄関へ送りに出る。

津村義雄は、岩崎の用事で、伊豆の方へ来月、出向かねばならないので、それまで当分の間、田代の屋敷へ滞在する事になった。

「それじゃ親分、お氣をつけて」

義雄が車に乗った岩崎に頭を下げると、

「こんな楽しい思いさせてもらたんも、みなお前のおかげや。感謝するぜ」

と岩崎は、えびす顔になった。

「この次は、またおもしろいもん見せてや。期待してるぜ」

岩崎の車が走り出し、しばらく見送っていた田代達は、やがて、ほっとしたように大きな門戸をガタンと閉ざす。

「やれやれ、これで肩の荷が軽くなったよ」

ショーが一段落し、あちこちから集まった客人達も、これで一応、引揚げた恰好になり田代も森田も、会が成功裡に終わった事を喜び合った。

「俺達、身内の者だけで祝杯といこうか。親分」

田代はそう云って、さも楽しそうに森田の肩をたたいた。

——千代の部屋では、もうすでに祝宴が始まっている。

スキヤキ鍋を、順子、葉子、和枝の三人で賑やかにつつき、おそい夕食をとっているのだ。

襖が開いて、春太郎が湯上りの上氣した顔を見せる。

「御苦労さん。よく洗ってやった？」

千代は、春太郎の顔を見ると、すぐに云った。春太郎と夏次郎は、静子夫人を風呂に入れているらしい。

「ええ、とくに念入りに、とっくりと洗ってやりましたわ」

春太郎がそう云って笑った時、夏次郎が静子夫人の背を押すようにして入って来る。

夫人は湯上りタオル一枚を体に巻きつけた

だけの姿で、前屈みになり、よろめくようにして部屋へ入って来たのだ。

うすら冷たい表情で、夫人は、その場に小さく坐りこむ。もう恐怖も屈辱も、そうした感情すら夫人は喪失してしまったように、凍りついた視線を畳に落としている。夫人の今の願いは、ただ一つ、千代達のいるこの部屋から解放され、冷たい牢舎へ戻りたいという事であった。そして、疲労し切った体を横たえたかった。暗く、冷たく、微くさい牢舎であっても、鬼女達のいるこの明るい部屋にくらべれば天国と地獄の差があった。

今日から三日間、千代の部屋へつながれる事になった静子夫人は、暗い牢舎が、ふと恋しくさえなったのである。

「ホホホ、お風呂へ入れてもらって、少しは疲れがとれたのじゃない。奥様」

千代は、順子の盃に酒を満たしながら云った。

静子夫人は、疲れがとれたどころではなく風呂へ入った事で、肉体は水を含んだ綿のようになり、先程まで春太郎達に受けた調教の痕が、火傷の傷痕のようにヒリヒリ痛み始めている。と同時に、朝から食事を与えられていない静子夫人は、二度三度にわたる浣

腸で胃を洗滌された故もあり、気が遠くなる程の空腹を覚えていた。

賑やかに千代達がつつくスキヤキ鍋の匂いが夫人をやり切れない思いにかりたてる。

和枝は、春太郎と夏次郎に、「どう、あんた達も一緒に食べない」とスキヤキ鍋の仲間に入るようにすすめる。

「おなか、ペコペコなのよ。じゃ、御馳走になりますわ」

春太郎と夏次郎は喜び、「ところで、この奥様は、どうしましょう」と千代に聞く。

「その床の間の柱にでも、縛りつけておきなさいよ」

千代は無難作にそう云って、床の柱を顎で示した。

「お立ち」

春太郎が夫人の肩をついた。

「あんたは朝から食べてないんだから、さぞかし餓^ひじいでしょうけど、三日間はこの調教のため、断食修業をして頂くわ。わかってるわね」

春太郎と夏次郎は、夫人の背に手をかけて引き起こし、床の間へ押し立てて行く。

「さ、タオルを取って」

春太郎がうしろから、夫人が体に巻きつけ

ているタオルをさっと剥ぎとった。湯上りの見るからに暖かそうな艶をうかべている夫人の肌があらわになる。夫人は、形のいい、ふくよかな乳房を両手で抱くようにし、その場に腰をかがめたが、春太郎が戸袋の中から麻縄を取り出して近づくと、夫人は、命令されるまでもなく、胸を覆っていた両手を静かに背中へ回して行くのだった。

そのように柔順になった静子夫人を、千代は頼もしげに眼を細めて見つめている。

かつての舞踊の愛弟子であった小夜子の眼前に、醜悪無残な姿を晒け出し、今はもう生きた心地もなく、中身の無い人形のように春太郎達に操られている静子夫人であった。

「さ、柱を背にして、ちゃんと立って頂戴」

豊満な乳房の上下には、黒ずんだ麻縄が二巻、三巻とかけられ、きびしく後手に縛りつけた夫人を二人のシスターボーイは、かっちり柱に押しつけて、別の縄をつかって、かたくつなぎとめる。

夫人は、涙も涸れ果てたような空虚で物悲しい瞳をぼんやり前方に向けているのだ。

「せめて御馳走の匂いだけは、うんと嗅がせてあげるわ」

千代は、わざとガスコンロや鍋を床の間近

くに移動させ、和枝や葉子達と再び鍋の周りを取囲むのだった。

「どう、おいしそうですね。奥様」

グツグツと煮えている鍋の中を箸で示しながら、千代は夫人の顔を面白そうに見上げている。静子夫人は苦しげに眼をそらせたが、思わず夫人が生唾を呑みこんだのを悪女達は見つけて、どっと哄笑するのだった。

「でも、いくら見ても見飽きがしない程、きれいな体をしているわねえ。男達がカッコとなるのは無理もないわよ」

和枝は盛んに箸を動かしながら、床の間のさらし者になっている静子夫人を、しげしげと見つめている。

日々のあくどい調教のため、いささか痩せた感があるが、それでも充分に脂がのった官能味豊かなムッチリした腰部や太腿、大理石のように光沢を浮かべた優美な二肢、そしてぴったり閉ざした太腿に挟まれ、ふっくら盛り上って見える柔らかい……。――それは、つい先程まで、木っ葉微塵なまで責めさいなまれたそれとは、どうにも思えない美しさであった。

「これからお食事の時は、何時もこういう風に奥様も一緒よ。匂いだけは、たっぷり嗅が

せてあげるわ」

千代は、悪戯っぽく笑うと小鉢の中に鍋の中の肉や野菜を盛上げて、よっこらしよ、と立上り、夫人の横に立った。

「そら、ね、おいしそうでしょう」

千代は、夫人の顎に手をかけて、小鉢を夫人の鼻先へ押しつけた。

夫人は、湯気を立てている鉢の中味に悲しげな影の射す瞳を向ける。

「いいのよ、食べても」

千代は箸で肉片をつまみ、夫人の口元へ押しつけていった。

夫人は、ごくりと唾を呑みこみ、千代の顔を見た。

「さ、遠慮なさらず」

千代は、クスクス笑っている。

たまらない空腹にもう見栄も体裁もなく、夫人は吸い寄せられるようにそれへ唇を近づけたが、瞬間、千代は、さっと手を引き、吹き出した。

「あら、駄目よ奥様。どうしても召上りたいのなら、こちらで召上って頂くわ」

千代は、身を沈めて、箸につまんだ肉片をそれへ近づけていく。

「さ、アーンと大きくお口をお開き遊ばせ。」

ここでなら、いくらでも召上れ」

それを見た和枝、葉子、順子の三人は、キヤッキヤツと肩をたたき合い、笑いこけた。

また、千代のいたぶりが始まったと夫人は口惜しげに唇を噛みしめ、さっと顔をねじるようにそむける。

「どうしたの、さ、早くお食べなさいよ」

千代は、段々、残忍な眼つきになって、箸につまんだそれを笠にかかって押しつける。

静子夫人が緊縛された身をよじって、すすり泣くと、千代は、フン、と鼻を動かして、夫人を憎々しげに見上げた。

「遠山家の、若奥様でいられた頃は、屋敷に一流のコックを雇って、随分と贅沢なものを朝食食べてたじゃないの。そして夜は遠山と一緒に、銀座か赤坂の高級クラブで晚餐をとる。ホホホ、それが今じゃ、元、女中が食べ残したもののさえ口に出来ない哀れな身の上、随分とみじめになったものね、奥様」

千代は、そんな事を云って、妖怪めいた笑い声を立てていたが、夫人が千代のいたぶりの言葉に身を慄かせ、一層、激しく嗚咽し始めると、いきなり夫人の高貴な鼻をつまみ上げ、ひねり上げた。

「みんなのいる前で、あんな羞ずかしい姿を

さらしながら、よくそんなおしとやかな顔が出来るものだわ」

酒癖の悪い千代がまた荒れ出したと、春太郎と夏次郎はニヤニヤしながら、スキヤキをついついている。

「ホホホ、朝から何も食べてないとは云わせないわ。さっきは奥様、捨太郎さんより愛情のこもったすばらしい生ジュースを御馳走になったじゃありませんか」

頭のとっぺんから出したような甲高い声で千代は、心身共に打ちひしがれている静子夫人に追討ちをかけるように嘲弄しまくるのである。そんな風に千代が、執拗なくらいに夫人をいたぶる気になるのは、やはり、汚辱の底にのたうちながらも失われる事のない夫人の美貌に対する腹立たしさが、原因しているようであった。

数々の言語に絶する辱かしめを受け、心身共に疲れ切ったように薄く眼を閉ざして顔をそらせている静子夫人だが、そのしつとりと翳のある、男心をうずかせるような情動的な深みのある夫人の優雅な横顔は、千代に一種の反撥心と、いまいましさを覚えさせるのである。

「ね、あんだ達」

千代は、春太郎達の方へ酒で濁ったトロンとした眼を向けた。

「これから、この奥様の夜の部の調教に入るのでしょう」

「ええ、今度は、さっきと違って、立たせたままガラス管を咥えさせるんです。もうお稽古場の支度も出来ていますわ」

夏次郎が立上って次の間に通じる襖を開ける。そこは、千代達の寝室になっている六帖だったが、畳の中央へ、六尺四方もある四角い板が敷かれてあった。その板の上には、三尺位の間隔をおいて太いくいが打ちこまれ、鎖が結ばれてある。板台の上に乗った生贄の二肢を、大きく割らせるための細工である事はすぐにわかったが、天井の方からも、生贄を板台の中央に固定するため、無気味な鎖が二三本、からみ合うようにして垂れ下がっていた。

「まあ、私の寝室がこれじゃ型なしね」

と、千代は苦笑し、「あんたのおかげで私達ここで雑魚寝しなきゃならないのよ。一生懸命、お稽古に励まないと承知しないから」と静子夫人の縄に緊め上げられている乳房を指ではじく。

ああ、まだ、この疲れ切った肉体に、おぞ

ましい調教を——静子夫人は、眼前に開けた隣室の無気味な臨時の調教場を気の遠くなる思いで見つめている。

千代は、調教場と、おのく夫人の凍りついた横顔とを交互に眺めて北叟笑むと、

「でも、腹がへっては戦が出来ぬというわけね。調教に入る前に春太郎さん、奥様に鍋の残りものを食べさせてあげて頂戴。ただし」

千代は、夫人のそれを指さして、笑いこけながら、「私なら遠慮なさるけど、調教師のあんた達なら奥様、喜んでお腹に入れて下さると思うわ」

二人のシスターボーイも、千代の狂気めいた残忍さにいささか閉口したが、さからうわけにもいかず、顔を見合わせて立上った。

静子夫人は、春太郎と夏次郎が傍へ近寄って来ても、人間的な意志を完全に喪失させてしまったように、うすら冷たい表情を前に向けたまま、微動もなかった。

千代は、このスキヤキパーティーの座興として春太郎達にそんな事を命じたわけだが、かなり酩酊して来た和枝も葉子も、「うんと御馳走してあげてよね。そら、お刺身だってあるわよ」と、刺身の皿を春太郎に手渡したりして、はしゃぎ廻っている。

春太郎は、しつとりと翳を沈ませた夫人の柔媚な頬に軽く接吻して、

「いいわね、ここにいる御婦人方の御機嫌をしっかりとって頂戴。皆んな大事なお客なのよ」

つまり、ここにつめかけている女達は客、自分は、客を楽しませる実演スターだ、と、春太郎に改めて念を押されるまでもなく、夫人は自分の心にはっきりふんぎりをつけたのだらう。夫人は、軽く瞑目しながら、小さくうなずいて見せたのである。

自分が、みじめな実演スターとして成長する事が千代や川田の狙いであるなら、彼等が望むように振舞い、心身ともに自分を作りかえ、彼等を満足させる、それが彼等に対する一種の復讐行為かも知れない。あれ程にまで哀願し、哀訴し、その代償として自分を汚辱の底に投げこんだのに、彼等は遂に千原美沙江を毘にかけたのだ。裏切られた憤り、絶望と屈辱、そうした苦しさを一切忘れる方法は彼等の手に我が身を日夜ゆだね、狂気した被虐の調教を受ける事、そして、それを快感として感じる肉体に自分を変貌させていく事よりない。静子夫人は、次第に自分をもっともっと傷つけたいという血走った気分が駆られ

てきていたが、千原美沙江と折原珠江がすでに彼等の手に落ちた事を知って、それで、はつきり自分のとるべき方針がきまったような気分になったのだ。自分の体内にあって、自分の今まで気づかなかった能力を調教師達のリードで巧みに引き出されていくうち、ふと夫人は、さらにその能力を引き出されてみたいという願望が、嫌悪の戦慄、自尊心の痛みと並行しながら、マゾヒスチックな感触となつてこみ上つて来たのかも知れなかった。

静子夫人が柔順にうなずいて見せたので、春太郎は満足そうな顔をし、夫人の気分をまづほぐすために、夏次郎と一緒に、縄に緊めあげられた乳房を手でまさぐり、乳頭に口吻などし始めたが、「ねえ、待って」と夫人はむずかるように身を甘くよじらせ、

「そこにおいでになる奥様方の慰み物になりたいわ。ね、奥様方の手で静子を——いいでしょう」

それは、静子夫人の千代達に対する一種の挑戦であつたかも知れない。

「まあ、私達にですって」

千代は、仲間の女達と顔を見合わせたが、万更でもない顔つきになって、

「私達になぶられる方が気分が乗るといふの

ね。いいわ」

千代は、和枝や葉子を見て、また、例のお遊びを始めましょうよ、と自分達の秘密を楽しみ合うように舌を出し合ったが、先程からすわった眼を床の間へ向け、静かに酒を飲みつづけている大塚順子の手を、千代はひっぱった。

「さ、順子さん、あんたも仲間に加わらなきゃ駄目じゃないの。明日から念願かなつて、千原流家元の娘に復讐するんですよ。その実験を、この女相手にやってみりゃいいじゃないの」

それもそうね、と順子は盃を卓へ置くと、一つしゃっくりをし、フラフラと立上るのだった。

肌に咲く花

女達の鬨りものになりたい、と静子夫人が意外な事を云い出したのは、窮鼠かえって猫を噛むの心境、自棄になつて悪女達に喧嘩を売つたようなものであつた。連日、鬼源や川田達の調教を受け、自分の肉体がどのように変貌し、また、どのような浅ましい媚態を演じる術を身につけたか、これらの悪女達、と

りわけ、元、自分の女中であつた千代に示してやりたい、という捨鉢な気分には夫人は陥つたのである。自分を娼婦に売った男へ、自分はこの娼婦になつたと、娼婦が孤憤して居直つて見せたのにも似た心境だった。

左右に立った和枝と葉子の手で、二つの乳房を柔らかくほぐされながら、夫人は、濡れ輝くような抒情的な瞳を夢見るように薄く開き、そつと上の方を見上げている。

千代が、身をかがめて、夫人の臍に悪戯っぽく口吻してから、ねっとり脂肪を浮かべたミルク色の肉づきのいい太腿内腿を隠微にさすり始めた。

夫人は、その陰影の深い瞳に情欲的な色をねっとり浮かばせ始めると、桜色にほんのり染まった頬に魅惑的な笑靨えくぼを作った。

「ねえ、次を、次をなさって」

甘えかかるようなハスキーな声をひっそり口に出した静子夫人は、さももどかしげに優美な双臀をくねらせる。

「次は、こうね」

千代がそつと手を触れさせると、夫人は、消え入るような羞ずかしい風情を見せて切なげに身悶えして見せるのだった。

成金じみた大きな指環をつけた千代の指先

が隠微に動作を開始する。

「何時も、こんな事は人に任せて、私達、高見の見物していたんだけど、今夜は奥様の御希望に応じて特別サービス」

千代は唄うように云って、喰い入るように見つめながらピッチを上げていく。

甘い身悶えや、すすり泣きの声を交えながら夫人は千代に翻弄されるままとっているのだが、それは千代に対する一種の敵対行動でもあった。気がすむまで以前の主人をなぶり抜くがいいわ、とばかり、元、女中の千代の眼前に静子夫人は、もはや、ためらいも羞ずかしさもなぐり捨て、臍物に至るまで露に曝してしまったのである。熱い涙を千代に引き出される事にも、今の夫人は、さして口惜しくは思わなかった。これは、千代との闘争だと夫人は思ったのである。

「さて、ベテランと交代しようか」

千代は、大塚順子の方を振返った。

「この大塚女史はね。昔、レスピアンに溺れていた頃があつて、すごいテクニシャンよ。」

この先生にかかっちゃ、いくら千原美沙江が箱入娘だといつても、きつと骨抜きにされちまうわよ」

順子が明日より千原美沙江を自分の部屋に

引き取って、花瓶に耐えられる肉体に育て上げるのだ、という事を千代に聞いた夫人は、火照った肉体にふと寒いものが走り、魔物でも見るように、こわごわ順子の顔に視線を向けるのだった。

「これからは大塚先生と呼ぶのよ。生花の第一人者だからね。尊敬しなきゃ駄目よ」

と、千代は笑い、「さあ、大塚先生、こちらへ」と手招きする。

飲み過ぎ、食べ過ぎて、息苦しくなったのか、順子はよろめく足を踏みしめるようにしながら、「一寸、失礼」と着ているアフタヌーンをもどかしげに脱ぎ出し、部屋の隅へ投げやる。

「今度は、私が試したげるわ。いいこと」

順子は、スリッパ姿になり、酒臭い息を吐き、ヨロヨロと倒れかかりそうになりながら柱に緊縛されている静子夫人に近づく。

「随分と酔ったわね、大丈夫」

千代が順子の動きを見て笑うと、

「これが酔わずにいられますかってのよ。千原流家元の娘をとうとう生捕りにしたんだからね」

普段はそうでもないのだが、酒を飲むと順子も千代と同様、荒れ出す癖があるようだった。

た。

「さっきから、ずっと見ていたんだけど、あんた、ほんとにいいおっぱいしてるわね」

順子は、上下に麻縄を巻きつけている夫人の優美な乳房を指で押し、次に身をかがめて行くと、

「すばらしいわ。しかも、凄い美人。男達がのぼせ上るのも無理ないわよ」

そう云って、順子は両手の指を触れさせていった。

「ね、いくつなの、あなた」

順子は、ゆるやかにまさぐりながら、夫人を見上げて云った。

「二十六です」

静子夫人は、象牙色の頬を朱く染め、切なげに首をねじりながら、紅唇を慄わせて云った。

「まだ、子供を生んじやないようね」

「ハ、ハイ」

順子は、そんな質問を発しながら、両手を使って巧妙ないたづりを加えるのだ。それは執拗を極めた。

夫人は、思わず齒を喰いしばった。今まで鬼源や川田、それに春太郎達より加えられたのとはまた違い、女だけに女の急所を知り尽

したとでもいう微妙な、それでソツのない動作であった。千代や銀子達とは違ったプロの攻撃ともいえる。

恐ろしい女——静子夫人は、汗ばむ程のおぞましさを感じ出し、順子のいたぶりを恐ろしく思った。

「うまいわねえ」と、少し離れた所から順子の仕事を凝視していた春太郎と夏次郎が、感心したように顔を見合わせる。

「女でなけりや出来ないことだわ」

しきりに感動するシスターボーイ二人を千代は面白そうに見ると、

「いい参考になったでしょ。この大塚先生はね、女でありながら女泣かせの名人なのよ。生娘の千原美沙江を明日、どんな風にして教育するか楽しみだわ」

大塚順子の五本の指は、ピアニストのように敏捷に、また蜘蛛の足ののように陰湿に一つ一つが責め場を分担して動き廻るのだ。

「あっ、ああ——」

今まで、押し殺したように低く呻きつづけていた静子夫人は、どうにも耐えられなくなったように、咆哮に似た叫びを上げた。

女の手管で、どうして自分がこんなに狂態を演じてしまうのか、静子夫人は自分で自分

がわからなくなってしまう。悪魔の触角にも似た順子の指先。

負、負けるものか——夫人は、カチカチ歯を鳴らし、激しく首を左右へ振った。

こんな恐ろしい女に、千原美沙江が——そう思うと静子夫人は、思わず背筋に冷たい汗が走った。

「ああ、許して」

静子夫人は、声を上げて泣きながら、順子に哀願した。これ以上、つづけられれば、再び——血走った気分になった静子夫人は、全身に戦慄を走らせて、「お願いです。もう、やめてっ」とほざくよう叫んだのである。千代達に挑戦する気で、どうともして、とばかり腹をすえ、どのような珍芸を強制されてもやってのけようと思ったものの、錯乱状態にだけは入りたくなかった。また、千代達が笠にかかってそうした恥を自分にかかせようとしても、彼女達を欺く位の技巧は夫人も身につけていた。しかし、大塚順子には、そのごまかしがきかない。その刹那を告げる言葉をわざと発して、がっくり首を前へ下げて見せても、

「あら、ごまかしたって駄目よ」と、順子は笑って、とり合わないのだ。

やがて、順子は、もう一つの責めを同時に夫人に加え始めた。

「ううっ！」夫人はそれが始まって間もなく歯の間よりむせるような声を上げ、全身の筋肉を震わせて、がっくり首を前へ垂れ下げたのである。

「今度は本当だったわね」

順子は、柱につながれた上半身を汗みどろにして死んだようにぐったりになってしまった夫人を見上げて云った。

「また、ああ、また、こんな——」

再び、敗北したみじめな自分、しかも、千原美沙江を誘拐した憎い女の手で——静子夫人は、底知れぬ汚辱の苦しさですり上げるのだったが、そんな気持はすぐに薄らぎ、自分のこの悲しい肉体をもっと傷つけられたいといった欲求がジリジリとこみ上って来るのを自分で感じ取る静子夫人であった。

「ごめんね。ここまで責め落とす気はなかったのだけど、あんたがあんまり美人だもんだから」

順子は、ふと夢中になった自分を照れ臭く思ったのか、そんな事を云いながら、フラフラと立上り、静子夫人の汗ばんだ額に口吻するのだった。

「ねえ、どうだった」

順子は、夫人の熱い耳元に口を寄せ、くすぐるように囁くのがあったが、それはレスポスの愛に溺れていた女特有の粘っこさのある甘い囁きだった。それに対し、夫人は、初々しい羞恥の色を潤んだ瞳にねっとり浮かべ、かすかに顔をそむけながら、微妙な気持を表わすようにうなずいて見せるのだ。

「あんたって、ほんとにすばらしい体をしてるわね」

順子は、夫人が男達を恍惚とさせる珍重な代物の主である事を傍にいる千代達に云って聞かせる。

「女だてらに、女道楽を随分として来たけれど、こんな見事な女には逢った事がないわ」

実際、順子は、静子夫人のそうした肉体に眼を見はったのである。綿を重ねたようなしっとりした柔らかさ、そして、粘りつくような生々しい吸引力、感情が極まると共に発する媚めかしいばかりに切なげな涕泣と甘い身悶えなど——順子は、悩乱の炎の残り火の中で、うっすらと薄眼を開き、見る事なしに、一点に視線を注いでいる静子夫人が、世にも美しいものに見えるのだった。

「鬼源さんもそんなこと云ってたけど、そん

なにこの女、見事なの？」

千代は、そんな事にも何か嫉妬がわくのかふと憎悪をこめた眼つきで夫人の端正な横顔を見つめていたが、フンと鼻で笑い、

「それじゃ、御褒美にうんと御馳走してあげるわ」

と、春太郎の方を振り向くと、

「かまわないから、お腹一杯、食べさせてやって」

春太郎と夏次郎は、再び、夫人の足元に体を沈めて小鉢と皿を手もとに引き寄せた。

「じゃ、御馳走するわ。お肉がいい？ それとも、お魚？」

静子夫人は、空気でも見るような無表情さを装おうとして、ねっとりとした瞳を前に向けていたが、春太郎の言葉に首筋まで赤く染め、顔を横へそらせてしまった。

「じゃ、最初、お刺身から御馳走してあげるわ」

夏次郎は小皿に醤油とわさびを入れ、それに箸でつまんだ刺身をたっぷり浸し始める。

「さ、召上れ」

箸でつまみ上げられた刺身が押しつけられて来ると、夫人は、もうひるんだりせず、もうどうにでもするがいいわ、とばかり不貞

くされた覚悟を決めたのだ。

「戴くわ」

夫人は、今までのメソメソした風情とは打ってかわり、白い柔らかな頬に仇っぽい微笑さえ浮かべて、自らそのいたぶりに挑戦してゆくのだった。

「まあ、ホホホ」

千代は、葉子の方を見て笑い出した。

夏次郎が器用に箸を使い始めると、夫人もそれに答えるかのように応じたのである。

「はい、それじゃ、もう一つ、アーンとお口を開けて」

次は春太郎が箸で刺身をつまみ、近づけて行く。

何ものをも溶かせるような悩ましい肉づきと甘美な吸引力。加えて、媚めかしい双唇の動き——千代達は、夫人のその動きに改めて眼を瞞るのだった。

「どう。奥様、おいしい？ ね、何とか、おっしゃいよ」

夫人の乳房のあたりを指で押して、葉子が笑う。

「おいしいわ」

夫人は、柔らかい睫を哀しげにそよがせながら、女達に命じられてゆるやかに体をくね

らせている。

そんな静子夫人の周りに腰をかかめて女達四人は哄笑し合うのだったが、夫人は感覚が麻痺したのか、恨みも口惜しさも忘れ果て、妖しい夢の中をさまよっているようなうっとりした表情にさえなっている。いや、それだけではなく、つめ寄っている女達に自分がこの種のスターとしてどれ程成長したか示そうとさえするのであった。

「ねえ、そんなにわさびをきかしちゃ嫌ですわ」

と、刺身を醤油に浸している春太郎の手元を見て鼻を鳴らしたり、

「もうおなが一杯ですわ。もう沢山」

と、双腎をくねらせて、甘く拒否して見せたり、そんな風に夫人は、悪女達の食後の余興をためらわず演じるのである。

やがて、夫人は、千代が持ちこえる小鉢の中へ身をよじりつつ、一つ一つ吐き出して見せ、悪女達の喝采を受けるのだ。

「御苦労だったわね。おかげで、いい座興になったわ」

千代は、クスクス笑いながら、帯の間からチリ紙を取出して、夫人の前に坐った。

「こんな芸が出来るようになって嬉しいと思

わない？ どう、奥様」

千代は、丹念にあとの始末をしてやりながら、夫人を見上げて云った。

「でも、静子がこんな女に転落して、一番嬉しいのは千代さんじゃありませんの」

静子夫人は、千代のそうした行為を甘受しながら、水が泌み入るような皮肉な微笑を口元に浮かべ小さく云った。それ位の皮肉を云うのが、夫人の千代に対する精一杯の反抗なのだ。

「そうよ。私じゃ嬉しくて嬉しくて仕様がないわ。千原美沙江も誘拐出来たし、折原夫人も罠にかかったし——」

千代は唄うように云って立上ると、ホクホクした表情で、順子の方をチラと見る。

「千原美沙江にお稽古させる造花があったわね。あれ、この奥様に一寸、お見せすれば」

「そうね」

大塚順子は押入れを開け、小型のトランクを持出した。蓋を開ければ、中にはぎっしりと色々な種類の造花がつまっている。

「ね、よく出来ているでしょう。鬼源さんの仲間に注文して作らせたものなのよ」

千代は、二、三本の造花を手にして夫人の鼻先へ近づけた。

造花の根はすべて針金になっていて、その先端に小さなゴム球がついていた。

「最初から生花にするのは大変だから、まずこうした造花であのお嬢さんの身体を鍛えていこうと思うのよ。少し、試させて頂戴ね」

順子は、そう云うと、トランクの中から赤と白のバラの造花を何輪か選んで取上げた。「奥様のお好きなバラの造花も、こうして用意してあるのよ」

それが順子の手で巧みに植えられていくと夫人は、ねっとり溶けるような眼差しを上の方へ向け、それを甘受すべく、順子にうながされてムッチリした大腿を心持左右へ割るのだった。

さっきは、仰向いた寝姿のまま、花を植えたけど、こうして立たせたまま花を植える事だって出来るのよ、と、順子はすでに三輪のバラを夫人の体に咲かせて悦に入っている。

「まあ見事に咲いたわ。すばらしいわねえ」葉子と和枝は、大きく眼を開いて、感にたえぬといった表情になった。

螢光灯の蒼味がかった電光に艶々と浮き出されたような夫人の乳白色の素肌、麻縄に緊め上げられた豊かな乳房から滑らかな象牙色の鳩尾みぞおち、そして、官能味たっぷりの腰からム

ツチリ引き緊った太腿に至るまで、その優美な夫人の肉体は、飽かず眺め入る悪女達に驚嘆と羨望、それから嫉妬まで惹起するのだったが、今、バラの造花を植えつけられた事によって、夫人の優美な肉体は、悪女達の臉がムズ痒くなるほどの、妖しいばかりに官能的な、また、美術品的な優雅な美しさを感じさせたのである。

夫人は、三輪のバラが落下するのを防ぐようにそつと腿を閉ざして、その優雅な顔を見せていたが、三つの花は、フルフルと思ひなしか顫えているようだ。

「どうしたの。急にまた泣き出したりして」千代は、夫人のびったり密着させた腿と腿との間に咲くバラの花から眼を移向させ、急にシクシクと繊細な白い頬に涙の滴を流し始めた夫人の顔を見上げた。

「家元の、家元のお嬢様が、こんな姿にされなければならぬかと思うと——」

静子夫人は、事実、それを思うと、たまらなくなつて、慟哭が胸をついたのだろう。

女の肉体のいわゆる泣き所を知悉した順子のいたぶりをほどき、人間花瓶に仕上げられる美沙江の事を思うと夫人は、あまりのむごたらしさに、ふと血が凍りつくような思

いになったのだ。我が身に加えられる限りな

い汚辱の責めには耐えられる。いや、耐えられる肉体に悪魔の手で作り変えられた夫人であつたが、そうしたいが千原美沙江に加えられるという思いは耐えられるものではなかつた。

だが、それは千代達の計算でもあつたのだろう。夫人に心理的な苦痛を与える、何よりもそれが千代にとっては楽しいのである。

「あのおしとやかなお嬢様を、こんな風な人間花瓶に仕上げるのは大変な根気がいるでしょうね」

千代は順子の方を見て、さも楽しそうに云うのだ。

「大丈夫。私が腕によりをかけて完全な人間花瓶に仕上げてやるわよ。千原流家元の娘の体に湖月流の生花を植えつける、これ程、痛快な復讐はないと思うわ」

順子は、眼に残忍な色を滲ませて、夫人の身体に咲く花をしばらく見つめていたが、トランクの中からもう一本のバラを取出し、それを横にして夫人の口に咥えさせるのだ。

「まあ、一段と妖艶さが増した感じね」女達は、カメラをかまえて色々な角度よりシャッターを切り始める。

静子夫人は、涙を滲ませた綺麗な睫をそよとも動かさずに一点を見つめ、口に含んだバラの枝を噛みしめている。上と下とにバラを咲かせた静子夫人の名状の出来ない凄艶な容貌を順子は見ながら、千原家の令嬢、美沙江をこういう姿にした時の光景を脳裡にあれこれ描いている。

「こういう風に私の部屋の庄の間に、美沙江を一日中縛りつけておいて、朝昼夜一度ずつ花を取り変えてやるのよ。花に必要なお水の方は美沙江の身体で作らせる。フッフ、ね、実に便利な花瓶だとは思わない」

順子は自分の着想に興奮し出したのか狂気めいた笑い方をし、「そうそう、ヒップの方に咲かせる造花も用意してあるのよ」と、春太郎達に、夫人をうしろ向きにして柱へ縛り直すように命じた。

「さ、今度はうしろ向きよ」

腿の間から花を抜きとり、口に咥えたバラを取り除いたシスターボーイ二人は、一旦、夫人の身体を柱から離し、くると一回転させて今度はうしろ向きに柱につなぎ始めるのである。たくましいばかりに盛り上った夫人の美臀が女達の眼の前にさらされる。全面に白粉を溶かせたような滑らかで優美な背中の

中程にはがっちり麻縄をからませた夫人の両手首が痛々しいばかりに脂汗を滲ませていた。

「まあ、見事なお尻ねえ」

順子は、食欲なぐらいにムッチリと盛り上りそれでいて柔軟さと繊細さを兼ねている夫人の双臀をしばらく手でさすっていたが、千代から菊の造花を一本受取ると、柔らかくまきぐり始めた。

「ねえ、順子さん」

静子夫人は、造花が植えられようとするると甘く拗ねたような声を出した。

「大塚先生よ。順子さんなんて奴隷が気安く呼ぶんじゃないよ」

千代が叱った。

「どうしたの奥様。フッフ、さっきあれだけ調教を受けたんだから、もうコールドなんか必要ないでしょ」

順子がそういうと、夫人は、なよなよと左右に首を振って、声を慄わせた。

「大塚先生は、こんな事を、ほんとに千原流のお嬢様になさるおつもりなんですか」

「そうよ。それがどうかしたの」

順子は鼻で笑って、静かにそれを植えつけていく。夫人はその一瞬、うっと異様な声を

発して美しい眉をしかめ、キリキリ歯を噛み鳴らした。

「こんな、こんなむごい事をお嬢様に——」

静子夫人は呪うように呻きつづける。

「こ、こんな事をされるのは、女にとって、どんなに辛い、羞ずかしい事か、大塚先生は御、御存知ですのっ」

夫人は、身も世もなく取り乱して、そんな事を口走ったが、無情に植えつけられた菊の造花は悪女達の眼を再び楽しませた。

「こう見事に花を咲かせる事が出来たのも、調教のおかげね」

順子は夫人の粘りつくような柔らかい吸引力に驚くとともに、美沙江に対しても、ガラス棒などで根気よく体調を作る必要があると春太郎に協力を頼むのだ。

「世間の事は何も御存知ない十九才のお嬢様に、こんな、こんなひどい事を——」

静子夫人は、哀しげな言葉を吐いて首を垂れ、肩を慄わせている。

「ブツブツ云ってずにお尻を振ってごらん」

ぼんやり突っ立ってただけでは芸がなさ過ぎるわよ、と悪女達は夫人の尻を平手打ちして、花を咲かせた双臀の踊りを強要するのだった。

静子夫人は、もうどうともなれとばかり涙を振り切り凍りついた横顔を柱にぴったり押しつけると、ゆっくりと双臀をくねらせる。

「もっと派手に揺さぶってごらんよ」

「こう、こうすればいいの」

夫人は、羞ずかしげに顔を染めながら、大きく双臀をくねらせ始めた。

菊の造花をフルフル慄わせながら、うねり舞う優美でたくましい双臀の何とも云えぬ艶めかしさを悪女達はうっとりとして見入っている。

迫る毒牙

十一時半になって、田代は川田、吉沢、そして鬼源の三人と、二階のホーム酒場へ入った。

そこでは、銀子や朱美達が京都から来てこの不良団に加わった恰好の友子と直江に酒を飲ませていた。

「関西のズベ公に関東のズベ公か。大分、気が合ったようだな」

と田代が笑うと、

「うちらズベ公やない。ただ、お金が欲しかっただけや」

と、友子は反撥した。

こっちに協力すれば、遊んで暮せるだけの手当てを毎月出してやると大塚順子に持ちかけられ、令嬢誘拐の片棒を担いだわけだが、順子や田代達が誘拐した令嬢に何を企んでいるのかは友子も直江もはっきり知らなかった知っていたとすれば、その恐ろしさにこの仕事を途中でおっぼり出したかも知れない。

「同じ女でありながら、あんた達、千原美沙江のような娘、憎いとは思わない？」

銀子や朱美達はそんな風な言い方で、友子や直江に階級意識、つまり、大袈裟に云えば貴族主義打破の欲求を共鳴させようとしていたのである。

「ま、そんなむつかしい事わからんけど、こうなったら、うちら銀子姐さんの身内や。よろしゅう頼みます」

直江は、金壺眼をキョロキョロさせながら銀子に云い、ムシヤムシヤとスルメを噛っている。

「お前達二人が金を持って戻って来るのを、地下の奥様とお嬢様はイライラしてお待ち兼ねだぜ。約束の十二時まで、あと何分もねえのだからな」

吉沢が、そう云って笑った。

珠江夫人と千原美沙江をどう扱うか、その相談が田代を中心に始められた。

千原美沙江はしばらくこちらへ任せてくれという大塚順子の希望であったので、美沙江の身柄は順子の許へ預ける事に決まったが、珠江夫人の方はどうするか。

「俺と鬼源に一任してもらいたい」

と川田が繻帯を巻いた片手を田代に示して云った。

「こんな目に合わされて、黙ってひっこむわけにはいきませんよ、社長」

川田は、手傷を負わされた復讐の意味で、珠江夫人の調教を買って出たのである。

「あの気位の高い博士夫人を操作出来るようになるにや、大変な苦勞がかかるだろうな」

田代は、顎をさすりながらしばらく考えていたが、

「よし、川田、お前に任してやる。鬼源と相談して、折原珠江のしごきにかかれ」

と、はっきり云った。

「ニグロのジョーを近々に呼び寄せようと思っ

っているんですがね」

鬼源は、珠江夫人の調教はどんな風にする気だ、と田代に聞かれてそう云った。

ですから、珠江夫人にもやっぱりそうしたコンビを組ませる必要があると思うんです」

それは、もっともだが、あの高慢そうな夫人を果たして、そこまで追いこむ事が出来るだろうかと、田代は、しかし、満更でもない顔つきで鬼源に云うのだ。

「それが俺達の仕事じゃありませんか」

と笑った川田は、明日までに若い衆達に命じて碟台を作らせてくれ、と吉沢に頼むのである。

「ここから逃げ出そうとしただけじゃなく、拳銃まで振り廻しやがったんだ。そのお仕置として、珠江夫人の方は明日一日、碟にしてこの庭に晒しておこうと思うんです」

「いいだろう。見せしめの意味もある」

田代はうなずいて、腕時計に眼をやった。

「そろそろ穴倉の二人に因果を含めに行こうか」

田代は、直江と友子はこの酒場へ残し、銀子や朱美達は、この仕事を手伝わすべく一緒に連れて部屋から出て行く。

——その頃、土蔵の地下では——珠江夫人と美沙江の心臓は高鳴り続けている。今日の新作生花発表会が謀略のため徹座に打砕かれたというショックではなく、十二時にまでに

友子と直江がここへ戻らなかったら——それを思うと恐怖のため、身体がガクガク慄えるのだ。その約束の時刻は、あと数分に迫っている。

「おば様、ね、おば様」

美沙江は焦りと恐怖に耐えられなくなって牢舎の分厚い板壁をたたくようにしながら、隣の珠江夫人に声をかけた。

「一体、友子さん達は何をしてるのでしょう随分とおそいわ」

「心配なさらなくても大丈夫ですわ。もう程なく——」

珠江夫人は、そう云いながら腕時計に不安げな眼差しを向ける。針はもう十二時をさしている。

珠江夫人の陰翳をもった額のあたりが不安げに曇った。これも、謀略ではないか——珠江夫人は居たたまれなくなって立上る。

先程、川田に見せられたあの恐ろしい写真の事が生々しく脳裡に浮かんで来たのだ。あれは、きつと模造したものだわ。いくら何でも遠山夫人があんなむごい——珠江夫人は、田代達が自分達をおどかすため、静子夫人の首をすげかえた写真を見せたのだとしか考えられなかった。

しかし、もし、あれが事実であったのなら——そう考えると珠江夫人は、ぞっとしたものが背筋を走るのを感じた。

その時、揚戸の開く音。つづいてドヤドヤと何人かの足音が地下の階段を降りて来る。

珠江夫人はハッとして思わず後退りした。

「きつと、友子さん達が戻ったのですわ。お嬢様」

そうであるように祈りながら、珠江夫人は美沙江に声をかけたのである。

だが——鉄格子の前にぞろりと立並んだ男女の中に友子と直江の姿はなかった。

「約束の時間まで待ったが、女中は戻って来ねえ。二人とも覚悟してもらおうか」

吉沢が舌なめずりするような顔つきで美沙江の牢舎をのぞきこむ。

美沙江の端正な顔からさっと血の気が消え眼がつり上った。

「へへへ、お嬢さん。約束通り素っ裸になって頂きましかね」

「素っ裸になったら、大塚女史のお部屋へ御案内するぜ。何か色々お嬢さんに面白い遊びを教えてくれるそうだ」

吉沢と川田にそんな言葉を浴びせかけられた美沙江は、強烈な電気に感電した瞬間のよ

うに全身を硬直させ、次にフラフラとよろめいて、土間にくずれ落ちる。

「あれ、また気を失っちまいがった」

吉沢が舌打ちする。

「その方が楽だぜ。今のうち剥いじまおう」

川田がポケットから鍵を出し、美沙江の牢舎の錠前へ差しこもうとすると、

「待って、待って下さい」

隣の牢舎から珠江夫人の狂気めいた声が聞こえた。

「もうしばらく時間を下さい。友子さん達は必ずここへ戻って来ます」

珠江夫人は必死な眼つきになり、鉄格子に手をからませて云うのである。

「そいつは当てにならねえな」

吉沢は、吹き出しそうになるのをこらえ、田代の方をチラと見ながら云った。珠江と美沙江が命の綱だと思っている友子と直江は、

ホーム酒場の方でもう酔寝してしまっただかも知れないのだ。

「私から直接、主人に電話させて下さい」

と珠江夫人が云うのを、駄目だね、と田代は、せせら笑いながら一蹴した。

「約束は約束だからな。川田の治療代がわりに身ぐるみ脱いで頂きますよ」

ひきつった表情になる珠江夫人であった。

恐怖のあまり、その美しい額を汗が流れた。

「それじゃ少し気の毒だから、二人を一緒に裸にせず、奥様の方から脱いで頂きましょうか。その豪奢な着物を一枚一枚、うちの連中へ競売するんです。それなら少し時間稼ぎになる。女中二人がその間に戻って来れば、このお嬢さんは我々の眼に肌をさらさなくてもすむってわけです」

田代は、珠江夫人の檻禁された鉄格子の中をのぞきこみ、相談を持ちかけるような調子で話しかけた。

「わかりましたわ」

珠江夫人は陶器のように冷たく蒼ずみながら、濃い睫を怒りにふるわせ、田代をキッと睨みつけるようにして云った。珠江夫人には哀泣して憐憫を乞うというようなところは微塵もなかった。敵の挑戦を受けて立とうとするような、はっきりした敵意を、ありありとその妖しく燃えるような双の瞳に滲ませている。

珠江夫人の横顔に滲み出ている、驕慢の傲りや自尊心の高さといったものを感じとった銀子や朱美は、何かカチンと頭にきて、ムラムラと珠江夫人に対し、敵愾心をわかせたの

である。

「貴方がたが私に対し、どのような紳士的振舞いをなさるのか私にも興味がございます」

皮肉をこめて冷やかにそう云い放った珠江夫人を、銀子達は憎々しげに見て

「そうかい。じゃ、葉桜団の作法を教えてやるよ。出て来な」

銀子は川田から鍵を受取って珠江夫人の牢舎の扉を開けた。

「さ、出ておいで」

珠江夫人は、陶器のように澄んだその頬をさすがに屈辱の慄えで蒼白にしながら牢舎から姿を出した。

「じゃ、競売はこの上で始める事にしよう。

仲間の者達を集めな」

川田が朱美に云った。

「さ、奥さん、どうぞ」

田代が階段の方を手で示し、上るように云った。

珠江夫人は、硬化した表情のまま、美沙江の牢舎の方を見た。

「気になるのかい。大丈夫、奥様が素っ裸におなり遊ばすまで、このお嬢様には指一本触れやしないよ」

川田はそう云いながら美沙江の牢舎の扉を

開け、入って行く。

「な、何をする気なのですっ」

川田の手が失神している美沙江の肩にかかろうとすると、珠江夫人は逆上したように鋭い声を発した。

「あわてるな。お嬢さんを正気づかしてやろうと云ってるんだよ」

美沙江の肩を抱き起こした川田は帯のあたりを膝でいきなり突く。美しい額にこまかい汗の玉を浮かべていた美沙江は、うっと呻いて眉を寄せ、そっと眼を開いた。

「あっ」と川田を見て、思わず身を引く美沙江である。

「へへへ、珠江夫人の競売がすめばお嬢様の番だ。これくらいで一々気を失ってくれちゃ困るぜ」

牢舎から出た川田は、元通りに扉に鍵をかけた。

「お、お嬢様っ」

田代や川田達に取囲まれ、連れ去られようとする珠江夫人を見た美沙江は愕然とし、悲鳴に似た叫び声をあげる。

「どこへ、どこへ、お嬢様を連れて行くのですっ」

美沙江は、おろおろしながら、鉄格子に手

をかけて川田や吉沢の顔を見る。

「奥様が着ていらっしゃるこの立派な着物を葉桜団が競売にするのさ。何しろ、静子夫人同様、大家の御令室がお召しになっているものだから、肌襦袢からお湯文字に至るまでいい値がつくと思うよ」

銀子が、珠江夫人の硬いくらいに引き緊まった白い頬を、冷笑を浮かべて見つめながら云った。

「お嬢様、私、時間を稼ぎますわ。必ず友子さん達は戻って来ます。しばらく辛抱して下さいね」

珠江夫人は、悲痛な表情を湛えながら落着いた声音で美沙江に云った。

「ニヤニヤして仲間同志、顔を見合わせていた男達は、

「あまり時間を稼がれちゃ面白くねえな。競売は一時間ぐらいですまそうじゃねえか」

さ、歩きな、と川田は珠江夫人の背を押した。

階段を上ると、そこは、かつて静子夫人と京子が羞恥地獄へたたきこまれ、涙と汗を流した土蔵部屋である。

祭壇のように、奥に作られた台の上に二本の丸木が立てられてあったが、それは静子夫

人と京子が共に剃毛という血が逆流する程の屈辱を受けた柱である。

「ついこの間のような気がしますね、社長」
吉沢は、二本の柱を指さし、京子のそれを刺りとった時のうずきを思い出して顔をくずした。

朱美の連絡を受けた義子やマリ、それに千代や大塚順子達が何か声高に話し合いながらぞろぞろと土蔵の中へ入って来る。

珠江夫人は彼女達に憎悪のこもった眼を向け、硬い頬を憤怒に慄わせた。

悪党と悪女達にぐるりと取り囲まれた形の珠江夫人は、負けるものかとばかり鉄のように硬く突っ立っているのだが、彼等に対抗出来る自信があるわけではない。

「さ、ぐずぐずなさらず奥様、お脱ぎになって。千原流後援会長のお召物ですもの。湖月流の大塚順子が散々煮湯を飲まれたお礼の意味で、下着一切もいい値で引きとらせて頂きますわ」

大塚順子からそう浴びせられた折原珠江はギクリとしたように肩を慄わせた。順子に対し何か悪態の一つもつこうとするのだが、次第に生気を失って来た珠江夫人の端正な顔はすっかり蒼ざめてしまっている。

「私が、私が、皆さんの前で肌をあらわにしただけなら――」

珠江夫人は、柔らかない睫をフルフル慄わせつつ、やっと口に出して云った。

「そ、そんな私を、皆さんはどうなさるつもりなんです」

さあね、と悪魔と鬼女達は顔を見合わせ、意味ありげな微笑をかわした。

田代が云った。

「どうもしやしませんよ。女中二人がここへ現われるまでの間、お気の毒だがこの穴倉で素っ裸のまま暮して頂く事になるだけです」

さ、お手伝いしましょうかね、と銀子や朱美達が珠江夫人の傍へ嘲笑いながら近寄って行く。

「寄、寄らないでっ」

珠江夫人は鋭い声でズベ公達を叱咤した。

「自分で、自分で着物ぐらい脱げますわ」

珠江夫人は、自棄になったように慄える手で帯じめを解き出したが、遂に屈辱の口惜し涙が一滴、その白い頬を伝わって流れた。



わがコレクション

ひそかな愉しみ

伊里賀 透

以前、どなたかの作品に「旅行先きで浣腸薬を買い、日時を記入してコレクションしている」というのがあったが、私も同様に、旅行するたびに、浣腸薬や浣腸器を買うのを楽しみとしていた。

ガラス製浣腸器にしても、メーカーが違うと、目盛りのつけ方(5、10、15、20という粗いつけ方のや、1ccごとに細かくつけたもの)も違うし、浣腸器のガラスの色(多くは青色だが白色のものもある)とか、浣腸器でもっとも魅力のある嘴管の形にしても、柔らかみ

のある形、鋭い形、先太中細など、色々と変化があって面白いし、軽便浣腸薬になると、「イチジク浣腸」以外にもメーカーがあり、知らなかったメーカーの浣腸薬を入手した時の喜びは、格別なものがある。

奈良に行った時、奈良公園下の繁華街を、夕食後ぶらついていて、とある薬局で早速、浣腸薬を買うことにした。

私は、地方の薬局で浣腸薬を買う時には、「イチジク浣腸」とは言わず、大人用の浣腸薬を下さいと言うことにしている。イチジク

と言うと他のメーカーの浣腸薬があっても、イチジク浣腸を出されてしまうからである。それ程、「イチジク浣腸」のシェアは高いということになるのだが。

その薬局には、おあつらえ向きにも若い女店員一人だけで、ますます私は嬉しくなったのだが、「浣腸ですね、これになりますか」と言っただけで差されたのが「カトウ浣腸」という、私には初めての浣腸薬なのだ。女店員一人であることを幸いに「ガラス製浣腸器があったら見せて下さい」と言おうとした瞬間女性二人づれの客が入って来たので、浣腸薬だけにして店を出た。

出て10メートル程行った左側に、また薬局があり、高校生位の女の子が店にいたのだ。同じ浣腸薬を出されたとしても若い女の子に「浣腸薬下さい」と言えるだけでも楽しいので、入って行った。そしてまたしても私は嬉しくなったのだ。内藤洋子に似た感じの美しい少女だったので。そのため大人用の浣腸薬というのが照れ臭く「子供用の浣腸下さい」と言った。子供用と言えば私が使用するのではなく、私の子供が発熱でもして買いに来たのだと思われたくて。

浣腸と言った私の言葉を聞くと、その少女

は、たしかに顔を赤らめたように思えた。そうした少女の顔を見ながら、私はゾクゾクする程の喜びを感じたのだ。差し出された浣腸薬はこれまた私には始めての「三つ星ダイヤ浣腸」というので、途端に私は大人用のも欲しくなり、照れ臭いのも忘れて、「これの大人用のも下さい」と言った。すると少女は、二つの箱を出して「二十グラム用と三十グラム用の二つがあるのですがどちらにしますか」と、やはり恥ずかしそうな声で聞く。勿論三十グラムのを求め、前の薬局で果たせなかった、ガラス製の浣腸器を見せてくれるように言った。

少女の出した浣腸器は私の持っているのと同じ「トップ印」の三十cc白色ガラス浣腸器だった。細長い箱を開け、紙にくるまった浣腸器を出してみ、嘴管の形が余り良くないので他の浣腸器を見せて欲しいと言うと、二箱出してくれたが、同じ浣腸器だった。私は厚かましくも少女に「この浣腸器の使用法は」と訊いてみた。少女は困ったような顔になり、店の奥の方を振り向いて父親でも呼ぶような態度だったので、あわてて「いいよ、じゃあ、これを包んで」と言って包ませた。お金を払ってから、「洗滌器ある？」と訊く

と、「センジョウキ？ 何ですか、それ。聞いてきましょか」と答えるので、これ以上長居は無用と、店を出たのだ。

旅館で二種類の浣腸薬を出してみた。

箱に印刷されているのを書いてみよう。

箱の上段、緑地に白文字でグリセリンカンチヨウ、その下に大きな活字で軽便カトウ浣腸、販売元、加藤製薬販売株式会社、東京都新宿区新宿1-45、20号2個入

反対側の外箱、上段から製造元、加藤翠松堂製薬株式会社、三重県四日市市赤堀、カトウ浣腸（白地に緑で縦書）効能、便秘、成分、局方グリセリン50%、局方精製水50%、用法

用量、一回一個必要時、浣腸用とす。

裏側、上段、ローマ字でグリセリンエネマカトーカンチヨウ、その下段に説明。

キャップ式容器使用法

①先端のキャップを取ってなるべく奥深く挿入し容器を強く圧して薬全部を注入して下さい。

②薬液を肛門内に注入したあと指先の力を弱めずおさえたまま静かに抜き出して下さい。

③注入が済んだら脱脂綿又は柔らかい紙でおさえて便意を催してきてもすぐ排便をせず、

出来る限りがまんして下さい。どうしてもこらえ切れなくなったときに手をはなして排便をして下さい。

ビニール袋入りで二つ入っており、ビニール袋にはなつかしくも「りすりんかんちゅう」と書かれてあった。色は濃い桃色で感じのいい色ではないが、嘴管のキャップをはがせば先端に穴が開いていて、イチジク浣腸の三角形の釘みたいので穴を開けるのよりは、はるかに使いやすい。箱が緑と白を基調としたデザインで、イチジクの箱よりはるかに好感がもてるレイアウトだ。

三つ星ダイヤ浣腸——こちらは三十グラム用で、キャップつき。赤い箱に黒で商品名が書かれているので、箱のデザインとしては感心しない。箱の大きさはイチジクの三十グラム用より二周りは大きい。感心したのは60%グリセリン含有の浣腸薬だということ。ほとんどがグリセリン50%なのに、特筆に値いしよう。他のメーカーでも60%五十グラム用とか、フリートエネマのように百二十グラム用とかの特大、強力な浣腸を発売してもいいと思うのだが。

外箱に記載されていることを書いてみる。
三つ星ダイヤ浣腸 60%グリセリン含有30

cc×2 発売元 日邦薬品株式会社 成分及分量 日本薬局方グリセリン60g 日本薬局方精製水40g 効能 便秘及び便秘を原因とする発熱・ヒキツケ・頭痛・ガス膨満・眩暈・痔疾 用法用量 大人は一回30gを御使用下さい。製造元、ダイヤ製薬、守金久治、橿原市東坊城町。

この二つの浣腸薬の容器を比べて感じたのだが、色といい、キャップといい、嘴管部の形といい、全く同一なので、浣腸薬の容器を作るだけのメーカーがあるのではないかと思うのだ。両者とも嘴管は細くて短く、二十グラム用も三十グラム用もほとんど変わらないのが物足りなく思う。

二つの浣腸薬を連れの女性に使用したことは言うまでもないが、そのことについては別に稿を改めたい。

翌日の京都では全く面白くなかった。四軒の薬局を歩いたのだが、全部、イチジク浣腸で収獲はなかった。ただ、京極通り近くの薬局では、ショーケースの中に、ゴムのエネマシリンジ、パイプレーター、コケシ、スポイト式洗滌器が置いてあって、薬局とコケシの取り合わせを面白く思った。

関西方面と東京では浣腸薬にしてもメーカ

ーが異なっていて、全国各地を探したら、面白い浣腸薬メーカーの地図が出来たのではないだろうか。

キャップ式の浣腸薬を東京で入手したのは世田谷の区役所近くの薬局だったが、「明治浣腸」と書いてあった。

軽便浣腸薬で私が一番好きなのは、白色透明の大塚製薬の「オロナイン浣腸」だが、最近ではほとんど見あたらず、買い求めた薬局に訊いても無いとのこと、メーカーで製造を中止したのだろうか。容器の感触はもっとも柔らかくて押しつぶす時の手ざわりが何とも言えず好きなのだが。

変わった形で面白いのがエス・エス製薬の「ウサギ浣腸」、イチジク型ではなく球形に近く、嘴管が他の浣腸薬よりも太く長くて、独創的な形をしている。エス・エス製薬と言えば、ウサギのマークで知られているが、長い目の嘴管が、ウサギの耳を思わせる。チェーン薬局に行っても現在では入手出来ない。これも製造中止になったのだろうか。

他に、大正製薬の「薬局浣腸」、これはイチジクの浣腸と全く同型。「ハート浣腸」、「白十字浣腸」、「ロイヤル浣腸」などと言うのもあった。

鳥井薬品では蟻虫駆除浣腸として「ウリノール」というのを出している。グリセリン含有量は少なく主成分は酢酸で、便意はほとんどない。効能書を読むと一般浣腸として用いても効果ありと記されているが、就寝前に浣腸して翌朝排便するとあるように、刺激はほとんどなく、プレイ用には物足りないが、初心者用、特に始めて浣腸を許す女性用には最適だと思う。四十グラム用もあるとのことだが、私は入手していない。

軽便浣腸薬も、フリート・エネマの様な大形で、嘴管部の太く長いのを日本のメーカーでも発売すれば良いのと思う。アメリカン・ファーマシーに行けば求められるが、値段の高いのが玉に傷で、私は使用済みのフリート・エネマの容器にグリセリンを入れて、何回となく使用している。何回でも使えるのがいい。量が多いので、相手は一番厭だと言うのだが。

最近話題になっている「ムーン・ペット」(浣腸器型の洗滌器)を浣腸に用いたところ嘴管が太いので意外に喜ばれ、専ら浣腸用に愛用している。ムーン・ペット以外の洗滌器による浣腸については、稿を改めて書きたいと思う。



連載 M 小説

ピエロ床屋

(6)

鬼^き

山^{やま}

絢^{けん}

策^{さく}

密 会

「善夫！シャンプーが溶かしてないぞ！」
翌朝、遅く起きた政吉は、店へ出てくるなり言葉も荒く善夫を叱りつけた。

「あ、どうもすみません」

練り石鹼を溶いて一升びんに詰め、それをシャンプーの小びんに詰めて使うのであるがその一升びんが、からになっていた。

「昨夜のうちにやっとくことは、昨夜に済ましておかなければ、だめじゃないか」
「ハイ」

善夫は、すぐ練り石鹼を溶いた。
仕事についてからも政吉は、いちいち口を出した。

「善夫、そのドライヤーのあて方は何だ。それじゃ一時間もたったら毛が立っちまうぜ。もっと丁寧にかける。口先ばかり丁寧でも、仕事は粗末じゃ、お客さんの信用を失うからな。うちの店は、信用が第一なんだ。東京みたいに、フリの客相手とは違うんだぜ」

善夫は素直にドライヤーを、かけ直した。
「旦那さん今日は御機嫌が悪いと見えるね」
椅子に坐ってる客が栄子に話しかけた。
「委しときゃいいのに。つまらない余計な口

出しして。てめえの仕事振りを見ろって言うんですよ。ノロクサノロクサして忙しいお客さんだったら癪おこしますよ」

「おいおい、おかみさんまで、荒れもようかい。さては昨夜なにかあったな」

「イヤらしい。プライバシーに口を出すんじゃないの」

その夜、善夫はパチンコに行くと言って家を出、栄子は親類の家へ行くと行って、喫茶店で待ち合わせた。

「ヤッコさん、どうやら感づいたらしいな」
「そうかねえ。でも昨夜は、よく眠っていた

わよ」

「今日の俺への当りようは、ただごとじゃなかったぜ」

「分かったんなら分かったで、いいじゃないのさ。どうせ、いつかは知れることなんだから。あんた、あいつを、むやみに恐がってるじゃないの。そんなに恐いの、あいつが」

「別に恐くはねえが、可哀想だからよ。ハイハイと言ったりや御機嫌がいいんだから」

「単純なヤツだからね」

「すぐ態度に出るだけ、まだ罪がないのさ。ところで、これからどうする。感づかれたと分かっちゃ、あんたは僕んとこへ来にくいだろう」

「ヘッチャラよ。行きたくなりや、行くよ。」

妾、どうせ、あいつとは別れるんだもん」

「ひと騒動、もちあがるな」

「ふふふ。それが大丈夫なのよ。妾が、あんと、こうなったことを政吉が知ったって、

グウの音も出させないようにして見せるわ」

栄子には、友市の時でも政吉が黙認していたことを知ってるから、善夫との場合でも、同じことだと思っていた。ただ友市との情事については、善夫に知られたくなかったから話さなかった。

「そう簡単に行くかな」

善夫は栄子の安易な気持を嘲うように、目を細めて何か考えていた。

挑 発

それから三日すぎた。

涼しいとはいっても、大田原も夏となれば日中は、やはり暑さがきびしかった。

栄子は、政吉が善夫とのことについて何か言い出すかと、様子をみていたが、栄子に対しては格別、変わった態度は見せなかった。

栄子は、そろそろ善夫の身体が、欲しくなった。

「今晚ためしてやろう、政吉が気づいているかどうか……」

栄子は夕食に酒をつけたが、政吉も善夫もあまり飲まなかったので、栄子一人で、かなり飲んだ。

夜のいざないは、いつも政吉の方から仕掛けてくるのであるが、政吉は一夜行なうと、五日か一週間ぐらいは休むのが普通だった。

栄子は三十女の熾烈な慾情のたかまりと、政吉が、ほんとに感づいているのかどうかを知りたいのとの両方から、今夜は栄子の方か

——前号までのあらすじ——

斧田政吉（53）若い時は女道楽に明けくられたが、今はまじめに恋女房栄子を愛し栄子の浮気に悩まされている。

斧田栄子（38）5年前に政吉と結婚し、故郷大田原に店を出す。職人友市と浮気するが喧嘩別れ。次に来た富岡善夫と最初は浮気のつもりが、恋愛に変わって、いまでは政吉と別れても善夫と一緒になろうと考えている。

富岡善夫（33）好男子で腕がよく、堅い男という評判で、最初はまじめに働いていたが、再三の栄子の誘惑に負けて、関係を結ぶ。だが、その心の奥底に何を考えているのか、善人か悪人か、正体不明の男。

鈴木清太郎（55）東京に理髪店を三軒持ち30人からの職人を使っている政吉の兄貴分。栄子が肉体を提供したので、職人不足の中から富岡善夫を栄子の店に差し向ける。

ら誘いをかけた。

自分から仕掛けるなんて、ばかばかしい気持もしたが、今夜ばかりは仕方がない。

寢床に入ると、政吉は栄子の方へ背を向けてサッサと寝てしまふよそよそしさ、いつもと違うと言えは違って見えた。

「おい——」

タオルの寝まきの前をはだけて、政吉と直角の形に寝そべった栄子は、裸の足で政吉の後頭部を小突いた。政吉の頭はピクピクと動いたが、知らぬ振りをしていた。

「おい、コラ……」

栄子は更に強く足の先で突いた。

「何だよ」

政吉の首が、こっちを向いた。

此方から見ると、太い逞しい二本の足が、太股まで大きくひろげられ剥き出しの下半身がモロに視界に入った。

栄子は枕を蒲団からはずして、煙草をすいながら、いたずらっぽく笑いかけている。

「今日はダメだよ。俺は疲れてるんだ」

政吉は不愛想にクルリと向こうを向いてしまった。

猫に、またたびを見せたように、この餌を拝ませてやればとびついてくると思ったのが案に相違して栄子は癪にさわった。

「何言ってるんだよ。ホラ、こっち向いてごらん」

足先に力をこめて頭を蹴つとばした。

「痛い、よせよ」

政吉は若い頃、玉の井の淫売宿で、酒乱の娼婦にしつこく、つきまとわれて困ったこと

を想い出した。その娼婦が、ちょうど栄子と同じようなポーズで誘ったことがある。

「まるで淫売みたいだな、まねをするやつだ。もっとも、昔バーの女をやったんだから、むりもない」

意地になって頭から蒲団をひっかぶった。

「よし、そんなら降参させてやる！」

パツと、とび起きた栄子は、政吉の蒲団を引っぱがすと、ガバと顔の上に大きな尻をのせた。

「ホラ！ こうされたら、いやも応もないだろう」

「よせ、イヤだったらイヤだ！」

政吉は今まで見せなかった力を出して栄子を、はねとばした。もんどり打って栄子は投げ出された。ちゃぶ台の角にゴツンと頭をぶつけた。

「痛い。ち、ちき生っ！」

政吉が、こんな頑強に抵抗することは初めてだったし、その力に驚いたが、それよりも口惜しさの方が栄子を半狂乱にした。

前もはだけたまま、また政吉の上に馬のりに跨って、

「こんちき生っ！」

顔をピタピタと平手で叩いた。

「何するんだ、淫乱女！」

政吉は手もなく跳ねとばすと、パツと半身を起こした。

ひっくり返った栄子は、臍までまくれ出た足で地駄んだ踏んで泣き出した。

涙をためた目で政吉を睨んでいたが、突然立ちあがると、ドタドタと足音も荒く二階へ上って行ってしまった。

「やりすぎた……」

すぐ政吉は悔恨にせめられた。

「なんで、あんな手荒らなことをしてしまっただんどう」

友市の時には、おうように見逃がす余裕がもてたのに、善夫に対しては激しい嫉妬がおきる。何故だろう？

友市は年が若すぎて、栄子との年令の差も十五もひらいていたし、自分から見れば息子のような男だから、まともに怒るのもおとな気ないと思ったが、善夫となると、ぐっと年令的にも接近してくる。それに善夫を堅い人物と信頼していただけに、それを裏切られた怒りもあるのだった。

そのほかにも政吉は、何か本能的に善夫だけは拒否する感情が強くあった。それは善夫が好男子だからなのか、仕事の腕が自分より

上だからなのか、床屋の職人というより呉服屋の店員のような、にやけた物腰が気に入らないのか、いや、それ等の条件よりもっと強い拒否感情が心の奥にわだかまっていた。それは言葉では言い現わせない、動物的な勘であった。恋うる者の第六感であった。

政吉の勘が、まさに的中していたことは後になって分かることなのだが、政吉の運命に大きな波乱をおこさせた、容易ならぬライヴァルであることが分かってくるのには、まだいまの時点では、善夫の真の意図が政吉には分かっていなかったから、ただ感情的な強い嫉妬のみがあった。

栄子は二階へ上ったきり、なかなか降りて来なかった。

二階では政吉に当てつけるような、栄子のしのび笑いが洩れてくる。

二階へかけ上って行って二人を殴りつけてやろうかと思ったが、歯をくいしばって我慢した。

どうにもならぬ焦燥感が次第に収まってくると、政吉は冷静をとり戻した。

「ここは、あくまでも穏便にことを運ぼう。そして善夫を清太郎の店に返せば、すべてが円く治るのだ」

と今後の方針を決めた。

「栄子よ、早くおりてきてくれ」

と願う政吉は、栄子が降りてきやすいようにと、電灯を消して、暗闇の中に、ひとり転々と寝返りをうちながら栄子を待っていた。

かりそめの安堵

翌朝、政吉が寝不足の、だるい身体を励まして店へ出てみると、いつもと変わらず綺麗に掃除が行き届き、仕事の準備も万端、整っていた。

「お早うございます」

善夫はケロリとした、いつもと変わらぬ表情で挨拶した。政吉は、そこに善夫という男の心の奥底にあるふてぶてしさを見出した。

「此奴は底の知れぬ奴だ」

という警戒の念が、おこった。

栄子は例によって、怒ったときは、いつまでも起きてこなかった。

十時頃になって、店がたてこんでいるとき栄子が新調のスーツにエナメルハイヒールをはいて、小さなスーツケースをさげて店へ出てきた。

アイラインをいれ、濃い口紅をさし、入念

に化粧された栄子は、二十代に見えるほど若々しく、輝くばかりの美貌だった。

「お、すごい。どこの奥さまかと思ったぜ」

親しい客の讚美の言葉を背中に、コツコツとハイヒールの音をさせて、

「じゃ、あとは頼んだわよ」

と善夫の背中越しに言った。政吉の傍を通り抜ける時にはひと言も口をきかなかった。

フランス製の香水のあまい香りが政吉を悩ませた。

大勢の客のいる前ではあり、あつという間もなく、栄子は表から堂々と行く先も告げぬ旅行に出て行ってしまった。

その夜、政吉は善夫を一ぱい飲み屋に誘った。

「ほんとに俺は、お前という男を心から信頼してただけにガッカリしたよ」

「すみませんでした」

「お前が来たときから栄子がモーションをかけていたことは、俺も知っていたよ。栄子という女は、ああいう女なんだよ。前にいた友市という男とも関係があったし、ほんとに始末の悪い女だ。お前が家へ来てくれるようになった、そもそものいきさつにしても、俺が

清太郎に頼みに行ってもだめだった。それが栄子が頼みに行くと、お前をよこしてくれるようになった。これは栄子と清太郎の間に何かがあったからだと言はれは踏んでいる」

「そんなことはないでしょう。うちの旦那はね、旦那のことをほんとの兄弟のように親身になって心配してますよ」

「それなら俺が頼みに行った時に何故、承知してくれないんだ。どうして栄子が頼みに行ったら承知したんだ。まあいい、すぎたことは水に流そう。お前と栄子とのことも、俺は何も言わね。だが清太郎との約束の三カ月には、もうあと三日しかない。清太郎も、お前を頼りにしているんだし、約束の日には東京へ帰ってもらおう」

「ハイ……」

「清太郎には、俺は何も言わない。まじめに三カ月の間、よく勤めてくれたと言っておくから」

「ハイ、すみません」

さすがに気がとがめたか、善夫は盃の数も少なく、蒼白い顔をして、終始、神妙に政吉の指示に従った。

政吉は内心ホッとした気持だった。

善夫さえ東京へ帰ってしまえば、波風は、

おさまるのだ。代りに新米の、はたちぐらいの小僧がくることになっている。栄子のことだからまたチョッカイを出すかもしれない。しかし、それなら許せる。善夫だけは困るのだ。

陰の行動

二日ほどして栄子は夜おそく帰ってきた。

「留守中、忙しかった？ 御免なさい」

政吉に自分から口をきいたのは機嫌のいい証拠だった。

「早速だが、善夫のことについてな……」

とたんに栄子の顔が険悪になった。

「イヤ、清太郎との約束のことだ。ちょうど明日が約束の三カ月目だから、ひとまず東京へ返すことにしよう」

「……」

「この前東京へ行って何とか延ばしてもらうように頼んだが、清太郎の方も手不足で困っているし、約束は約束だから、ともかく善夫は返してくれと言うんだ。代りを直ぐによこすからと……」

「……」

「善夫は確かに腕はいいし、店のためにはな

るんだが、あれだけの男を、こんな田舎にいつまでも止めておくのも可哀想だし……」

「なあ、そうしようと思う」

政吉は栄子の顔色をうかがいながら、ひかえ目にしゃべった。栄子はムツとした顔で、黙って聞いていた。意外に冷静だった。

「善夫さんは東京へ帰ると言っているの」

「ああ、善夫も帰ることに決めているんだ」

「妾は帰さないわよ！」

静かだが栄子はキツパリと強い語気で言いきった。ハツとして政吉は栄子を見つめた。

「お前、よくそんな口がきけるな」

「あんたこそ、よくそんな口がきけるわね」

「俺は小面倒なことをクドクド言うのがいやなんだ。ここはサッパリと善夫と切れてくれないか。すぎたことは何も言わないからな」

「何のこと言ってるの。妾は帰さないと云ってるのよ」

「俺は心を静めて考えに考えた末で一番いい道をえらんだんだぜ」

「とにかくね。ふたりで水かけ論みたいなの言い合っている、はじまらないわ。妾は帰さない。あんたは帰すという。一対一だね。あとは善夫ちゃんの意志で決めることだね」

「そうだ、その通りだ。二対一が公平だ。善夫を呼んで聞いてみよう」

呼ばれて善夫が二階から降りてきた。

「お前、明日、帰るんだろう」

「奥さんが帰れと言えは帰りますよ」

「妾は、いやよ。いてもらうわ」

「でも清太郎が約束だから帰って来いと言ってるんだぜ。善夫、お前は主人の命令に背く気なのか」

「嘘お言いでないよ」

栄子が凄じ剣幕で、まくしたてた。

「妾いま東京の清太郎さんのところから帰ってきたんだよ。清太郎旦那は、そんなに善夫が役に立ってるなら、もう半年ほど延ばしてもいいと言ってくれたんだよ。この前、あんたが、清太郎さんに頼みに行った時だって、延ばしてもいいと言ってたそうじゃないか。てめえに都合のいいような嘘ついたってだめなんだよ。妾はみんな調べて知ってるんだから」

政吉はグッと詰まった。嘘をついていることは確かだった。だが栄子の言うことも少し違う。政吉に対して清太郎は「まあ考えておこう」と、はっきりした返事をしなかったのが事実だったのだ。だが政吉の嘘がバレてし

まったことは、しかたのない事実だった。

「善夫！ お前、俺に帰ると、はっきり約束したな。俺を裏切るのか」

「いや、僕は旦那が帰れと言うから、帰りますと言っただけですよ。だけど、奥さんが帰るなと言う。それに何よりも、僕のところの旦那から、お許しが出たとあっては、話は変わってきますよ」

「帰るんだ、善夫」

「ダメよ」

「どうすりや、いいんです。僕の立場も考えて下さいよ」

「この店のことは、妾の言う通りにしてればいいのよ。妾の店なんだから」

「ほかのことなら何でもきくが、これだけは困る」

「何言ってるやがんだい、主人面して。嘘ついて、ひとをペテンにかけようたって、その手にゃ、のらないからね」

栄子は、威だけだかに罵り、政吉は政吉で必死に粘って言い合った。

善夫はハチをよせて、夫婦の言い合いを聞いていたが、

「失礼します」

と二階へ立って行ってしまった。

闇黒の孤独

「なあ栄子。嘘を言ったのは悪かった。この店も確かに、お前のものだ。お前が主人だ。だが今度のことだけは、俺の願いをきいてくれよ。俺の気持ちも分かるだろう」

善夫がいなくなると政吉は弱気になった。

栄子は不機嫌に黙りこんで、さっさとスーツを脱いでシュミーズ一枚になった。

「ああ、暑い暑い。東京も暑いけど、家も暑いわ」

汗ばんだ身体から、女の匂いがムンムンと立ちこめた。酒くさい匂いも、その中にまじっていた。栄子が相当飲んできたことが、いま分かった。

「栄子。俺は、お前だけが頼りなんだ」

政吉は栄子の太い足に、すがりついた。

「うるさいわねえ」

栄子は膝小僧で政吉のあごを突きあげた。

政吉は、ひっくり返ったが、また両足に抱きついた。

「ばか！」

栄子は、上から平手で政吉の横っ面をはった。

パン！

と大きな音が鳴った。

「栄子、えいこう……」

政吉の声は弱々しく哀訴するようにふるえ弾力のある足に抱きつき、透きとおるようなナイロンのパンティに、顔をこすりつけていた。

「栄子、俺とお前は夫婦だろう。夫としての俺の気持も少しは汲んでくれ」

政吉はパンティに両手をかけて、ずりおろした。

「フン、夫婦？ こんな夫婦ってあるかい。

妾に、こうやって殴られて！」

足もとに脆く政吉の頬ぺたをピシリと殴り

「こうして足で蹴られてさ」

石ころでも蹴り返すように政吉の薄い頭髪を足で踏みつけるようにしておいて蹴った。

「こんなにされて黙ってる夫である？ 何とか言ったらどうなのさ。おい！」

太腿へ手をのばしてくるのを払いのけて、頭へ足をかけた。

「お前だって、この前、妾を投げとばしたぐらいのくそ力があるんじゃないか。どうして今夜はあれを出さないんだい。コラ！」

頭へのせた足を前後に揺って踏みこむ。

「こんな夫婦ってないだろ。女あるじと下男だよ。前によく分らせてやったのに、まだむほんを起す気なのかい」

栄子は仰向けに倒れた政吉の顔の上に馬のりに跨った。

「仕事をやらせりやグズで何もできやしない能なしで、いくじなしのお前が、この妾の夫と言えるかい。ホラ、こんなにされて喜んでお前がさ、夫として満足な勤めもできないくせに亭主だなんて大口がたたけるのかよ、この口でさ」

口汚く罵られても、政吉は口がきけず返す言葉が出なかった。

「それとも亭主として、女房にこうされて口惜しいと思ったら、この前のように跳ね返してごらん。ホラ、どうしたのさ。男なら男らしく、ばか力を出してごらんよ」

栄子は太腿でグイグイと締めつけながら、

「こんど、あんなことしやがったらお終いだからね。きっぱりと夫婦の縁を切ってやる。それを承知なら、跳ね返して見るがいい。サどうしたのさ」

「苦しい、ちょっと力を弛めてくれ」

「フッフ、情けない野郎だよ」

政吉は大きく呼吸した。

「お前、そんなに善夫が好きなのか」

「好きさ。好きで好きで堪まらないのさ。あんたは、またいつもの浮気がはじまったぐらいに思ってるんだらうけれどね、こんどばかりは違うんだよ。妾達は、ほんとに愛し合ってるんだから。それが気に入らないと言うんなら、いつでも別れてやる」

栄子の言葉は政吉の心臓をグサリと突き刺した。

「それほど深味にはいつていたのか……」

ショックに政吉の頭は呆然とし、次第に混乱した。

汗ばんだ太腿が、あまい芳香を放ちながら首を締めつけてくる。

「サア、どうなんだい。妾と別れるつもりなら跳ね返してごらん。跳ね返せないのかい。おとなしくしてりゃいいと思ったって、そうはいかないよ。ホラ、こうしてやるよ」

勝ちほこった栄子は、次第に屈辱責めの度を増していった。

栄子は階段の途中までおりてきて、秘かに覗いている善夫の視線を意識していた。

チラと、うわ眼使いに、階段の左上の隅を見上げたが、そこにはレースのはしが僅かに

(続)

フェチ小説

この胸のときめき (3)

文及びカット

日本武士



五

「やあ、きみ」十一日、私は、鈴木君に電話した。「君は前の学生委員長で、現在、ユリ」という店を経営している女性を知っているかい」

「さすが、我々のリーダーだけのことはありますね。もちろん知っていますとも。彼女は大物ですよ」

「そうか、知っているなら、くわしく教えてほしいんだ」

「ええ、いいですよ。で、どの程度まで御存

知なんですか？」

「今言ったこと以外は全然知らないんだよ。名前からのむ」

「えーと、名前は、影山ユリと言います。としは私が入学した前の年の卒業ですから……二十五か六です。東西デパートの社長の一人娘で、女性の下着を売る店を、経営しているそうです。二年生の時に学生委員長になり、三年間ずっとその地位にいて、そういうなサディストぶりを、発揮したそうです。今でも小山田らに陰から指示を与えているそうで、この点は、宮本君が調べているんですが、はっきりとした証拠は、まだ入手できません。まあ、これぐらいですね私が言えることは。宮本君は、もっとよく知っているはずですよ」

「いや、それだけで十分だよ」

「で、どうして彼女を知ったんですか。私達は、彼女がはっきりとした行動にでるまで、黙っていいように思ったんですが」

「ああ、ちょっとしたことだね」私は、言葉にこし、そしてすばやく言った。

「ところで、君は、明日は暇だろうか？」

「ええ、それは……」

「実は、その影山ユリと明日の四時に、会う

ことになっているんでね」

「影山とですか！」

電話の向こうで驚いている彼が、目に見えるようだった。

「そうなんだ。だから、幹部全員でおしかけて、問いつめてやろうと思ってね。きてくれるだろう」

「も、もちろん。今こそ、奴をグウーと言わせてやれますよ」

「それで、みんなに電話してほしいんだ」

「ええ、いいですよ。あー、女の人にも知らせますか」

「もちろん」

「……………」

「どうしたんだい。女はまずいかな」

「いや、実は、数日前から全然姿を見かけていないんです。それに、電話しても通じなくて……………」

「どうしたのかな……………」

私は、一人言のようにつぶやいた。

「きっと、運動の方に携わっていると思うのですが……………」

「じゃあ、彼女達には、私の方から連絡するよ。君は他の人達に知らせてくれ」

「わかりました。十二日の四時ですね。場所

はどこですか」

「彼女と会うのは、駅前の喫茶店『ロゾ』でなんだけど、一時ごろまでに私のアパートまで来てほしいんだ。さきに打ち合わせをしておいた方がいいんでね」

「十二日の一時までにリーダーのアパートへ集合ですね。じゃあ」

私の耳の中で、単調なベルの音が繰り返されていった。

三十一回 三十二回。

女性幹部の一人、芳賀純子はがじゅんこさんに電話をしたのは、鈴木君との通話が終って、すぐにかけてから、二度目である。一度目は、ベルが四十四回鳴るまで待った。今度は、三十五回まで待つつもりだった。

彼女は、いないのかもしれない。鈴木君の言ったとおり、応答なしだ。

三十四回、三十五回。

私は受話器をもどした。

二人目の阿部さんは、親戚の家に下宿していた。今回はベルが五回で通じた。応じたのは女性の声だったが、阿部さんでないことはすぐにわかった。すき透るような声だが、どこことなく気どった感じが、自分の年をかくそ

うと努めていた。阿部さんを……………という

「ここ四、五日、家をあけてますのよ」

「どこへ行かれたか、御存知ありませんか」

「えっ？ 学校にはおりませんか？」電話の声は、ちょっと不安の色を私の耳に感じさせた。「三日前電話がありました、しばらく学校に、芳賀さんと一緒にとまり込む、と言ってよこしたんですのよ。学校にはいないんですの？」

「さあ。私は、ずっと学校へは行かなかったもので……………学校にいますね」

「ええ、そう言ってきたんですのよ」

「じゃ、きっとそうでしょう。これから、行ってみます。芳賀さんと一緒なんですね」

「ええ……………」不安の色は、まだ、ちょっとのこっていた。

「あつ、それから、及川さんのことは、何も言っていなかったですか」

「ええ」

「そうですか。じゃ、どうも」

彼女は、なかなか電話を切らなかった。十三、数えた時に、やっと切ってくれた。

学校に行く前に、私は、やはり幹部である及川良子さんに電話した。彼女も、学校だろうと思ったが、万が一という場合もあるから

だ。いったい、女三人が寄って、一週間も何をしてるのだ。今度は、五回ベルがなったら、すぐ切ることにしようと考えながら、私はダイヤルを回した。

ところが案に相違して、一回目のベルが鳴り終らないうちに電話が通じ、いきなり

「そうせかせないで、今すぐ行くわ」

「もし……。あッ、そう。じゃ、待ってるよ」

私は、あっけにとられ、とっさに、こんなことを、言ってしまった。

「えッ！」

電話ごしに彼女の驚きの様子が、ありありと私の耳に伝わってきた。こっちも驚いたのだから、そっちにだって驚いてもらわないとワリがあわない。

「もしもし」彼女は、おそろおそろ言ってきた。「あなた、だれ？」

あんまり驚かせても悪いので、私は、すまなそうな声を装って言った。「驚かせたのなら、もうしわけありません」テレビ電話でないのも、案外、役にたつ。ニヤニヤしながらもうしわけなさそうな声をだす顔なんて、人に見せられたものではない。

「僕ですよ、瀬川です」

「瀬川さん」彼女はホッとしたらしい。「い

いえ、私の方こそ、変なこと言ったんじゃない？ ちょっとあわてていたのよ、私」

しばらく沈黙が続いたが、私の勇気が、それを破った。

「突然変なことをたずねますけど、十二日の午後は、暇ですか」

「十二日、明日ね。むーん、どうして？」

「実はね、あなたも知っていると思うんだけど、敵の黒幕である影山ユリと、四時に会ってます。それで、幹部全員でおしかけて行って彼女を問いつめてやろうと思うんだけど、どう？」

「おもしろそうね」彼女の声は、異様に高ぶっていた。「行って見ようかしら」

「そうしてもらえとうれしいね」と私。

「どこへ行けばいいの」

「一時ごろまでに、私のアパートに集まってほしいんだが」

「そう、一時ね」

「あッ、ちょっとまって。芳賀さんと阿部さんどこに行ったか知らない？」

「………。どうかしたの？」

「二人とも自分の家にはいないんだ。阿部さんのいる家の人の話では、学校にしていると電話で言われたそうなんだけど……。僕はてっきり

君と三人で学校にいたと思っていたんだ。彼女たちを知らない？」

「さあ、私は、ずっと家にいたから、知らないわ。きっと学校じゃない。競技会も近いことだし……。」

「だろうね。どうもありがとう。じゃ」

私が言い終ると同時に、彼女は、すぐに電話を切った。

十二日。十二時四十八分に鈴木君がきた。

「宮本君と村田君は、これがないと言っていました。おじけづいたんですよ、きっと。それから、佐藤正君は、バレーボールに出場のため、練習でこれないそうです。ですからくるのは、佐藤章君に、北林君と野中君の三人です。女の人達はもうでした」と、彼は一気にしゃべる。

「家の方では学校にいたと言うから、学校へ行って心あたりに聞いてみたけど、誰も見かけていないんだってさ。一応僕もさがしてみただけど、やはりだめだった。及川さんは、電話が通じたので、話しておいたから、来るかもしれない」

「及川さんに通じたんですか。おかしいな、僕がしたときは、通じなかったんだけど」

「要するに、頭の問題さ」

と私は、すまして言った。

「ただ運がよかっただけです」

彼も負けてはいない。

ここへ、三人が一緒に入ってきた。一時三分だった。五人で、三時までいろいろ相談してから出発した。

三時二十六分に「ロゾ」に着いた。

打ち合わせどおり、私が一人でテーブルにすわり、他の四人ははなれた別のテーブルに陣取って、ユリを待った。ユリが現われると他の四人がおしかけて、ユリをかこむようにする計画である。

エッセンスのききすぎたミルクセーキを前にして、二十分程待った。もうじき、約束の四時だ。

ちくしょう。よくも、十日の日は、私に恥をかかせてくれたな。だが今日は、みてる。ぐわーと、言わせてやる。

さあ、こい。ここへきて、なにかも話すんだ。

さあ、こい。ここへきて、今までのことをあやまるんだ。

女のぶんざいで、男を手玉にとるとは。女性上位なんて糞食らえ！

さあ、こい。ここへきて、なにかも話すんだ。

さあ、こい。ここへきて、すべて……

まで、英敏。まで、まで、まで。

もし彼女が苦しまぎれに、おまえが、下着を買いにいったことを話したら？……彼女のことで、きつと話すだろう。

彼らは、これをどう、うけとるだろう。

彼女がでたらめを言っていると信じてくれるだろうか？ 彼らには、学校で偶然、出会ったと言っているが……

どうした英敏！ 落着いてよく考えろ！

だめだ。俺は、信じてもらえそうもない。

俺は、とっさに対応できるほどの話術はもっていない。どうしよう……

私の心は、いっしか、ユリをにくむ気持ちから悲願する気持ちにかわっていた。どうかこないでくれ！ そうだ、交通事故にでもあえばいいんだ。だれかユリを轢いてくれ。私は、このとき初めて、自動車を持っている人に、感謝しようという気持ちになった。しかしそれは、突然私の肩にぶつかってきた。背すじが

ピンとのび、心臓がミルクセーキの中に飛び込んだように感じた。私はおそるおそる後をふり向いた。するとそこには、自動車では

なく鈴木君の、驚いた様子でもって私を見つめている顔があった。

「だいじょうぶですか？」

「あ、ああー」

「どうかしてんじゃないですか。本当に、大丈夫ですか。さっきから、放送で呼んでるじゃないですか。電話だって……」

「放送？」

私は、顔を上げ、耳をすました。たしかにスピーカーが、私に電話だということをつげていた。

「いや、どうも。ちょっと、考えごとをしていたんでね。いったい、だれだろう」

私は立ち上がりながら、私の心臓の入っているミルクセーキを飲みほした。私は、電話の方へ歩きながら、鈴木君にたずねた。

「ところで、何時だい」

「もう、四時を五分もすぎてるんですよ」

「うーむ、ユリからかな」

「私もそう思います」

「一緒に聞こうじゃないか」と私。

「ええ」彼は、はりきって答えた。

私は受話器を取って、鈴木君と私の耳の間に捧げるようにしながら口を開いた。

「もしもし、おまたせしました。瀬川です」
「もしもし」

ユリの店での、彼女のあのニヤニヤ笑いが
浮かび上り、私の心をしめつけた。

「私がだれだか、おわかり？」

ユリにまちがいはなかった。私は、皮肉な口
調で言っただけ。

「あなたの時計では、今、何時か知りません
が、全国共通の時刻は、四時を十分も過ぎて
いるんですよ」

「九分と三十八秒よ」

彼女は、あっさりと言ってよこした。

「約束は四時ですよ。おぼえていますか」

「ええ、おぼえているわ。それに私は、内気
なマゾヒストさん、あなたと会う約束をした
筈だと覚えているのよ」

「そうですよ。だから、私はここへきてるじ
やないですか。あなたは、どこへ電話をして
いるんですか」

「私が言いたいのはね、マゾヒストさん。あ
なたと会うようだったのよ。いいこと？ あ
なたの仲間と会うなんて言わなかったわ」

「……………」

私の口は、しばらく、開いたまま、閉らな
かった。

「聞こえたでしょう。そこには約束外の人間
がいるわね。だから、今日のデートはお流れ
よ」彼女は一息いれ、それから、ゆっくり、
強く言った。「後で後悔しないようにね。こ
のお礼はきつとさせてもらうから」

「あッ、ちよっ……………」私が言いかけたと
き、ガチャンと電話は切れた。

鈴木君は、私の顔をのぞきこんできた。

「彼女は、どうして私達のことを知ったので
しょうね」

「もしかすると、ここにスパイがいるのかも
しれないぜ」

私達は、三人のいるところへもどり、今の
電話のことを話した。三人とも信頼できるし
鈴木君だってそうだ。私達は、七時まで、こ
こで、いろいろ推理し合った。周囲の人々や
ウェイトレスに、疑惑の目を向けながら。

しかし結局、彼女は、私達をおそれてこな
かったのだろう、という結論に達しただけだ
った。私は、下着のことがバレなかったし、
又、鈴木君が、ユリがさかんに私をマゾヒス
ト呼ばわりしたことに、全然ふれなかったの
で、ほっとした。

私は帰り道、さっきの電話での会話をもう
一度、頭の中で繰り返してみた。

——どうして彼女は、私達のことを知った
のかな。誰も話すはずがないんだが……。及
川さんかな？ いや彼女じゃないな。彼女は
常に女子の先頭に立って私達の運動に参加し
ていたから。じゃあ、いったい誰が。

——後で後悔しないようにか。後で、とは
いつのことだ。とにかく、現在私は後悔など
していない。私は、これで十分さ。

——マゾヒストさんか。ふむ、本当に私は
マゾヒストかな……………」

六

私はパンティの湖を泳いでいた。岸にはブ
ルーの制服を着たみにくい顔の女達がゲラゲ
ラ笑っていた。私は、沖へ沖へと一生懸命泳
いだが、その動作は、スローモーションその
ものであった。沈みかけて懸命にもがいた。
その時、耳もとで白い音がした。それがだん
だんいやらしい音になり、最後に、電話のベ
ルと化した。私は、逃げていくパンティを追
いかけながら、受話器をつかんで言った。

「もしもし、どなた」

「もしもし、阿部さんが、一時に図書館前で
会いたいそうです」

「えッ？」

「聞こえたでしょう」と相手が言った。

「アーさん、イーさん、銅像前は雨だそうですね、だね。ああ、聞こえたとも。ところで、あんただれ？　ここは……」

「瀬川君、ふざけないで。阿部さんが、一時に図書館前で会いたいそうよ。わかった？　確かに、伝えたわよ」

相手は、一語一語を、はっきりと強く発音してきた。

「君は女だろう。だれだい。阿部さんかい」
「あなたと話をしたくてウズウズしている女よ。じゃ」

女は、言い終ると同時に電話を切った。

私は、もう図書館の回りを五周廻り、そして、今六周目の行進をしている。私は時計に目をやった。これで何回目だろう。三十四回まで数えたんだが、それ以後は、おぼえていない。五十回か六十回ぐらいだろう。時計は三時七分をさしていた。指定の一時は、二時間まえに過ぎていた計算になる。

六度目の行進を終えた時、私の心は、あの電話はいたずらであった、という結論を支持していて、すぐさまアパートへもどることを肉体に命令したが、私の肉体は六周もの行進

に疲れはて、ストライキをおこしていた。結局、心と妥協するまでの一時間ほど、私はそこで、しゃがみ込んでいた。

部屋に着いたのは、四時を四十分も過ぎてからだ。鍵を取り出し、鍵穴にさし込んだとたんにドアが開いた。一瞬、私はドアの前に立ったまま、動くことができなかった。

出る時には確かに鍵をかけたはずだが………。私は、二歩後にさがり、三つ深呼吸をしてから、部屋の中へ肩から突進した。ドアが開いた時、中で物音がしたからだ。私は、部屋の中央にくるやいなや、腰をおとし、片ひざ立ちに身構えてあたりを見廻した。その目は、ベッドのところでストップした。私は、一度目をつぶり、五つ数えてから、改めて開いた。幻ではなかった。ベッドの端にユリがすわっていたのだ、あのニヤニヤ笑いをうかべて。

「まるで、スパイ映画のようね」

という彼女の声に、私は本当にそうであればいいと願った。もしそうなら、わきの下から拳銃を取り出して、彼女を撃ち殺してやるんだが。私は、ゆっくり立ち上がり、ベッドとは反対側においてある、アームチェアに腰をおろし、そして言った。

「まず聞かせてもらいましょう。どうして、この、私の部屋に入ったんですか」
「あなたに会うためよ」

彼女は、あっさり言っただけ。

「どのような方法でもって、私の部屋に、お入りになられたんですか」

私は、歯をむいてうなった。

彼女は、私の口調から察してか、ニヤニヤ笑いを止めて言った。

「あなたの質問が悪いのよ。私は、どんな用事でここへ来たのか、と思ったのよ。留守中に入った方法は後で話すわ。それよりも、早く用意をなさい」

「用意？　何の用意だい。君がこれから言うことをメモしろ、とでもいうのかい」

彼女は、その私の言葉を無視して——しばらく、私をにらんではいたが——言った。

「まだ言っていなかったわね。これから、十二日のデートの代りをするのよ。一緒に食事をして、それから……いろいろ話したいことがあるのよ。さあ、早く用意して」

ユリは、言い終ると同時に立ち上がった。この時、初めてユリの服装が目についた。彼女は、ブルーのブラウスの上に、黒いスーツに同色のパンタロンのスラックスといういで

たちだった。

「どうして、今日のこの時に、デートをしなければならないんだ。き……」

「どうして、十二日、私は、あなたたちのことを知ったのか、とか、阿部さん達のことを知りたいでしょう」

彼女は、私の質問を無視して続けた。

「阿部さん？ 今朝電話したのは君か」

「今朝？ 何んのこと、それ？」

彼女は、あきらかにとぼけている。英敏よく考えろ。彼女は大物なんだ。その彼女の方から、さかんに私に近づこうとしている。何かある。阿部さんのことを知っているな。よく考えて行動しろ。

「どうしたの」

彼女は、いらいらした口調で言った。

「きまっているじゃないか。行くよ。でも、

まだ夕食には早いような感じだけど」

「だいじょうぶよ。レストランまで車で四十分ぐらいなの。話しながら行くから、一時間ぐらいかかるわ。さあ、用意して。ネクタイをしてよ」

十時、私達二人は、ユリの家の居間で、テーブルをはさんで向かい会っていた。

「どうぞ、お飲みになって」ユリは、私の前にあるグラスをさして言った。「ただのウィスキーよ」

彼女は自分のを一口飲み、私を見つめた。

「飲むよ」

私は一口だけ飲んだ。レストランで食事の前に飲んだ食前酒のおかげで、胃のぐあいがおかしくなり、食事は満足にできなかったし、いまだに胃が重く感じられた。二時間のドライブのせいだろう。

「君はどうして……いや、どのようにして、私の部屋に入ったか。それから、阿部さんのことについて話すと言ったが、いつ話してもらえるんですかね」

「それを飲んでから話すわ」

「どうして、この酒にこだわるんです？」

「毒が入っているからよ」

彼女は、すまして答えた。

私は、酒をのみほした。今の私の胃には、毒でも、水でも、酒でも同じだった。と、彼女はたち上がり、私の横にきた。

「こっちへいらっしゃい。これから私のコレクションを見せてあげるわ。それから、あなたの質問に答えてあげる」

声の調子が、だんだん命令調になっていっ

た。私は彼女の後について、次の部屋に入たが、一歩足を入れた時から、私は、急速に歳をとっていつているように感じられた。

彼女は、私がおいつくと、私に一冊のアルバムを渡しなが、低い声を出した。

「開いてごらんさい」

私は、重いまぶたを懸命におし上げて、アルバムを開いた。その瞬間、私の目はそのペーじの上にすいこまれた。半裸姿で縛られた阿部さんが、そこにいたからだ。

私は、急いで——心でそう思ったんだが、すぐくゆっくりに感じられた——顔を上げ、ユリを見た。あのニヤニヤ笑いが、どっか遠くの方に見えた。

まぶたの裏のどこか遠くの方の、まっ黒いものが私の方に近づいてきた。私の心は、さかんに手や足に働くように命令しているのだが、その命令は、手足にとどく前に黒いものにすいこまれていった。突然、床が私にぶちあたってきた。痛いとか心がさげんだが、私は感じなかった。その時、黒いものが私を包んだ。

七

まぶたの裏の黒いものが白くなってゆき、

それが、だんだん胸のところまで下ってきてそこで燃えだした。私は、悲鳴をあげて気がついた。明るかった。明るすぎた。私の斜め上から二個のライトが私を照らしていた。私とライトの間には……ユリだ。ユリがいた。あのニヤニヤした顔があった。そして……私はその瞬間、はっとして目を見はった。ユリの肉体がいた……というべきだ。彼女は小さな絹のパンティ一枚という姿で、私の前にたっていたからだ。

おいッ。き、きみは……私は驚いてたち上がろうとしたが、できなかった。おかしい。私は下を見た。なんとということだ、私も裸であった。そればかりではなく、足はひざから下がなく、腕は、肩からすっぽりなくなっていた。あわてた。跳いた。だめだった。英敏！ おまえは自分を守る手も足もなくしたのか。……それにしてもたち上がれるはずだが……。私は、両手が手錠で固定され、茶色のジウタンの上に正座させられているのに気づくまで、二分程も跳いた。わからない。思考作用が極端に、にぶっている。なぜ？ しかも、なぜ私は縛られているのか、しかも裸で。

よく考えろ……。そうだ、私は、たしかに

ユリの部屋にいたのだ。そして……わかった！ そうか！ あの酒には本当に、クスリが入ってたんだな。ちくしょう。

「ひきょうな……。わけを言え！ どうしてこんなことをするんだ！」

私の心は、憎悪でにくりかえってきた。そしてこのことが、手足の動かぬ私をして彼女へ突進させようという馬鹿げた考えをおこさせた。結果は、手首がちぎれそうになったのと、彼女の足蹴りを胸に喰ったにすぎなかった。

彼女は、その足で私のものを踏みつけ、髪をつかんで後に押した。仰向けさせられた私は、いやでも彼女の顔を見上げなければならなかった。

ユリは、銀色の長いホルダーで、たばこを吸っていた。彼女は私を見据えたままそれを口にくわえてから、私の左右のほおに、ゆっくり、強く、平手打ちをとばした。びしっとな音がして私のほおは、今にも燃えあがりそうになった。

次に彼女は、私のものの上に急に腰をおろしてきた。ズッシリした、しかし柔軟な重量が私の膝にめり込んだ。彼女はたばこをいっぶん深く吸いこんで、煙を上につくくりふきだ

してから、まるで一人言のように呟いた。

「口のきき方をなおさなくてはね。でもその前に、約束通り、まず後悔させてあげなきゃいけないわね」

彼女は、そう言うなり、なんでもないことをするように私の胸にたばこの火を押しつけてきたのだ。

「ウッ！」

私の口から、いや、のどの奥からおもわず悲鳴がとび出した。

これがたばこの火か？ 私には巨大な火炎放射器のように思えた。

彼女は、火を私の胸につけたまま、アクセントのない声で言った。

「私を、みんなで襲うことを計画したのは誰なの？」

言い終ると同時に、火炎放射器の噴射口を私の胸からはなした。私は、肩で息をしながら、うなった。

「何んで、そんなことが聞きたいのだ。そんなことより、どうして、私をこんなむごい目にあわせるのか説明しろ」

私のうなり声に似た抗議は、三十秒後には悲鳴に変わった。火の勢いは数倍になったような感じだった。

「誰が計画をたてたの？」

ユリは、勝ち誇ったように言った。ゆっくりと、静かな口調だ。

「わ、私だ」

彼女は、私の左の乳首の回りに、ハートの形を、たばこの火で書くつもりらしい。平気な表情を崩そうともせず、たんねんに、私の胸に火を押しつけながら言った。

「どうしてなの？」

「……………」

赤くなつたようなハートの中心部に、ひときわこたえる激痛が走った。私は、たまらず悲鳴をあげた。

「どうしてなのよ」

「わかった。い、言う。言うから、火をどけてくれ！」

最後の方は、われながら情けない泣き声にかわった。無表情だった彼女は、はじめていじわるそうに笑った。

「素直に言わないから喜んでると思ったわ。」

言ったら、やめてあげるわよ」

私は、たったの十五語をしゃべるのに一分程かかった。その間、ユリの容赦ない責めの火は、私の胸を噛みつぶけた。

私は、火が徐々にさがっていくのに気づい

た時、再び得体の知れない黒い大きな煙みたいなものに包まれていった。

胸がズキズキと痛んだ。しかし、それより

もまして、両方の頬が痛んだ。目をあけるとすぐ前に、やはりユリがいた。こん度は目上げる必要がなかった。私の目と殆ど同じ高さに、ユリの顔があったからだ。目の焦点が合ってくるにしたがって、腹部のやけどが痛んだ。手をあてようとしたが、今度は頭の上に、万歳の型で縛られていた。

ユリが動いた。そのとたん、ヒューという音がして背中に激痛が走った。四回目の打撃が私の背中に炸裂した時、たまらず悲鳴をあげて叫んだ。

「やめてくれ、わかった。君をだまそうとしたことは悪かったよ。わかったよ。十二日のことはあやまる。だから、もう、かんべんしてくれ……………」

ユリは、私の首に鞭をかけ、自分の顔の方に引きよせた。

「言うことはそれだけなの？」「あなたの言うことは、何んでもしますから」とは言わないの？」

「そ、それを言わせたいのか」

彼女の返事は、ムチできた。

「くそくらえ！」

私は、うなり、そして、叫びちらした。ほとんどが悲鳴だが。ユリは、七回打ち終わると、やめて言った。

「どう？」

「わかった。……よくわかったよ。やめてくれ。言うことを聞く」

「ふーん」

「本当だ」

私は、かすれる声をしぼり出して、体のしんから哀願した。

「ようやく、わかったようね」

と言いのこし私の視野から消えていった。しばらくして、私の前に、一つの箱とともに現われた。

「見おぼえがあるでしょう」

と言いながら、持ってきた箱を、私の目の前に示した。彼女は、私が決断しかねているのを見て、箱のふたを開いた。そのとたん、私の身体は、こおりついたようになった。

「どう？」ユリは、いじわるそうに、ほほえんだ。「見おぼえがあるでしょう」

「ああ……………」

「これはなあに？」

S.C.R.(性問題相談室)案内

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

「この女は……」私の胸が、ムチを受ける皮膚以上に痛んだ。「俺の秘密を知っていて、それを言わそうとしてやがる」

「なんだ、って訊いてるのよ」

「コッソリと、軽く膝に爪先が当る。」

「言わない気？」

「見ればわかるだろう」

「私は、あなたの口からききたいのよ」

「……………」

彼女のよく効くキックが、私の向こうずねに炸裂した。

「わ、わかった。言う。……し、下着だ」

二度目の激痛が、同じところに当る。

「女性のだ。…………ウッ！ 君の店から買ったものだ」

「……………」

「どうして買ったの」

「金を払っ……ウッ！」又、同じ所に激痛が走る。「な、何を言わせたいんだ」

「おまえは、フェチストなのね」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

彼女は火傷部に力一杯、爪を立てた。

「そうだ、そうだとも。……俺は、フェチストだ！ フェチストのどこが悪い！」

連載時代伝奇小説

緋

ひ

縮

ぢり

緬

めん

地

じ

獄

ごく

(第十五回)

白鳥大蔵

半九郎の夢

寺尾半九郎は、こんこんと眠りつづけていた。ヤレツケの岩松のために、眠り薬入りの酒をのまされたのだ。

大酒のみの半九郎は、その酒をがぶがぶのんだ。一升近くものんだのだから、たまらな

い。深川扇橋のこの見世物師岩松の家の離れにひっくりかえったまま、もう三刻あまり、いびきもかかずに眠りつづけていた。

ようやく眠り薬のききめがうすれてきたこ

ろ、半九郎の脳裡には、夢ともうつともつかない映像が去来しはじめていた。

それは、追憶とよぶにはあまりにもなまなましい、この数日間のあわただしかった出来事だった。

橋場の真崎稲荷のそばの家に、半九郎はいた。

その家と、酒と女をあてがわれて、半九郎は飼われていたのだ。飼主は、日本橋伊勢町の廻米問屋主人、大津屋彦兵衛。

ある日、その彦兵衛がふいにやってきて、酒をくらって眠り呆けている半九郎の枕もとに立った。

「仕事だ」という。

用心棒としては、どんな仕事でも主人の命令とあれば、よろこんで服従しなければなら

ない。こういうときに勇んで働かないと、用心棒はクビになって、酒や女はおろか、三度の飯とも縁が切れる。

半九郎は刀を腰に差すと、大津屋彦兵衛の供をして、駒形が多田薬師の境内へおもむいた。

そこで彦兵衛を待っていたのが、掏摸の親分の立花屋久六と、その子分の源次という男だった。

半九郎は一刀のもとに、久六の右腕を斬り落とした。そして、半死半生の重傷にうめく久六のからだをかついで、橋場の家へもどったのだ。

あとでわかったことだが、彦兵衛は、久六の身内の女掏摸お京によってすりとりれたオランダ歌留多の半片を取りもどすべく、半九郎をつれて、多田薬師へ出かけたのだった。

しかし、そのオランダ歌留多は、久六の片腕を斬ったとたんに、どこかへ消え失せてしまった。

彦兵衛は、消えたオランダ歌留多の行方と彦兵衛の娘、お絹お雪姉妹の行方をききだすために、久六をしめあげた。

半九郎は、このときはじめて、彦兵衛の娘二人が、久六のために誘拐されていることを知ったのだ。

久六ののどもとに白刃を突きつけて、半九郎は姉妹の監禁場所を白状させた。石浜神社裏の花屋敷とよばれる久六の別邸である。半九郎はただちに、その花屋敷へ出かけたが、姉のお絹ひとりしか救いだせなかった。

そして、その夜、半九郎は久六に誘惑されたのだ。

千両やるから、おれを助けてくれ、と久六

は言う。

千両といえば、一生遊んで暮らせるほどの大金だ。半九郎はその誘惑に手もなく乗り、彦兵衛を裏切る決心をした。彦兵衛の用心棒をやめて、久六の用心棒に鞍替えしたのだ。

高熱をだしてうなっている久六を駕籠にのせて、半九郎は橋場から石浜神社裏の花屋敷へと向かった。

そしてさらに、久六の指図で、花屋敷から久六のめかけのお仙、女掏摸のお京、大津屋の娘のお雪の三人の女をつれだして、この深川扇橋の見世物師岩松の家へひそかに落ちついたのだ。

ふたたびオランダ歌留多の半片を手に入れた久六は、大津屋彦兵衛に対してさらに敵意を燃やし、岩松に命じて、彦兵衛の女房お静をさらってこさせた。

お静は、かつて柳橋の芸者だった。小静という名で出ていた。久六はその小静に惚れてさんざんかよいつめたのだが手きびしい拒絶にあっている。

江戸の仇を長崎で、とばかりに、久六はさらってきたお静を、いまこそ自分のものにしようと、欲と色との二股をかけて夢中になった。

久六は、約束の礼金千両のうち、五百両だけを半九郎に渡したが、あと残りの半分をなかなか出さない。

怒った半九郎は、捕えてある女掏摸お京の縄を解いて逃がしてしまった。

——お京のやつ、うまく逃げられたか、どうか……。

と、ここまできて、寺尾半九郎の夢ともうつともつかない記憶はとぎれる。

その後、久六にとっては弟分にあたる岩松が、久六を裏切ったことを、半九郎は知らない。その裏切りの行動をおこす前に、岩松は邪魔な半九郎に眠り薬をのませたのだ。

反抗したお静のかんざしで片眼を突かれて苦しんでいる久六を、岩松は土蔵の中に押しこめた。

べつの土蔵の中に、久六のめかけのお仙とお静お雪の母娘をとじこめて、オランダ歌留多の隠し場所を吐けと、さんざんに責めさいなんだ。

その苦痛に屈服して、お仙は「歌留多の半片は、久六の胴巻きの中にあるよ!」とさけんだのだが、久六のからだをいくら調べてみても、歌留多はおるか、鼻ッ紙一枚でてこなかったのだ……。

油断大敵

——くそッ、どこにもねえ！

ヤレツケの岩松は、どうしてもおさまらない怒りの顔で歯ぎしりをした。

家じゅうの畳のあいだ、天井板、壁の隙間まで調べてみたのだが、オランダ歌留多の半片は、どうしてもみつからないのだ。

さがし疲れて、自分の居間へもどってきた岩松だった。

「庭石までひっくり返したんだが、オランダ歌留多なんて、どこにもありやしねえ！」

吐きだすようにいうと、岩松は醜惡な赤黒い顔を、さらに醜くゆがめた。

「ほんとに、久六のやつ、どこへ隠してしまっただろうねえ」

なぐさめるように、お仙がいった。

そのお仙は、うしろ手に縛りあげられて、布団の上に、あられもなく押しころがされたままである。

いくら縄を解いてくれとたのんでも、猜疑心のつよい岩松は、冷笑して首を横にふるだけだ。

大津屋の女房の縄を解いて、両手を自由に

してやったとたんに、かんざしで片眼を突かれた久六のぶざまな恰好が、いまだに、まぶたの裏に灼きついていて岩松なのだ。

「お仙。おめえ、本当に知らねえのか。知っているくせに、とぼけてるんじゃないかねえのか。ええ、おい」

岩松は、腐った魚のように濁っている目の奥底だけを光らせて、お仙を見おろした。

「なにを言ってるんですよう、親分。あたしが知っていたら、もうとっくに、親分に教えていますよう」

お仙は鼻声をだし、縛られている四肢をよじりながらいった。

ゲジゲジのように岩松を嫌っているお仙だが、いまはせいっぱい媚態を示さないと、この縄を解いてもらえない。

縄さえ解いたら、たとえ素ッ裸のままでもかまやしない。往来へとびだして、このゲジゲジ野郎のところから逃げだしたいお仙である。

「なんと言っても、おめえは長いあいだ、久六兄貴にかわいがられた女だ。久六に対して恩も義理も、人情もあるはずだからな」

岩松は、なおも底意地の悪い言いかたをする。

いくら口で、好きだ、好きだと言ったところで、しょせん自分が女に好かれる男ではないことを、百も承知している岩松なのだ。

お仙のような白ギツネの魂胆がどこにあるか、世間の裏道ばかり歩いてきた岩松に、わからないはずはない。

「じれったいねえ。あたしが、こんなに本気になってるのに、まだ親分にはわからないんですか。いくらあたしがバカだって、損得のソロバン勘定ぐらいははじますよ。いまにも死にそうな、あんな化けものみたいな男に義理をつくすよりも、これからは岩松親分にかわいがられたほうが、よっぽどいい思いをして暮らせますからね。だれだって、つまりは自分の身がかわいい。ねえ、親分、そうでしょう？」

いいながら、つきたての餅のように、白い裸身をくねらせる。のど首から胸の下あたりの肌が、とくにねっとりした脂肪に光ってなまめかしい。

からだの上に布団がかかっているないので、どこもかもまる見えなのだった。

「義理や人情でこの世の中は渡れませんよ。ねえ、親分。あたしゃもう、身も心も親分のものなんですよ。あたしゃもう、このとおり

親分のものになっちまったんですよう」

そのまる見えの裸身を、さらにみせびらかせるようにして、お仙は四肢を挑発的にくねらせる。巨大な臀部がむくむくと盛りあがり白い太腿がうごめく。

肉づきのいい三十女の胸にくいこんだ縄目が、そのゆたかなやわらかい肉のあちこちをなまなましく強調している。

縛られているくせに、いや、縛られているからこそ、いっそうなま臭く、むんむんと女のおいがたちのぼってくるのだ。

しかし、この女のからだを、入念に味わいつくしたばかりの岩松は、そんなあさましい姿態をみても、いまはそれほど食欲がわかない。

つめたい視線を投げるだけである。いま岩松の頭のなかにあるのは、久六がこの家のどこかに隠したはずの、オランダ歌留多のゆくえだけなのである。

「大津屋の女房と娘は、こっちの手におさえであるんだ。歌留多さえ手に入れば、大津屋の身代を思う存分ゆすることができんだが……ちくしょう、久六のやつ！」

岩松は、わめくような大声でいって、くやしそうに赤黒い唇をねじまげた。

自分の家の中に隠してあるものがみつからないなんて、こんなに腹の立つ、シヤクにさわることはない。

しかし、ここが自分の家である、ということに岩松は安心していった。いくら久六がうまい所に隠しても、いつかは自分の手に入る。十数人の子分たちが、常にこの家に寝泊まりしているということにも、岩松の安心があった。

だからこそ、大きな声をだしてくやしがつたのだが、ここに岩松の油断があった。

岩松とお仙のやりとりを、障子の外の廊下で、寺尾半九郎がすっかりきいてしまったのだ。

眠り薬入りの酒の酔いから、ようやくさめた半九郎が、ふらつく足を踏みしめて起きあがってみると、久六の姿は見えない。捕えてあるはずのお静とお雪の姿も見えない。

不審に思った半九郎は、離れの部屋を出て廊下を歩き渡り、母屋のこの岩松の居間の外までやってきたのだった。

そして、はじめて岩松とお仙の裏切りを知ったのである。

——もしかしたら、久六はすでに殺されたのかも知れんな。

と、半九郎は思った。久六には、まだ五百両の貸しがある。

白刃一閃

「そうか。拙者が離れでひと眠りしているあいだに、だいぶ筋書きが変わってきたらしいな……」

声にだしていいながら、半九郎は障子をあけた。

ぎくりと、岩松がふりむいた。お仙は、あつけにとられ、ポカンとした顔で、いきなり現われた半九郎をみあげた。羞恥をかくすひまもない。そういえば、この用心棒の存在をお仙はすっかり忘れていたのだ。

「きさま！」

と、岩松は半九郎を睨みつけて犬のようにうなったが、虚を突かれた形で、そのあとの言葉がつづかない。

「おい、岩松」

半九郎は、裸で縛られているお仙をみて、顔をしかめながらいった。

「悪党にも、悪党同志の仁義とかいうものがあるはずだ。兄貴分の久六を裏切った上に、久六の女まで横取りするとは、けしからん男

だな」

しかし、考えてみれば、半九郎もまた、大津屋彦兵衛を裏切って、久六の用心棒になった男だ。他人のことを、けしからんと言える筋合いはない。

「なにを！」

と、岩松は目玉をむき、巨大な赤鼻をふくらませた。この用心棒の腕前を、岩松はまだみくびっている。

「お前を、斬る」

半九郎は、あくびをしながら、ぼそりといった。

「なんだと、この駄サンピン！」

岩松は激怒し、歯をむきだした。

「拙者は、久六に雇われた用心棒だ。主人の危急を知って、そのままではすまされぬ。拙者は、久六を救わねばならぬ」

「くそおッ」

岩松は吠えた。赤黒い顔全体が殺気を帯びて、なにかべつの生きもののよう、異様な大きさにふくれあがった。

「じつを申すとな、拙者はまだ久六に五百両の金が貸してある。それを取り立てぬうちは久六に生きていてもらわねば困るのだ」

このとき、お仙が縛られている身を必死に

おこし、寺尾半九郎にむかってさげんだ。

「だ、旦那、寺尾の旦那。こ、この岩松を斬っておくんなさい。こいつはね、久六をだまして土蔵のなかへ押しこめ、あ、あたしをこんなに縛りあげて、無理やり手ごめにしたんですよ！」

お仙は顔じゅうを口にし、夢中になってわめいた。

「うぬッ、このあまッ！」

岩松の怒りの形相が、お仙にふり返った。と同時に、半九郎の右手が動き、大刀が鞘走った。

白刃が一閃すると、肉を斬るにぶい音がして、岩松の左肩から、おびただしい血がふきだした。

「うわッ！」

ふかぶかと肩さきから斬りおろされた岩松は、のけぞって倒れた。

自分の体内から溢れだした大量の血糊のなかに、岩松のからだがおびただしまに沈み、たちまち虫の息になった。

血のにおいにおびえて、お仙は手足を縮め蒼白になっている。が、岩松の死を確認すると、口から唾をとばしながら、半九郎に訴えはじめた。

「だ、だ、旦那。よかった、助かった。ほんとにあぶないところだったんですよ。あたしや、この男に、もうすこしで殺されるところだったんです。さ、早く、早く縄を解いておくんなさい。すぐに、うちの旦那を助けに行かなければならないんです！」

「久六は、どこにいる？」

半九郎は、不機嫌な顔で、ぶすりとお仙にいった。

縄がくびれこんで、むちむちとふくれあがった白い肉のかたまりのようなお仙のからだを、汚ないものでも見るような目で、半九郎は見おろしている。

「裏庭の土蔵のなかです。この岩松のために押しこめられたんです。まったく犬畜生にもおとるやつなんですよ、この岩松って男は。あたしゃもう、くやしくなって、くやしくなってたまらない！」

お仙は、口をとがらせてしゃべりまくる。「助けねばなるまい。いま久六に死なれてはおれも困る」

半九郎は、そういうと、お仙に背中をむけた。

お仙は、あわてた。

「ちよっ、ちよっ待っておくんなさいよ、

寺尾の旦那。あたしのこの縄を、早く解いておくんなさいよ！」

縛られた四肢を芋虫のようにくねらせて、けんめいに半九郎の足もとににじり寄った。

しかし半九郎は、興味のなさそうな目で、縄目のあいだから突きだしている巨大なお仙の乳房を見おろしている。

「ねえ、旦那。早く、早くこの縄を……」

ようやく半九郎は口をひらいた。

「お仙。お前はもう、岩松の女になったのではないか。おれはいま、障子の外でちゃんときたいぞ」

多少の皮肉をまじえて、半九郎はいった。

「いやですねえ、旦那。あれは、岩松の手から、たとえすこしでも逃げるための言いのがれだったんですよ。嘘も方便っていうじゃありませんか。あんな口から出まかせを、信用なすっちゃいやですよ、旦那」

「おれの耳には、本気で岩松をくどいているように聞こえたぞ。まあ、しばらくはそのままでいろ。いまお前の縄を解いても、おれにとっては、足手まといになるだけだ。悪く思ふなよ」

言いすてると、半九郎は廊下へ出て、うしろ手で障子をしめる。半九郎には、お仙を助

ける意志は、まったくないのだ。

「旦那、旦那。後生だから助けて！」

と、お仙は激しくもだえて金切り声をあげたが、廊下から裏庭へおりた半九郎の耳にはもう入らない。

お仙の目の前には、息の絶えた岩松の顔が早くも紫色になっている。血のにおいがぶんとただよい、お仙が心の底から悲鳴をあげるのも、無理ではなかった。

かくし場所

庭は、夜であった。ただし、いまが何刻であるのか、長いあいだ眠りつづけた半九郎には、見当がつかない。

久六の監禁されている土蔵は、すぐにわかった。

苦痛にうめく久六の声が、土蔵の外まできこえていたのだ。

扉には、錠がおりていない。半九郎は扉をあけると、土蔵のなかへ、一歩足を踏み入れた。

「なるほど、これはひどい」

ひと目みるなり、半九郎はうなった。

金網行燈の、もう乏しいろうそくの光りの

下に、久六はボロきれのようなみじめな姿で這いつくばっていたのだ。半殺しにされた野良犬が、死にきれずに長い舌をだしてうめいているような形だった。

片腕を斬り落とされて、その傷口もまだ癒えてないうちに、こんどはお静のために、かんどしで右眼を突かれて、つぶされた久六である。

岩松に裏切られ、お仙にはあいそをつかさね、一度ひいた熱が、また出てきている。どんなに気の強い久六でも、ここまで痛めつけられては、うめかすにはいられない。

「臭いな」

半九郎は、顔をしかめた。

高熱を発している久六のからだからは、屍臭に似た異様なにおいがたちのぼっているのだ。

「だれだ？」

うめき声とともに、わずかに目をあけて、久六がいった。げっそりと眼窩が落ちくぼんで、幽鬼のような形相になっている。

「おれだ。寺尾半九郎だ。お前に千両で雇われた用心棒だ」

うす暗い土蔵の内部を見渡しながら、半九郎はいった。どうやら、敵の見張りは一人も

いない。もっとも、この衰弱しきつた久六の状態だったら、見張りは不必要であろう。

「おう……お前さんか……何をしにきた？」のどをせいぜい鳴らしながら、きれぎれの声で久六はいった。

「何をしにきた？……おい、おれはお前の用心棒だぞ。お前を助けにきたのだ」

「おれを、助けに？」

久六は、疑わしそうな目で、半九郎をみあげた。自分の味方は、もう一人もいないとあきらめていた久六である。

「ただし、条件がある。礼金を、あと五百両増やしてもらいたい。都合千五百両だ。そのうち、手つけとしてすでに五百両は受け取っているから、あと千両だ。……どうだ。不承知なら、おれはこのまま、お前を見棄てる。お前はここで死ね」

久六の顔の真上に突っ立ったまま、半九郎はいった。

幽鬼のような久六の顔が、わずかに齒をみせて、にやりと笑った。

「足もとをみやがったな。ふふふ……」

「いやか？」

半九郎も、にやりと笑った。

「いや、たのましい。たいした用心棒だ。そ

ういうお人のほうが、いざというときには、頼りになるのさ。よし、氣にいった。条件はのむぜ。おれを、花屋敷の地下部屋までつれていってくれ。金はそのときに、きれいに払ってやる」

「そうか、よし」

半九郎は、右手の拳で大刀の柄をたたいて久六を安心させた。

「おっと、ちょっと待ってくれ。おれを外につれだす前に、お前さんに、たのみてえことがあるんだが……」

久六は、口ごもった。

「なんだ？」

口ごもっていた久六が、決心したようにいった。

「お前さんを、男とみこんで、たのみてえ」

「大げさだな。言ってみろ」

「いまのおれにとって、くやしいが、お前さんしか信じられる人間はいねえんだ」

「あまり買いかぶるな。おれだって、あぶないもんだぞ」

「たのまれてくれ、旦那。立花屋久六、一生のお願いだ」

「早く言え。たのまれてやる」

「旦那……」

久六は必死の力で弱った上半身をおこし、真剣な顔で半九郎をみあげた。

「この家の離れの廊下の突きあたりに、廁がある……」

「なんだ、お前、廁へ行きたいのか」

半九郎は拍子ぬけした。

だが、久六は首を横にふった。

「そうじゃねえ。旦那に行ってきたらいてえんだ」

「おれに？」

久六は、また口ごもったが、思いきったようにいった。

「あの廁の落とし紙の一番下に、オランダ歌留多の半きれが隠してある。そいつを持ってきたらいてえんだ」

「そうか……なるほど、うまいところに隠したな、久六」

半九郎は首をひねり、素直に感心した。岩松がいくら探しても見つからないはずである。一万両にも、十万両にもなるうという

オランダ歌留多の半片を、廁で使う落とし紙のあいだに隠すとは、意表をついている。

「よし、持ってきてやろう。待っている」

「信じてますぞ、旦那」

久六は、すがるような目つきでいった。

ここで半九郎に裏切られては、これまでの苦勞が、すべて水の泡になってしまふ。

「安心しろ。おれは、そんなオランダ歌留多なんかよりも、目の前の千両のほうが、ありがたいのだ。しかし、久六、そんなからだになりながら、お前もたいした男だな」

半九郎は、なぜかこのとき、ふいに久六という男が、妙にいいもののように思えてもう一度、大刀の柄をたたいて安心させてやったのだ。

しかし、土蔵の外へ出ようとする半九郎のうしろ姿を、まだ疑惑の目で見送る久六だった。

また一難

立花屋久六が、いのちをかけて守りぬいたオランダ歌留多は、廁の中の落とし紙のあいだに、たしかにあった。

多くの男の欲望をひきずり、罪のない女たちを悲運におとしいれて、なおも葛藤の中心にある半片であった。

しかし半九郎は、なんの感情もあらわさずそれを懷中にとすると、ふたたび、久六が待っている土蔵へと、もどりがけた。

裏庭の最も奥まった場所に建っている土蔵のなかから、定と政の心交わりによって助けだされたお静とお雪が、ころがるように出てきたのは、ちょうどそのときだった。

半九郎は、偶然、その四人の行く手へ、立ちふさがるような形になったのである。

「あつ、てめえは！」

半九郎の姿をみて、ぎょっとしたように定がさげんだ。

「たしか、寺尾半九郎とかいったぜ。久六親分の用心棒だ。気をつけろ！」

定の背後から、政がわめいた。

定と政は、お静とお雪を背中にかくすようにして、半九郎の前へ立ちはだかった。

お静とお雪を救いだして、大津屋まで送りどけ、彦兵衛からたっぷり礼金をせしめようと決心して、すでに実行に移してしまった定と政にとっては、いまや、自分たち以外の人間は、すべて敵であった。

もう、あとへ引き返すことはできない。自分たちの直接の親分である岩松はもとより、久六も、久六の側の人間も、すべて敵であった。

「野郎、くたばれ！」

定がすばやく七首をぬき、半九郎の脇腹め

がけて突っこんだ。

わずかに体を左にひねると同時に、半九郎は腰から大刀を抜きはなち、のめった定の脇腹を、逆に下から上へと斬りあげていた。

「げっ！」

というような絶叫とともに、定は背中をまろくして石燈籠にぶつかり、そのままくずれ落ちた。一撃で、定の生命は断ち切られていた。

「お前も、くるか」

血にぬれた刀のさきを、政の鼻さきに突きつけながら、悠然と半九郎がいった。

「わ、わわわ……」

なにか意味のわからないさげび声を発しながら、政はその場に腰をぬかした。

お静とお雪は、たがいに手を取り合い、ひと身を寄せ合っている。

半九郎は、地面に這いつくばった政を見おろし、ゆっくりと大刀をふりかぶりながらいった。

「きさまらのようなやつは、生きていられただけ世間が迷惑する。ついでだから、きさまもあの世へ送ってやろう。心配するな、痛いとか苦しいとか感じるのは、ほんの一時であとはすぐ楽になる」

政は首をすくめ、悲鳴をあげた。

「ま、ま、待ってくれ！」

半九郎のかまえに、嘘でない殺気がみなぎったのだ。

「待ってくれ。助けてください、お願いします。このとおりです。いのちだけは、いのちだけはお助けください！」

地面に頭をすりつけて、政は哀願した。

「そうか。そんなに、いのちが惜しいか」

半九郎は刀をふりかぶったまま、軽く笑った。

「へい、なにしろ、たったひとつしか無いもんですから……」

政は、両手を合わせて、半九郎を伏しおがんだ。

「おれの言うことをなんでもきけば、いのちだけは助けてやろう」

半九郎の気が変わった。

「ききます、なんでもききます。先生の子分になります。お願いです、このとおりです。助けてください！」

「よし、それでは助けてやろう」

半九郎はあっさりといって、すでに息の絶えた定の着物の裾で刀の血糊をぬぐうと、大刀を鞘へおさめた。

「ありがてえ。先生、このとおりです。先生は、あっしのいのちの恩人です！」

政は、ぺこぺこ頭をさげた。

「おい、お前の名は、なんという？」

半九郎はきいた。

「へい、政……政と申します」

「政吉か、政次か、それとも政五郎か」

「いえ、ただの政なんです……」

「ただの政か。よし、さっそく用をいいつけてやる。政、駕籠を三挺都合してこい」

「へえ？」

「久六と、この二人の女を、この家からつれだすのだ。……いやか？」

半九郎の右手が、また刀の柄にかかった。

脅しでない殺気が、全身にみなぎった。

政は、腰をぬかしたのも忘れて、とびあがった。

「わ、わかりやした。駕籠屋をつれてめえりやす！」

「おい、政、駕籠を探しに行くふりをして、そのまま逃げるなよ。いくら逃げても、どこへ逃げようと、おれはかならずお前を探しだして、預けたいのちを返してもらうからな」

「へ、へい、だいじょうぶです。逃げやしません。先生のお腕前は、たったいま拝見した

ばかりで……」

「よいか、駕籠を三挺、この家の裏堀の通用口の外にそろえておくんだ。わかったな。わかったら、いそげ！」

「へい！」

政はすっとなで、夜の闇の中へ消えた。

半九郎の視線が、つぎにお静とお雪にむいた。

「大津屋の女房と、娘だな？」

お静とお雪は、固く身を寄せ合ったままふるえている。恐怖のために足がすくんで、逃げることもできないのだ。

定と政を説き伏せて、やっこの思いで縄を解いてもらい、あり合わせの着物で肌を包んで、土蔵の中から出たばかりだというのに、ふたたび、おそろしい久六の用心棒に出合ったのだ。

「お願いです、私たちを大津屋へもどしてください。お礼は、お望みどおり、いくらでも差しあげます、お願いです」

お静もまた、地面に手をつかんばかりにして、半九郎に哀願した。

「おれにみつかったのが、お前たちの不運だったな。おれは知ってのとおり、久六の用心棒だ。残念だが、お前たちを大津屋へつれて

行くわけにはいかないのだ。久六と大津屋のあいだには、なにか大変な取り引きがあるらしいのでな。まあ、悪く思うな」

「ああ、おっかさん！」

お雪が、お静にとりすがって泣きだした。無理もなかった。長いあいだの責め苦から解き放たれ、やっと自分の家へ帰れるという望みを抱いたとたんに、再度の敵が現われたのである。一難去って、また一難とは、このことであろう。

お静は、あまりにも不運な娘の肩を、つく抱きしめた。

「先生、駕籠を三挺、塀の外へつれてきました」

政がもどってきて、半九郎に告げた。よほど走りまわってきたらしく、肩で息をしている。いまさら岩松の自分にもどるわけにもいかず、なかばヤケになっている政である。

「おう、早かったな。政、お前、なかなか見どころがあるぞ。これから、かわいがってやる」

「へい」

賞められて、政は神妙な顔をした。その政の顔へ、つづけざまに半九郎の命令が浴びせられた。

「土蔵から久六をかつぎだして、駕籠へ乗せるんだ。おれは、こっちの女二人をつれていく」

いいながら半九郎は、お静とお雪の手首をつかんだ。母娘は、その手を本能的にふりほどこうとしたが、半九郎の握力はおそろしく強かった。

久六と、お静と、お雪を乗せた三挺の駕籠は、こうして深川扇橋の見世物師岩松の家を離れた。

半九郎と政が、その駕籠を守るようにしてつきそい、深夜の江戸の町を、ひた走りに走った。

駕籠の中の久六は、自分がいまやっと岩松の家から救いだされたことを、自覚していなかった。意識を失っていたのである。政が土蔵の中の久六をかつぎだすとき、久六は激しい苦痛と衰弱のために、気絶したのだ。気絶というよりも、すでに冥土への第一歩を踏みだしているのかも知れない。

ひろいもの

女掏摸のお京の口から、大津屋の母娘が岩松の家に監禁されていることを知った目明し

黒縄の五郎蔵が、勢いこんで乗りこんできたのは、半九郎の一行がこの家を去ってから半刻ほどたった後である。

そのころになると、眠っていた子分たちもようやく家の中の異変に気づいて、あちこちの部屋から起きだしてきた。

親分の岩松が血まみれになって絶命している姿を発見したときは、仰天して、家じゅうがひっくり返るような大騒ぎになった。

殺されているのは、岩松だけではない。裏庭の土蔵の前には、定も斬られて血だらけになって死んでいる。

そして、土蔵の中に縛りつけておいた二人の女と、久六の姿が見えない。見張り番をしているはずの政が消えているのも、妙だ。

用心棒の寺尾半九郎が居なくなっているの、眠りからさめた半九郎が、二人の女と久六をつれて逃げて行ったということまでは、想像がついた。

しかし、子分たちはこの後始末をするのにどこから手をつけていいのか、わからない。あまりの変事に、ただ呆然としているだけである。

そんなところへ、黒縄の五郎蔵が乗りこんだのであった。

血の海の中で、岩松が畳をかきむしって死んでいるのは、ただ凄惨なだけだが、そのそばに、素ッ裸のまま手足を縛りあげられた年増ざかりの女が、蒼白になってふるえているのは、色っぽいなかにも、なんとなく珍妙な雰囲気であった。

「おめえは、だれだ。だれが、こんなにひどく縛りやがったんだ？」

と、五郎蔵はかがみこんで、縄目のあいだからとびだしている桃色の乳首を指でつまみながらきいた。

だが、お仙は唇を紫色にして、ただわなわなとふるえるだけで、返事ができない。

「おい、この女は、なんだ。岩松の女か。なんのために、裸で縛られているんだ？」

集まっている子分たちにふり返って、五郎蔵は声をかけた。

しかし、子分たちも、たがいに顔を見合わせて、五郎蔵の再度の問いにも答えようとしていない。

うっかり本当のことを答えるわけにはいかないのである。岩松と久六の、欲と色のからみあった争いのいきさつを、岡ッ引きである五郎蔵にきかせるのは、いかにもまずい。

だまりこくった子分たちを見渡して、五郎

蔵は、陰険に、にやりと笑った。

「そうか。言えねえのか。言えねえところをみると、おれにしゃべっちゃまずいことがあるんだな。まあ、いい。この女を番屋へこのまましょっぱいて行って、女の口からきくまでだ」

お仙の顔がひきつれ、ますます蒼白になった。なにか弁解になることを言おうとするのだが、舌がもつれて、声にならない。

五郎蔵は冷笑をうかべて、廊下から裏庭へおりのた。定の死体を調べるためである。

夜がしらじらと明けそめていた。樹の多い裏庭もようやく明るくなって、小鳥のさえずりが始まっている。朝露に湿った庭土を踏んで、五郎蔵は裏庭のあちこちを歩いた。

並んで建っている土蔵のあたりへ、とくに鋭い視線を送りながら、定の死体を調べはじめる。

「おや？」

血に染まった死体を用心ぶかくひっくり返した五郎蔵の目が、異様なものを見つけて光った。

オランダ歌留多である。

しかも、まん中から意味ありげにななめに切れて、半片だけのオランダ歌留多である。

五郎蔵は、その半片をひろいあげ、ていねいに土を払ってから、袖の中にいれた。

下手人をあげるときの手がかりになるにちげえねえ……と、職業柄、そう直感したのだった。

そして、五郎蔵の直感したとおりだった。

オランダ歌留多の半片は、定を斬った瞬間に、寺尾半九郎の懷中から落ちたものであった。

「この下手人は侍だな。それも、よっぽど腕のたつやつだ。たったひと太刀でやられている。見事なものだ」

五郎蔵は、つぶやいた。

それから、そのへんをうろついている子分へ声をかけた。

「おい、この家に、大津屋の女房と娘が居るって話をきいたんだが、どこに居るのか教えてくれ。お上の御用だ。隠すためにならねえぜ」

黒縄の五郎蔵は、じつはこの目的のためにわざわざ真夜中を深川までやってきたのだ。

しかし、子分は首を横にふった。

「なんのことですかい、親分。大津屋の女房だとか、娘だとか、さっぱりわかりませんねえ。そんな者はおりませんよ。嘘だと思っ

でしたら、家の中を存分に改めておくんなさいまし」

その子分の表情には、たしかに偽りの影はなかった。鋭い五郎蔵の訊問にも、平然としている。

——くそッ、母娘をどこかへ隠しやがったな！

岡ツ引きとしての五郎蔵のカンは、江戸でも指折りである。

この家から、母娘をもう運びだしやがったんだ……すぐにそう察して、舌打ちした。

ヤレツケの見世物師の子分だけあって、どいつを見ても、したたかな面がまえである。

いまここで締めあげても、泥を吐くような男は居そうにない。

——まあ、いい。あの女を責めあげるほうが早道だ。あの女の口から、きっと吐きださせてやる！

五郎蔵は、あわてなかった。

岩松が殺されている部屋へもどると、お仙を縛ってある縄を解いた。

「ありがとうございます。親分、あたしはお仙と申します。こんなところを見られて、あたしゃもう親分さん、恥ずかしくて、恥ずかしくて……」

すがりつくようにして礼をのべるお仙へ、「礼をいうのは、まだ早いぜ。早く着物をきる。着物をきたら、また縄をかけてやる。お仙とかいったな。番屋へしょっぱいて行つてとっくりとききてえことがあるんだ」

五郎蔵は、突き放していった。

「あたしゃ、なんにも知りません。ほんとになんにも知らないんです。助けてくださいよう、親分」

お仙は、大げさな泣き声をあげた。

その表情と泣き声で、五郎蔵は、この女、なにかを知っていやがるな、と直感した。お静とお雪の行方も、知っているにちげえねえ……と思った。

ようやく着物をきて、帯をしめ終えたお仙に、五郎蔵は容赦なく縄をかけた。

黒い縄である。わざわざ黒く染めた愛用の縄を、五郎蔵は十束持っている。そのうちの一束は、いま今戸八幡の『花鳥』の離れにいるお京の素肌に、きびしく巻きついていてはげだ。

「あッ、痛ッ、痛いじゃありませんか、親分さん。痛いッ！」

うしろ手にきりきりと縛りあげられて、お仙はなおも泣き声をあげた。お仙にとっても

これは一難去ってまた一難であった。

「じたばたするところを見ると、やっぱり怪しいな。おい、お仙、静かにしろ。観念したほうが身のためだぜ」

番屋へしょっぱいて行くと、口では言っても、この黒縄の五郎蔵には、お仙を役人に引き渡す気持ちは小指のさきほどもない。

『花鳥』の離れへひっぱりこみ、楽しみながら、じつくりと吐かせてやろうと、そのときのことを想像して、もう口のなかに生唾を溜めている五郎蔵である。

「親分さん、かんにんして。ああ、痛い、痛い！」

お仙は、縛られた上半身を揉むようにして悶える。

「うるせえ。さあ、立つんだ。観念して立ちやあがれ！」

五郎蔵は縄尻をつよく引いて、お仙を立たせた。背中縛られた左右の手首が、急に吊りあがって、お仙はまた、ひいッと派手な声をあげた。

世間にはまったく隠されている裏側の世界で、血なまぐさい暗闇が昼夜のべつなくつづけられているその原因が、いま自分の袖の中に入っているオランダ歌留多の半片にあると

いうことを、夢にも知らない黒縄の五郎蔵であつた。

そして、縄をかけられて引き立てられていくお仙も、まさか自分の縄尻をにぎる五郎蔵の袖の中に、すでに幾人もの生命を奪っているオランダ歌留多が鎮座しているとは、思いもよらないことだつた。

火の乳房

——ちくしょう、ふざけやがつて！

おりんは、胸のなかが煮えくりかえるようだつた。指さきが、ぶるぶるふるえている。

嫉妬である。五郎蔵が離れに置いていった若い女のこと、気になって気になって仕方がないのだ。

「おめえがヤキモチを妬くような女じゃねえから、安心して見張つてろ」

といって五郎蔵は出かけて行つたのだが、安心できる女か、できない女か、そう言うときの五郎蔵の目の色をみれば、おりんには、すぐわかる。

妬くな、というほうが無理である。調理場の火を落とし、店をカンパンにしてから、おりんは胸に一物を秘めて、そつと離れへ忍ん

でいった。どうしても心が落ちつかない。

この『花鳥』には、ほかに住み込みの少女が二人と、婆やが一人いるだけである。

離れ座敷の床柱に、お京はうしろ手に縛りつけられ、口には手拭いのさるぐつわを噛まされていた。

おりんは、ひと目みて眉をひそめ、それから、のこのこと部屋の中へあがりこんだ。

のぞきこむと、さるぐつわの手拭いは、頬までくいこんでいる。これではとても、声をだして、助けを呼ぶことなんか、できやしない。

岡ッ引きの五郎蔵が、念入りに縛りつけていったのだから、女がいくらもがいたつて、縄は解けるはずもない。

——これだけしっかり縛つてあるんだつたら、なにもあたしが、いまさら見張ることなんか、ありやしないじゃないか。

おりんは、また胸をむかむかさせる。

自分という女がありながら勝手なことばかりしている五郎蔵が、憎らしくてしようがない。そしてまた、自分がいつ棄てられるかわからないという不安も、つきまとうのだ。

お京の肌をおおい隠しているものは、乳房の上下にかかった縄と、両足首を縛つて、床

柱につなげてある縄だけである。

つまりお京は、その二本の黒い縄しか、肌につけていないのだ。縄が解けたとしても、この姿では、外へ逃げだすことはできない。

——それにしても、若いくせに、なんてまあ色っぽい、からだの女なんだろう。

おりんの胸に、またむらむらと嫉妬が湧いてくる。自分にはすでにない、若さに対する嫉妬だつた。

この若い女に、なにか意地悪をしてやりたい。どうせ相手は床柱に縛りつけられて、身動きできないでいるのだ。

「ねえ、お前さん。見たところ、まだお若いのに、どうしてうちの旦那にしょっぱかれるような破目になっちゃったんだい？」

おりんは、きいた。お京は無言である。

「かわいそうに、素ッ裸にされて、そんな気味のわるい黒い縄でぐるぐる巻きに縛られてさ。まあ見たところ、堅儀でもなさそうだけれど、お前さん、おうちはどこなんだい？」
いくらおりんがきいても、お京に返答のできるはずはなかった。さるぐつわを噛まされているのだ。

お京は、返事のかわりに、両眼を大きくひらき、首を横にふりながら、おりんをみつめ

た。

もしかしたら、この女が自分を助けてくれるかも知れない、と思ったのだ。わらにでもすがりたいというのが、いまのお京の気持ちだった。

あのいやらしい岡ツ引きがもどってくる前に、なんとかしてこの部屋から逃げださなければ……。

五郎蔵がここへもどってきたとき、自分のからだになにをするか、お京にはもうわかっていて。いやだ、あんな蛇みたいな卑怯なやつ、の慰さみものになるなんて、死んでもいや

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。

だ。

「お前さんの名は、なんていうんだい。うちの旦那と、どういう関係があるのさ？」

いいながら、おりんはお京の髪の毛のうしろへ両手をまわして、さるぐつわを解いた。

やっぱり、意地悪をするにしても、声のだせる相手のほうが張り合いがあると気づいたのだ。

やっと呼吸が自由になって、お京は大きく息をついた。

「あたしは、お京っていうんです。なんのために、五郎蔵親分につかまったのか、自分で

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しては枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対しては、も応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供にしましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事を差し上げます。

もよくわからないんです。あたし、なんにも悪いことをしていないのに……」

お京は、とぼけて言った。

いまこの女に、本当のことをしゃべってもしかたがない、と判断したのだ。

どうやら、あの陰険でいやらしい岡ツ引きと、この女とは、ただでない関係があるらしい。

この女の嫉妬心をそそのかして、なんとかここから逃げだしてやろう……。

頭の回転のいい女、お京は、とっさのあいだに、そんなことを思いついたのだ。

「ふうん……。なんにも悪いことをしないのに五郎蔵親分はあんたを縛ったのかい？」

おりんは、疑惑と嫉妬をむきだしにして、膝をのりだしてきた。

さるぐつわをはずしたお京の顔は、なかなかの器量よしである。五郎蔵は、こういう、きりりとひきしまった感じの、目鼻立ちのはつきりした下町娘が大好きなのだ。

「ええ、そうなんです。このお部屋につれてこられてからも、親分さんはあたしを裸にして、いやらしいことばかりするんです」

お京は、ここぞとばかりに、目に涙をうかべて言った。

十三のときから拘摸の修業をしているお京である。こんな、ソラ涙をこぼすのは朝めしだ。

「ふうん、そうかい。うちの旦那が、お前にいやらしいことをねえ……」

おりんは動揺し、顔色を変えている。

「ええ、もう、あたしを縛っておいて、なめたり、吸ったり……」

「なめたり、吸ったり？……」

おりんの瞳の底が、青く燃えはじめた。

しめたッ、とお京は思った。

「おかみさん、お願いです、あたしを助けてください。あたしは、両国の水茶屋で働いているんですけど、もう、きまった人がいるんです。来年の春になったら、その人と世帯を持つんです。それなのに五郎蔵親分は、あたしをこんなひどく縛りつけて、めかけになれ、めかけになれって言うんです。おかみさん、あたしを助けてください、お願いです。この縄を解いて、あたしをここから逃がしてください！」

お京は、身を揉んで訴えた。両眼から大粒の涙が、どつとあふれでる。

縄でしめつけられ、大きく隆起している左右の乳房の上に、その涙の粒がしたたり落ち

て、お京の話に迫真力を添えた。

——ちくしょう！

おりんは、奥歯を噛んだ。

五郎蔵がお京をくどきながら、ねちねちと責めさいなんている光景が、おりんには、はっきりと目の前に浮かんでくるのだ。

なぜなら、おりんもまた、同じような手段で強引にくどかれ、五郎蔵のめかけになった女である。

五郎蔵が、どういう卑劣な、破廉恥な方法で、目星をつけた女を落とし入れるかを、肌で知っている。

おりんの全身の血が、嫉妬のために音をたてて逆流した。齒の根が合わず、ガチガチとふるえた。

——ちくしょう、どうするか、おぼえていやがれ！

おりんは、年甲斐もなくとりみだした。

すぐ目の前に、みずみずしいお京の乳房があった。縄にしめつけられて、多少ゆがんではいるが、青い筋が透きとおって見えるほどの、美しい、色の白いふくらみであった。

おりんは、その若い隆起の最も敏感な先端を、指のさきで、思いきり強くつねりあげたのだ。

「ひいッ！」

ふいをつかれて、お京はすさまじい絶叫の声をあげた。

「ちくしょう、お前がきれいだからいけないんだ。お前があたしより若いから、いけないんだようッ」

おりんは、夢中でわめきながら中腰になると、無防備にさらしているお京の胸のうす赤色の先端を、二度、三度とつねりあげた。

「ひいッ、ひいッ！」

お京はのけぞり、激しく肩をふるわせた。縄がぎりぎりといくこみ、その苦痛のために、お京は息がとまりそうになった。

「ちくしょう、本当はお前のほうから、五郎蔵をたらしこみやがったんだろう！」

おりんは立て膝になると、お京の胸の左右のその先端を、両手で同時に力いっぱい、つねりあげた。

「ひいッ、ひいッ、ひいッ！」

火のような苦痛がお京を襲い、お京は悲鳴をあげつづけた。ふたつの乳房が、火に包まれているような苦痛だった。

※

※

※

※

ここに一個の単細胞があります。時間が経つに従い分裂増殖を求めます。そして、仲間をもっともと殖やして行きたくなつて、触角を創り出し、臭いのする方に伸ばしていったら信号を送り、自らの存在を仲間知らせて結合を呼びかける……というような状態が、現在の私のM的要望に似ているように思います。この単細胞の願いがいつ実を結ぶかは未知数ですが、出来るだけの触角を振り廻して、仲間を求める信号は、きつといつまでも送り続けることでしょう。

その触角に、仲間の応答ではないが、感度のあったものを書いてみます。

1、カメラ・ハントについて

四十二年の十月号の、大島照代の浣腸が良かったのですが、惜しいのは顔が隠れていることです。いろいろと制約も多いこととは思いますが、『メンズメイト』へ5月号でさえトイレ記事を数ページにわたって載せ、若い乙女が太い腿をマル出しにして便器の横に立っているフォトが掲載されているのですから、マニアの多い本誌などでは、左近麻里子さんあたりが、表情も豊かに仰臥開脚して挿込み便器の上にお尻を

感想

M女の要望

小杉 千恵

のせている姿態ぐらい、載せてもらいたいものだと思いますが、許されないことでしょうか。それが駄目なら、せめてのこと、他誌なみに白い陶器の横で、艶然とはほえみながらお尻を見せているぐらいのものをお願いしたいと思います。

2 告白について

原薫さんの『色彩画の記憶』はすばらしかったのですが、近頃は、あまり「告白」と、りきむほどのこともないようなことが多いよう

性では控えめな笑子さんと、Sの東区の女王さんが人気があるようですし、バナナ切りご希望のM女初枝さん。浣腸好きのみち子さん……等々。楽しい雰囲気、皆さん仲々はりきっていらっしゃること。

4 カットについて

四月号と六月号の、豪城二さんのがとても好きです。表情や姿態から、その時のヒロインの置かれた状況と心理状態までがにじみ出ているようです。豪さんが、何んの

制約も頭に置かず、自由に描いた絵をプレゼントされた夢を見ました。春川ナミオさんの絵は、やはりトイレものが私には良いと思えます。

5 興味のあった記事に

ついて

に思います。ただ、六月号の『我がSMプレイの実態』が、幸崎さんの奥さんの正面フォトの美しさに救われて成功しているように思われますが、いかがでしょう。

3 読者通信について

私と同じく、孤独な単細胞がそれぞれの触角を振り立てて交歓している、楽しい場所の感じ。男性では揮マニアの江川さん。神酒の茂男さん。下着フェチの青木さん。卵遊びの串野さん。浣腸のお好きな今井さん。女

四月号の『責場、SM場面見聞録』が、奇妙に私の心を魅きつけました。文中の映画に出る女の羞恥を考えると、ゾクゾクする程、私のマゾ心がくすぐられるのです。この種の映画を観る機会は、まだ私にはあまりありませんが、ぜひ、金剛さんの『続SM場面見聞録』などをお願いしたいと思います。



男性虐待快樂術 (第七話)

BAR・SADO物語

前

篇

馬族 保

(一)

福重健一は、ふと目がさめた。

意識がはつきりしてくると、最初に気づいたのは、胸の上に毛布が掛けられていたことだ。上体を起こし、部屋の中を見まわした。どうも勝手がちがう。

洋室であった。調度品や部屋の中の装飾の色彩からくる感覚は、明らかに女性である。それも若い女の匂いさえ、漂っている。はてな。

強いほうでもないのに、今日は珍しくアル

コールの量が多すぎたようだ。花見の宴席であったからでもあるが、隣り合わせの座席にいた凄惨いほどの美女が連れの二、三人とともに合流して、どんちゃん騒ぎになった。たしか鹿沼妖子だといった。

よせばいいのに、がぶ飲みし、はしゃいだように思う。名前だけは、ちゃんと記憶していた。そのほかは何も憶えていない。彼女の職業も勤め先も住所もわからない。連絡先ぐらひは、聞いておくべきだった。訊いたのかもしれない。

とにかく、この絶好のチャンスを逃すとは

よくよくついでにいないと、思うほかはなかった。大失敗だった。

それにしても、おれはどうして、ここにいるのだらう。見知らぬ部屋であった。

そのとき、ドアがあいて、むらさき色の繻子の布地に、牡丹の図柄を銀糸で刺繍した支那風のワンピースを着た女が現われた。

「あら、おめざめ」

こぼれるように笑った。皓い美しい歯並みが印象的だった。

「ここはどこでしょう。貴女は？」

半身を起こした形で、女の顔を見上げて訊

いた。

「わたしの家よ。わたしの名は、木暮ナナ。どうぞよろしく」

唇の左端の下にあるホクロが、実に蠱惑的である。どちらかといえば、愛くるしい顔だ。ちだった。このての顔は小柄の美人に多い型だ。だから初対面だと、なぜということなしに、奇異感を抱くかもしれないのである。

身長は一六四センチはあるにちがいない。

踵のたかい靴を穿いたら、ゆうに一六七センチの高さになるだろう。その發育した身体の上の顔だけが美少女のように愛くるしく、小さく魅惑的な唇と切れ長の涼しい黒い眸とがちょこんと肩の上に載っているのである。

しばらくして眼が馴れてくると、これはたいへんな男殺しの美人であることがわかる。

この種の女は、男をくい殺す型である。瀕死の断末魔の男の身もだえを、ニッコリ笑って冷酷な眼差しで視おろしながら、じつくり堪能し、くいつくす牝のかまきりだ。

むろん、福童健一は、始めからそれを見破ったわけではなかった。

こぼれるようなナナの笑顔の中に、彼は何となく異常な妖気を感じたような気がした。「それは、ご厄介おかけして恐縮しました。

僕は、全然覚えていません」

「あなた、お酒強いほうじゃないわね。フリーって、顔をしかめていたわ。二人がかりで、肩を貸して歩いてるところを、わたしの車に乗せてあげたの。お腹空いたでしょう。ご馳走はないけど、よろしかったら、食事と一緒に如何」

「いや結構です。一応、帰ります。いま、何時でしょう」

福童は、彼の腕時計に眼をやった。午後五時すこし過ぎを指していた。

「午後五時七分」

「だいたい合っています。——お世話おかけしてすみません。ありがとうございます。改めてお礼に上ります」

「お礼はいらないわ。よろしかったら、お店のほうにお寄りになってね」

「お店？」

「そう。渡辺通りの九州電力本社前の紅春飯店横の路地を這入って、左側。BAR・SADOっていうの。あなたは、上等のお客でもなさそうだけど、まあいいわ。ムリしてお飲みにならなくてもいいのよ。気楽に、お遊びにいらして頂戴」

「BAR・SADOですね。貴女は、ママさ

ん？」

「ええ」

「かならず行きますよ」

「うれしいわ。じゃ、ゲンマン」

ナナは少女のように笑って、小指を健一のそれにかからませた。

「お名前、聞かせて」

「福童健一」

「職業は？」

「千代田不動産常務」

「あら。常務さん。その若さで——たのもしいわ」

「親の光りですよ」

「千代田といえば、祇園町通りの千代田マンションとも、関係があるのかしら」

「おやじが建てたものです。一昨年の夏、水飢饉で困りました。これに懲りて、昨年井戸を掘って、屋上に貯水タンクの設備をしましたから、もう大丈夫です」

木暮ナナの小さな頭の中を、素早いテンポで巡回する、ひらめきがあった。

「じゃ、また。さようなら」

「お約束、間違いなく、来てよ」

福童健一は、そろそろ昏れなずみかけた街の舗道に、もう精気をしゃんととり戻した若

い身体を叩きつけるようにとび出していった。

(二)

さつき車の中でみた腕時計は、八時少し前を指していたから、もう八時を五分ぐらい廻っている頃かもしれない。

ドアを押して中に這入ると、まだ時刻が早いのであろう、客は二人切りであった。ホールの内部には、暗青色の照明が、しっとりしたムードを醸していた。スタンドに並行して固定した回転椅子が十脚ばかり備えつけられていたが、スタンドのはずれの奥まったところには、テーブルが四組、黒レザー張りの椅子を四脚ずつ、一つのテーブルに配置して客を待っていた。

「いらっしゃい。——あらっ、常務さんね。うれしいわ。お約束たがえずに、ようこそ。さあ、どうぞ」

木暮ナナは、スタンドの下の小さな扉をくぐって出て来た。

奥のテーブルに招じると、

「ほんとうによく来て下さったわね。こころ待ちしていましたのよ。四日目でしょう。今晚あたり、もしかしたら、と思って」

「それはどうも。いろいろ、やば用があるも

のだから。——先日は、たいへんにお世話をかけました」

「お忙しくて、うれしい悲鳴ってところね。

あやかりたいわ」

照明の色彩にそまったナナの顔は、妖しく輝く眸と赤い唇とで、咲き誇った緋牡丹のよう華麗だった。

「お飲物は何にしましょう」

「ビール」

「かしこまりました」

スタンドの横から、階段がついているらしく、階上に向かって、

「由美ちゃん、蘭子ちゃん、今日子ちゃん、お客様よ。何をしてるの」

「はアい」

二階の部屋に人の気配がし、板の階段をトントんと降りてくる足音がきこえ、三人の女が現われた。

「いらっしゃい」

三人とも顔立ちは違っていたが、共通な点は、身長が一六〇センチ以上はあるだろうこと、マダムより二つか三つ若いこと、肉つきが揃っていいことだった。それぞれ特長があって、魅力のある顔立ちと肉体美の、もち主である。

三人は、ひとりずつ散らばって、お客の席につく。

「グーッと一と息に召上れ」

注がれたビールを、福童健一は、そのとおり一気に飲み乾し、コップを由美という女に差した。

「サンキュー」由美は、コップのビールを半分、飲み、健一の顔を見た。

「お客さんはS? それともM?」

「——」

福童には、由美の言葉の意味がわからなかった。反問するように、由美の恰好のよい唇を眺めていた。

「SかMかと訊いているのよ」

ふいにスタンド席にざわめきが起こった。

ナナの語勢が急に強くなると、客のひとりを叱りつける声がした。

「聞きわけのない男ね。まだ、早いっていつてでしょ」

諦めわるく、ブツブツとつぶやくように哀願する男の頬に、いきなりピシリとナナの平手打ちが、はじけた。

「あとで、ゆっくりいじめてあげるわよ。それまで、おあずけよ。辛抱なさい」

その夜、福童健一は、由美とビール一打をあけて、グロッキーになり、長椅子の上に寝込んだ。

十時すぎ目がさめた。いつの間にかホールは満員だった。

マダム・ナナが、ミニ・スカートのしなやかな身体をくねらせ、もんしろ蝶のようにテーブルからテーブルへ、椅子から椅子へと軽快にとびまわっている。

「ママさん、勘定」

ナナが隣りのテーブルに巡回して来たとき指を立てて合図した。

「あら、もうお帰り。ゆっくりしてらっしゃい。だめね、すぐ眠ってしまふんだから。この次は、二階の部屋でお飲みになってよ。幾ら眠ってもいいわよ。特別待遇にしてあげるわ」

「うーん、そうする。どうも、アルコールに弱くて、それでは、取引に成功しないって、おやじに叱られるんです」

「でも、その世間摺れしてないところが、とても魅力よ。わたし、あなたを誘惑してやるうかな」

「千客万来だな。ママさんの魅力かな」

「この次は、いつ来て下さるの。二、三日う

ちに、また来てね」

「ああ、きつと来ます。勘定、幾ら？」

「七千円いただいとうかしら。——由美ちゃん」

由美が赧い顔をし、眼をトロンと宙に浮かせながら福童の傍に近づいて、抱きついた。

「もう帰るの、薄情者。あなた、プレイボーイじゃなか。可愛がってあげようと思ってたら、グーグー寝てしまふんだもん。つまらないわ。ねえ、坊やは、S？ M？ どっちなのよ」

「——」

「白ばくれてるわ。ちゃんとわたしには、わかってるのよ。いっておきますけど、由美はSだから、そのおつもりで。凄いわよ。わたしにMを要求しても、だめってこと」

「由美ちゃん、そのS・Mって、どういうこと？」

「わかってるくせに。あなた、案外カマトトね」

「本当に知らないんだよ」

「あら、ほんとう？ 見直したわ。ようし、じゃ、由美が筆卸してあげるわ」由美は、

健一の耳許に唇をくつつけんばかりにして、

「この次は二階の部屋にご案内するわ。特別

サービスするわ。明日か明後日あたり、またいらしてね」

「ああ」

ママと同じことをいってるな、と思うと、おかしくなって、健一はひとりでニヤリと笑っていた。

「はい。おつり」

ナナが、おつりを渡しながら、ギューッと掌を握りしめた。

福童が表の路地に出たときだった。

送って出た木暮ナナのあとを追って、四十四がらみの男が泳ぐように寄って来た。ナナに平手打ちをくった男だ。

「ナナ女王さま！」

ナナの足許に土下座すると、いきなり彼女の片足を抱えて、その甲に接吻の雨を降らせはじめた。

「ばっかっ！」

ナナは穿いているハイヒールの靴で、男のあごを、したたかに蹴りあげた。痛撃を受けて俯伏せになるところを、ナナの靴が首根っこをグイと踏み敷いた。

「ふ、ふ、ふ。この男は、わたしにこんな目にあわされると、よろこぶのよ。こいつ、Mなの。——おい、タン壺におなりッ！ やる

からサ」

靴をどけられた男の顔が、口を大きく開いて、今度はあお向けに寝返りをうった。ナナは唇をつぼめて、男の口に照準を当てながら糸のようなつばきを、流し込む。

男は反芻動物のように、ムニャ、ムニャと口中で賞味していたが、咽喉を鳴らしてゴクゴクと飲みこんだ。

「こいつ、わたしのなら、ネクタールだって飲むのよ。面白いでしょう」

こぼれるような微笑を湛えて、平気で悪魔の言葉をつらねるナナ。

福童健一には、ナナのいうネクタールの意味はわからない。しかし飲むという言葉で、だいたいの想像はつく。由美に再三、聞かされていたMの意味も、さっきのナナの言葉から、はつきり理解できた。

すると突如、福童健一の体内に潜伏していた名状しがたい感情が、うつぽつと噴きあげて来た。

異常の興奮の血潮が騒ぐ。

「さようなら」

怒ったようにいい捨てる、福童は、路地を一気に駆けぬけて大通りへ出た。

(三)

体中に熱気がみなぎっているくせに、皮膚には、うそ寒さが纏いついていた。十時半。……どちらつかずの時間であった。

タクシーを拾って帰ろうかと思った。往来者の減った道路の左側をゆっくり歩いているとうしろから駆って来た空車が、速度をおとし徐行しながら福童とならんだ。

クッションに坐ったときだ。彼のあたまたにひよいとクラブ・デカメロンの店の名前が浮かびあがった。

福童は、運転手に行先を伝えた。

旧博多駅前築港へ通ずる一直線の道路を小山町通りというのだが、デカメロンは、交叉点へ出る手前の右側の立海ビル地下にあった。

満員の盛況だった。

デカメロンは、ゴーゴー・クラブだ。

二つのステージの上で、ゴーゴーガールが両腕を振り、腰をくねらせ、網タイツの脚で調子を取りながら、夢幻の狂騒曲を踊っていた。

ステージを取りまいて、ホールには、若い男女の群れが腕と脚の動作を音楽のリズムに

合せて、陶醉境に没入していた。男の中には年配の客の姿も八、九人見える。曲はキープ・ミー・ハンギンド・オンである。

楕円形の室内の真ん中を区切り、西側の客席は、五〇センチぐらいの段を設けて高くしその裏に、いわゆる匿し照明の装置があり、機敷には朱の絨緞が敷き詰められている。大型の丸テーブルが間隔ごとに配置してあったが、一つのテーブルの円座に、これも丸型の分厚い鞆し皮の座布団が六枚ずつ敷かれていた。

実際にミニ・スカートのホステス達が客を挟んで坐ると、まるでアラビアン・ナイトの宮殿の現代版を連想する光景だった。

曲が終って、照明が明るくなった。案内のボーイが、

「相席でもよろしかったら」と念を押した。

「ああ、いいとも」

愛くるしい悪魔、ナナの幻影から一刻も早く遁げ出したかった。

「相席お願いします」

奥まったテーブルには、五十年配の客と若い女が三人いた。

福童健一は、軽く会釈して坐り、ホステスにビールを命じた。

間もなく照明が暗くなり、グループ・サウ
ンズのエレキが次の曲を奏しはじめた。

「お客さん、踊りましょうよ」

ホステスの一人が誘った。

「のどが渴いたから、ビールでおさえたあと
にしよう」

たしかに、咽喉がカラカラに渴いていた。

運ばれたビールを、一杯グーッと飲み干した
ときの美味さは、格別だった。

「ああ、うまい！」

ビールがこんなに美味しいのは、始めてであ
った。そのときである。福童健一は、新鮮な
果実を発見したように眼を見張った。

「あっ、あの女だ！」

彼の視線は、五メートルを隔たない距離の
ステージの上で踊っているゴーゴーガールに
吸いついた。

あれから一日も忘れたことのない、花見の
宴席に合流して来た女——鹿沼妖子だった。

「妖子さん！」

機敷の席から降りると、健一は、つかつか
とステージの鹿沼妖子の脚の近くまで寄って
行った。

妖子はカッコいい身体をリズムに合わせて
弾みながら健一を見下ろし、片目をつぶって

笑って見せた。超ミニである。肉づきのいい
太腿まで露出している。

「その席にいます」

ちょっと腰をかがめ、健一の口に耳を藉す
恰好をし、指差した場所をチラッと流し目で
たしかめると、分ったというように、うなず
いた。

やがて曲は終わった。次の曲の演奏にうつる
までの短い時間を、ステージの下で踊ってい
た本もののゴーゴーガールに耳うちすると妖
子は健一のテーブルに来て横の席に坐った。

「この前は面白かったわ」

「そうですか。僕はだらしなくて面目ない」

「いいわ。これから、わたしが仕込んであげ
るから」

「毎日、貴女のことばかり想い出していまし
た。勤め先も、連絡先も聞いてなかったもの
ですから、それがくやくして」

「電話番号、あとで教えるわ。そこはわたし
の悪友の住んでいるマンション、かならず連
絡してくれるの」

「妖子さんに会えて、僕はすごくうれしいの
です。今晚は飲み明かしましょう」

「強がりいって大丈夫？ また、グロッキー
になるんじゃない」

「ボーイさん、ビール」

木暮ナナの悪夢から解放されたい。おれは
鹿沼妖子に一目惚れしている。誰が何といお
うと、妖子を手離すものか。ナナは、おれを
没落させる毒蛾だ。妖子だけが、おれの恋を
正常な形で受け入れてくれる女性だ。ぜった
いに、おれは妖子を手離しはしない。

福童健一は、祈るような気持で念じるので
ある。

黄いろの地に黒猫の模様をデザインしたワ
ンピース姿の妖子の顔が、しだいにかすみは
じめた。

「妖子さん」

睡魔が襲ってくると、傾向かける身体を何
回となく起こしながら、妖子の手を握りしめ
て、名前を連呼する。

「妖子は、ここにいますわよ」

「妖子さん」

そこまでが限界だった。荒い呼吸使いがつ
づき、姿勢がぐらついてくると、福童の身体
は、絨緞の上に長くのびてしまった。

「あら、あら。だらしないわね」

鹿沼妖子は、健一の頭を膝の上に載せ、乱
れた髪を指先で掻きあげてやりながら、へあ
あ、何て可愛い男だろう。この坊やは、まだ

女を知らないらしい。わたしが戴いちゃおうかな」

「妖子さん」

「ここにいるわよ。ほら、わたしが妖子。わかるの」

掌で軽く頬をたたきながら顔を近づけて、

「一と眠りしたら、ラクになるわよ」

「妖子さん」

ふいに、健一の両手が妖子の身体にしがみついて来た。妖子も衝動的に反応を示した。彼女の朱い唇が、うわごとのように動く男の唇をふさいだ。

福童健一の感覚は、眠っていたわけではない。その瞬間、火花のように燃えはじめた。妖子が、舌を口中に差し入れると、健一は一層しがみついて来たが、びっくりするような強い力で、恋する女の舌を激しく吸いつづけた。

(四)

土地開発の用件で、長崎に三日間出張して帰ると、健一は、妖子恋しさに矢も楯もたまず、着替えをする前に電話を入れてみた。聖子という女が電話口に出た。妖子は、いま外出しているという返辞だった。女は、あと

で、そちらに電話するように伝えるから、その電話番号を教えて下さい、といい、福童のいう番号を、メモに書き留めているらしい様子であった。

その日の夕刻、六時四十分ごろ、妖子から電話がかかった。

「妖子さん、健一です。すぐお会いしたいのですが、構いませんか」

「そうね、軽く食事しない？ 妖子、天神町の岩田屋の角にいるから、自動車で迎えに来てね」

「十五分ぐらいして行きます」

身長一六七センチ、体重六〇キロ、長い髪を、むらさきのヘア・バンドでしばり、両肩から背中に垂らしている。長めの輪廓のはっきりした派手な顔だちである。それだけに、胸をV形にひらいた真紅のワンピースがよくうつった。おもわずハッと息をのむ華やかな美貌だ。

妖子に乗せると、車は彼女の示す唐人町の方角に駛り出した。

『時雨』の前で車は駐まった。おにぎりとお出し、雀の丸焼き、それに若茄子の漬ものを注文して、腹ごしらえをする。

アルコールに強くなりたいという健一のた

めに、妖子が配慮してくれた策だった。

時雨を出ると、もと来た道を引返し、一気に東中洲まで駛り有料駐車場に車を預けた。

その夜も、健一はせっかくの腹ごしらえのかいもなく、泥酔した。キャバレー・チャイナタウン——クラブ・不夜城——デカメロンと梯子しているあいだに正気をうしない、バー・サドに着いたときは、生水ばかり要求する始末だった。

妖子も、かなり酔っていた。

クラブ・不夜城での話だが、ホステスにチップをやってほかのテーブルに行かせ、健一は妖子の胸に顔を埋めて、接吻を求めた。

「妖子さん」

「だめよ。人目があるもの。あとで、ホテルに行きましょう」

「いま、して」

「だめだったら」

「ねえ。いましてよ」

「だめだったら。そのかわり、もっといいことしてあげるわ」

妖子の右手が健一の膝の間にスルスルと伸びた。彼女の手は奥深く潜行してゆく。最初、健一の全身がピクッと衝撃を受けたように動いたが、そのあとは、妖子の誘導のまま

身体を固くしながら、委せ切っている。

妖子は愉しくなった。

「あなた、童貞ね」

福童は黙って顔を赤くした。

「つまらないわ。その歳になって、童貞なんて気味わるいわよ。だいいち不潔じゃなか。

わたしに、何もかも捧げなさいね」

「——」

「妖子は、ラブ・ハンターよ。わたしの崇拜者は、ゴマンといふの。妖子、健一さんが大好きよ。でも、すぐ飽きるかもしれないわ。それでも、いいの」

「僕は、妖子さんが死ぬほど好きです」

「わかってるわ。妖子も健一さんが好き。でもね、恋は火花よ。すぐ消えちゃうの。そのとき、健一さんは後悔しない？」

「しません」

「妖子を好きになって、身を滅ぼした男が何人もいるの。妖子は恐ろしい女よ。それでも後悔しないの」

福童健一は、とろけるような眸を半眼にして、妖子を見上げた。健一は、とっくりうなずく。

「そう。うれしいわ。いま、妖子はあなたに本当に夢中よ。飽きが来たら、そのときは、

そのときよね。現在を愉しみましょう」

——長椅子の上に眠っている福童が寝返りをうち、妖子の名を呼んだ。

「妖子、ここにいますわよ」

「水、水」

「はい、はい。お水、すぐあげるわよ」

妖子は、つつ立っているナナと顔を見合せて苦笑した。

「この坊や、妖子にいいところ見せようと必死なのよ。可愛いわ」

「二十六歳だって。まだ、童貞らしいわよ」

「本物よ。わたしの眼に狂いはないわ。妖子どうする」

「ナナ、今夜帰らないでしょう」

妖子は、素早く三番のテーブルにねばっている男——端間泉のほうへ、一瞥をくれた。

「妖子は？」

「今夜、彼をいただくわ」

「チェッ。わたしが狙っていたのに。ああ、残念至極」

「ちようどよかったわ。マンションの部屋も提供させるわ」

「それ、それ。どうやら、妖子のお城の夢も

叶えられそうじゃなか」

「絶対、叶えさせてみせるわ」

「でも、父親が許さないわよ」

「ううん。母親が理解があるの。大丈夫」

妖子は健一を揺り起こし、その腕を貸してやる。

客は五、六人を残すだけに減っていた。由美が、片目をつぶりコップをあげて、妖子にサインを送った。由美のお唇と椅子の間に、人間椅子志願者がうつ伏せになっていて、その人間椅子に掛けている由美の上半身が、小山のように高く聳えて見えた。

外に出ると、妖子はタクシーをよんだ。

「ホテル・竜宮」

鹿沼妖子の顔には、生贄をゆっくり賞味する百獣の王者のような、誇りたかい威厳と喜色、満ち溢れていた。

(五)

桜が散って、あっという間もなく、初夏だった。本当に、二、三日の勝負で、樹の芽が言葉どおりサツとふき出し、若葉をわたる風は、とろけるような匂いをふくみ、膚も汗ばむ暖かさだ。

木暮ナナは、午後一時ごろ、目ざめた。

パジャマ姿のまま郵便受を改めると、封筒

五通と、はがき三通が届けられていた。

はがきは転任挨拶と信託銀行はか一通、封筒は三通が会員加入申込、二通はナナ女王を礼讃する隔地居住の会員からの手紙だった。

「おや」

広島市皆実町二の五、里見晃吉——たしかに記憶に残っている名前である。

ナナは、スチールのキャビネットから会員名簿を取り出し、五十音順に整理された名簿のサのページを開いた。

あった。

里見晃吉。五十歳。果樹園主。

私こと、このたび、娘に婿養子を迎えましたので、果樹園経営の一切を譲りました。かねて男やもめの味気なさから解放されたいと念願し、これからの短い余生を有意義にするためには、私は私なりの自由の境地を求めたく計画を立てておりました。それはナナ女王さまの足下にひれ伏し、朝夕、女王さまの奴隷となってお仕えすることです。でございます。

どつどつした文章である。しかし、その底には真実あふれる情熱と悲願がこめられてい

た。

ふん、とナナは鼻をならした。奴隷なら、誰でも無条件で許可するとも思っているのかしら。里見晃吉の身勝手さに彼女はムツとした。おいぼれの分際で、よくも図々しい。

娘夫婦には、国内旅行に出るということに納得させましたが、蒸発する覚悟でございます。私の短い生涯を、ナナさまの奴隷として、仕えさせて下さいまし。決して迷惑おかけすることはいたしません。生活費も、福岡のE銀行支店に三千万円預金済みでございます。年利七分にしまして、利息だけで、私ひとりの生活は充分かと存じます。出来ますれば、貴女さまのマンションと同じ部屋に住まわせて頂きたく存じます。貴女さまの快樂の生きた道具として仕えさせて下さいまし。

蒸発——三千万円——奴隷——木暮ナナのあたまが、ある閃きでクルクル回転する。早いテンポである。

ナナは便箋を卓子の上に拡げ、万年筆を執って、返辞を書いた。

お前のことは、思い出した。光栄に思うがよい。二年前、歳より若い元気のいいじいさんが、わたしの奴隷にしてくれと志願して来たのを、いま思い出した。わたしは、暴君ネロの境地だよ。沢山の奴隷に侍ずかれっていると、暴君の快樂のために、ひとりやふたりの奴隷をふみ殺したからといって、別に罪の意識はない。お前の切なる願いを入れてやるからには、慈悲を施すことになるのだよ。わたしの快樂に刺激を捧げるのであれば、お前の願いを聞きとどけてあげよう。始めに断っておくが、お前の命は、そのために縮められるかもしれないよ。ナナ女王さまは容赦しないからな。その覚悟ができているなら、いつでもおいで。ナナ女王さまの足台——タン壺——犬——マット——人間椅子——あらゆる労役を科してやる。それでも耐える自信があったら、おいで。博多駅についたら、店に電話するんだよ。わたしは、七時過ぎないと店には出ないから、時間を見計らって電話するように。

書いているうちに、木暮ナナの体中の血潮が、あやしく騒ぎ出し、下半身は熱っぽく興

奮っていた。

一週間しても、晃吉からは音沙汰がなかった。文面が強すぎたのかな、とナナは少し後悔した。しかし事実は伝えるべきだ。嘘のい

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)
		郵便番号 558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたたいという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号暁出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何力月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、切手代用、振替(大阪四二

えないナナである。彼女は天真爛漫なほど、自己に忠実な女性だった。

十日目に、覚悟はどうにできている、という内容の里見からの手紙が届いた。娘を嘆か

七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法ですから、必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何力月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上にハ本号にて前金切Vの判を捺印致しますから継続お払込み願います。継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたしますから、数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

せるのが一番つらい。それには、蒸発して生死を不明にすることが、最良の方法だ。私の死にざまは、私にとっては極楽にちがいないが、娘にとっては最大の悲劇に見えるでしょうから、それが、たまらなく辛い。私はどうしても、蒸発するほかはない。私はいま、蒸発の時期を狙っている。

里見晃吉は、そう書き述べていた。

六月十三日の夜、晃吉からナナに電話がかかった。博多駅からだった。

おいぼれ、とうとう来たな。……ナナは愛くるしい顔をほころばせて、つぶやく。

しめた。もうわたしのものだわ。

BAR・SADOに、里見晃吉は姿を現わした。

今日子が二階に案内する。その奥にナナの密室があった。

ノックする。

「お這入り」

水色の照明が神秘のムードを醸し出している部屋の真正面に、木暮ナナの長身の雪のように白い水着の裸身が椅子に凭れていた。あたまたに王冠を戴き、足に黄金の靴を履いて、片手に細身のムチを握っている。

ハ、ハーッと里見晃吉は、荘厳な蠱惑美に

うたれて、ハの字に開いたナナの脚許にひれ伏した。

「苦しくない。近う寄れ」

畏まって、晃吉は女王の足もとまで膝行した。その途端ナナの右腕が上下しはじめる。

晃吉の背をめがけて、ムチが弧を描きながら小気味よい音を鳴らした。ヒーツという悲鳴とともに晃吉の身体は横転した。

「女王さま、ムチはお許し下さい」

ナナはムチ打ちをやめない。力いっぱい腕をふるって、とびこんで来た獲ものを打ち据えるのだ。

「ナナ女王さま！ どうぞ、どうぞムチだけは、お許し下さい」

そのとき、ナナの手がピタリと止まった。

「じい！ これからのあなたの生活は、わたしが面倒をみる。よいか。あなたの貯金通帳と印鑑を、わたしに預けな」

「女王さま！ それは困ります。この貯金は私の生活費の全部です。それだけは、お許し下さい」

「バカヤロー」

鼻にかかった甘い肉感的な声だった。

「お前の身柄とともに、貯金通帳も預かろう

ヤセ犬の遠吠え

oooooooooooo

『ペツト』

系振昇

自己の本能を他から圧せられることを嫌うのは、生物たるもの総てに共通することだろう。智慧の進んでいることでは、勿論人間の右に出る生物は、地球上には存在しないことは事実だろうが、万物の霊長と勝手に名付けての専横には、同じ人間ながら私はいつも眉をひそめざるを得ない。

人間が人間を支配しようとすれば必然的

にトラブルが湧き起こり、どうしてもその支配が必要とするならば、支配者は、被支配者が納得、もしくは諦め得る程度の、何らかの代償を用意しなければならぬ。しかるに、他の生物類に対しては、一切の顧慮を払うことを必要としないように思いつているのが人間である……テナ肩肘はつたことをいうつもりはない。ただ、時には

というのが、なぜわるい」

また、ムチが老人の顔をピシャリと弾く。

みるみるうちに赤いみみず腫れが、頬から首筋にかけて、ふくれあがった。

「は、は、は」

ナナは可愛い声をあげて、傲慢の笑いを笑った。

「じい。お前はいい、何をしに、ここへ来たのかよ。ナナ女王さまに、ほら、こんなふうになまれ、苦しめられるために、わたしの奴隷を志願したのだろう」

黄金の靴の下に首筋をふみ敷き、踵の尖でグリグリとふみにじった。

「この、おいぼれ」

ナナはさも憎々しげに、もういちど、ふみ敷いている後頭部を踵で挟みながら、

「ほら、このところに、孔をあけてやろうか。ふ、ふ、ふ。真赤な血が噴き出すわよ。

気絶してもいいの」

ナナは靴をどけた。抬げた里見晃吉の顔にニッコリとこぼれるような媚笑を浴せ、やさしい声音でなだめる。

「晃吉、じたばたおしでないよ。さあ、貯金通帳と印鑑を、わたしに渡しなさい」

「――」

もっともらしいことを並べながら、ことに当っての人間は、非常に残酷な動物だといいたいだけだ。

髪の毛程の罪悪感もないままに、人間の都合だけで、他の命ある生物を苦しめ、殺していることは数えきれない。

害虫だの益虫だの、動物愛護だのということを知ることが、その根本は総てが「人間にとって」の前提がつくのだ。昆虫や動物に人間を対象にして生活？ する能力がある筈はない。最近ではペット流行だが、生物としての権利を認めるのではなくして、何かの形で自分の利益になるから飼っているのがペットで、純粋にその動物の生命とか、本性を尊重して共存しているのは皆無といっていると思う。出来るはずがないのだ。

動物に人間の真似を仕込んで習性本能をねじ曲げることが、なんで「動物愛護」になるものか。

妙な服を着せられて、ナイフ、フォークを持たされる猿。飼主の合図通りに何番目の紙片を喰えて来たり、幾声かを吠えさせられる学者犬……などに至っては、人間の残酷さまる出しのような気がしてならない。あの猿や犬が「ひとつ、こういうことをして人間どもをビックリさせてやったら

どうだ？」テナ相談を受けたとも思えないし、従って自主的に練習したものではないだろうと思う。押しつけと、その意図を身に泌みて感得させられるきびしさが眼に見えるようである……などと、私は人類の横暴をあげつらう積りでもない。

言いたいことは、そのように何かの形で「自己の利益」のために、その意志のない動物を束縛している人間が、趣味としてのその意志のもとに、人間同志で「外形上のみ」の拘束を行うことについては、とかくの偏見を持った批判をするのが、奇妙に感じられるということである。

片や、絶対権力者としての一方的支配。片や、意志疎通による人間同志の遊戯。

べつにSMプレイの肩を持つわけではないが、どちらが残酷？ となれば明白だろう。私は、自分でやったことはないが、プレイでは縛る人も縛られる人も、共に快楽を得ているのだらうと理解できる。しかし鎖で繋がれている犬や、檻に入れられている猿などが、いかに餌の心配がないからといって幸福感に包まれているとは、どうしても考えられない。

すくなくとも、ペットを飼っている人間はSMプレイを嘲る資格なしとするのは、私だけの「ヘリクツ」だろうか。

「さあ」

木暮ナナは、黄金の靴から、一方の素足を脱いで、晃吉の鼻さきに翳した。

「ほら、ナナさまの足の裏をお舐め。ゆっくり念を入れてお舐め。わたしが気持がよくて眼を細めている間、舌の先を休めてはいけないよ。ふ、ふ、ふ。その上で、わたしがどれだけの価値があるかを知るがよい。晃吉、こころを鎮めて、わたしの美しい桃いろの足をしゃぶれ」

官能のあとに來る虚無感が如何に巨大なものであるかを、里見晃吉は、実感として、まだ体験したことがない。

感極まった心情の昂ぶりに陶醉し、すべすべと滑らかなナナの足の甲に唇をつけて吸うその頭の上に、ナナのもう一つの足の靴が踵を載せて、刺激を加えるのだ。

「奴隷！ ナナ女王さまに、お前のすべてを捧げるがよい」

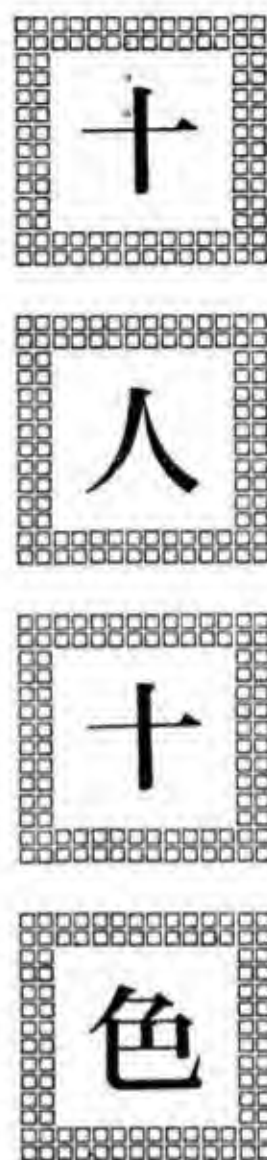
さしもの老人の頑固さも、白い肉体の御神殿に額ずいたときから、しだいに甘美の世界が展けてゆくようであった。

(後篇につづく)

レンズの中の女

第四話 キキとミミの巻

泉 野 薫



今回はレスビアンの話である。

正直いって、私はレズは好きじゃない。柔らかなでスベスベした、どこにも引っかかりのないからだがふたつ、クネクネウネウネとからみ合っている場面を想像しただけで、うじ虫のからみ合いを連想してしまうのだ。それに一般の男性として、工学的にも不合理なのが、なぜ無理してクツつき合わねばならんのか、という疑問がわだかまっている。が、好奇心は別である。婦人科の写真屋と

して、何事にあれ女の関係したことについては、人並み以上に好奇心が働くのが悪いくせで、今回の話も、その好奇心が生み出したものということになるだろう。

三流週刊誌の編集をやっている友人から電話があった。

「レズの女の子を撮ったことあるかい」

「ないね」

「撮ってみんか。実はレズだと自称している女にゃロクなのがいらないんだが、これだけは掘り出しもんでね、口説いて口説いて、やっ」とOKをとったんだ。頼むよ」

「どうしておれに声をかけたんだい」
「武士は食わねど高揚子をスケてやろうと思つてさ」

「妙に親切じゃないか、ゾクゾクして来た」
「はっはっは、冗談だ。あんたの写真を見込んでだよ、ホント。これまでのレズと写真という、ナマツチロイのがからみ合ってるだけで、何ともシャシンにならないものが多いのさ。そこへ行くとあんたのは、なにかこう女の業のようなものが、メラメラッと噴き上げてくるみたいだろう。それがレズの写真にはピッタリなんだなあ」



「ワリカシ良いこと言うね。しかし高いぞ」
「貧民救済は我が社のモットーでございまして。気張ってやるよ」

女の業みみたいなものがメラメラッと——というセリフが気に入って、引き受けることにしたのだが、はじめての仕事で何の成算もない。で、それは出たとこ勝負ということにして、女ふたりを並べて縛ったら面白いかもしれない、などとあられもないことに想像をたくましくしたりしていた。

数日して華やかな小鳥のようなのがやって来た。

「あたくし貴世子、通称キキ。よろしく」

「あたしは美代子、通称ミミ」

ペコリとおじぎをして、ソファに並んで掛けたと思うと、それが彼女たちには自然なポーズなのか、互いの指をからみ合わせた。

私は、まずふたりが悪びれる所が少しもないのに驚かされ、次にしみじみ顔を見比べてなかなかの美人なのに驚かされた。

私の通念からいけば、レズというのは男役と女役があって、男役というのは正真正銘の男さえ逃げ出すような面がまえをし、髪はショートカットか引つめ、肌浅黒く筋張ったオールドミス。女役は男役より年下で、本当

の男の味を知らない前に男役から別の味を教え込まれた、なよなよした世間知らずのおぼこ、ということになっていた。ところが、この通念が完全にくつがえされたのである。

キキもミミも年頃ははたち前後。ただキキの方が見た所では諸事に世なれた印象を与えるだけの違いで、オールドミスには程遠い。体つきにしても、キキがちょっと背が高く、やせた感じがミミより強いだけ。髪形はキキがショートカットでミミがロングヘア。それにキキのパンタロンにミミのミニ。

まあ同じような女の子が、ことさらに互いを区別するために違いを作り出していると言った方が当たっている。

ただ顔立ちは別で、キキはキリッと引き締まった輪郭の中に、切れ長の眼、薄い鼻樑と唇という直線的な顔立ちなのに対し、ミミのそれは万事まろやかで、ことにポテツとやや突き出し気味の唇が官能的である。

こう言ってくると、私の通念はこわされたしたもの、やはりひと眼見ただけで、男役女役の区別は出来るように造られているようではある。（後で聞く所によると、最近のレズ——妙な言い方だが——は男役女役の区別があまり明確ではないんだそうである）

「いやあね、なにをそんなに見つめていらっしやるの」

とうとうミミが音をあげて、私を優しくにらんだ。

「あたしたちがレズだというので、興味シンシンなのよ。エッチ」

とキキが応じる。

「そんなことはないよ」

私は、あわてて打ち消した。

「ぼくの想像していたレスビアンとおおちがいはなくて、感心していたのさ。それに被写体をよく観察することは、写真屋としての第一歩だからね」

「うまいこといってエ」

これはふたりの口から同時に出た。ふたりの指は、ますます固くからみ合っている。

「ひとつだけ質問したいことがあるんだが、いいかい？」

私は紅茶をすすめながら言った。

「たいてい想像がつくわ。なぜレズになんかになったんだ、って聞きたいんでしょ？」

「ズバリだ。さしつかえなかったら聞かせてほしいな」

「さしつかえなんか何もないわ。答は、ただひとつ。いいからよ」

「それじゃ答にならないな。男と女だっていいぜ」

古いのね——といったような軽蔑の光がキキの眼差しに宿った。

「どっちもいいんなら、後は選択の問題じゃない？ あたしたちは同性を選んだのよ」

「女同士だから、からだのツボがよくわかって……ね、キキ」

ミミがキキの体に体をこすりつけるようにした。キキはまるで猫のように眼を細めて鼻を鳴らす。見ちゃいられない。

「じゃ、もひとつ聞こう。君たちは男を知っているの？ いや、男を知っていると言えるほど知っているか、ってことだ」

「愚問愚問」

キキが即座に言った。

「男を知っていると言えるほど男を知っていたら、女を選ぶ筈がないじゃないの」

「男って野蛮で暴君だわ。自分ばかり楽しんで、相手を楽しませることなんか、コレッポチも知らないのよ。ねえ、キキ」

「そうよ」

私は、眼の前でこれ見よがしにじゃれ合っているおいしそうな女たちを見ながら、モレツに敵愾心が起るのを感じた。

「じゃ、そろそろそのいい所を見せてもらうことにするかな」

今に見ている——と心中でつぶやきながら私は立ち上がった。

これは写真屋にとっては、まことに危険な感情である。

二

衝立から出て来たふたりは、そろってベビードールとかいう、腰のあたりまでのネグリジェを着ていた。キキは薄紫、ミミはピンクで、もちろんスケスケルック。下にはビキニのパンティしか、はいていない。

「どうすればいいの？」

さすがに手を握り合ったままモジモジしている。

「そこでまず抱き合ってみたまえ」

ふたりはチラと顔を見合わせたが、そのままスンナリと抱き合った。ネグリジェの下でむっちりとした上向きになったミミの乳房が、固く小ぶりのキキのそれに押しつぶされているのが見える。

自然に、ミミがキキの肩に頬を押しつけ、キキがミミの髪に顔をうずめるスタイルになった。

角度を変えて上半身だけの数を撮った。撮り終って、からだをはなしたふたりは、もうそれだけで頬を上気させて、肩で吐息をつけている。からみ合う視線にねばっこさが加わったようだ。

「なんだか妙に燃えてきちゃったわ」

キキが額にかかる髪をかき上げながら言うのに、私は（見られているからさ……）と言うおうかと思ったが、思いとどまって、

「君たちの好きなように、そのベッドでやっごらん。ネグリジェは、腰のあたりまでなら降ろしてもいいだろう」

こうなっては、なまじっかな指示をするよりいいだろうと思ったのである。

羞じらうより衝き上げる力の方が勝っていたのだろう。ふたりは待ってましたとばかり抱き合って、ベッドに倒れ込んだ。

「いやよ、そんな乱暴なの……」

ミミが言いかけたが、たちまち口をふさがれて、しばらくはスラリと伸びた脚をバタバタやっていたが、すぐにグッタリと任せてしまった。ミミのめくれあがったネグリジェから、キツチリと太腿に喰い込んだパンティの端がのぞける。

ミミが苦しげな呻きをあげはじめた。キキ

の背にまわしたマニキュアした指が、もどかしげにかきむしっている。

頭の方へまわると、重なり合ったふたつの額から汗がにじみ出し、鼻息がすさまじい。

ミミのネグリジュはすでに肩先を剥ぎ降ろされ、キキの魔女を思わせる鋭い爪が、ミミの乳房に突き刺さっている。

私は何度かカメラを放り出したくなった。

私は自分自身の愛欲の姿を第三者の立場から見たことがないから何とも言えないが、男と女の愛欲より女同士のそれの方が、はるかにすさまじいものであることを、はじめて見せつけられる思いがした。

男と女の場合だったら、主としてハッスルするのは男の方で、女はただ悶々と為すがままになっているだけだし、男が本当に我を忘れるのは一瞬だけしかないから、どうしても自意識的なものが加わらざるを得ない。

ところが、女と女となるとそうではないようなのだ。悪く言えば、オナニーのデュエットのようなものであるらしい。

霧のように噴きあがる汗が妖しくミックスされたような臭いに、私は嫌悪とも恍惚とも知れない気持を呼びさまされて、しばらく呆然とただ見つめていたが、やがてふたりが体

をずらしあいかけたので、ハッと我を取り戻した。

「オイオイ、そこまでは写真にできないよ」

「ほっといてちょうだい」

汗とあぶらで化粧もなにも落ちてしまった顔をあげてキキはおこったが、すぐそれさえ時間のムダだとばかりに、もう一塊りの肉塊のように変じてしまったミミのからだに顔を伏せてしまった。

腹が立った。

「きみたちは仕事に来たのか、楽しみに来たのか」

キキの尻を、私はピシヤリと打った。

キキの固く締まった小さめの尻がピクッと脇にずれ、ミミが重たげなまぶたを上げる。

「両方よ。ほっといて」

キキがおこって言った。

「じゃ、おれもそのテでいくぜ」

すぐみをきかせて言ったのが効いたのか、キキはハッとしたように身を起こした。

「それどういうこと」

「おれも楽しませてもらうと言ったのさ」

キキは私が何を意図しているかを探るように、じっと私の眼をのぞき込んだ。ミミまでが不安げに起き上がって、キキにすがりつい

ている。

「何をするの？」

「いつも同じことをやってたってつまらないじゃないか。君たちの写真をわざわざ多くの所へ頼みに来たのには別の意味があるのさ。これだよ」

私はベッドの下から縄の束を引っ張り出して、そこへ投げ出してやった。

「あ、サドルのね」

「サドル？」

「縛っていいじめるんでしょ？ あたしやったことある」

「それなら話は簡単だ。ただくっついていてより、縛ったやつを可愛がっている方が、目先が変わっていいじゃないか」

相手がいつこうに驚かないのにちよっとはぐらかされたような気分だったが、かえって手間ははぶける。

「くくるの？ いやよ、ミミ絶対いや」

ミミがキキに哀願しはじめる。

「いいじゃないの。面白いわ。ミミだってはじめてというんじゃないし」

「だってエ……」

ミミはチラッと私の方を見て、キキの肩に顔をかくしてしまった。

「どうやら、縛られたらどんな状態をさらけ出すことになるか、ミミはよく知っているらしい。それがあまりにも男性である私に対して羞ずかしいから、いやだと言ったのだ。」

「センエツながら、縛るのはよくにまかせてもらおうよ。さっき楽しみと言ったのはこれのことなのさ」

実はもうひとつあるのだが、それは成りゆきということにして、言わないでおくことにした。

「あら。あなた、そのケがあるの？ いやあねエ」

キキは眼を大きく見開いて、私をあらためて見直したようだが、ミミはますますおびえている。面白くなって来た。

「さあ、キキは、どいたどいた」

追い払っておいて、私は縄を握んだ。

三

ミミが縛られ型の女であることはひと眼見てわかったし、無意識のM型であることも、さっきのキキとの狂態を見ていて、わかっていた。

「いやよ、いやよ。ね、キキ……」

駄々をこねてキキにすがりつこうとするの

を構わず押し倒して、両手を背中にねじり上げた。しなやかな体つきで、面白いほどねじり上げた腕が高くあがる。

思い切ってねじり上げておいて固く縛り合わせた。ミミの柔らかな体が、私の膝の下で弾むのが、久しぶりに女を縛るという実感を私のからだに、じかに伝えてくる。

ネグリジェは胸元がはだけて、白桃を思わせる乳房があらわなのをそのままに、胸に縄をまわした。

ミミは弱々しくいやいやしながら、涙ぐんでいる。そんなミミの様子に好奇心をそえられるのは私だけではないらしく、キキが、はたから口を出した。

「ミミはおっぱいを締め上げられるのが好きなのよ。もっときつくしてやって」

「うそよ、うそよ……」

哀れな声をあげて突っ伏そうとするのを、じゃけんに引き起こしておいて、乳房が縄目の間から奇妙な形にひしゃげて盛り上がるように、更に縄をかけ、おまけに首縄につないで上に吊り上げるようにした。

ミミのすすり泣きが激しくなっている。

私は、もう一度その縄をひき上げてみて、ミミに悲鳴をあげさせてやってから離れた。

「後は任すよ。でもシャシンになるような所でやめにしてくれよ」

「OK」

キキは細い眼を燃えあがらせて、飛びかかって行った。ネグリジェはとうに脱ぎすてて黒いレースのパンティだけになって待ち構えていたのだ。

ファインダーをのぞいたが、ミミのネグリジェが後ろ手のいましめのあたりにクシャクシャに引っかかっているのが、わずかに発禁になるのを防ぐだろうと思うような、すさまじい構図であった。が、そんなことは構ったことじゃない。縛った上でのレズなんてのはドダイはじめから発表しようなんて思っていないのだから。

キキだって、もう五分前の約束など、とうの昔に忘れてしまっているらしく、白桃にむしゃぶりついている。

のけぞったミミの可憐な眉が苦しげに寄せられ、奥から舌をのぞかせた唇が、なにやらうわごとのような言葉を吐き続けている。

「好きよ、キキ、……もっと愛して……」

とかなんとか言うことらしい。私など、すでにロボット以下の存在である。

キキは、先刻の続きでもあるかのように



唇を移動させてゆく。それが何の前ぶれであるのか、ミミには痛いほどわかるのだろう。呻くように何か口走りながら、体をふってせがむポーズと見受けた。

キキはあくまでも無言である。それがふたりの日常のことなのかどうか、すさまじい攻撃？ 態度であった。

そんなキキが、私の方にチラッと眼を向けると、

「取ってよ」

と、短く言った。私の気のきかなさを怒っているような鋭い調子だった。

その意味はすぐにはわからなかったが、キキのもどかしげな身ぶり、ようやく気付いた。邪魔なものがキキの攻撃目標に残っていたのである。

私は今度は腹を立てず、鞠躬如として、それを取ってさしあげた。

後のことは、ここで筆にする事をはばかられる。

さかりのついた犬のようだ、などときたないことは言うまい。ここは、ソクラテスだったかプラトンだったかが言ったように、みずからの失われた半身を求めて汗を流している

美しい人間性の発露がある……とでも言っておこう。もっとも、その半身が幸か不幸か、同性だったのだが……

ともかく、私は次第にしらけてゆく眼で、このふたりを眺めていた。(これは男性に対する冒瀆ではない

か?)

この怒りとも欲情ともいえるものが私の内で爆発する時を、心ひそかに待ち望んでいたのだ。

四

連縛という考えが、いつから私の脳裏に眼ざめたのかわからないが、連縛こそ眼の前のふたりを罰するのに、最も適した方法のように思われた。これから私の本当の楽しみが始まる——いや、楽しみを始めてやる、と心の中で女どもに悪態をついてやった。

まだ汗のひききらないキキの肩に手をかけて、上半身を引き起こす。

「何をするの？」

さっきまでの警戒の色は全く消えて、陶醉にひたりきった女の眼になっている。

「君を縛らせてもらうのさ」

「なんですって？」

あらがおうとしても、その時のキキの体は自らの意志の言うことをきく筈もない。牝鹿を思わせる、しなやかに引き締まったキキのからだを、私はミミとは別の興味で縛りあげて行った。

「君もおっぱいを締めあげられると、喜ぶほ

うかい？」

「冗談は止してッ」

ようやく事の重大さに気付いたようだが、時すでにおそし。後ろ手にくくし上げられたからだは丸太ん棒に等しい。さかんに悪態をつきながら、キキは次第に自分の無力をさとしていったのか、おとなしくなっていた。

キキのからだは、ミミのそれ程に縛って味のあるものではなかった。枯枝をくくるという程でもなかったが、むっちりに乗ったあぶらに縄目が喰い込むという縛りの醍醐味はなく、せいぜいそのしなやかな弾力を楽しむ程度にとどまった。

背中合わせにして縛る。

ミミはまだグツタリとして、とろんとした瞳を宙に浮かしたまま、拒もうともしない。

キキは唇を噛みしめている。

私はそのような連縛の状態のままで、幾枚か写真撮った。しかし、彼女らの飽和状態であるということがわがわいして、どうも思ったようなのが撮れない。女たちのからだがたるみ切っていて、羞恥その他による緊張感が、どうしても出ないのである。あぐねた私は別なテを思いついた。

連結縦縛りである。

縄を通された頃から、キキは黄色い声をあげはじめていたが、その悶えがミミに伝わって、ミミが泣き声をあげはじめた。

「どうだ、これなら縛られたままでも差し支えないだろう」

「意地わるッ……」

声もなかばに、キキは声をのんだ。ミミが妙な声をあげてもがき始めたのだ。

「ミミ、いやよ、じっとして……あ、だめだったらァ……」

「だって、キキ……」

ミミは、なよなよしているくせに、こんなことは好きと見える。やはり見た通り縄には弱い女なのだろう。

結末は割にあっけなかった。

腰縄を解かれると、ふたりはそれぞれ大きな吐息をついて、ふらりと横に倒れた。精も根も尽き果てたという様子である。

そんな様子を見て、私のはやり立った気持ちも、しばらくためらった。物事には限度というものがある。しかし私もまたもう引き返すことのできる限界を越えた所に足を踏み込んでいたのだ。

私はキキにだけ再び縦縄をきつく掛け直して、引き起こした。ぐったりしているのを抱

くようにして柱の所に連れて行き、立ち縛りにする。

「何をやるの？ もういやよ」

もの憂げな瞳をあげて小さく言った。

「君は黙って見ていればいいのさ」

猿轡を噛ませた。

その頃になって、キキはようやく私の言葉の意味を薄々に気付いて来たらしい。眼がさめたようにもがき始めた。が、もがけばもがくほど、自らを責め立てている結果になるのだ。キキは胸を衝かれたように身動きを止めると猿轡の奥で何かわめいた。

ミミは、まだ失神からさめきっていないかった。私に肩を抱き起こされると、驚いたような瞳を私に向けた。

私は黙って柱のキキの方を指さした。

「あ、キキ……どうしようっていうの？」

優しい身もだがこころよく伝わってくるのを十分噛みしめながら、私はミミの桜色の耳朶に唇を寄せた。

「男を知ったと言えるほど男を知っていたら女を選ばない、とさっき言ってたね」

「あッ……」

ミミの身悶えが激しくなった。

「いやです、いや、いやッ……ああ、キキ、



助けてエ……」

ミミは、かなしげに叫んだ。

キキの狼狽ぶりこそ、みものだった。猿轡の顔を狂ったように振りたて柱もきしむばかりに身悶えている。それでも眼は愛する女の運命からそらすことはできないのだ。私はその眼の中に燃え上がっているすさまじい炎にあやうく逃げ出すところだった。

ミミの抵抗ははじめだけで、後はキキに見られているという後ろめたさのために、形だけのものになってしまっていた。

(五)

さすがにうしろめたい感じがするのをさりげなくかくして、私はキキの傍に寄って行った。ミミは、ベッドの上で身も世もなく泣いている。

(とんでもない面倒なことになりそうだぞ……)

しらじらしい気持ちの中で、私はひそかに後悔していた。女同士の嫉妬は男女の間のそれよりもすさまじいということは、私もかねがね知っていた。

(こりゃ、おれが殺されるか、ミミが首を絞められるか、どちらかだぞ)

私がキキの方に寄って行った心中には、何とか彼女の心を解くてだてはないものかとそればかりがあった。おそろくともなく愚かしい

顔をしていたに違いない。キキが顔をそむけたままにいるのが、わずかに救いであった。

まず猿轡を取ってやった。

顔をそむけたまま反応なし。

次いで腰の縄を下に落とす。

キキはキリキリ歯がみしている。全身をぬめぬめ光らせている汗は、私が何とか近づこうとしているのを冷たくはね返すようだ。普通なら、

「なんだ、上品ぶるなよ」

とか、なんとか軽口をたたくのだが、今度に限ってそれが出ない。

ところが、柱に縛りつけているいましめを解こうとして立ち上がった時、キキはキツと顔を上げると、私の眼をちかちかと凝視したまま、意外なことを口走ったのだ。

「あたしも、ミミのようにして」

哀願ではなくて命令であった。

私は、あっと思った。

(あいこ、ってわけか)

立場が逆になった。ミミが柱に縛りつけられ、キキがベッドに横たわっている。私は、わざとキキのいましめはすべて解いてしまっていた。

「キキ、キキ。負けちゃだめよ、ね、ね……」
頭の上で、ミミの哀しげな声が聞こえる。

キキは無言である。秀でた鼻梁を上に向け
たまま、眼をつむっていたが、からだはしな
やかな鞭のように小気味よくしなった。もし
て私はその強じんな鞭に翻弄されて、幾度か
危機におそわれた。

ミミはふやけたようになって、柱にはりつ
いたまま、シクシク泣いていた。

さて、一時間後——キキもミミも私の居間
で酔っぱらってクダをまいていた。

酔わせるつもりではなかったが、気まずさ
をいくらかでも救ってやろうと思って出した
ウイスキーが、この始末なのであった。

「さあ、さつさと白状しちまいな。あたしと
この男とどちらが好きだい」

いささか酒乱気味のあるらしいキキが、巻
き舌でミミにからみついている。

「よくわかんないのよオ、それが」

ミミはキキをうるさそうにはねのけながら
こちらはしきりにトロンとした眼で私に秋波
を送ってよこすのだ。

「なにを、男の方が好きだってエ？ この情
け知らず。お前をこれほどまでに仕込んでや

ったのは誰だと思ってるんだい」

「あたいだって、ずいぶんあなたにや尽した
わよ。いまさら、そんなこと言い出すなんて
野暮じゃん」

「ちくしょう、このあたしをソデにしやがる
気かい」

「なにもそんなこと言っていないわよ。あなた
があんまりしつっこく聞くからよ」

「なんだってえ。しつっこいのじゃなくっち
やあ頼りないっていったのは、どののだれ
なんだヨウ」

「そ、そんなこと。関係ないじゃない」

「関係ない？ お前、あたしにこんなにまで
仕込んでもらいながら、関係ないなんていう
つもりかいッ」

「なにもそんなことは……。キ・チ・ガ・イ」
「なんだとオ……」

あわやつかみかかろうとするのを、私が間
に入って、かろうじて止めた。

「まあまあ、キキちゃんもミミちゃんもよせ
よ。どうでもいいじゃないか。せっかくの楽
しい思い出をファイにするバカはないよ」

私は精一杯の猫なげ声を出した。

「フン、何が楽しい思い出なもんか。おい、
お前。ミミに惚れたんだろ？」

今度は私に酒くさい息を吹きかけてくる。

私はそれをあしらうようなふりをしながら、
とっさの思いつきでキキの耳に吹き込んだ。
「あなたの方が、ずっと素晴らしい体だよ。
残念ながらこの素晴らしさは、女じゃわから
ないんだろ。おいしいな」

キキは一瞬キョトンとなった。

「なにをッ、このサドリやめが……」

と、これまでの勢いで声を張り上げたが、
勿論、虚勢である。

根がバツの悪さをごまかそうというところ
から来たクダ巻きだから、おさまるのは簡単
であった。私のささやきがテキメンに効を奏
したのである。が、そのお返しとして、ミミ
が酔いにまぎれて高鼻に眠ってしまったのを
さいわい、キキにヤイヤイせがまれて、彼女
が自身の女にはわからない素晴らしさを確かめ
るための、実験台に立たされる破目におちて
しまった。

今回の教訓は、レズに好奇心を抱くあまり
下手なチョッカイを出すと、火傷をするとい
うことである。

おわり

娘 || 相 || 撲 || 物 || 語 || (17)



花の

女斗美

たち

奮斗士好太

体育大会は、予想どおり、麗華女学院の優勝でした。それも全く圧倒的な…。なにしろ一回戦から決勝まで、ひとつの勝ち星も相手に与えなかったのですからスゴイ勝ちっぷりでした。

悠々と胸を張って退場して行くニクラシイ

娘たち。ハチ切れそうな若い裸身にキリリと締めこんだ萌え黄のマワシがひととき鮮やかに映えて、私たちはみんなうらやましさとねたましさの混じった複雑な表情で見送ったのでした。

ところで私たちの方は…。

張り切っていたついこの間までとはうって変わったシヨゲよう。意気消沈、落胆失望。あるいは、などと秘かに野望を抱いていたその鼻を思いきりひっぱたかれたような恰好でしばらくは練習にも気はいりません。お義理でマワシをつけているだけで、ろくろく体も動かさず引きあげてしまう有様です。三年生の人たちも、ガックリきているので、練習場にも活気がなく、汗のにおいがたちこめるなんてこともなく…。

でも、たった一人だけ別の世界の人のように張り切っている人がありました。

選手になれなくてクサっていた津野さん。その津野さんは、敗戦のショックを直接受けていないだけに、大会前までとまるつきり逆に生き生きとして、まるで練習場の女王さまのようにふるまっているのでした。

「サア！ 気合いをいれて練習々々！」

と私たちにハッパをかけ、

「あんたたち、なにグズグズしてんのッ！、早くしたくしてッ」

と一年生の新人たちにニラミをきかすのです。そして、マワシのつけ方にもいろいろ注文をつけて、津野さんの気に入らない締め方をしてる子などには

「なにヨ、そんな締め方して。そんなさわれば解けちゃうようなことやってちゃ、お相撲とれないワヨ。やり直し、やり直し」

と、皆の見てる前で、どんどん解いてしまします。

解かれた子は赤くなって恥ずかしがっているのにチツとも遠慮なしに、

「ホラッ！ もっとキツクしなくっちゃ……」

マワシをつけてる時のスタイルなんて、あんまりイカスものではありません。

キリリと、一分のスキもなく締めこまれたマワシ姿は、おとめの誇り高い裸体美をかざる最高のいろどりでしょうけれど、したくをしているところなどは、マワシに限らず、人前にさらすもんじゃないと思います。いくらお互いの裸を見なれている同士だって、なにも皆の前でやり直しをさせなくってもいいのに……とその新人に同情したくなるのも無理はないでしょう。

グイッ、グイッと引っぱられて、まるで腰のまわりへ、マワシが埋まりこんでいくくらいにキツク締められて、そのひとは息苦しそうな顔になっているというのに

「このくらいにしてなきゃ気持がダラケちゃうのよ」

と、いい気なものですが、津野さんに締め上げられたその新人は、固く締めこまれたタテミツのあたりが気になるらしくて、しきりにおシリに手をやっているのです。

まだ子供っぽいフックリした二つのふくらみを深く割ったタテミツは、たしかにマワシになれていない、このひとたちにはキツすぎるようでした。キツク締め込むと気持ちが悪きしまるといふのはウソじゃないでしょうけど、一年間マワシに親しんできた私たちに、それに耐えられる体ができているのですけれど、それと同じつもりで扱われては、この子たちは、たまらないでしょう。津野さんの目をぬすんでは、おなかをへこませてヨコミツを押し下げたり、中腰になって、きゅうくつなタテミツを直そうとしたりしている姿は、かわいそうでもあり、おかしくもありで、悪いと思いながら、笑いがこみあげてくるのでした。

「次はダレ？」

と、津野さんはほかの新人たちを見まわしながら、エモノを物色します。

オドオドしてる新人たちの姿は、津野さんの優越感をますますそそるらしいのでした。ところで今年の新人はみんな五人です。

原系子さん――一七五センチ、六〇キロ、一番の長身ですが、ちょっと細くひ弱な感じ、色白なのがよけいそう見せているのかもしれない。でもなかなか勝ち気で動作もキビキビしています。紺野陽子さん――一七三センチ、六五キロ、陽気ないたずらっ子、体格もいいし力もあります。腕ずもうなら負けないんだがなァ、というのが口ぐせ。高見エミさん――一六五センチ、五七キロ。私たち相撲部でこそ一番小柄ですけど、ほかの部へ行ったら堂々とグラマーで通ります。クルッとした大きい目の無邪気なかわいい子です。朝野順子さん――一六八センチ、六〇キロ。新人中随一の美人おとなしい子。それにもう一人、津野さんがニガ手になってしまった南悦子さん――目鼻立ちのはっきりした顔立ちで、まず美人と云えるでしょう。素直そうな、見るからにのびのびと育ったといった子です。体格もすっかり大人なみで、一七〇センチ、六三キロのボリュームを誇り、胸のふくらみや、腰のあたりから太腿にかけて若さがあふれている感じ。まだまだ大きくなりそうですから、きっと、スケールの大きい女力士になってくれるにちがいありません。もっとも、体格だけから云えば、紺野さんの方が、タテ、ヨコ両

方ともにひとまわりずつ大きいと云えるのですけれど、この南さんには何となく動作の大きさがありません。生まれながらに身に備わっているともいえるのでしょうか。彼女が部屋へ入ってきますと何となくやかなふんい気ができるのですから、それだけでも、彼女の存在は貴重なものなものでした。

ところが、津野さんは、この南さんのゆっくりにした動作が気になるらしく、何かというとおこごとなのです。

彼女がマワシをつけて練習場へ出てきますと、たちまち津野さんの目が光ります。

「アラアラ、その恰好はどうでしょう。その禪は飾りなの？」

でも、南さんはちっとも悪びれず、津野さんの命ずるままに悠々とした動作でマワシをと、そしてその端をコワイ顔をして傍に立っている津野さんに手渡ししながらニコツと笑ってみせたりします。これにはさすがの津野さんも毒気を抜かれた形であっけにとられた顔。でも、そこは「鬼」の津野さん。すぐに本領を発揮して

「ダメダメ、そんなに上へあげたらおしまいが足りなくなっちゃうわヨ、前の端はオッパのあたりでちょうどいいの」

「ホラ、もっと足を広く。そんなにおなかを突き出してちゃ締められないじゃないの」

と、口うるさく注文をつけるのです。

それでも南さんは大してこたえたような様子もなく、皆の注目する中で、津野さんの云うようにマワシを胸のあたりまで上げ、足を開き、腰をおとして、津野さんの指導に従って締めこんで行くのでした。

そんな様子を見ていますと、あれこれ文句を云いながら世話をやいている津野さんの方が南さんより小柄なだけに付き人みたいに見えてきておかしくなってくるのでした。

「あの子の世話をやいてるところを見るとあんたの方がなんだかふんどしかつぎみたいな感じだわヨ」

などと、ヒロちゃんがからかいますと、

「あたしもついそんな気になっちゃうの、あの子はどうもニガ手だワ。イヤに落ちついちやってサ」

と、津野さんはシブイ顔。

「ヘエエ、あんたにニガ手があるなんて」

「世の中は広いわヨねエ」

ふだんのお返しとばかりみんなは一斉にヒヤカシます。

「まあせいぜいお世話してあげなさいヨ。あ

の子は大物になる素質があるから」

「大物かなんだか知らないけど：エタイが知れないワ：あの子ちょっとおかしいんじゃないかなア」

津野さんの浮かない顔にまた笑いが湧いて私たちも徐々に敗戦ショックから立ち直って行くのでした。

でも、この新人たちは皆立派な「根性」の持ち主たちでした。

去年の私たちがそうだったように、この子たちもまた、相撲部へ入ったら、すぐに相撲をとらせて貰えるものと思っていいたらしいのです。

ガップリ四つに組んで、押し合い、寄り合ひ。投げの打ち合い、一瞬の変化：そんなことを夢見てカッコいい勝ち名のりに胸ふくらせてやってきたのでしようが、現実はその甘さをミジンに砕いてしまったのでした。

汗と砂にまみれた基本練習だけ。四股ふみ運び足、鉄砲：と、からだ中の筋肉が焼けつき、関節がこわれてしまったんじゃないかと思うほどの苦しさ。なれないマワシにこすられた股や腰のあたりは赤くなっているというのに、無情な先輩はそんなことにおかまいなくシゴキます。あまり体を動かさないうでマワ

シがスレないようになどと苦心していると、たちまち目をつけられてわざと屈身体操をさせたり、伸脚運動をくりかえさせたり。まるで皮膚がむけて血が出るんじゃないかと思うほどの痛さ……思わず涙が出るくらい……。中でもいちばん辛いのは、股わりという柔軟運動でした。おシリをペタンとおろして、伸ばした両足を一直線にひらき、上体を前や左右に曲げたり、ひねったりするのです。もちろん最初からこんなふうに来る筈はなく、足は九十度くらいも開ければせいぜい、まして体を曲げたりなんて思いもありません。そのくらい開いても、内もものスジが切れそうな感じがするというのは、上級生たちはおもしろ半分みたいの後ろから上体を押して曲げさせるのです。プロのお相撲さんでも、最初これをやらされる時は泣き出す人もあるんだそうですけど、私たちも、これにはみんなヒイヒイ悲鳴をあげ、大げさなヒロちゃんなどは「股がさけちゃった」とポロポロ涙を流して私たちは痛さを忘れて思わず笑ってしまったりしたものでした。そのヒロちゃんが、今ではシゴク方へまわって、新人たちをヒイヒイ云わせているのですからいい気なものです。津野さんお気に入り？ の南さんはわりあい

体が柔らかくて足もかなり開きますしその姿勢で或る程度上体を動かすこともできるのでした。と云っても、もちろん津野さんの満足するわけではなく、背中を押されて悲鳴をあげているのですけれど……一番かわいそうなのは原さんでした。細づくりの体に似合わず、彼女は体が堅くて、両足は九十度も開かず、上体は直立したまま。顔を真っ赤にして、一生懸命がんばっているのですけれどダメです。とうとうヒロちゃんは、おんぶするように後ろから抱きついて、自分の体重を原さんにかけて曲げさせるのでした。目を閉じ、唇を噛んでがんばる原さん。それをまるでおもしろ半分みたいな顔つきで「ヨイシヨ、ヨイシヨ」と両肩を押さえてのしかかるヒロちゃん一年前は彼女自身がヒイヒイ泣き声をあげていたくせに、今度は立ち場がかわったとたんにこの有様です。

「イターイ、やめてエ」

とうとう、さすがにがまん強い原さんも、限界に達したとみえて悲鳴をあげます。けれどもヒロちゃんは、

「なにヨ、このくらいで泣きごとを云って、まだゼンゼン曲らないじゃないの」

とますます力を加えて、原さんの背中を押

さえます。

ほとんど棒立ちみたいな上体から前へ伸ばした両手がもがくように空気をかきまわして原さんは目に一ぱいの涙です。

「もうダメ、かんにんして……」

頬を伝った涙がポロポロとこぼれて、彼女としては精いっぱいひろげたつものの両足の間の砂に吸いこまれて行きます。色白の彼女の、ことさらに白い内腿の肌の色が痛々しく目ににじみます。

「だらしないわねエ、苦しいのをがまんしなきゃいつまでたっても上達しないわヨ」

ヒロちゃんは、口ではそんな強いことを云いますが、さすがにかわいそうになったのでしょう。ひとりで立ちあがれない原さんの手をひいて起こしてあげるのです。けれども、こんな毎日の猛練習にも脱落しないについてくるこの新人たちの「根性」は大したものでした。これには私たちの誰もが感心して、「やるわねエ、あたしたちもフラフラしてられないわ」

「この調子じゃ、あたしたちの方がシゴかれることになっちゃうわヨ」

と、じょう談半分ながらも、のんびりムードを反省させられて、

「テルちゃん、ひさしぶりに十番勝負といこうか」

松田さんに挑戦されて

「ええ、いいわヨ、十番でも二十番でも」

私も斗志をかきたてて、両手でポンと横ミツをたたきながら土俵へ向かうのでした。

津野さんやヒロちゃんもそれぞれ中川さんや小林さんをつかまえて土俵の外でのぶつきりげいこや押し合いげいこ。おとなしい西田さんも黙々と四股や鉄砲に精を出します。

新人たちの「根性」が私たちに新風を吹きこんで沈滞ムードを追い払ったのでした。

ところである日、マネジャーの榎本さんがビッグニュースを持ってきました。

毎年私たち相撲部員は夏休みを利用した合宿に出かけていたのですが、それがどうやらあの惨敗のおかげ？　でとりやめになるかもしれないという情報が耳の早いヒロちゃんあたりから伝わり、私たちの気をもませていたのです。合宿を返上して夏休みの間中をミツチリとしごかれるらしいなどとヒロちゃんが真剣な顔で云うのを、半信半疑でしたけれども試合に敗けたのはしょうがないじゃないの——などと口の中で抗議してみたり、せっかくの楽しみを奪ってしまうなんてヒドい部長先

生だワと恨んでみたり、でもまだそうだときまったわけでもないんだから……などと一筋の

のぞみをつないだりしていたのでしたが、榎本さんの情報で合宿は正式にとりやめとわかったものでした。そのかわり、夏休み中の猛練習には、何と麗華女学院の前田ハルミさんがやってくるというビッグニュースがついてくるのでした。前田さんがなぜ私たちの練習に参加するのかは、そのあとの部長先生の説明でわかりました。麗華女学院の相撲部長をしている先生と、私たちの部長先生とは大学時代の同期なのだということでした。そしてそのお二人の話し合いで、私たちの練習の刺激になるように誰かを連れてくるということに決まったのだそうです。最初は体育大会の時の選手全員との合同練習を希望したのだということにしたけれど、先方の都合もありそれではというので、ちょうど就職組でわりあい暇のあった前田さんがえらばれたのだということでした。なにしろ、今年の体育大会で抜群の強さを誇ったそのチームのキャプテンがやってくるというので私たちはゾクゾクソワソワの大にぎわい。嬉しいようなコワイようなヘンテコな気持ちでした。あの体育大会の時の前田さんの堂々たる女力士ぶり、圧倒的

な強みを見せた取り口のひとつひとつがはつきりと目に浮かびます。

「あんなひとにやってこられたらますますあたしたちがみじめになっちゃうんじゃないかしら」と気の弱いことを考えたり、反対に「思いっきりぶつかってやろう。力をつけるには絶好のチャンスだワ」と強気に考えたりすると、待ち遠しい気持ちにもなるのでした。

学期末試験が終わって待望の夏休み。

でも、楽しみにしていた夏の合宿が中止となって、夢がひとつ消えた感じ。昨年の合宿で、私たちのアイドルになってしまった、あの子とも会えなくなっていました。あの子もきつと淋しがっていることでしょう。私たちもみんな少々ガックリ。

でも、そのかわり、学校での練習に、高校女子横綱前田ハルミさんがやってくるとあって、その合宿中止の不満はどこかへケシ飛びこのスバラシイ話題が私たちの胸の中を完全に占領してしまいました。

日ごろ口の軽いヒロちゃんなども、さすがにじょうだんも云えなくなつて緊張しています。津野さんも張り切りを中止したみたい。きつと、前田さんに猫の子でも扱うようにされたら、張り切り屋の手前ひっこみがつか

くなると思ったのでしょう。

その日も、私たち二、三年生全員が、汗だらけ、砂だらけになってもみ合っていますと何の前ぶれもなく、練習場の入り口の戸があらいて、大きなひとが入ってきました。一瞬とまどいましたが、すぐにそれこそ電気にふれたように全身に戦慄みたいなものが突き通りました。そうです。前田さんがやってきたのです。

前田さんの後ろから麗華女学院の先生、そして私たちの部長先生が入ってきました。

部長先生が声をかけるまでもなく、私たちはしげんに練習をやめてしまっていました。練習のドキドキの上に緊張のドキドキが加わって、心臓がのどもとまでふくれ上がるような動きをしています。

顔の汗をぬぐい、腕や、おシりのあたりについた砂をはらい乱れたマワシを直しながらゾロゾロと集って行く、そんな私たちを前田さんは意外に思ったくらい楽しそうな表情で見えていました。

「君たち待望の前田さんだ」

部長先生が紹介しました。

「前田ハルミです。よろしく願います」
からだに似合わぬ小さい声でした。

「今日からしばらく、君たちと一緒に練習してくれることになった。けいこをつけてくれると云った方がいいかな……。とにかく、前田さんと、部長の富樫先生のご好意で絶好のチャンスに恵まれたわけだから、この機会に十分練習して実力をつけてくれるように。前田さんを負かすようにならなくていいから、仲よく、しかしまじめにやってくれ、わかったな」

「ハイッ」と全員が声をそろえます。

「よし、じゃ練習を続けて」

そして部長先生は、麗華女学院の先生と、何やら話しをしたり、愉快そうに笑ったり。練習を続けろと云われても、ソワソワして身が入りません。何ということなしに汗をぬぐったりしていますと、後ろからポンと肩をたたかれました。ふりかえると榎本さんです。
「テルちゃん、あんた、前田さんのマワシ手伝ってあげて」

「ハイ」

何で私がそんな役目をする事になったのだろうと、チョッピリ口をとがらせて、部屋へ戻ります。もう裸になった前田さんがひとりで器用にマワシをつけ始めていました。

「ア、あたし手伝います」

「そう、すみません、願います」

前田さんは、もう、一回二回と腰に巻いていたマワシを解き直して、ひろげた前を胸のあたりで押さえながら、端の方を私に渡ししました。あの春の体育大会の会場で見た萌え黄色の若々しい魅力いっぱいマワシです。肌ざわりのよさそうなキメのツンだ生地、堅いくせにゴツゴツした感じのないのはよほど高級な生地なのでしょう。

「ワァ、スゴクリッパ」

思わず私が小さな叫びをあげたほどです。
「ええ、あたしたちにはちよっとぜいたくだと思ってるの。でもマワシばかりりっぱでダラシない負け方したりしちゃいけない。なんて責任を感じるから……。それがネライだったのかもネ」

前田さんはそんなことを云ってニコリ笑うのでした。押さえた胸のあたりの内側がチラッと白く光るのは銀色の糸で校章のぬいとりがあるのです。こんなぜいたくなプロのお相撲さんのようなマワシを締めたら、私だって実力以上の力が出るかもしれないワ。などと、麗華女学院のぜいたくさをうらやむのでした。

ところで、すぐ近く—というよりも肌にふ

れるほどのところで見る前田さんの肉体美は私を完全に魅了してしまったのでした。身長なら中川さんだっけかなりの長身ですし、肉づきのよさから云うなら小林さんのポリウムがグッとくるのです。けれども、前田さんは、その二つを兼ねそなえていて、そのうえにすべてにバランスがとれているのでした。

ひろやかな両肩から腕のつけ根のあたりは肉が盛りあがっていて、まるでパットをつけたよう。そして、そこから流れ広がる背中には均整美あふれる逆三角を形づくってすこしのたるみもあります。スイと反った背筋は、腰の辺りにくぼみをつくるほどに弓をひいて、張り切った二つの半球につながります。大柄なひとは割り合い肌の荒れたひとが多いのに前田さんはびっくりするくらいキメの細かいきれいな肌なのです。思わずソツとふれてみたいような魅力。小林さんのポテポテとした大きなおシリに負けにくい立派なおシリなのに、重量感よりも、むしろ若々しい活動

力に満ちあふれた魅力なのです。胸がドキドキしてきて顔が熱くなり、何だかまともに前田さんを見れなくなりそうな気持ち……。

たくましさのうちに、ふくよかな女らしさをたたえた腰に、マワシが吸いつくように小

気味よく締まって、萌え黄色のタテミツが、花やかな色どりとほどよい緊張感を加えて、ほんとうに絵のような美事さなのでした。

すこし反りぎみの胸にツンと突き出した二つのふくらみの形のよさ。同じ女性として私などはシットを感じるほどなのです。ゆったりと、でも、少しの余分な肉づきもない実り豊かなおなかには、ツヤツヤとして、おヘソの深くくぼみが、前田さんの女性美を一層ひきたてていきます。どこもこれもムダなく、不足もなく、バランスのとれた肉体美から青春のハーモニーが若い息吹きを奏でているのでした。

最後の結び目をキュッと引き上げます。ちょうど、ひとにぎり半くらい端を余して、にくらしいくらいに見事な、前田さんのマワシスタイルが出来上がります。

歩を運ぶ前田さんに、皆の視線が集まってその中からタメ息のような軽いどよめき……。

三年生の小林さんや、中川さんなどは、少しばかりハゲシイ目つきになりましたが、感激屋の津野さんなんかは、うっとりしたような目つきで前田さんの裸体美に見とれているのでした。

こうして、高校女子横綱前田さんを加えた

私たちの夏期特別練習が始まったのでした。

心臓が破裂し、目の前がまっくらになるような猛げいこ。投げとばされ、ころがされ、からだも、マワシも、汗と砂にまみれて、顔じゅう涙か汗かわからないものが流れ落ちます。みじめな、そんな自分の姿も考えるのを忘れるくらいにヘトヘトになったころ、ようやくぶつかりげいこから解放。とけ落ちそうになるほど乱れたマワシを締め直すのもおっくうで、両手をヒザにあてがって、うつむいたまま全身であえぎます。したたり落ちる汗のしずくがポタポタと顔の下の砂をぬらしませ。口の中はかわき切ってツバも出ません。

そんな私の後ろから、誰かが軽く肩をたたきました。

「……？」

ぐったりと頭を垂れたまま、後ろの足元を見ますと、たくましい足、そしてチラリと萌え黄の色……。ハツとして疲れも忘れてふり返りますと、前田さんがニコニコして立っているのです。

前髪がベツトリと額にはりついて、両肩からその形のいい胸のあたりへ流れ落ちる汗。

「サア、マワシを直してあげるわヨ」

前田さんはそう云いながら、私のすっきり

乱れたマワシを解き始めます。

おヘソの下へしっかりと締め込んだはずなのに、激しい練習ですっかりズレ上がって、おなかの上へ巻きつけたみたいになり、前ミツもゆるんで垂れ下がっている有様。こんなみっともないスタイルを、あこがれのひとの目の前にさらすなんて、ほんとうに恥ずかしくて、それこそ顔が真っ赤になるところなのですけれど、今はつごうのいいことに顔中汗だらけ、ハアハアと息を切らしていますので顔が赤くなっているあたりまえ。前田さんも、ごく当然といった顔で、おシリのあたりなんか砂まみれになっているのを払い落とし、そしてマワシを締め直し始めるのでした。

「どうもスミマセン」

キリッと締まるマワシの感触が新たなファイトをかき立ててくれます。

「あんた、なかなかいいわヨ」

「……」

何のことかと、びっくりする私へ

「あんたの突っぱりは回転も早いし、腕もよく伸びてるし、たいしたもんよ」

前田さんにはめられるなんて夢のようだと私はゾクゾクしてきてソワソワ、ニヤニヤ。

「ただね、あんたのは、何か横から叩くみたいな感じなのヨ、もっと真っすぐ、突き上げるようなつものでやればもっと威力が出るんじゃないかしら」

そうかしら……と私は思います。自分では真っすぐ突いているつもりなのでした。

「もっと両ワキを締めて、ヒジを内側へ入れるようにするの」

と前田さんは、自分でその形を示してくれ

ます。豊かな二つのふくらみが、太い両腕にはさまれて、真ん中に深い谷間がきざみこまれます。何だか、まぶしいものを見る気持。

「それからもうひとつ。疲れてくるとだんだんヒザが伸びてくるでしょ。だから腰も浮いてきて、突っぱりも上へ流れるし相手にとびこまれる危険性もあるし、たたかれるとすぐ落ちちゃうし……」

前田さんほどの力のひとになると、ちょっと見ただけでたちまち欠点を見破ってしまうのでしょうか。私はまた赤くなって、そしてすっかり感心してしまうのでした。

「もっと四股ふみをやったらいいワ。背の高いひとはどうしても腰の方も高くなるから」

前田さんはそう云って、最後に

「あたしも、さんざんそう云われたんだ」
前田さんは、そう云ってペロツと舌を出すのでした。私は、そんなあけっぱなしの態度がうらやましく、親しみを感ずるのでした。もう何年も前から知り合っていた人のような気持さえします。

前田さんが土俵の方へ行きますと、私はたちまち入れ代りに、津野さん、松田さん、ヒロちゃんらにつかまえられました。

「何を話してたの、ねエ」

「あなたばかり、ズルイじゃないの」

「何を教えてもらったのサ。ねエ、正直に白状なさい」

こづいたり、両肩をつかまえてゆすぶったり……ほんとに乱暴な人たちです。

「あたし、みこみがあるんだって」

「チェッ、ショッてるワ」

「えエ？　ほんとにそんなこと云われたの」

「あなたも純情だワねエ、いちいち真にうけちゃってサ」

「ほんとヨ、私の突っぱりは大したもんだってよ」

「へえエ、あれが大したもんなの」

「それにしても、あんまり上手なおせじじゃないわネ」

「前田さんて乱視かもしれないわヨ」

「何を失礼なこと云うの、云いつけるわヨ」

「ナニサ、もう自分だけ、かわい子ちゃんになった気で……」

「あなた血圧測って貰った方がよくない？」

何を云っても、二倍か三倍の反撃が返ってくるのですから、たまりません。

「何をワァワァ云ってるの」

小林さんがどなりました。

「サボッてないで、ホラ、ヒロちゃん！」

小林さんの胸にぶつかるとヒロちゃん。

ころがされ、突きとばされ、みるみる砂まみれになって、また起き上がってはぶつかって行くのです。汗まみれの顔に、目ばかりキラキラさせて突っ込んで行くヒロちゃん。そんな姿を前田さんが腕組みしてジッと見つめていました。

前田さんのあけすけなこだわりのない性格に私たちは直ぐになじんでしまいました。

そして、別に決めたわけでもないのに練習グループは二つに分かれて、一つは三年生の人たちと一年生たち、そしてもうひとつは、前田さんを中心とした私たち二年生のグループになったのです。

物おじしないヒロちゃん、図々しい津野さ

ん、理論的な松田さんの質問。前田さんはそれらにいちいち実地にけいこをつけながら説明し、私たちを納得させてくれるのです。

辛い苦しいぶつかり合いでも、相手が前田さんだと順番が待ちきれないほどでした。三年生の人たちもかわるがわる前田さんと申し合いを何番かするのが日課になりました。重量では互格の小林さん、猛烈な突っ張りに自信を持つ中川さんらが挑戦する時は、ほんとうに迫力十分で、私たちは皆息をのみました。

合わせて一五〇キロもの肉体がぶつかり合う小林さんとの申し合いなど女性とは思われないほどのスケールでした。ガップリと胸を合わせて四つになると、前田さんもさすがに手こずります。

前田さんに、県下第一人者としての面目があれば、小林さんには、キャプテンとして、私たちの目の前でムザムザ負けられない意地があります。

ジリッと寄る前田さん。一步二歩後退しながら、でも、すぐに寄り返す小林さん。つきたてのおモチみたいな彼女の背中からおシリそして太腿のあたりがブルンブルンとゆれます。お互いにガッチリとマワシを引きあって大きく踏みひらいた四本の足が、土俵に根を

おろしたようにドッシリと構えているのを、私たちは手に汗をにぎり、目ばかりもせずに見つめるのです。

緊張し切った二人の顔。お互いに相手のスキをうかがって、からだのスミズミにまで神経を働かせて戦う姿の何という美しさ。それは、きびしい勝負に青春を賭けたおとめの最高の美しさと言えるのではないのでしょうか。「どっちも負けしたくないわねエ」

松田さんがソツとささやきます。ほんとに誰もがそう考えたにちがいないでしょう。

こうした、楽しさ、きびしさを織りまぜて私たちの夏期特別練習は、どんどんとスケジュールを消化して行きました。

前田さんが特別参加してくれた十日間などは、アツという間に過ぎてしまったようでした。そしてその最後の日、私たちは前田さんと申し合いの方は、もっぱら三年生の人たちが権利を行使していたのです。

女子高校横綱の力がどんなものか、私たちは興奮しました。でも、練習ではあるし、場所がホームグラウンドということでもあり、負けてもとなのですから気は楽なものでした。先陣は津野さん。ひやかしたいな声援を受けて、ちょっとテレくさそうな顔です。

立ちあがると津野さんは猛烈に突っ張りました。つかまっておしまいだと見て、カ克蘭戦法に出たのでしょうか。回転の早いその突っ張りを受けて、前田さんは一歩二歩後退しました。シメタ：と図に乗った津野さんの攻撃。けれども、すぐに体勢をととのえた前田さんは、突っ張ってくる津野さんの腕をハネ上げながら、突き返しての攻撃です。回転はおそいのですけれど、一突き一突きが津野さんとは段ちがいの強さです。その一発を肩のあたりにまともに受けた津野さんは、アッという間に吹っ飛ばされて土俵ぎわ、完全に腰がくだけてヨロケかかるところへ前田さんのとどめの一撃、大して強いとも思えず軽く左腕を伸ばして押したように見えたのです。けれど、津野さんは、まるで小犬のように土俵の外へ飛ばされて、それで足らずに背中から一回転してしまいました。

ペソをかいいたような笑い顔で津野さんが起きあがってきましたが、私たちは、そんな津野さんをからかうどころではありません。スゴイとしか云いようのない前田さんの強さに目を見はるばかりなのでした。

マトモに突き合ってはトテモ駄目——それが私たちへの教訓でした。

次に松田さんが出ました。

適当に肉がついて、均整のとれた体つきは二人とも同じですが、前田さんが全体に一まわり以上、大きいのでした。

オーソドックスな取り口の松田さんだけにこうはつきり実力のちがう相手には、期待をかける方がムリだと思いました。けれども、松田さんはよく戦いました。すこしも悪びれず、斗志をこめて正面から堂々と立ち向かって行ったのです。

立ち上がり、鋭く突っこむ松田さん。でも前田さんは一歩ふみこむと、ガッチリ受け止めてすばやく両マワシをとってしまいます。体勢は、松田さんのとくいの左四つ、そして肩のあたりに頭をつけた低い構え。けれど、前田さんの強いひきつけが松田さんの動きをゆるしません。くいさがられた体勢をそのままに、相手のからだに自分の体重をかけるようにして、前田さんはじっくりと相手の出方をうかがいます。松田さんの真っ赤な顔。こんな体勢が長びけば、下へもぐっている方が先に疲れます。前田さんの強烈なひきつけを松田さんはけんめいに腰をひき、足巾を広くとってこらえます。完全に埋まりこんだムザムザなタテミツ。わきばら近くにまでズリ上が

ったヨコミツに、腰のあたりはすっかりムキ出しになって、こすれたあとの薄赤い肌の色が痛々しいのでした。荒くなった呼吸におナカが大きく波うっていかにも苦しそう。ジリッとする前田さん。けんめいの投げでこらえる松田さん。けれども、とうとう松田さんの頭は上がって汗にまみれた顔が前田さんの肩越しにのぞきました。気力だけで持ちこたえているような松田さんを、前田さんはジックリと腰を落として吊りぎみに寄り進み、土俵ぎわ、棒立ちになって、それでもこらえようとする松田さんをポンと持ち出すように切りました。口もきけない松田さん。前田さんの方も、さすがに肩を大きく上下させて、タオルで汗をぬぐっています。はた目には軽く見えても、そう楽な勝負ではなかったのでしょう。観戦する私たちも、こんな勝負は息苦しくって、切なくなります。津野さんの相撲みたいのなら、勝負がついてもゲラゲラ笑うこともできるのですけれど……

三人目、西田さんは、立ち上がり、ややおそく立ったように見えた前田さんが、下からすくうようにスパッとよろざしに受け止め、そのまま一呼吸もせず思い切ったすくい投げ。西田さんは、相手の体にふれたかふれな

いうちに一回転させられ、ものの見事に背中から土俵にたたきつけられてしまいました。あっけにとられて、何が何だかわからないみたいで顔で起き上がる西田さん。

四人目のヒロちゃんも、とびこんで行く体勢が低すぎて、軽くたたきこまれて前田さんの足元にころがります。

段ちがいの強さに、私たち二年生はただ感心し、中川さんや、小林さんたち三年生の顔は、だんだん険しくなっています。

そして二年生の最後を飾る？ 私の登場。むしろぶるいか、身ぶるいか歯がガチガチします。

形どおりの仕切り、私はすこし後ろへさがって構えました。前田さんからほめられた私の突っ張り。そしてその前田さんが教えてくれた型を今こそ実行してみるチャンスだと思っただけです。

堂々と仕切る前田さんの構えはさすがにスキがなく、ズシツとのしかかってくるような圧迫感さえあります。唇をかみしめて斗志をかき立て、思い切って突進しました。先制攻撃—私の突っ張りが前田さんの胸から肩のあたりにさくれつします。三発、四発、そして五発、六発。

「その調子ッ！」

「イイワヨ、イイワヨッ！」

まわりから黄色い声援がとんで、私のファイトを一層ふるい立たせてくれます。

前田さんは受け太刀一方ながら、私の突っ張りを下からハネ上げるようにして、何とか組み止めようとします。組み止められては勝負はそれまでです。私もけんめいに突っ張りますが、さすがに相手は高校横綱、手ごたえが重くて、ともすればハネかえされそうな感じさえして、なかなか突き進めないのです。

「ソレッ！ ファイト、ファイトッ！」

「何をしてるのッ、もっと腰をおとしてッ」

その声が耳にはいつて、私はハッとしました。『そうだ、もっと腰をおとして下から突き上げるんだったワ』

私は腰を落とし、ヒザのバネをきかせるようにして、全身の力を両腕にこめて突き出しました。前田さんの巨体が一步、二歩と後退しました。胸のあたりがカアツと熱くなって何かのどもとへふき上がってくるような気持。強く噛みしめた歯の間から吹き出しているきそうになるのは、私の斗志だったのでしょうか。土俵ぎわまで前田さんを追いつめて、でも、そこで腕が石のようになって、ど

うにも私の云うことをきかなくなってしまったのでした。『負けるものか』と私は、最後のファイトを繰り出して、体あたりのように、前田さんの胸に突進しました。前田さんが、この私のくいさがりを簡単に許してしまったのは、私に勝ちをゆずってくれようと思ったのか、あるいは、私の突っぱりが彼女の体勢をくずすほどの威力を持っていたからなのでしょう。とにかく、私は前田さんの胸の谷間に頭を埋めて、両前ミツをとることに成功しました。あとは、寄り進むだけ。おがむような体勢で、前ミツをとった指先からだ中の神経と力を集中して、それをコジあげるようにしながら必死に前進しました。

こらえる前田さんのからだから力がぬけ、ヒロちゃんや松田さんが歓声をあげ、津野さんが、背中をピチャ、ピチャとたたきながららんぼうな祝福を与えてくれるのを、信じられないような気持ちで味わっていました。いまにも爆発してしまいそうな心臓、カラカラになったのを焼けるような熱い呼吸が激しく通過します。肌全体で呼吸したいくらいの息苦しさ。そんな私の様子を、前田さんが悪びれない笑顔で見つめていました。